

下田中中道遺跡 下田中川久保遺跡

国道354号道路改築(改良)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1995

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第186集

下田中中道遺跡 下田中川久保遺跡

国道354号道路改築(改良)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1995

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道354号線は、邑楽郡邑楽町と佐波郡境町にて改良工事が進められており、既にその一部については共用されています。同国道と一般国道17号線の上武道路が接する新田郡新田町下田中地域は、平成3年度、同5年度に工事対象となりました。工事対象区域には、予め埋蔵文化財が存在していることが分かっていたため、工事着工前に記録保存のための発掘調査が必要となりました。工事対象地域は新田町、境町の両町にまたがるため、発掘調査が当事業団に委託されました。

発掘調査は平成3年度に下田中中道遺跡、平成5年度に下田中川久保遺跡を行いました。両遺跡とも古墳時代から近世にかけての住居跡、畠跡等が調査され、一級河川早川の氾濫により埋没した遺跡であることがわかり、洪水による災害の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。両遺跡は、本年度に調査報告書を刊行することになり、その作業を進めてきましたが、ここにその成果がまとまりましたので、両遺跡の発掘調査報告書を上梓することにしました。

発掘調査から報告書刊行まで、群馬県土木部道路建設課、同太田土木事務所、新田町教育委員会、境町教育委員会、尾島町教育委員会、地元関係者の方々から種々ご指導、ご協力を賜りました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は、国道354号道路改築（改良）事業に伴う「下田中中道遺跡」と同354号線関連（県道大原・境線）の道路改良事業に伴う「下田中川久保遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 「下田中中道遺跡」は群馬県新田郡新田町大字下田中中道（1-3-1・2、4-6、17、19、20-1・2番地 他）、「下田中川久保遺跡」は同じく字中道（28-1、32-34番地 他）及び佐波郡境町大字三ツ木字越戸（92番地）を中心に所在する。遺跡名は、大字の「下田中」と小字の「中道」に因んで「下田中中道遺跡」とした。なお、調査面積の狭い「下田中川久保遺跡」は、同じ小字地内にあるが混乱をさけるため近接の小字名である「川久保」を用いて「下田中川久保遺跡」とした。
- 3 発掘調査は、群馬県（土木部道路建設課）の委託により、群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 調査の実施期間は、以下の通りである。
発掘調査 下田中中道遺跡 平成3年6月1日～同年12月28日
下田中川久保遺跡 平成5年4月8日～同年12月28日
整理事業 平成6年10月4日～平成7年3月31日
- 5 調査・整理体制は、以下の通りである。

事務担当 遠見長雄、中村英一、松本浩一、近藤 功、佐藤 勉、蜂須 実、神保侑史、岩丸大作、齋藤俊一、巾 隆之、中東耕志、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義

事務補助員 松下 登、大澤友治、野島のお江、並木綾子、吉田恵子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子

調査担当 下田中中道遺跡 下城 正（群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門員）
石守 晃（同 主任調査研究員）、磯貝朗子（同 調査研究員）
下田中川久保遺跡 大江正行（同 主幹兼専門員）
松井龍彦（同 主任調査研究員）、黒澤照弘（同 調査研究員）

- 6 報告書作成の担当は、以下の通りである。

編 集 松井龍彦

執 筆 第1章第1節 巾 隆之（群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究部第3課長）

第4章第3節2・3 大江正行（同 主幹兼専門員）

縄文土器観察 藤巻幸男（同 専門員）

家形埴輪・埴輪観察 南雲芳昭（同 主任調査研究員）

土師器・須恵器観察 飯田陽一・坂口 一（同 専門員）、黒澤はるみ（同 嘱託員）

陶磁器観察 大西雅広（同 主任調査研究員）

金属器観察 大江正行（同 主幹兼専門員）

自然科学分析 前古環境研究所

馬歯・馬骨の鑑定 大江正直（前 群馬県家畜登録協会常任理事）

石材鑑定 飯島静男（群馬地質研究会）

上記以外 松井龍彦

遺構写真	下城 正、石守 晃、磯貝朗子、大江正行、松井龍彦、黒澤照弘
遺物写真	佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師）
保存処理	関 邦一（群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師）、小村浩一（同 整理補助員） 土橋まり子（同 非常勤嘱託員）、小沼恵子（整理補助員）
整理補助	黒澤はるみ（整理嘱託員）、角田孝子（整理補助員）、富永セン（同）、岡田美知枝（同） 戸神晴美（同）、池田和子（同）、飯塚京子（同）

- 7 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。




















群馬県（土木部道路建設課）、太田土木事務所、新田町教育委員会、埴町教育委員会、尾島町教育委員会、小宮俊久氏（新田町教育委員会）、須永光一氏（尾島町教育委員会）
青柳泰介氏（奈良県立橿原考古学研究所嘱託員）、三浦京子氏（前橋文化財研究所）

発掘作業に当たり、地元の方々及び多数の作業員の方にお世話になった。ここで感謝の意を述べたい。

- 8 調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センター及び財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、全て国家座標上の北を示している。
- 2 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院20万分の1及び5万分の1の地形図、新田町都市計画図2千5百分の1を使用した。
- 3 遺構平面図・遺構断面図・遺物実測図中に使用した網点部分は下記の通りである。

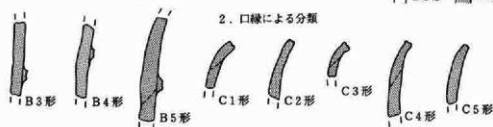
 地山	 灰	 焼土
 石組凹部分	 石組全体図	 道路
 馬歯出地点	 木炭・焼土	 木炭
 As-B		
 灰釉陶器	 厚減部分	 黒色処理炭化物付着
 羽口珪酸部分	 羽口発泡部分	 羽口還元部分
 羽口中性酸化部分	 埴輪断面	 縄文織維土器断面

- 4 本文中に記載されているテフラは、浅間A・B・C軽石→As-A・As-B・As-C、榛名山二ツ岳降下火山灰(Hr-FA)→FA、榛名二ツ岳降下軽石(Hr-FP)→FPを示している。
- 5 本書に掲載した遺構図や付図の縮尺については、縮尺率とともにスケールを付した。
- 6 遺物実測図の縮尺は、以下の通りである。
土器1/3、埴輪1/4(家形埴輪のみ1/8)、石器(石類)1/3(大型1/6)、金属製品1/3
紡錘車及び土錘1/3
- 7 下田中川久保遺跡の遺構図中に使用している2点鎖線は、トレンチを示す。なお、「中段」と表記してあるものは発掘調査の際の階段状に掘り下げた部分を示している。
- 8 本文・遺物観察表中の数値に使用している()は、推定計測値を表す。
- 9 土層・土器類の色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に従った。
- 10 計測可能な竪穴住居の面積については、1/40図を基本としてプランメーターによる3回の計測平均値を採り、住居確認面の掘り込みから内側を測定した。
- 11 住居及び竈の主軸方位は次の基準で計測した。住居の主軸方位は、竈の付設された辺に直行する辺の角度を計測したが、竈の検出されなかった住居については、南北方向の辺を主軸方向とした。竈の方位は、竈の中心軸を計測した。主軸方位が不明及び推定の場合、竈の方位については記載しなかった。角度は、真北を基準として東回りにN-角度-Eと表記した。
- 12 遺物写真の縮尺は、縄文土器・埴輪・中世陶磁器1/3、甕・埴輪の復元した大型遺物1/6、瓦破片・埴輪片1/4、羽片・石器1/3、大型石類1/4・1/6・1/8、金属製品1/2・1/3、紡錘車・土錘1/2で掲載した。
- 13 本書に記載されている遺構名称は整理作業の過程で再検討したが、発掘調査時の番号を尊重して通し番号を付している。その際、遺構番号が欠番及び一部変更となったものもある。また、下田中川久保遺跡の不明遺構については、発掘現場での遺構名称SXをそのまま使用した。
下田中道遺跡と下田中川久保遺跡の耕作痕の遺構名称については、両遺跡の発掘担当者の意向を尊重し、前者は「畠」、後者は「畑」の文字を使用した。
- 14 円筒埴輪の突帯及び口縁による分類は、以下の通りである。

円筒埴輪 1. 突帯による分類(台形状→A形、M字状→B形)



2. 口縁による分類



目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
写真目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法と経過	3
1. 発掘調査の方法 2. 発掘調査の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 位置	6
第2節 地理的環境	6
第3節 歴史的環境	7
第3章 下田中中道遺跡	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本土層	16
第3節 古墳時代の遺構と遺物	17
1. 竪穴住居跡 2. 古墳 3. 土坑	
第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物	26
1. 竪 2. 竪穴住居跡	
3. 羽口出土地点 4. 溝	
第5節 中・近世の遺構と遺物	46
1. 溝及び道路遺構 2. 集石遺構	
第6節 遺構外の出土遺物	60

第4章 下田中川久保遺跡	65
第1節 遺跡の概要	65
第2節 基本土層	70
第3節 古墳時代の遺構と遺物	71
1. 竪穴住居跡	
第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物	72
1. 溝 2. 祭祀と関連遺構	
3. 水田関連遺構 4. 畑跡 5. 土坑	
6. 竪穴住居跡 7. その他の遺構(SX)	
第5節 中・近世の遺構と遺物	104
1. 溝 2. 道路遺構	
第6節 遺構外の出土遺物	105
第5章 まとめ	108
遺物観察表	111
自然科学分析	129
下田中中道遺跡	
I. 野外調査およびテフラ検出分析	
II. プラント・オパール分析	
下田中川久保遺跡	
III. テフラ分析	
IV. 植物珪酸体分析	
V. 花粉分析	
下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について	161
写真図版	
抄 録	

挿 図 目 次

第1図 下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡位置図	1
第2図 調査区及びグリッド設定図	5
第3図 大間ヶ原伏地の地形分類(尾崎町誌から)	6
第4図 周辺遺跡分布図	8
第5図 古墳時代概念図	12
第6図 奈良・平安時代(麻路・溝)概念図	13
第7図 平安時代(住居跡)概念図	14
第8図 中・近世概念図	15
第9図 基本土層	16

第10図 1号住居跡・出土遺物実測図	17
第11図 1号墳・1号溝実測図	19
第12図 1号墳出土遺物実測図(1)	20
第13図 1号墳出土遺物実測図(2)	21
第14図 1号墳出土遺物実測図(3)	22
第15図 1号墳出土遺物実測図(4)	23
第16図 1～5号土坑実測図	25
第17図 第1軌跡群実測図	26
第18図 第2軌跡群実測図	27

第 19回	第 2 鉄跡群断面実測図	28
第 20回	第 3 鉄跡群実測図	30
第 21回	第 3 鉄跡群断面実測図	31
第 22回	第 4 鉄跡群実測図	31
第 23回	2 号住居跡実測図	32
第 24回	2 号住居跡出土遺物実測図	33
第 25回	3 号住居跡実測図	34
第 26回	3 号住居跡出土遺物実測図 (1)	35
第 27回	3 号住居跡出土遺物実測図 (2)	36
第 28回	4 号住居跡・出土遺物実測図 (1)	37
第 29回	4 号住居跡出土遺物実測図 (2)	38
第 30回	5 号住居跡・出土遺物実測図	39
第 31回	羽口出土地点・出土遺物実測図 (1)	40
第 32回	羽口出土地点出土遺物実測図 (2)	41
第 33回	1 号溝実測図	42
第 34回	4・14号溝実測図	42
第 35回	2・16・17号溝実測図 (1)	44
第 36回	2・16・17号溝実測図 (2)	45
第 37回	3・8・9・10・11・12・13号溝実測図 (1)	48
第 38回	3・8・9・10・11・12・13号溝実測図 (2)	49
第 39回	9・10・11・12号溝出土遺物実測図	50
第 40回	6・7・8号溝・1号道路遺構実測図 (1)	52
第 41回	1号道路遺構実測図 (2)	53
第 42回	6・7・8号溝・1号道路遺構断面図	54
第 43回	7号溝出土遺物実測図	54
第 44回	1号道路遺構出土遺物実測図	55
第 45回	5号溝実測図	55
第 46回	2号道路遺構・出土遺物実測図	56
第 47回	1号象石遺構実測図	58
第 48回	2号象石遺構実測図	59
第 49回	遺構外出土遺物実測図 (1)	60
第 50回	遺構外出土遺物実測図 (2)	61
第 51回	遺構外出土遺物実測図 (3)	62
第 52回	遺構外出土遺物実測図 (4)	63
第 53回	遺構外出土遺物実測図 (5)	64
第 54回	古墳—平安時代前期 (下部) 概念図	66
第 55回	平安時代前期 (上部) 概念図	67
第 56回	平安時代 (住居跡・土坑等) 概念図	68
第 57回	中・近世—近代概念図	69
第 58回	基本土層	70
第 59回	7号住居跡・出土遺物実測図 (1)	71
第 60回	7号住居跡出土遺物実測図 (2)	72
第 61回	51・52・2・61・62号溝・出土遺物実測図	73
第 62回	53号溝・出土遺物実測図	73
第 63回	57・58・63・64号溝実測図	74
第 64回	59・60・2号溝実測図	76
第 65回	69号溝出土遺物実測図	76
第 66回	52-1号溝実測図	77
第 67回	60-1号溝実測図	77
第 68回	60-1号溝出土遺物実測図	78

第 69回	33号溝実測図	78
第 70回	2区3・4号溝馬1出土状態	79
第 71回	2区4号馬2出土状態	80
第 72回	3号土坑の掘移と馬3・4の出土状態	81
第 73回	2区3・4号溝I—5礎群・土器納置実測図	82
第 74回	2区3・4号溝I—5土器納置出土遺物実測図	83
第 75回	2区3号溝下段G—2土器納置・出土遺物実測図	83
第 76回	2区3・4号溝水田一面1実測図	85
第 77回	2区3・4号溝水田一面1・2横断土層図	86
第 78回	2区3・4号溝3・4号の新・古の状況	87
第 79回	太畦跡と客土面 (部分)	88
第 80回	畑2'・6・7実測図	90
第 81回	畑5実測図	92
第 82回	畑4実測図	93
第 83回	畑4出土遺物実測図	93
第 84回	畑4・5様式図	93
第 85回	畑1・2実測図	94
第 86回	畑1出土遺物実測図	94
第 87回	1号土坑・出土遺物実測図	95
第 88回	1号住居跡・出土遺物実測図	96
第 89回	2号住居跡実測図	96
第 90回	2号住居跡出土遺物実測図	97
第 91回	4号住居跡実測図	97
第 92回	4号住居跡実測図	98
第 93回	4号住居跡出土遺物実測図 (1)	98
第 94回	4号住居跡出土遺物実測図 (2)	99
第 95回	5号住居跡実測図	99
第 96回	5号住居跡出土遺物実測図	100
第 97回	6号住居跡・出土遺物実測図	100
第 98回	8号住居跡・出土遺物実測図	101
第 99回	S X 7実測図	101
第100回	S X 1実測図	102
第101回	S X 4実測図	102
第102回	S X 5・出土遺物実測図	103
第103回	S X 6実測図	103
第104回	34号溝・1号道路遺構・出土遺物実測図	104
第105回	遺構外出土遺物実測図 (1)	105
第106回	遺構外出土遺物実測図 (2)	105
第107回	遺構外出土遺物実測図 (3)	107
付図 1	下田中道遺跡 古墳時代全体図	
付図 2	下田中道遺跡 奈良・平安時代 (鉄跡・溝) 全体図	
付図 3	下田中道遺跡 平安時代 (住居跡) 全体図	
付図 4	下田中道遺跡 中・近世全体図	
付図 5	下田中川久保遺跡 古墳—平安時代前期 (下部) 全体図(1)	
	平安時代前期 (上部) 全体図(2)	
付図 6	下田中川久保遺跡 平安時代 (住居跡・土坑等) 全体図(3)	
	中・近世—近代全体図(4)	

写真図版目次

下田中道遺跡

- 図版 1—1 平安時代面 (第 2 面) 全景 (本線部分、東から)
 — 2 中・近世面 (第 1 面) 全景 (本線部分、東から)
 図版 2—1 北枕塚区平安時代面 (第 2 面) 全景 (南から)
 — 2 南枕塚区全景 (北から)
 図版 3—1 低地部基本土層断面 (T—31グリッド、中位に A s—B 層、下位に洪水堆積層が見える。南から)
 — 2 風向を覆う下層の洪水堆積層 (第 2 面の第 2 鉄跡群、

西から)

- 図版 4—1 冠水した調査区 (調査中、台風により 3 回調査区が冠水した。本線部分、東から)
 — 2 発掘作業員全員での遺構確認作業 (南から)
 — 3 溝群の検出作業 (北から)
 — 4 ローム台地上層の土層堆積状態 (南から)
 — 5 本線部分西側の新開河床上層の土層堆積状態 (北から)

図版5-1	1号住居跡(西から)
-2	1号墳(南から)
図版6-1	1号墳埋輪出土状況(南から)
-2	馬堀土層断面(南辺、東から)
-3	馬堀土層断面(北辺、東から)
-4	1号墳埋輪出土状況(北から)
-5	1号墳埋輪出土状況(北西から)
図版7-1	1号墳埋輪出土状況(南東から)
-2	1号墳埋輪出土状況(南西から)
-3	1号土坑(西から)
-4	1号土坑土層断面(南から)
-5	2号土坑(南から)
-6	3号土坑(西から)
-7	4号土坑(西から)
-8	5号土坑(西から)
図版8-1	第2面第1畝跡群(東から)
-2	第2面第1畝跡群(西から)
図版9-1	第2面第2-4畝跡群(北東から)
-2	第2面第2・3畝跡群(東から)
図版10-1	第2面第2畝跡群(南から)
-2	第2面第3畝跡群(北から)
図版11-1	第2面第3畝跡群(北西から)
-2	第2面第4畝跡群(北西から)
図版12-1	2号住居跡(西から)
-2	2号住居跡前遺物出土状況(西から)
-3	2号住居跡貯蔵穴遺物出土状況(北から)
図版13-1	3号住居跡(西から)
-2	3号住居跡前遺物出土状況(西から)
-3	3号住居跡貯蔵穴遺物出土状況(西から)
図版14-1	4号住居跡(西から)
-2	4号住居跡前遺物出土状況(西から)
-3	4号住居跡北東隅遺物出土状況(南から)
図版15-1	5号住居跡(西から)
-2	5号住居跡(西から)
-3	5号住居跡貯蔵穴(北から)
図版16-1	平安時代住居群と畝跡(北から)
-2	羽口及び白石黒石地検出状況(北東から)
-3	1号溝(北西から)
-4	4号溝(北東から)
-5	14号溝(北東から)
図版17-1	第2面溝群(2・16・17号溝と畝跡、北西から)
-2	第1面下層溝群(3・9-13号溝、南から)
図版18-1	第1面下層溝群(9-12号溝、北から)
-2	第1面下層13号溝(西から)
図版19-1	第1面中層溝群(7号溝と1号道路遺構、南から)
-2	第1面中層溝群(7号溝と1号道路遺構、北から)
図版20-1	8号溝(西から)
-2	2号溝(南から)
-3	3号溝(西から)
-4	6号溝(南東から)
-5	5号溝(東から)
図版21-1	7・9-11号溝と1・2号道路遺構土層断面(南から)
-2	7・9-11号溝と1・2号道路遺構土層断面(北から)
-3	8・12・13号溝土層断面(西から)
図版22-1	1号道路遺構(南から)
-2	2号道路遺構(北から)
図版23-1	1号集石遺構(南から)
-2	1号集石遺構(西から)
図版24-1	2号集石遺構(南から)
-2	2号集石遺構(北から)
図版25	1号住居跡、1号墳出土遺物
図版26	1号墳出土遺物

図版27	1号墳、2・3号住居跡出土遺物
図版28	3・4号住居跡出土遺物
図版29	5号住居跡、羽口出土地点、9-12号溝出土遺物
図版30	7号溝、1・2号道路、遺構外出土遺物
図版31	遺構外出土遺物
図版32	遺構外出土遺物

下田中川久保遺跡

図版33	遺跡全景(2区掘上空から)
図版34-1	2区掘から上武道路と早川を望む(東から)
-2	下田中道遺跡(調査終了一写真中央より左上部分)と調査中の三ツ木沼田遺跡(北西から)
図版35-1	2区(現代の耕作地)から赤城山方面を望む(南東から)
-2	2区北隅及び1区3面全景(南から)
-3	2区第4面全景(南西から)
図版36-1	1区の道東試掘(北から)
-2	2区の道東試掘(西から)
-3	2区の道東試掘(北から)
図版37-1	2区低地部基本土層断面(西から)
-2	2区第4面作業風景(南西から)
-3	2区第4面作業風景(南西から)
図版38-1	1号住居跡(西から)
-2	2号住居跡(西から)
-3	4号住居跡(南から)
図版39-1	5号住居跡(南東から)
-2	6・7号住居跡(北から)
-3	8号住居跡(西から)
図版40-1	33号溝(中央より右側の畝内、東から)
-2	34号溝と1号溝遺跡(手前)の断り割り(北東から)
-3	60-1号溝全景(東から)
-4	60-1号溝土層断面(西から)
-5	60-1号溝遺物出土状況(北から)
図版41-1	2区3・4面間馬1出土状況(南西から)
-2	4面馬2出土状況(南から)
-3	3・4面間馬3出土状況(北から)
-4	* 3号土坑、馬3・4出土状況(北東から)
-5	* 馬4出土状況(南から)
-6	* I-5土器納置遺物出土状況(北東から)
-7	* I-5土器納置遺物出土状況(北から)
-8	* 3面下位G-2土器納置遺物出土状況(南から)
図版42-1	* 3・4面間大堀跡と客土面(部分)・52-1号溝・水田一面1(北西から)
-2	2区3・4面間水田一面2(北西から)
図版43-1	畑1・2の全景(南から)
-2	畑2の全景(東から)
図版44-1	畑4の全景(北から)
-2	畑5の全景(南から)
図版45-1	1号土坑土層断面(西から)
-2	1号土坑(西から)
-3	SX1遺構確認状況(北から)
-4	SX1(北から)
-5	SX4遺構確認状況(北から)
-6	SX4(西から)
-7	SX5(西から)
-8	SX7(東から)
図版46	I・2・4・7号住居跡、51・53・59・60-1号溝1号土坑、畑1・4、2区3・4面間I-5及び3面下位G-2土器納置出土遺物
図版47	4・5・6・8号住居跡、SX5、34号溝、1号道路、遺構外出土遺物
図版48	遺構外出土遺物

第1章 発掘調査の経過

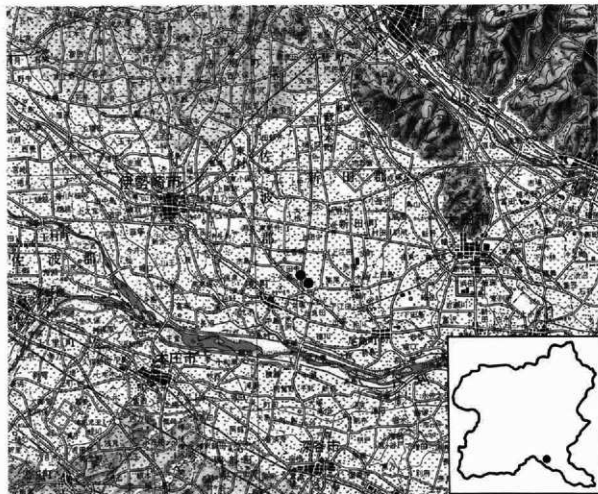
第1節 発掘調査に至る経緯

国道354号線は高崎市を起点とし、伊勢崎市南部を通り、尾島町で上武道路（国道17号線バイパス）を横切る。更に太田市の南部から館林市内に入り、同市内を南北に走る国道122号線と合流する。群馬県の南部を東西に走る商業道路として、また当該地域の生活道路としての機能を果たしている。ところが、近年になり上武道路が埼玉県と開通したことにより、更にその使用頻度が増してきた。このため群馬県では、本路線の利便性を更に高める必要から道路の整備に着手することになった。

県土木部道路建設課では、改良工事を実施するに

あたり、事前に埋蔵文化財の有無について県教育委員会文化財保護課と協議を行ったところ、路線に沿って多くの埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明した。文化財保護課では、路線の通過する市町村の教育委員会と協議を行い、各教育委員会で発掘調査を実施することで合意した。この決定に従い新田町では昭和63年度から平成3年度にかけて中江田地区の花園遺跡・中江田原遺跡の発掘調査をそれぞれ実施した。

平成2年になり、平成3年度の事業照会が道路建設課から文化財保護課に示された。本路線の平成3年度の計画をみると、上武道路に隣接する新田町の下田中地区が対象となっていることが判明した。ところが遺跡対象地を詳細に調査したところ、新田町・尾島町・境町の3町が複雑に入り込む地区にあ



第1図 下田中道遺跡・下田中川久保遺跡位置図（国土地理院 1:200,000「宇都宮」使用）

第1章 発掘調査の経過

たることが判明した。このため、従前通り各町の教育委員会が個別で発掘調査を行うとすると、同じ遺跡を分割することになり、作業能率が極端に悪くなることが懸念された。文化財保護課では各町が一遺跡を分割して調査を行うことは不合理であると判断し、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団と調査の実施が可能であるか協議を行うとともに、遺跡の内容を把握するため平成2年12月に試掘調査を実施した。その結果、遺跡地は沖積地ではあるものの旧河川跡が検出されるとともに、畠状遺構や溝状遺構等が存在することが判明した。

試掘調査が終了したため、県文化財保護課と事業団において調査の可否、調査期間の算定、調査費用の積算等について協議を行った。その結果、事業団で調査を行うには支障がないこと、調査期間は約4ヶ月を必要とすること、平成3年度の事業団全体の事業工程上から調査の実施時期は7月から10月にかけて行うことで合意ができ、道路建設課及び当地区を担当する太田土木事務所と具体的な協議を行うこととなった。

発掘調査は平成3年7月中旬から開始することとなり、遺跡名を大字の下田中と小字の中道を採用して「下田中中道遺跡」とした。本線以外にも取付道路があり、その部分から調査を開始したが、試掘調査では把握できなかったローム台地が検出され、古墳や道路状遺構が発見されるとともに、旧河川の落ち際に数軒の住居跡が存在するなど、新たな状況が展開された。また8月から10月にかけて数回の台風が来襲し、加えて秋の長雨にも祟られ、数度にわたって遺跡地全体が冠水するなど調査困難も強いられたが、10月中旬には予定された地域の調査を終了することができた。

発掘調査が終了したのを受け、整理事業の時期が問題となった。しかし、下田中中道遺跡の隣地を走る上武道路との境界付近に未買収地があり、試掘調査が実施されていないこともあり、平成4年度には整理事業を実施せず、未買収地の扱いが決定した段階で協議を行うこととした。

平成4年になり、県土木部では平成5年度に境町・新田町・尾島町を走る国道354号線と上武道路（国道17号バイパス）・県道大原境線・県道太田境線等に対し、上武道路を中心とした立体交差による整備を一括して実施することを決定した。このうち、県道大原境線の遺跡の取扱いについて県土木部道路建設課と県文化財保護課で協議を行った。文化財保護課では、事業地が周知の遺跡（新田町遺跡地内の川久保遺跡）であることから発掘調査の必要がある旨を伝えるとともに、その取扱いについても協議を行うこととなった。その結果、本事業は国道354号線の導入路としての取付工事の一環として実施することが判明したため、平成3年度に実施した「下田中中道遺跡」の継続事業として、本事業団が引き続き調査を行うこととなった。

事業団では、遺跡名を大字の下田中と近接する小字の川久保をとって「下田中川久保遺跡」とし、平成5年4月上旬から発掘調査を開始した。畠状遺構や古墳時代の住居跡等を検出するとともに、下田中中道遺跡の未買地も併せて調査を実施し、6月には調査を終了することができた。

なお、国道354号線の新田町分についても本事業団で実施することになり、中江田地区の「中江田八ツ縄遺跡」の発掘調査を平成6年度で行っている。

整理事業については、国道354号線の事業団担当分として平成6・7年度の2年計画で実施し、報告書刊行も2分冊とすることになった。平成6年度で「下田中中道遺跡」・「下田中川久保遺跡」の全部と「中江田八ツ縄遺跡」の一部の整理事業を行い、「下田中中道遺跡」と「下田中川久保遺跡」両遺跡の報告を第1冊目として刊行し、平成7年度では「中江田八ツ縄遺跡」の整理事業を継続するとともに、第2冊目として同遺跡の報告書刊行を行う予定である。（文責 巾 隆之）

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

下田中道遺跡

本調査区は、上武道路（国道17号バイパス）の三ツ木交差点に接続する国道354号線の取付け部分付近に位置している。調査面積は6,800㎡を対象に実施された。

グリッドの設定は、対象区域に限定した設定であり、今回の調査方法の概要は以下の通りである。

(1) 調査対象区域は南北に取付け部分があるため調査の都合上、第2図に示す通り本線部分と南北の拡張区に分けた。

(2) グリッドの設定は国家座標第Ⅲ系に合わせ5m方眼を設定し（第2図参照）、東西隅をグリッド基点とし、南北軸をアルファベットで、東西軸を算用数字で呼称した。

(3) 遺構名称は種別ごとに通し番号を付した。遺物の取上げに際し、原位置をとどめる物については、その都度番号を付し図面上に記録した。

文化層が多面調査となったため、南拡張区のローム堆積層上面の古墳時代の遺構面を第3面、本線部分と北拡張区の下部洪水堆積層を挟む奈良・平安時代の遺構面を第2面とした。北拡張区及び本線部分の上部洪水堆積層より上位に相当する中・近世の遺構面を第1面とした。

(4) 遺構等の測量には平板を使用し、住居・古墳の周溝・遺物・セクション・エレベーション等は1/20、溝・道路遺構・土坑等は1/40、集石遺構は1/10の縮尺図、10cmコンタを原則とした。また、広範囲に及ぶ測量は業者委託とした。

(5) 遺構の写真撮影に際しては、35mm版と6×7及び6×9インチ版カメラを使用し、モノクロームとカラーズライドフィルムでの撮影を行った。また、撮影対象に応じて、高所作業車を使用した。

(6) 本遺跡の調査では、野外調査及びテフラ検出分析・プラントオパール分析を行い、分析結果を巻末に掲載した。

下田中川久保遺跡

本調査区は、上武道路（国道17号バイパス）の三ツ木交差点に接続する県道大原・境線の一部拡幅と迂回に伴う工事部分の調査である。調査面積は898㎡を対象に実施された。

グリッドの設定は対象区域に限定した設定であり、今回の調査方法の概要は以下の通りである。

(1) 調査対象区域は南北に長い調査範囲のため、調査の都合上、第2図に示す通り1・2区に分けた。また、県道大原・境線に沿った東側の調査区を道東と呼称し、それぞれ道東1・2区とした。

(2) グリッドの設定は国家座標第Ⅲ系に合わせ5m方眼を設定し（第2図参照）、北東隅をグリッド基点とし、南北軸をアルファベットで、東西軸を算用数字で呼称した。

(3) 遺構名称は種別ごとに通し番号を付した。また、遺物の取上げに際し、原位置をとどめる物については、その都度番号を付し図面上に記録した。

特に、住居・土坑・溝・道路及び不明の遺構については、それぞれSJ・SK・SD・SW・SXを遺構の種別に付した。また、畝跡及びトレンチャーによる耕作跡については溝の扱いをし、記録した。

文化層が多面調査となったため、1区のローム堆積層上の古墳時代の遺構確認面を第5面とし、1・2区の洪水堆積層より下位のV層上面を第4面、IV層上面を第3面、2区のAs-B下面の遺構面を第2面、1区の表土下の中・近世以降の遺構面を第1面として、調査をした。

(4) 遺構等の測量には平板を使用し、住居・溝・道路遺構・遺物・エレベーション・セクション等は1/20、土坑・竈・SX（不明遺構）は1/10、畝は1/40の縮尺、10cmコンタを原則とした。また、広範囲に及ぶ測量は業者委託とした。

(5) 遺構の写真撮影に際しては、35mm版と6×7インチ版カメラを使用し、モノクロームとカラーズライドフィルムでの撮影を行った。また、撮影対象に応じて、高所作業車及び気球を使用した。

(6) 本遺跡の調査では、テフラ分析・植物珪酸体

第1章 発掘調査の経過

分析・花粉分析及び馬歯・馬骨の鑑定を行い、分析及び鑑定の結果を巻末に掲載した。

2. 調査の経過

下田中中道遺跡

本遺跡の調査は平成3年7月上旬より調査の準備に入り、7月16日より本格的に調査を開始した。

7月下旬迄に、本線の取付け部分である南北の拡張区及び本線部分西半部分の重機による表土掘削を行った。ローム台地部分である南拡張区より遺構確認作業を実施し、周堀のみが残存している古墳1基及び住居跡1軒、土坑5基、溝2条、道路遺構1条を検出し、北拡張区からは畝跡1群、溝1条、早川の旧河道跡を検出した。

8月には、南・北拡張区の調査をほぼ終了した。また、本線部分からは第1面上層の遺構である道路遺構1条、早川の新时期河道跡を検出した。また、本線部分の西半の4地点及び北拡張区の2地点で、下層調査のための試掘トレンチを入れた。折しも台風12号の襲来により、調査区が一時水没状態となったため、ポンプを使って排水作業を行った。

9月に入り、本線部分東半の第1面上層の調査を終了し、第1面中層の調査のための掘削を開始した。これに並行して、南拡張区では旧石器時代の試掘を3ヶ所設定し実施した。本線部分東半からは道路遺構1条、溝3条を検出した。だが、台風18号の影響により再度調査区が水没状態となり、二度目のポンプによる排水作業を行うことになった。この水没により、調査不能状態が一週間続いた。

9月後半より本線部分の東半から第1面下層の溝6条、南拡張区から続く道路遺構1条を検出した。また、本線部分西半を重機掘削し第2面の文化層から畝跡3群及び溝2条、住居跡4軒を検出した。

10月に入り、台風21・22号の襲来とその後の秋雨の影響により調査区は三度目の水没状態に陥り、調査の進捗に相当な支障をきたした。ポンプによる排水作業を再開するとともに、排土の土山の崩落に備え、安全対策には万全を期した。

中旬には現地での調査をほぼ終了し、11月上旬までには全調査区の埋め戻しと調査事務所の撤収を完了した。

下田中川久保遺跡

本遺跡の調査は平成5年4月上旬より調査の準備に入り、4月20日より本格的に調査を開始した。

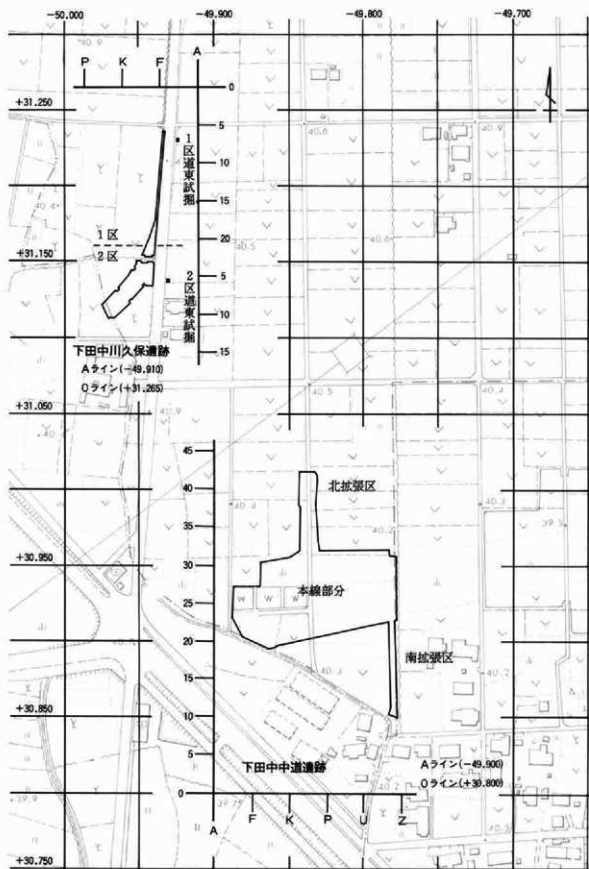
4月中には重機による表土掘削を終了し、1区から第2面の住居跡1軒、1区側ではトレンチャーによる耕作跡を多数確認した。

5月初旬、トレンチャーによる攪乱から僅かに免れた部分より、第2面の住居跡4軒及び性格の不明な遺構4基を検出した。また、1区から第1面の江戸時代以降と思われる道路遺構1条と溝1条を確認した。並行して、1区の県道沿いに旧石器時代の試掘を行ったが遺構等は検出されなかった。

中旬には、2区の第3面を調査するため重機による洪水堆積層の除去を実施した。畝跡及び水田跡と推定される遺構の検出及び馬歯・馬骨等の出土をみた。併せて、南西部より早川の旧河道である落ち込みと1・2区の区境付近より第3面の畝跡を検出した。この区境付近の畝跡からは、上下2層からなる耕作の跡を確認できた。

6月上旬、用水路の南側の2区で第4面の調査を行い、溝11条、畝跡1及び痕跡2単位を検出し、併せて馬歯・馬骨の出土をみた。中旬、県道大原・境線に沿った幅2～2.5mの東側の調査をするため、県道の道東1区及び2区に1ヶ所ずつ試掘を入れた。約1.6mの深さより径250mmの排水管を検出したが、この排水管は県道に沿って南北に敷設されていることと調査対象区の幅が狭いこともあり、道東の調査は試掘だけにどめた。一方、1区の第5面の調査のための掘削を並行して行い、古墳時代の住居跡1軒の検出をみた。また、2区の用水路の堤防の南際より第2面の住居跡2軒を検出した。

下旬より調査の終わった1区から重機による埋め戻しを行い、6月中には全調査区の埋め戻しと調査事務所の撤収を完了した。



第2図 調査区及びグリッド設定図

0 1 : 2000 50

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置

下田中道遺跡と下田中川久保遺跡は、県南部を流れる利根川の北約3.5km、東武伊勢崎線の境町駅より北東へ約1.7km程の所にあり、新田郡新田町の南西部に位置する。両遺跡とも上武道路(国道17号バイパス)と一級河川早川の左岸にあり、現況は微高地が畑地、低地部は水田として土地利用されている。

第2節 地理的環境

下田中道遺跡と下田中川久保遺跡のある周辺の地形は、大間々扇状地、洪積台地、沖積低地という形勢時期の異なる複雑な地形が入り組んでいる。

この大間々扇状地は、開折扇状地で第四紀更新世後期に山田郡大間々町相原を扇頂とする渡良瀬川の下刻作用によって形成されたもので、南北約18km、東西約13kmの広い地域を指している。

大間々扇状地の形成時期は、地形の違いから、大きく新旧二つの段丘面で構成されている。

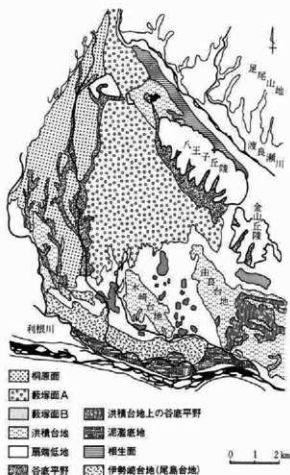
石田川の北側の広大な地域は、藪塚面と称されている。この藪塚面は、下層に藪塚礫層があり、扇尖で層厚約20m以上、扇端部で約10~15m程堆積をしている。礫層の上層には、浅間山を給源とする板鼻褐色軽石層(A_s-B_P、18,000~22,000年前)が存在する。藪塚面の形成時期は、約20,000年前と考えられている。

一方、扇状地の藪塚面西側を占める面を桐原面と呼んでおり、扇状地の形成上最も古い扇状地面であると考えられる。この桐原面は、層厚約40~50mに及ぶ桐原礫層を覆うローム層中に年代の指標となるテフラを含んでいる。最も下層のテフラは、北橋スコリア(H_kS、50,000年前)であり、その上層中には湯の口軽石層(A_g-U_P、40,000~50,000年前)、榛名八崎(H_r-H_P)、赤城兜沼(A_g-K_P)、前述のA_s-B_Pを順次堆積させている。このことから、桐原面が形成されたのは、約50,000年前頃と

推定される。

この藪塚面の中で、上部ローム層の二次堆積物や軽石層が沖積低地の微高地に残っている所がある。これを特に藪塚面Bとし、それ以外の藪塚面を藪塚面Aと呼称されている。

下田中道遺跡と下田中川久保遺跡は、大間々扇状地の藪塚面Bが沖積低地の中に島状に点在する地区であり、東に石田川、南に早川が接して流れる地域にある。この早川の流路は、上武道路(国道17号バイパス)に沿って流れ、三ツ木付近で南流する形をとっているが、改修前は蛇行し川幅が狭いため時々氾濫する地区であった。このことは、両遺跡地内の土層からも窺うことができる。なお、標高は両遺跡ともほぼ40.1~41.3mの範囲にある。近年、周辺は工業団地、道路整備等で開発が著しく、畑地、水田が減りつつある。



第3図 大間々扇状地の地形分類(尾島町誌から)

第3節 歴史的環境

下田中道遺跡・下田中川久保遺跡の周辺では、上武道路（国道17号バイパス）の建設及びその関連事業或いは種々の開発に伴い、多くの遺跡が発掘調査されている。ここでは、両遺跡の位置する新田郡新田町を中心に、周辺の尾島町、佐波郡境町の主な遺跡の分布を時代をおいて見てみたい。

新田町における旧石器時代の遺跡は、木崎台地の縁辺部及び大間々扇状地の扇端部の湧水地付近に集中する傾向がある。最も古いものは木崎台地西縁部にある中江田AⅡ地点で、始良火山灰層の10cm上位より旧石器後期の刃器状縦長剥片を出土している。

縄文時代の草創～早期にかけての遺跡は、旧石器時代同様に木崎台地の縁辺部に多く、中～後期になると湧水地縁辺にも多く見られるようになる。

草創期の遺跡としては大間々扇状地の扇端部の低台地上にある新堀前遺跡、木崎台地及びその縁辺の草創期～中期までの中江田AⅠ・B地点遺跡があげられる。

矢太神遺跡では、中期の屋外に設置された炉跡が検出されている。また、矢太神沼遺跡では、後期前半の火災を受けたと推定される不整形の住居跡1軒を検出している。矢太神沼の湧水地周辺には、大量の縄文時代の遺物が採集できることから、大規模な遺跡の存在が推測される。なお、矢太神沼を水源とする石田川の左岸にある新屋敷前遺跡でも、後期に属すると思われる住居跡が検出されている。

隣接地に限ってみれば、南方の小角田前遺跡から草創期の押圧縄文土器と石棺、中期から晩期にかけての遺物が出土している。

次に、弥生時代の遺跡を見てみると、沖積地を控えた台地の縁辺、湧水地の縁辺、扇状地の扇端部などで確認されている。このことは、生活様式が狩猟・採集から農耕を中心とした形態へと変革したことにより、台地部から低湿地へと生活基盤が移ったことを示している。主な遺跡としては、中江田AⅠ・矢太神・東田・梨子木・東遺跡等があげられる。

古墳時代になると、農耕技術及び生産の向上、人口の増加等により、低地の周辺から台地の縁辺を中心として大小の集落が急激に出現する。特に、中期以降には用水の確保、土木技術の進歩から集落が台地の奥にまで広がっている。

当遺跡の周辺一帯では、5世紀後半になると古墳の出現が見られるようになる。主な前方後円墳は、現在までのところ6世紀後半以降のものに限定されている。主要なものを挙げれば、前方後円墳は小角田地区で2基（『上毛古墳総覧』 世良田村36・37号）、調査された尾島工業団地遺跡の1基である。

一方、最近の尾島第二工業団地内の調査（世良田諏訪下遺跡）で発見された5世紀後半から6世紀前半にかけての初期群集墳（73基の帆立貝式と円墳からなる）は、当地域周辺における初現的な古墳として注目される。

主な古墳時代の集落は、花園（木崎中学校校庭）・大通寺後・堀之内・一町田及び中通の木崎台地上の遺跡、林・東油田及び下耕地の赤堀地区の遺跡、寒沢の中江田地区の遺跡、下江田地区の御門遺跡、下田中地区の八幡・下田中・中道・川久保遺跡、上田中地区の前六供遺跡、村田地区の本郷・本郷B・境ヶ谷戸遺跡、金井地区の金山前遺跡等がある。

奈良・平安時代の遺跡では、官衙や寺院等の遺跡には、上野井・入谷・源六塚遺跡等があげられる。特に境町にある十三宝塚遺跡では多数の掘立柱建物と3棟の基壇建物が検出され、そこから奈良三彩陶、墨書土器、「測」銘入りの縣名瓦を出土している。集落の遺跡は、沖積地の中の微高地からも見つかり、一段と広がりをみせている。当遺跡の周辺のものをおよぼせば、下田中（いずみ団地）・西田・小角田前・三ツ木皿沼・世良田諏訪下遺跡等が分布している。

中世では、新田庄を開発した新田義重と子孫一族が領主支配を行った地域であり、これに關係する館跡等の遺跡は枚挙にいとまがない。とりわけ、新田氏と縁の深い世良田の長楽寺を中心とした文化は、この地域周辺を特徴付けるものである。



1. 伊勢崎東流通団地遺跡 2. 三宮岡ノ谷遺跡 3. 上西名美神谷遺跡 4. 鶴巻古墳 5. 上西名古墳群 6. 十三宝塚遺跡 7. 雷電神社古墳 8. 出口遺跡 9. 土橋・三ツ古屋遺跡 10. 烏海戸遺跡 11. 下西名塚遺跡 12. 寺家前遺跡 13. 下田中遺跡 14. 江田館跡 15. 西田遺跡 16. 谷津遺跡 17. 中道遺跡 18. 上新田遺跡 19. 今井遺跡 20. 矢大神遺跡 21. 中江田遺跡 22. 花園遺跡 (本崎中学校校庭遺跡) 23. 矢旗神社古墳 24. 油田古墳群 25. 二休地蔵古墳 26. しども山古墳 27. 一本松塚古墳 28. 長楽寺遺跡 29. 北米岡遺跡 30. 女塚遺跡 31. 下田遺跡 32. 西林遺跡 33. 歌舞伎遺跡 34. 尾島工団地遺跡 35. 小角田前遺跡 36. 小角田古墳群 37. 三ツ木地戸遺跡 38. 三ツ木遺跡 39. 西今井遺跡 40. 上矢島遺跡 41. 武士古墳群 42. 三ツ木田沼遺跡 43. 新井田原跡下遺跡 44. 台遺跡

第4図 周辺遺跡分布図 (国土地理院 1:50,000 「深谷」「高崎」使用)

周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	概要	文献等
1	伊勢崎東流通団地遺跡	伊勢崎市日乃出町 佐波郡東村東小保方	古墳～平安時代の集落跡。周溝墓、段治遺構等を検出。	『伊勢崎・東流通団地遺跡』群馬県企業局 昭和57年
2	三室岡ノ谷遺跡	佐波郡東村東小保方三室	古墳時代後期の集落跡。木製品出土。	『上瀧名真神谷遺跡・三室岡ノ谷遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成3年
3	上瀧名真神谷遺跡	佐波郡境町上瀧名	平安水田跡、古墳時代後期集落跡。	同上
4	鶴巻古墳	佐波郡東村東小保方鶴巻	角閃石安山岩使用の横穴式石室。	
5	上瀧名古墳群	佐波郡境町上瀧名字鎮古	鎮古地区に群集墳あり。古墳～平安時代の集落跡。	『上毛古墳群』群馬県教委昭和12年 『群馬県佐波郡采女村上瀧名古墳発掘報告』国学院大学考古学会 『上代文化』18 昭和23年
6	十三宝塚遺跡	佐波郡境町伊与久字十三宝塚・上野初	佐波郡衙門遺構。昭和51～56年の6次に及ぶ調査を実施。三彩陶、埴名瓦等出土。	『史跡十三宝塚遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成4年
7	雷電神社古墳	佐波郡境町雷電裏	前方後円墳。横穴式石室が社殿下に開口。大刀、耳環が出土。7世紀代と思われる。	
8	出口遺跡	佐波郡境町下瀧名出口	住居跡57軒、祭祀遺構、井戸等検出。	『土橋・三ッ古瀧・出口・島海戸遺跡発掘調査概報』境町教委 昭和52年
9	土橋・三ッ古瀧遺跡	佐波郡境町下瀧名土橋	平安時代の遺構。埴名土器出土。古墳。	同上
10	島海戸遺跡	佐波郡境町下瀧名島海戸	古墳時代集落を中心とした遺跡。標名山二ッ岳火山灰層(F A)下の住居跡が注目される。	同上
11	下瀧名塚越遺跡	佐波郡境町下瀧名字塚越	古墳。古墳～平安時代の集落跡。船跡。	『下瀧名遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成3年
12	寺家前遺跡	佐波郡境町下瀧名字寺家前	昭和58年度境町教委調査。朱書土器出土。	『昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』境町教委 昭和59年
13	下田中遺跡	新田郡新田町下田中宇高田	古墳前期～平安時代集落、園立社建物。	『発掘遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡』群馬県企業局 平成3年
14	江田船跡	新田郡新田町上江田字西郷	江田行舟の船跡といわれる。室町時代の土器、櫓が残存。照指定史跡。	山崎一『群馬県古墳遺跡の研究』上 昭和46年
15	西田遺跡	新田郡新田町上江田字西田	古墳～平安時代の集落跡。昭和50年調査。	『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』東京電力株式会社 昭和63年
16	谷津遺跡	新田郡新田町上江田字谷津	古墳～平安時代の集落跡。礎出土。	同上
17	中道遺跡	新田郡新田町下田中宇高田	古墳～平安時代の集落跡。	同上
18	上新田遺跡	新田郡尾島町世良田字上新田	中世の環濠居館の一部を検出	同上
19	今井遺跡	新田郡尾島町世良田字今井	古墳～平安時代の集落跡か?	同上
20	矢太神遺跡	新田郡新田町大字大根	縄文時代集落跡。矢太神通水道がある。	
21	中江田遺跡	新田郡新田町中江田字本郷他	通称「世良田田んぼ」の東側台地上にあり、先土器～平安時代の包蔵地。	
22	花園遺跡(本崎中学校校庭遺跡)	新田郡新田町本崎字花園他	古墳時代中期～後期集落。	『本崎中学校校庭遺跡』新田町教育委員会 昭和56年 群馬大学研究室調査
23	矢抜神社古墳	新田郡新田町中江田字宿通	前方後円墳。角閃石安山岩使用石室。土輪、大刀、玉類が出土。	出土品は東京国立博物館蔵
24	油田古墳群	新田郡新田町赤塚字東油田	後期古墳群。現状で3基確認。	
25	二休地蔵古墳	新田郡尾島町世良田町下	東武伊勢崎線世田原駅から旧跡高地上に続く古墳群のうちの一基。	
26	しほみ山古墳	新田郡尾島町世良田町福原	世良田48塚古墳群の南端。後期古墳。	
27	一本松古墳	新田郡尾島町世良田町下原	世良田48塚古墳群の南端。後期古墳。	
28	長栄寺遺跡	新田郡尾島町世良田町東原宮西	中世集落跡。文殊山古墳(前方後円墳)等多彩。	『長栄寺遺跡』尾島町教委 昭和53年、56年
29	北米岡遺跡	佐波郡境町北米岡257他	縄文～古墳時代包蔵地。金子規矩雄氏蔵石版出土地。	『境町古代遺跡』境町役場 昭和53年
30	女塚遺跡	佐波郡境町女塚道西	群馬大学史学研究室で一部発掘。古墳時代末期の住居跡を検出。	同上
31	下田遺跡	佐波郡境町三ッ木下田	古墳～平安時代の住居跡。中世の溝・土壇跡の検出	『西林遺跡・下田遺跡発掘調査の概要』境町教委 昭和56年
32	西林遺跡	佐波郡境町三ッ木西林	古墳～平安時代の集落跡検出。境バイパス関連調査。	同上 『西林遺跡第1次発掘調査概要』境町教委 昭和54年

第2章 遺跡の位置と環境

No	遺跡名	所在地	概 要	文 献 等
33	歌舞伎遺跡	新田郡尾島町世良田字歌舞伎	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の住居跡約200軒を抽出。	『歌舞伎遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和57年
34	尾島工業団地遺跡	新田郡尾島町世良田・小角田	小角田前遺跡に続く集落跡、古墳群。企業局調査。	
35	小角田前遺跡	新田郡尾島町世良田字小角田前	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の集落跡。古墳2基抽出。	『小角田前遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和61年
36	小角田古墳群	新田郡尾島町小角田	後期古墳群。角閃石安山岩使用石室。	相川龍雄「小角田前古墳考」『上毛及上毛人』198号 昭和8年
37	三ッ木越戸遺跡	佐波郡境町三ッ木字越戸	平安時代の集落跡。境バイパス工事に伴う調査。	『三ッ木越戸』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和56年
38	三ッ木遺跡	佐波郡境町三ッ木字自光坊・堂前	古墳～平安時代家跡、方形周溝墓。早川右岸台地上。なお南接地域は同遺跡名で境町教委が調査。	『三ッ木遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和60年 『西今井・三ッ木遺跡調査概報』境町教委 昭和55年
39	西今井遺跡	佐波郡境町西今井字中道 新田郡新田町下田中字諏訪下	上武道、早川河川改修に伴う発掘調査で奈良時代以降の集落跡を抽出。南接地はほ場整備関係の境町教委による調査。	『西今井・三ッ木遺跡調査概報』境町教委 昭和55年 『西今井遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和63年
40	上矢鳥遺跡	佐波郡境町矢鳥字上矢鳥	ほ場整備関係の調査で一部集落跡を抽出。	『上矢鳥遺跡発掘調査概報』境町教委 昭和54年
41	武士古墳群	佐波郡境町上武士・下武士	前方後円墳5、円墳45基ほどあったといわれる。数次に亘る調査を実施。	『上武士の古墳』境町教委 昭和43年 『下武士遺跡』境町教委 昭和53年 『武士遺跡』境町教委 昭和56年
42	三ッ木原沼遺跡	佐波郡境町三ッ木字原沼	古墳時代の住居8軒、平安時代の畑・集落跡。	『年報13』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成6年
43	世良田諏訪下遺跡	新田郡尾島町世良田諏訪下	古墳73基、平安時代の水田・畑跡。	『世良田諏訪下遺跡』尾島町教委 平成6年
44	台遺跡	新田郡新田町高尾字台	縄文～平安時代の集落跡。	『台遺跡』新田町教委 昭和63年

【上記以外の参考文献】

- (1) 『群馬県史 通史編』1990 群馬県
- (2) 地形の分類は、沢口宏氏の分類による。「新田町誌」第一巻通史編 1990 新田町誌刊行委員会・新田町、「尾島町誌」通史編上巻 1993 尾島町
- (3) 『新田町誌』第二巻 1987 新田町誌刊行委員会・新田町
- (4) 『尾島町誌』通史編上巻 1993 尾島町
- (5) 『年報11』1992 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 『年報13』1994 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (7) 『群馬県遺跡台帳1』(東毛編) 1971 群馬県教育委員会
- (8) 『上毛古墳総覧』1938 群馬縣
- (9) 『群馬県の地名』1987 日本歴史地名大系 10巻 平凡社
- (10) 『群馬県遺跡地図』1973 群馬県教育委員会

第3章 下田中中道遺跡

第1節 遺跡の概要

本遺跡は新田郡新田町・同郡尾島町・佐波郡境町の町境にあり、上武道路（国道17号バイパス）の東側で、南流する早川の左岸に位置している。調査区はこの早川と東を流れる石田川とに挟まれる微高地と、早川によって浸食された谷地形の境にある。

調査区の周囲には、北東側に東京電力株式会社で調査した中道遺跡、東側に小角田古墳群がそれぞれ位置している。標高は、ほぼ40.1～40.6mである。

本線部分は国道354号線の長さ約225m、幅約95～120mの本線部分と、その取付け部分となる北拉張区及び南拉張区からなっており、北拉張区は長さ約105m、幅約32～40m、南拉張区は長さ約130m、幅約10～13mを対象としている。

また、本線部分と北拉張区は低地部と旧早川の流路により浸食された部分からなり、南拉張区は微高地部分に位置している。

今回の調査では、古墳時代から中・近世に至る各種の遺構と遺物を検出した。

旧石器時代に対する試掘を南拉張区の微高地上で3箇所設定し実施したが、遺構・遺物は何ら検出されなかった。また、縄文時代の遺構は検出できなかったが、各調査区及び他の時代の遺構の覆土中から、僅かではあるが縄文時代の石器や中期の土器が出土した。

弥生時代の遺構及び遺物は全く検出されず、当地区の希薄な時代と言える。

古墳時代の遺構としては、前期の竪穴住居跡1軒、土坑5基、後期の円墳1基を検出した。これらの遺構からは、遺物がそれほど多く出土していないが、他の時代の遺構からは、古墳時代前期の土師器片及び調査区の周辺に存在したと思われる古墳の埴輪片などが出土した。

奈良・平安時代の遺構としては、本線部分及び北拉張区から畝跡4群、溝7条（自然の凹地も含む）、

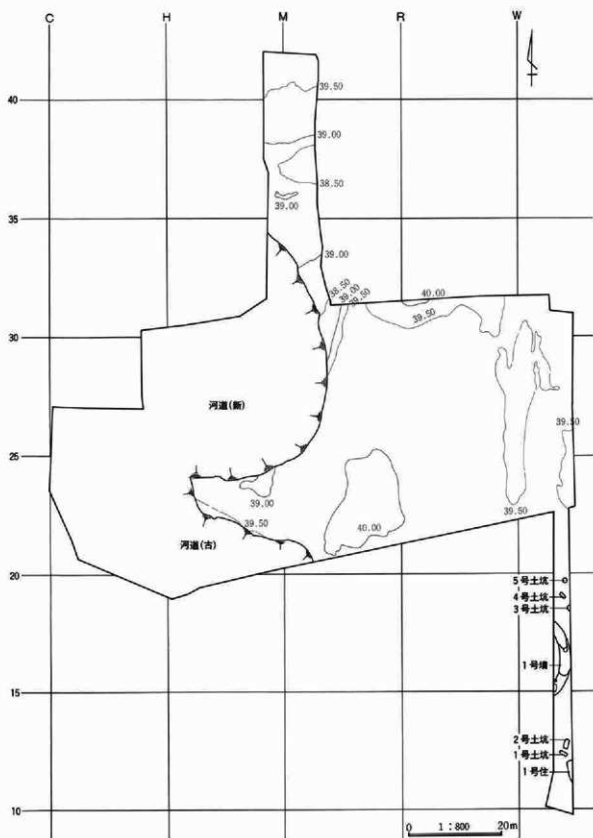
住居跡4軒を検出した。この内、畝跡群は早川の影響であると考えられる下部洪水堆積層の直下から発見されている。この下部洪水堆積層に埋没した畝跡群は、それぞれ数条から十数条を1単位として検出している。また、検出した溝の内の1条は、畝を区画するものと推定される。下部洪水堆積層は、南拉張区を除いた本線部分及び北拉張区で確認することができた。なお、遺構ではないが、グリッド出土の遺物として北拉張区から羽口及び台石が数点出土していることも、下部洪水堆積層の直下の特徴としてあげられる。

住居跡については、調査の段階で一度に下部洪水堆積層と上層の黒色土（場所によっては4～10cm程の層厚で堆積）を除去したため、住居跡と畝の新旧関係を土層から判断することはできない。しかし、住居跡の年代は伴出する遺物から、概ね9世紀後半～10世紀中葉と推定することができる。

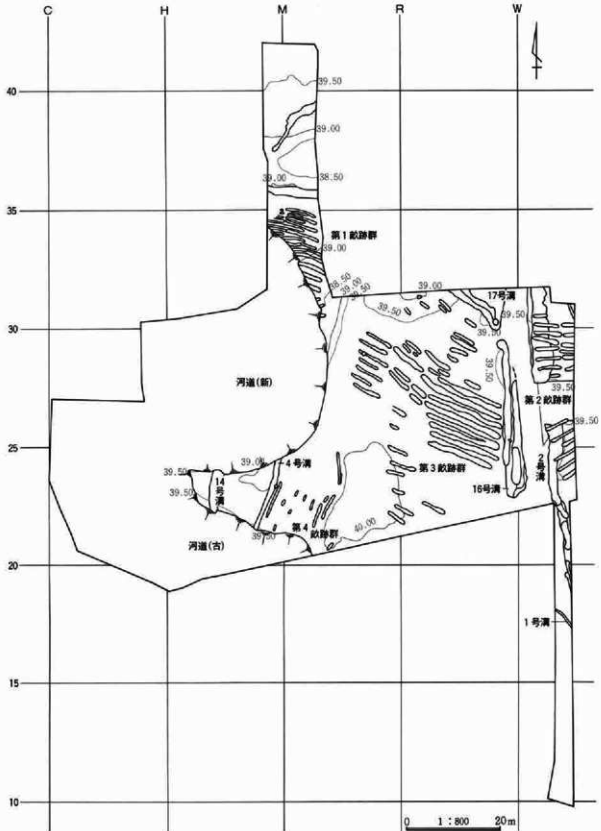
中・近世の遺構としては、溝9条、道路遺構2条、集石遺構2基を検出した。これらの遺構は上部洪水堆積層が覆った後に構築された遺構と推定できる。この内、5条の溝と2条の道路遺構については、本線部分の東壁寄りから重複して検出されている。同一地点での改修を繰り返していることが窺え、長期にわたる地軸継続としての性格をも窺わせる。

これらの遺構の多くは、出土遺物及び土層からAs-B降下以降の溝と推定できる。また、1号道路遺構は南拉張区から本線部分の東壁寄りを走行しており、As-B降下以降で、As-A降下以前の遺構と捉えられる。2号道路遺構は、本遺跡で検出できた最も新しい遺構であり、As-A降下以降と考えられる。

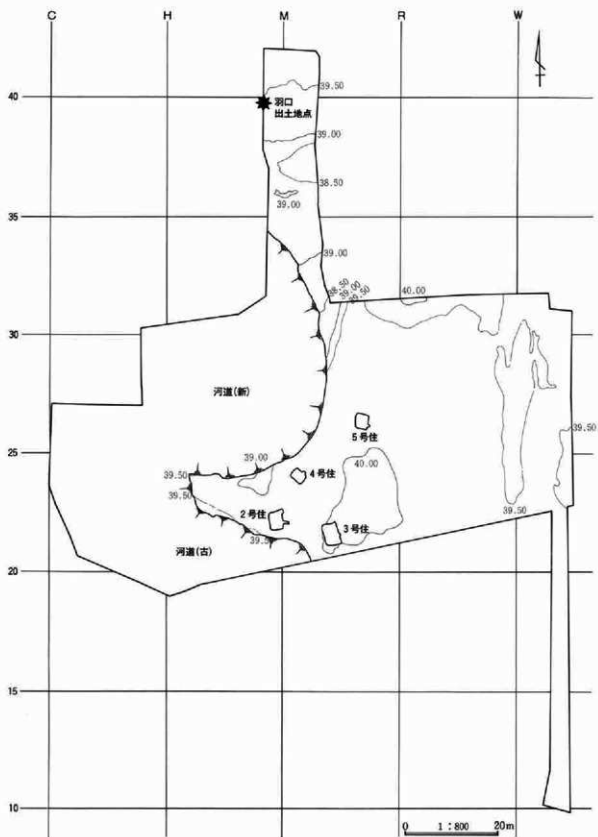
また、集石遺構は本線部分中央の南壁寄りから検出している。1号集石遺構は掘方のある遺構で、下位に小礫を詰め上位にやや大きな礫を並べている。一方、2号集石遺構は大小600個以上の礫を積み上げており、下面より若干の炭化物を検出した。これらの遺構には、遺構の年代を特定できる遺物は出土しなかった。



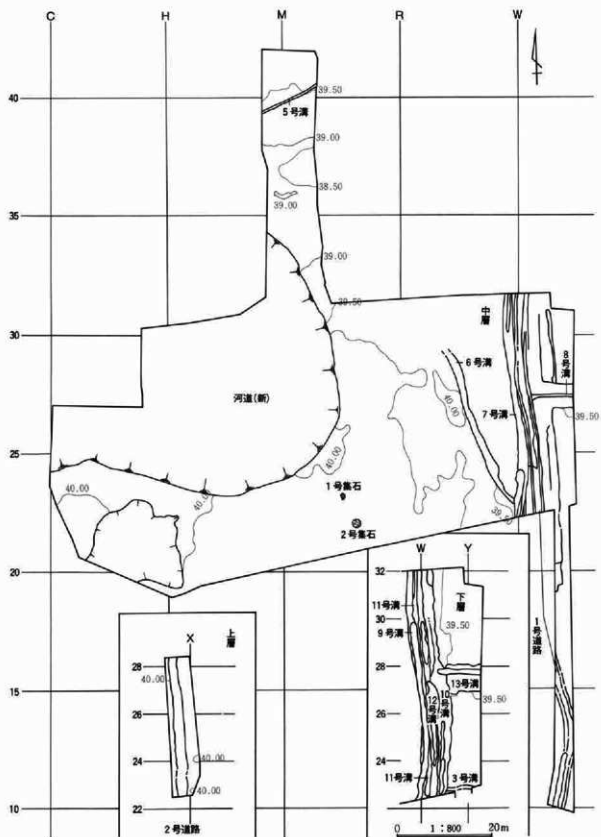
第5図 古墳時代概念図



第6図 奈良・平安時代（跡群・溝）概念図



第7図 平安時代（住居跡）概念図



第8図 中・近世概念図

第2節 基本土層

本遺跡の標準的な土層堆積状態は第9図に示した2地点であり、概要は以下の通りである。

(低地部基本土層)

- I 層 褐色土 現耕作土 As-Aを含む砂質土。
- II 層 暗褐色土 As-Bを含む砂質土。
- III 層 As-B層 黒褐色をなし、新期河道部を除く低地部のほぼ全域に認められる。
- IV 層 上部洪水堆積層 黄灰色や浅黄色をなすシルト質の土層で、2～3層に分層される。
- V 層 黒色土 粘性の高い土層で、上下の洪水堆積層の間層をなす。
- VI 層 下部洪水堆積層 黄灰色や浅黄色をなす粘土質の土層で、3～5層に分層される。
- VII 層 暗灰色土 粘性の高い土層で、上層にAs-CやFA・FPを包含する。

7～9世紀代の遺物を包含する。

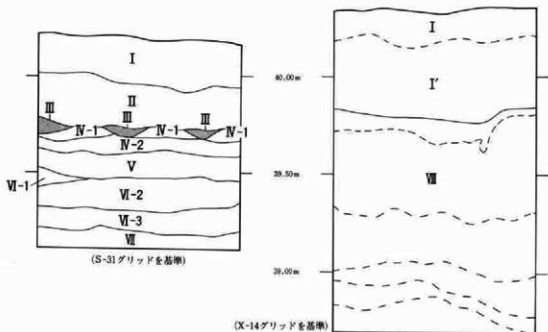
(台地部基本土層)

- I 層 低地部の基本土層のI層と同一。I'層は近・現代の耕作土。
- III 層 暗褐色ロームやにぶい橙色をなす火山灰がラミナ状に堆積し、水磨された白色軽石粒(As-Y-P?)を含む。ロームの水成二次堆積層と考えられる。

以上が本遺跡の基本土層である。今回の調査では、低地部は、I層下面、II層下面及びIII層上面より遺構を検出したが、III層下面やV層下面にも遺構が存在していたものと考えられる。また、台地部ではIII層を掘り込んだ遺構が確認された。

なお、テフラ及びプラント・オパールについては、科学分析を行った。分析資料の採取地点は以下の通りであり、分析結果は巻末に掲載しておく。

- 第1地点 Y-23グリッド
- 第2地点 S-31グリッド
- 第3地点 R-21グリッド
- 第4地点 V-22グリッド



第9図 基本土層

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

1号住居跡 (第5・10図 図版5-1)

位置 第3面Y-11・12グリッドにあり、台地部(南拉張区)の南端寄りで東壁際より検出された。

重複 第1面中層の1号道路とこれに伴う溝により、住居跡の北西部を切られる。

規模 住居跡の大半が調査区域外であるため、規模の確定はできないが、確認できた西壁の長さは約4.60mであった。

形状 北西隅と西壁の状態から、方形の住居跡であると推定できる。

主軸方位 N-165°-E

覆土 ローム粒及びブロックを含む暗褐色土で、自然に埋没した様相を示している。検出面はローム面

で上部には直接表土がのっているが、北壁は表土層下の暗褐色土層を除去した面で検出されている。壁高 周壁の残存高は最大で約18cmであり、ほぼ垂直に立ち上がっている。北壁の掘り込みは、南壁と比較して浅く、やや緩やかに立ち上がる。

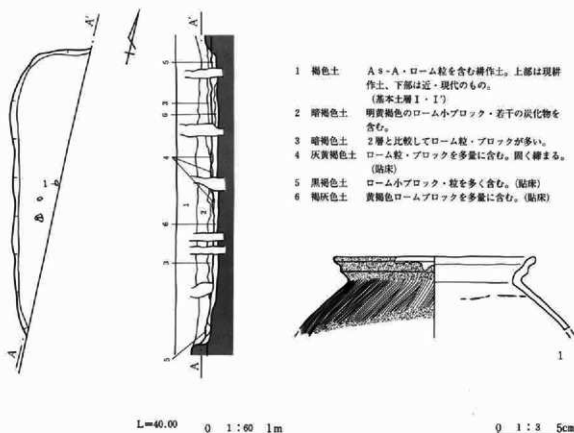
周溝 なし **柱穴** 不明

床面 部分的に床面と思われる面があるだけで、全体的に固く締まった面は検出できなかった。構築面は床面下約10cmで凹凸はあまりなく、北壁に向かって下がっていく傾向が見られた。この面に褐色土とロームの混土で、厚さ約10cmの貼床を施して床面としている。

炉の位置・残存状態 不明 **貯蔵穴** 不明

遺物の出土状態 西壁際中央部の床面直上から、土師器台付甕の口縁部片が出土する。

所見 本住居跡の時期は、出土遺物より4世紀後半と考えられる。



第10図 1号住居跡・出土遺物実測図

2. 古墳

1号墳(第5・11図 図版5-2、6、7-1・2)

位置 第3面X-14~18、Y-15~17グリッド

重複 第1面中層の1号道路とこれに伴う溝が北北西から南南東にかけて走行しており、墳丘部及び周堀と重複し、切られている。

規模 検出された周堀は本古墳の東側にあたり、周堀の1/4弱を確認した。周堀の幅は約2.00~2.30m、深さは25~49cmで、検出された周堀の北側と南側を比較すると南側の方の幅が若干狭く、深くもなっている。堀の底面は、北側で標高39.34mであるのに対し、堀の中央付近で39.30m、南側で39.23mを測る。部分的に凹凸が見られるものの全体としては、ほぼ平坦な底面の様相をしている。検出された周堀の規模から推定される墳丘の規模は、径約15.4mである。

形状 古墳の大半が調査区域外であるため形状の特定は難しいが、「上毛古墳総覧」に掲載される小角田古墳群の大半が円墳であることから、円墳の可能性が高い。また、後世の削平が及んでいるため、調査範囲内では墳丘の盛土等は検出されなかった。

主体部 墳丘を削平されていて主体部及びその痕跡は一切確認できないが、周堀から出土した円筒埴輪の年代観からみて、横穴式石室の可能性が高い。

覆土 トレンチャーによる耕作で、かなり攪乱を受けているが、ロームの二次堆積層を掘り込んで周堀を構築しており、各土層にはロームブロック及びローム粒を包含している。

出土遺物 総数761点の埴輪片が出土した。その大半は周堀の覆土内からの出土である。第11図に示す通り、周堀内からの出土した遺物は墳丘寄り出土している。また、これらは概ね底面からの高さが10~50cmの範囲で出土している。

これらの埴輪片はすべて朝顔形埴輪及び円筒埴輪の小片、細片であり、この内遺存状態が良好で実測可能な破片は67点であった。この67点を除いた694点の小片及び細片の内、形状・部位が判明したものは259点であり、内訳は以下に示す通りである。

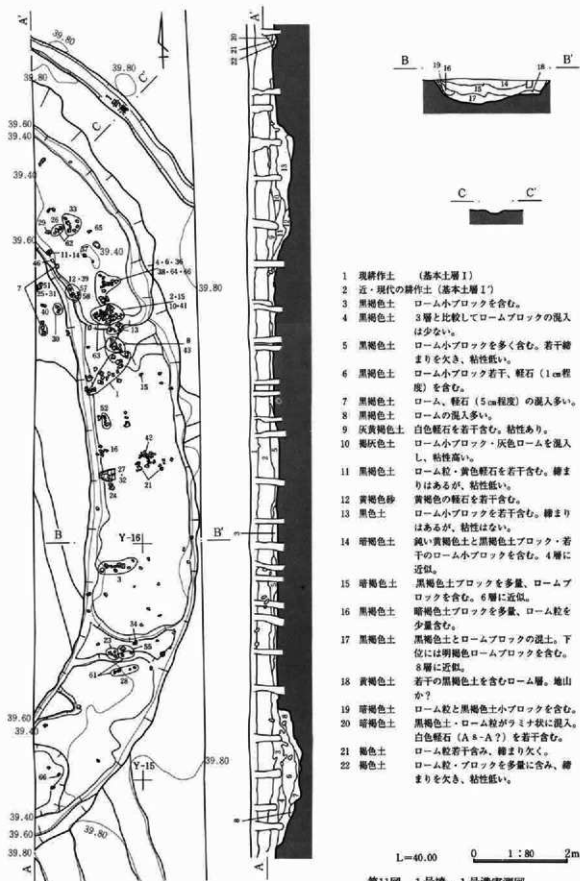
口縁部片52点、基底部片13点、突帯及び突帯を有する胴部片52(この内、透孔を有するもの5)点、胴部片127点、透孔を有する胴部片10点、ヘラ描きを有する口縁部片5点であった。この内、1点のヘラ描きは、「ト」字状に描かれているが、欠損部分を考慮すると「×」字状になる可能性がある。また、凡例で示した突帯の形状で分類すると、A1・A5・B3・B5形は各2点、A2・A3・B1形6点、A4・A6形4点、B2形5点、B4形0点であり、遺存状態が不良なため不明のもの13点であった。口縁部は、小片のため分類は不可能であった。なお、実測した67点の内、ヘラ描きを有するものは「/」が3点、「(」が1点であった。

本遺構から出土した円筒埴輪は、2条の突帯を有し、円形の透孔が胴部に一対位置する形状である。色調は大半が橙色を呈しており、胎土に白色粒や赤色土粒を含み、焼成のあまいものは全体的に少なかった。成・整形の特徴としては、外面は一次調整の縦ハケで内面は縦ハケや斜めハケ及び指ナダが施され、外面の二次調整横ハケが施されたものは全くみられない。したがって、これらの円筒埴輪は縦ハケのみで構成される時期の所産である。円筒埴輪の樹立密度や配列は不明であるが、僅かではあるが朝顔形埴輪片の出土もみられるため、円筒埴輪と朝顔形の埴輪の組み合わせによる埴輪樹立がなされていたと考えられる。

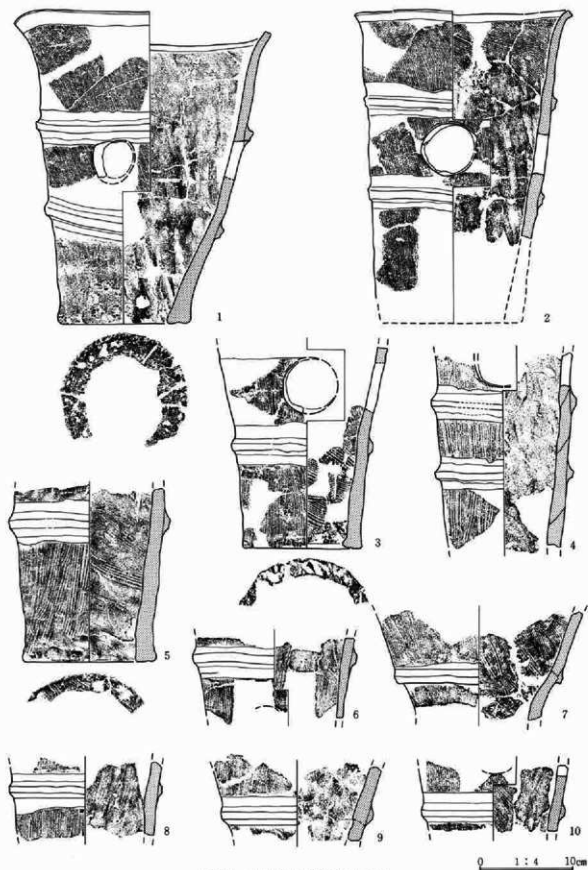
所見 本遺構は、新田町大字下田中道の中道の1番地に所在する。墳丘は削平されており、地表からはその存在を確認できなかった。「上毛古墳総覧」にも該当する地番はなく、記載漏れの古墳である。台地部(南拉張区)の中央付近に位置し、確認面は基本土層I'層の下面から検出した遺構である。

本遺跡周辺には、小角田古墳群(相川龍雄「小角田前古墳考」『上毛及上毛人』198号 昭和8年)が存在する。この古墳は小角田古墳群の一部に含まれるものと考えられ、築造年代も一致している。

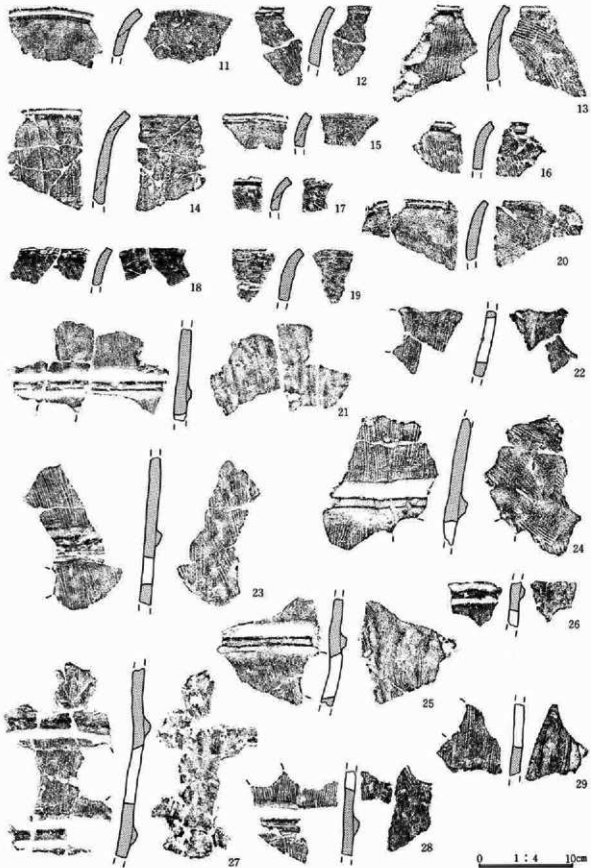
本古墳の時期は出土した埴輪の特徴により、6世紀後半と考えられる。



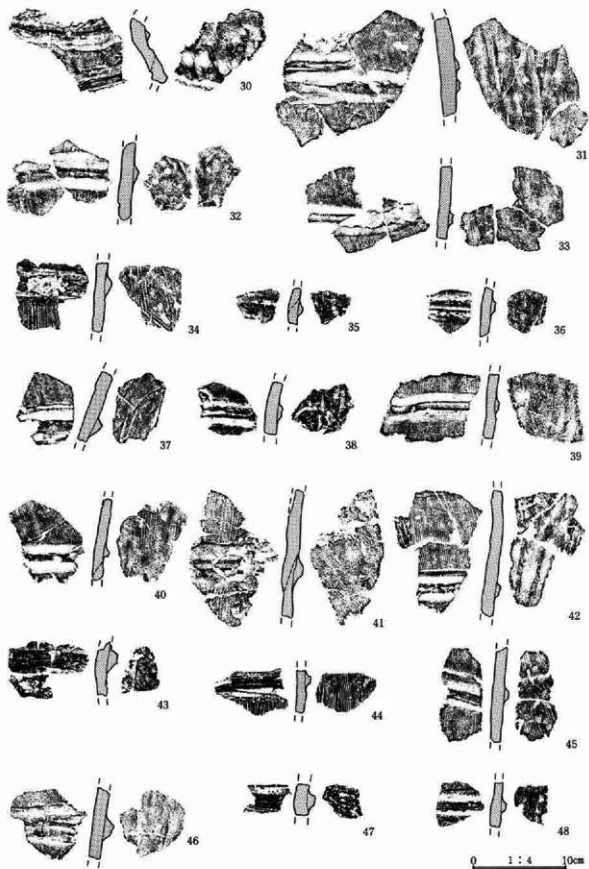
第11図 1号墳・1号溝実測図



第12図 1号墳出土遺物実測図(1)

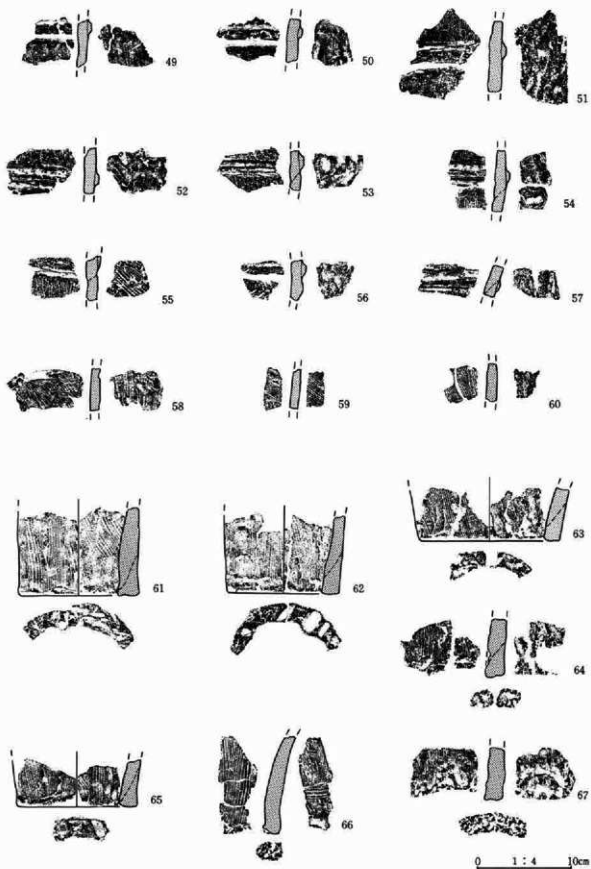


第13図 1号墳出土遺物実測図(2)



第14図 1号墳出土遺物実測図(3)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第15図 1号墳出土遺物実測図(4)

3. 土坑

1号土坑 (第5・16図 図版7-3・4)

位置 第3面X・Y-12グリッド

重複 第1面中層の1号道路とこれに伴う溝により切られる。

規模 1.82×0.88m 深さ12-14cm

形状 平面形 不整形な方形

断面形 底面は丸みを帯びており、中央部分より北西寄りがやや低くなっていく。壁は、やや緩やかに立ち上がる。

覆土 ロームブロックを含むいぶき黄褐色土及び褐色土により埋没する。出土遺物 なし

所見 南拡張区(台地部) 南半に位置している。古墳時代前期の1号住居跡に比較的近似した土で覆われていることから、古墳時代の所産と考えられる。

2号土坑 (第5・16図 図版7-5)

位置 第3面X・Y-12グリッド

重複 第1面中層の1号道路とこれに伴う溝により切られる。

規模 2.26×10.10m 深さ42-48cm

形状 平面形 楕円形

断面形 長軸方向は北東側より直線的に掘り込まれ、テラスを有し緩やかに落ち込む。南東壁は緩やかに立ち上がる。底面は、北東側に低く傾く。

覆土 ロームブロックを含む黄褐色土

出土遺物 覆土よりS字状口縁台付甕の副部片(小片のため未掲載)

所見 南拡張区(台地部) 南半に位置している。1号土坑と直行する位置にある。時期は古墳時代と思われ、風倒木痕の可能性がある。

3号土坑 (第5・16図 図版7-6)

位置 第3面Y-18グリッド

重複 なし

規模 0.84×(0.37) m 深さ28cm

形状 平面形 (楕円形)

断面形 円筒形状 底面にやや凹凸がある。

覆土 ロームブロックやローム粒を含む暗褐色土を主体とする。

出土遺物 なし

所見 南拡張区(台地部) 北半に位置し、調査区の東壁際より確認された遺構である。古墳時代前期の1号住居跡に比較的近似した土で覆われていることから、古墳時代の所産と考えられる。

4号土坑 (第5・16図 図版7-7)

位置 第3面Y-18グリッド

重複 なし

規模 1.29×0.47m 深さ10cm

形状 平面形 隅丸方形

断面形 底面は木根による凹凸がみられ、壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土 やや砂質で粘性に欠ける黄褐色土及び褐色土により埋没する。

出土遺物 なし

所見 南拡張区(台地部) 北半に位置している。古墳時代前期の1号住居跡に比較的近似した土で覆われていることから、古墳時代の所産と考えられるが性格は不明である。

5号土坑 (第5・16図 図版7-8)

位置 第3面X・Y-19グリッド

重複 第2面の2号溝により切られる。

規模 1.07×(0.96) m 深さ28cm

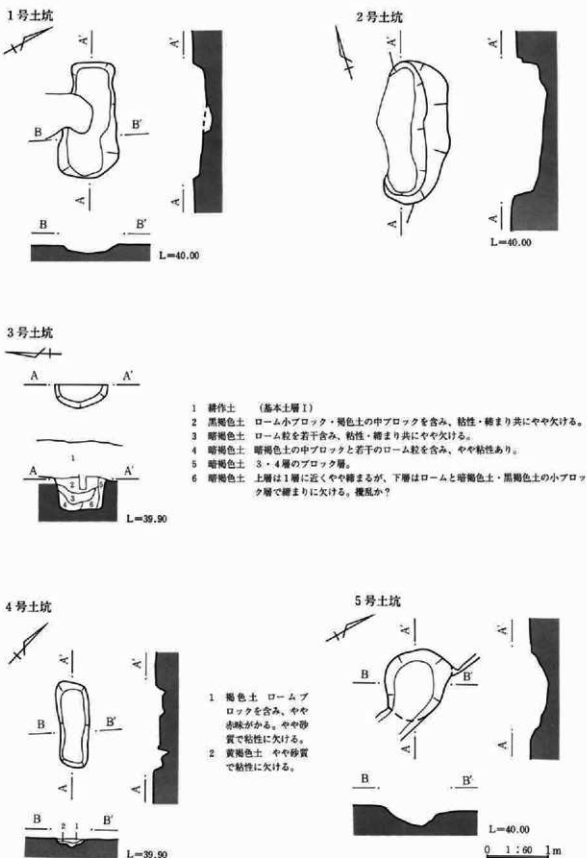
形状 平面形 不整形な楕円形

断面形 底面は丸みを帯び、緩やかに立ち上がる。

覆土 不明

出土遺物 なし

所見 南拡張区(台地部) 北半に位置している。古墳時代の所産と考えられるが、本遺構の南東隅を2号溝に切られているため詳細な資料が得られず、性格は不明な点が多い。



第16図 1～5号土坑実測図

第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1. 畝

第1畝跡群 (第6・17図 図版8)

概要 現地表面から約1.20~1.70m掘り下げた所より検出した。

位置 第2面 L-33・34、M-32~34、N-30~34 グリッド

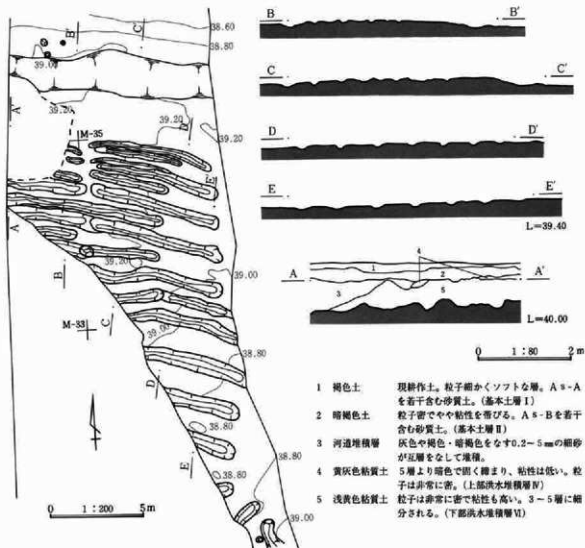
畝間の走行 N-153~177°-E
N-51~88°-E

畝間の規模 20.60×12.20mの範囲に24条の畝間を検出した。畝間の長さは0.88~8.42m、幅は0.22~0.88m、深さは0.02~0.22mである。

覆土 下部洪水堆積層である黄灰色や浅黄色の粘質土により覆われている。

出土遺物 土師器坏・甕の小片で、実測不可能。

所見 北拉張区の南半より確認された遺構である。遺構の西側を中世にはあったと考えられる早川の新規河道により削られている。しかし、遺構の上層を下部洪水堆積層に覆われているため、遺存状態は良好である。遺構の様子から、数単位の耕作跡が考えられる。



第17図 第1畝跡群実測図

遺構の南半から北側へほぼ0.60～1.60mの間隔で畝間が9条検出されており、これを1単位の耕作跡と考えることができる。

北半では、この1単位の畝間に時期の異なる畝間が作られ、これは西側にかけて延びている。このことから、数度にわたり耕作地点を移動していることがわかる。

第17図の北西側の地点は、調査時の手違いで重機により削平してしまったため遺構は未検出であるが、本来はこの地点にも畝が作られていたものと思われる。詳細は不明であるが、西壁に残された土層の様子から、本遺構は調査区域外の西へ延びることが確実である。

この畝跡群の北側に約2.30～3.40m程離れて、溝状の凹地が検出された。自然地形なのか人為的なものなのかは不明であるが、凹地を境にして南北の地形は高くなっている。この溝状の凹地は畝間の走行に沿う形で検出されており、凹地を境にして北拡張区からは畝跡が検出されなかったこともあり、第1畝跡群の北限を区画する境界であると推定できる。

本遺構は下部洪水堆積層下での検出であるため、氾濫層に埋まる直前で耕作をしていたことが推測できる。

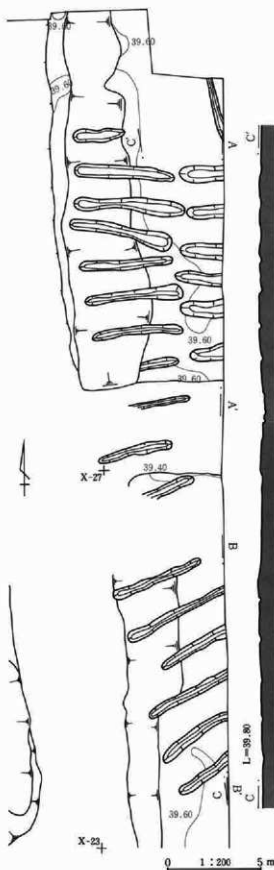
第2畝跡群(第6・18・19図 図版9・10-1・17-1)

概要 現地表面から約0.40～0.54m掘り下げた所より検出した。

位置 第2面W-27～30, X-23～30, Y-23～26・28～30グリッド 畝間の走行 N-54～101°-E
畝間の規模 35.18×8.55mの範囲に23条の畝間を検出した。畝間の長さは1.81～5.86m、幅は0.29～0.95m、深さは0.02～0.17mである。

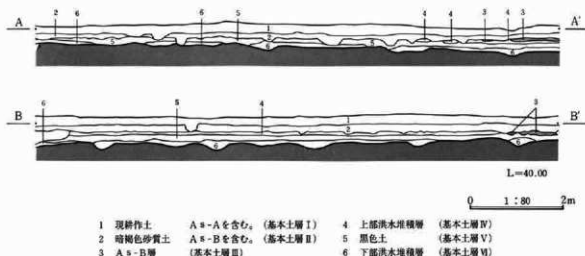
覆土 遺構の大半を中・近世の遺構に削平されているが、畝間に堆積した土層と東壁の土層の様子から、下部洪水堆積層である黄灰色や浅黄色の粘質土により覆われていることがわかる。

出土遺物 なし



第18図 第2畝跡群実測図

第3章 下田中道遺跡



第19図 第2畝跡群断面実測図

所見 本線部分の東寄りから検出された遺構で、2号溝と重複するが新旧関係は不明である。また、遺構の大半を後世の遺構によって削平されていた。

畝間どうしの重複は見られず、3単位の耕作跡として捉えることができる。

調査区の東壁に接して検出された6条の畝間を1単位とした耕作跡は、中・近世の溝等による削平は受けておらず、下部洪水堆積層に覆われていたこともあり、残存状況は良好であった。この6条の畝間は、調査区域外へ延びていくため全容は不明である。検出された畝間を見るかぎりでは、N-83-95°-Eの範囲で走行をしている。畝の間隔は0.79-1.35mであるため、その間隔には若干のばらつきが観察できる。

東壁側の6条を除く17条の畝間の内、大半が削平を受けていたり一部しか検出できなかったこともあり全容を知ることはできない。だが、第18図の北半にある10条の畝間は走行がN-76-101°-Eであり、南半の7条はN-54-67°-Eであることから、別々の単位の畝跡と考えることができる。

北半の10条の畝間の長さは2.12-5.86m、幅は0.29-0.95m、深さは0.02-0.17mであった。南半の7条の畝間の長さは2.58-5.80m、幅は0.29-0.68m、深さは0.02-0.13mであり、大きく削平さ

れた部分にも、耕作跡があったことが推察できる。

第2畝跡群で検出された畝間の底面の両端を比較すると、やや西及び南西へ低く傾く傾向にあり、標高差で0-22cmの傾きが見られた。これは、旧表土の傾きに沿うようにして耕作をしたことが推測できる。

東壁に見られる畝間の覆土は下部洪水層であるため、その直前までが本遺構の耕作時期であると考えられる。

第3畝跡群(第6・20・21図 図版9・10-2・11-1・16-1・17-1)

概要 現地表面から約0.45-1.16m掘り下げた所より検出した。

位置 第2面O-27・28、P-27-29、Q-21-29、R-21-31、S-22・24-31、T-24-30、U-24-27・29・30、V-24-26グリッド

畝間の走行 N-104-142°-E

畝間の規模 31.75×47.35mの範囲に45条の畝間を検出した。畝間の長さは1.44-18.75m、幅は0.27-1.68m、深さは0.01-0.15mである。

覆土 畝間に堆積した土層から下部洪水堆積層である黄灰色や浅黄色の粘質土層により覆われている。

出土遺物 なし

所見 本線部分の中央東半より検出された遺構である。後世の攪乱・削平等を受けていないため、残存状態は良好である。畝間の様子から少なくとも6つの単位の畝としての耕作が窺える。

西寄りの7条の畝間の特徴は、幅が他と比較して細いことにある。畝の間隔は1.09～1.82m、畝間の幅は0.27～0.67mであり、走行はN-116-123°-Eで走行している。

このすぐ東側で検出された大小様々な畝間は、その並びから2単位の耕作が考えられる。畝間はほぼ北西から南東にかけての走行であるが、長さに長短が見られ、畝間の幅及び畝の間隔もそれぞれ異なっている。

Q-R-21～24、S-22グリッドにかけて検出された畝間は1単位の耕作跡として捉えることができるが、規則的な耕作の方向、長さ、幅等は見受けられなかった。

この第3畝跡群の中で北壁寄りの4条の畝間は、N-127-142°-Eの走行で、北に向かって下がる斜面上から検出された。

第3畝跡群の中で、畝間の長い規模をもつ1単位がR-26・27、S-V-24-27グリッドから検出された。7条の畝間の長さは14.4～18.75mであり、幅は0.60～1.68m、深さは0.01～0.09mであった。畝の幅は0.63～1.45m、畝の走行はN-109-118°-Eである。一部の畝間で枝分かれしており、2条の畝間の重複として考えられるため精査を行ったが、新旧関係は確認できなかった。また、7条の内、最長の畝間は別の単位の耕作跡との重複も考えられる。この7条の北に並行して走行N-116-Eの畝間跡を1条検出したが、規模の小さな畝間跡であるため同じ単位の耕作跡とは捉えがたい。

本線部分の中央東半より検出された畝跡群は、旧地形の傾きには沿う形で耕作をしていたことが推測できる。

畝間に堆積した土層は下部洪水堆積層であるため、洪水の直前の時期までが本遺構の耕作時期であると考えられる。

第4畝跡群(第6・22図 図版9-1・11-2・16-1)

概要 現地表面から約0.56～0.90m掘り下げた所より検出した。

位置 第2面L-21～23、M-22～23、N-20～22、P-20・22-24グリッド

畝間の走行 N-9・15-42・176°-E

畝間の規模 20.90×16.10mの範囲に13条の畝間を検出した。畝間の長さは1.05～1.22m、幅は0.16～0.45m、深さは0.01～0.18mである。

覆土 畝間に堆積した土層と南壁の土層の様子から、下部洪水堆積層である黄灰色や浅黄色の粘質土層により覆われていることがわかる。

出土遺物 なし

所見 本線部分の中央南半より検出された遺構である。2号住居跡と重複するが新旧は不明であった。遺構の西側を早川の新規河道により削平されているが、第1畝跡群の検出された地点よりは標高が高いため大半の遺構は残されたものと推測できる。

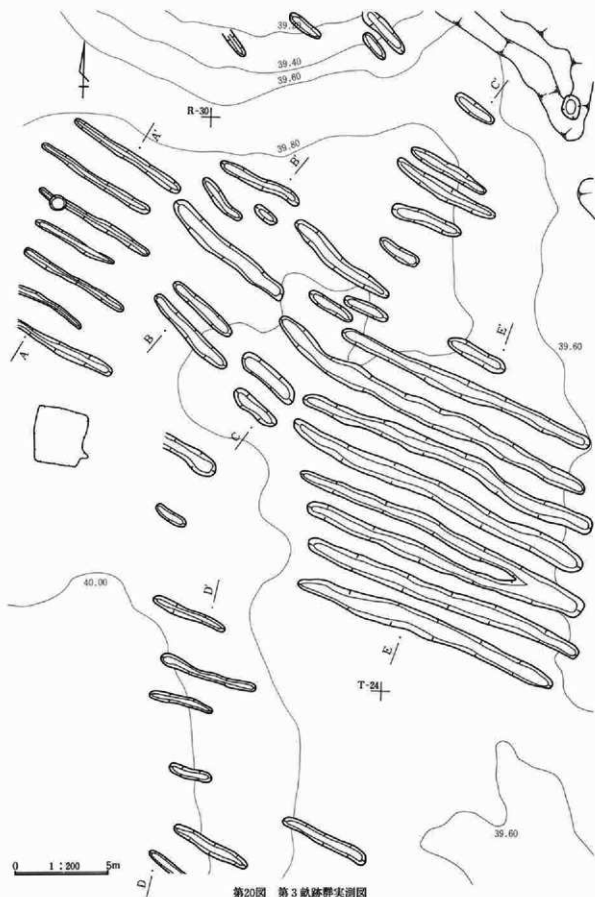
畝間に並行して、4号溝が検出されている。4号溝を境にして西側に畝間の検出が見られないため、本溝が第4畝跡群の西側を区画する境界であった可能性が高い。

第4畝跡群の特徴は、畝間の幅が第3畝跡群で検出された西寄りの7条と同様に狭いこと、また、他の畝跡群とは畝間の走行が大きく異なることにある。

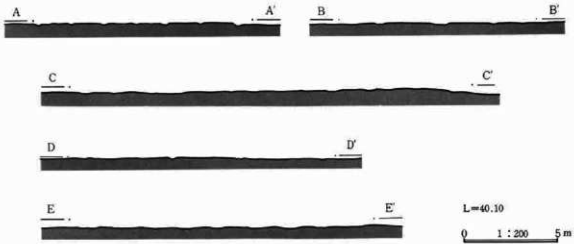
13条の畝間の内、東側で検出された2条は他の畝間と走行が異なっている。走行は、N-9・176°-Eであった。この2条の畝間は、南端で一部が重複しているが、両者の新旧関係を確認することができなかった。

この2条を除いた11条の畝の間隔、畝間の幅及び長さはそれぞれ異なり、畝間の走行はN-15-42°-Eの範囲であった。第4畝跡群の畝としての単位は不明である。

畝間の覆土及び南壁に見られる土層は、下部洪水堆積層であるため、その直前までが本遺構の耕作時期であると考えられる。



第20図 第3 畝跡群尖洞図



第21図 第3 畝跡群断面実測図



第22図 第4 畝跡群実測図

2. 堅穴住居跡

2号住居跡 (第7・23図 図版12・16-1)

位置 第2面L・M-21・22グリッド

重複 第4畝跡群と一部重複するが、新旧関係は不明である。性格の不明なピットにより住居北東隅の一部を切られる。

規模 長軸は3.79m、短軸は2.89mである。面積は推定で10.59㎡である。

形状 南北に長い隅丸方形を呈する。

主軸方位 N-86°-E

覆土 洪水堆積層に覆われているが、上部洪水堆積層か下部洪水堆積層かは判定できない。

壁高 ほぼ10cmで、緩やかに立ち上がっている。

周溝 なし 柱穴 なし

床面 全面に貼床が施され、ほぼ水平で四方の壁より20~30cm離れた住居の中央付近が固く締まる。床面下は深さ10~15cmのやや起伏のある構築面を持つ(断面図は生活面を示す)。

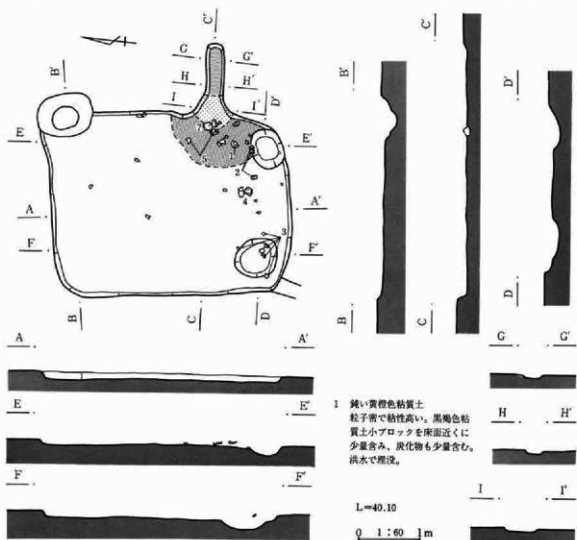
竈の位置・残存状態 東壁中央より南側に位置する。

袖部は確認できないが、煙道は火床から水平に1.05m程壁外に延びる。竈の方位はN-88°-Eである。

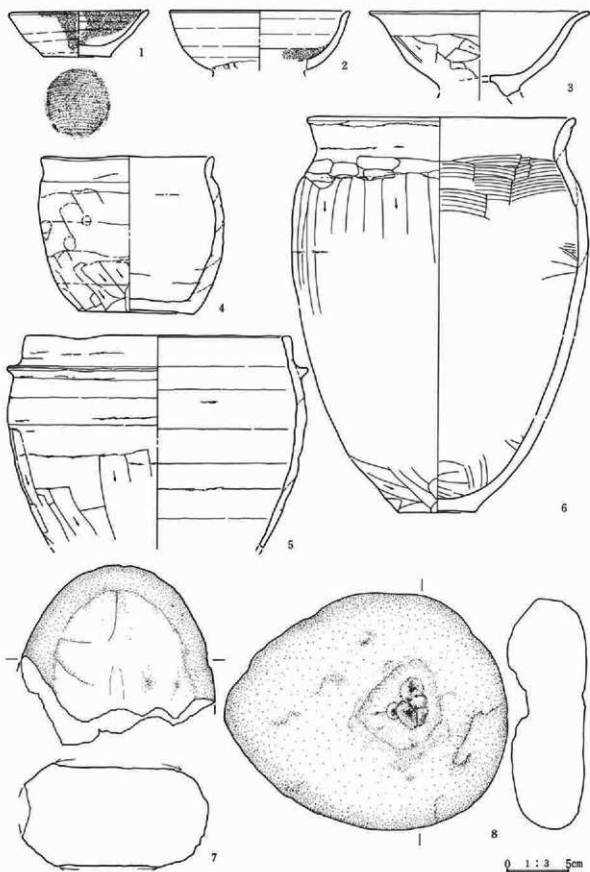
貯蔵穴 南東隅と南西隅の2箇所で検出され、南東隅のものは長方形、南西隅のものは不整形を呈す。

遺物の出土状態 竈内及び床面から土師器甕、ロクロ土師器碗、小型甕、須恵器羽釜等が集中して出土しており、これらが住居の年代を示す。

所見 本住居跡の時期は、10世紀中葉と想定できる。



第23図 2号住居跡実測図



第24図 2号住居跡出土遺物実測図

3号住居跡 (第7・25図 図版13・16-1)

位置 第2面N・O・21・22グリッド

重複 なし

規模 長軸は4.34m、短軸は3.17mである。面積は13.70㎡である。

形状 やや南北に長い隅丸方形を呈する。

主軸方位 N-77°-E

覆土 洪水堆積層に覆われているが、上部洪水堆積層か下部洪水堆積層かは判定できない。

壁高 ほぼ17-25cmでやや急に立ち上がる。

周溝 なし 柱穴 なし

床面 ほぼ水平であった。竈前から住居の中央付近までは固く締まっているが、周壁寄りはやや軟らかい。薄い貼り床を持つが、顕著な掘り方は見られなかった。

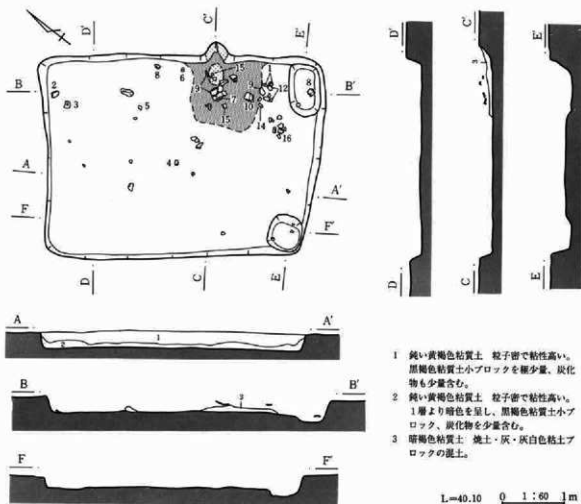
竈の位置・残存状態 東壁中央より南側で、袖部は確認できないが、強く焼けた火床の位置からみて燃焼部を壁内に造り付ける燃焼部壁内型と推定する。竈の方位はN-76°-Eである。奥壁部は強く焼けて、竈前は焼土、灰、灰白色粘土ブロックの混ざった暗褐色粘質土が10cm程堆積していた。支脚、天井石、袖石等は残存していなかった。

煙道は壁を僅かに掘り込んで、ほぼ45°の傾きで立ち上がっていた。

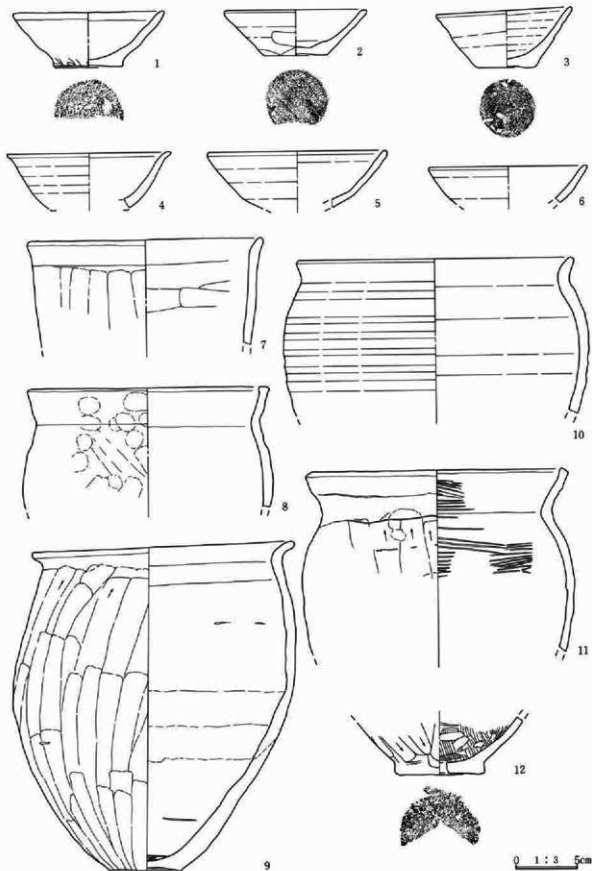
貯蔵穴 住居の南東隅と南西隅で検出された。南東隅と南西隅の貯蔵穴の深さは浅く、床面より各々12cm程掘り込んでいた。

遺物の出土状態 竈及び竈前に特に集中していた。

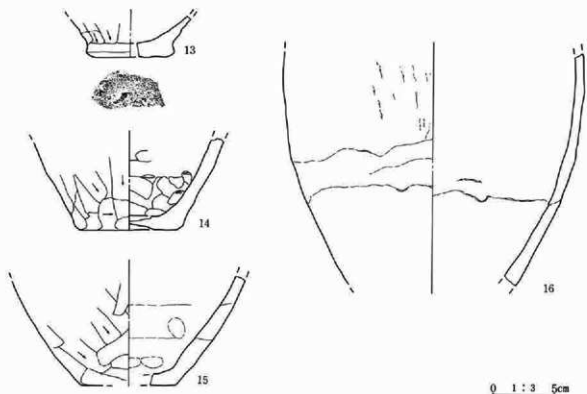
所見 本住居跡の時期は、伴出する土器の年代から10世紀中葉と想定できる。



第25図 3号住居跡実測図



第26図 3号住居跡出土遺物実測図(1)



第27図 3号住居跡出土遺物実測図(2)

4号住居跡(第7・28図 図版14・16-1)

位置 第2面M・N-23・24グリッド

重複 なし

規模 長軸は2.79m、短軸は2.29mである。面積は6.31㎡である。

形状 隅丸方形を呈する。

主軸方位 N-40°-E

覆土 炭化物を含んだ黒褐色の粘質土が堆積した後、洪水堆積層で覆われている。しかし、この洪水堆積層が上部洪水堆積層か下部洪水堆積層かの判定はできない。

壁高 ほぼ20cmでやや急に立ち上がる。

周溝 なし 柱穴 なし

床面 ほぼ水平な床面であり、竈前から中央部及び南壁にかけて固く締まった床面を持つが、北東隅から北壁及び西壁にかけてやや軟らかい。床面は薄く貼床されていた。

竈の位置・残存状態 東壁中央より南側で、壁を幅約59cm、奥行き約33cmの半円形に掘り込んだ燃焼部

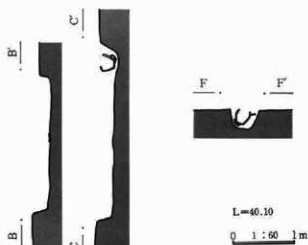
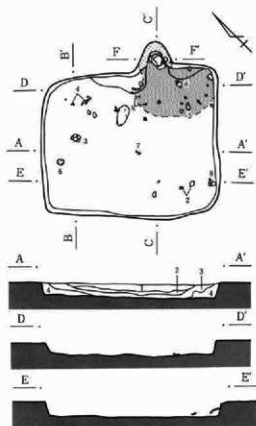
壁外型を呈す。燃焼部中央の左側の火床直上より須恵器塊が出土し、この上に土師器壺が重なって出土している。煙道は検出できないが、急傾斜で立ち上がる可能性が考えられる。竈の方位は、N-44°-Eである。

燃焼部の断面は、U字状のやや深い構築面であった。竈の周壁は急角度で立ち上がり、底面は丸底状である。周壁及び奥壁は強く焼けており、底面から竈前にかけて灰が3~5cm程堆積していた。支脚、天井石は残存していなかった。

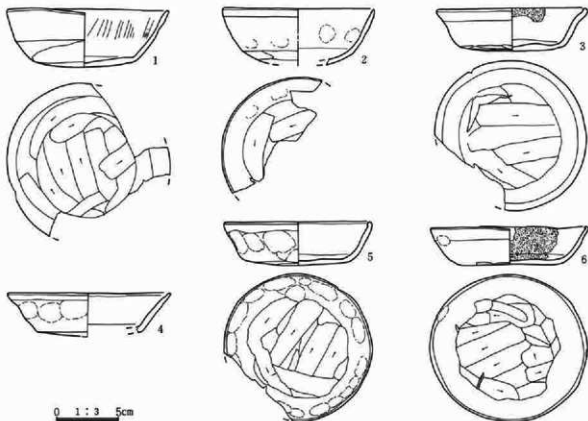
貯蔵穴 なし

遺物の出土状態 竈内からは須恵器杯、土師器杯及び壺、竈前からは土師器杯等が集中して出土しており、これらはこの時期の良好なセットを示している。また、住居の北壁寄りからは土師器杯が検出されている。

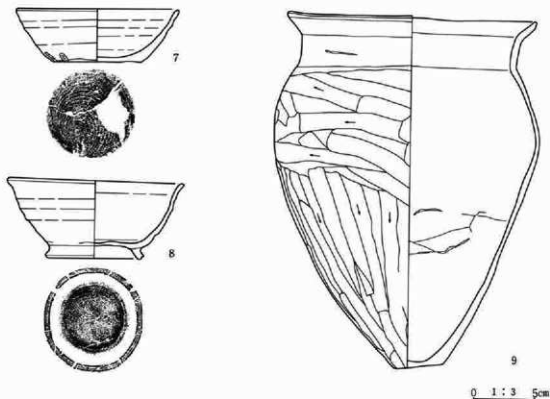
所見 本線部分のほぼ中央付近に位置している。本住居跡の時期は、伴出する土器の年代から9世紀後半と想定できる。



- 1 鈍い黄褐色粘質土 粒子密で粘性高い。灰白色粘質土小ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色粘質土 粒子密で粘性高い。1・3・4層に近似的な土層が混じり合っている。炭化物粒を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色粘質土 粒子密で粘性高い。黒褐色粘質土小ブロック・炭化物粒を少量含む。(洪水層)
- 4 黒褐色粘質土 粒子密で粘性高い。炭化物粒を少量含む。(両層?)



第28図 4号住居跡・出土遺物実測図(1)



第29図 4号住居跡出土遺物実測図(2)

5号住居跡(第7・30図 図版15・16-1)

位置 第2面P-26グリッド

重複 なし

規模 長軸は2.94m、短軸は2.57mである。面積は7.35m²である。

形状 やや南北に長い、不整形な隅丸方形を呈している。

主軸方位 N-115°-E

覆土 炭化物を少量含んだ黒褐色粘質土が堆積した後、洪水堆積層に覆われている。しかし、この洪水堆積層が上部洪水堆積層か下部洪水堆積層かの判定はできない。

壁高 ほぼ7~11cmでやや急に立ち上がる。

周溝 なし 柱穴 なし

床面 全体にはほぼ水平であるが、北東隅が部分的にやや低くなっている。竈の手前から住居の中央部分にかけては固く締まっているが、周壁寄りはやや軟らかい床を呈している。薄い貼土を住居の全面に施している。

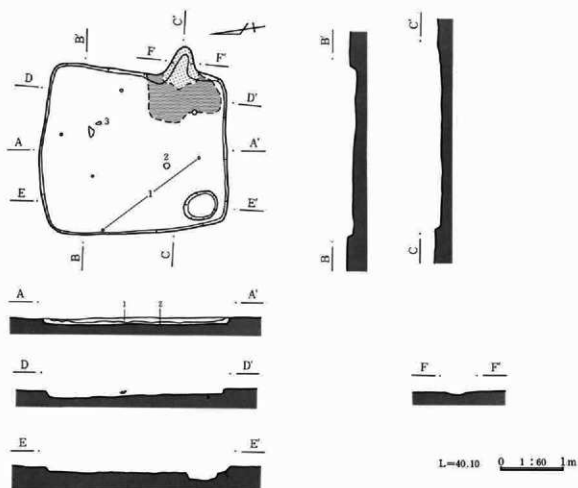
竈の位置・残存状態 東壁中央より南側で、壁を幅約54cm、奥行き約43cmの半円形に掘り込んだ燃焼部壁外型を呈している。竈の方位は、N-110°-Eである。

周壁は焼け方が弱く、竈前は黒色の灰が薄く堆積していた。支脚、天井石、袖等は残存せず、煙も検出できない。

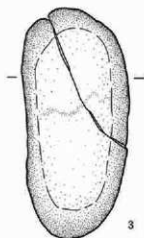
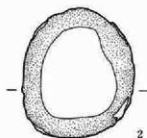
貯蔵穴 住居の南西隅で検出された。長軸は54cm、短軸は44cmの楕円形を呈している。深さは床面下より13cm程掘り込んでいた。内部からの遺物は検出されなかった。

遺物の出土状態 小円礫と須恵器環の破片を少量出土したが、散在していた。これらの遺物は、流れ込みによる物と考えられる。

所見 本線部分のほぼ中央に位置している。出土した遺物が流れ込みによるものと考えられるため、本住居跡の時期は確定できないが、住居の規模や形態及び軸線の傾きが近接する他の住居跡に近似していることから、近接した時期の所産と考えられる。



- 1 鈍い黄褐色粘質土 粒子密で粘性高い。炭化物少量含む。
 (洗水層)
- 2 黒褐色粘質土 粒子密で粘性高い。炭化物少量含む。
 (間層?)



0 1:3 5cm

第30図 5号住居跡・出土遺物実測図

3. 羽口出土地点

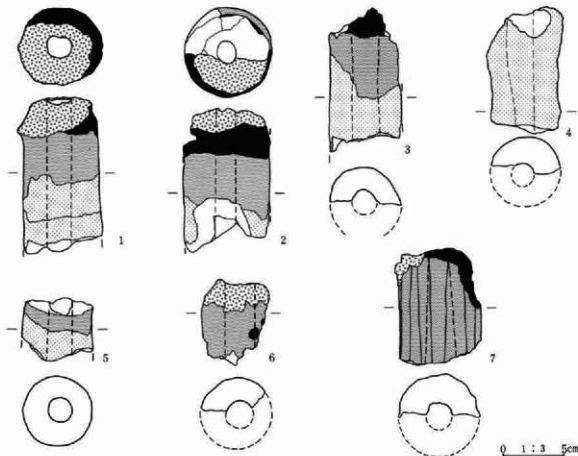
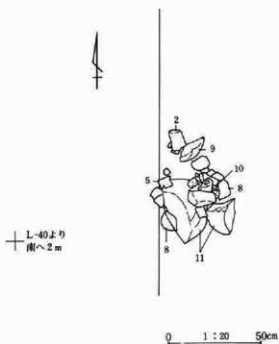
L-39グリッド (第7・31図 図版16-2)

概要 北拡張区北半の西壁寄りの地点で、現地表面から約80cm掘り下げた第2面より出土した。

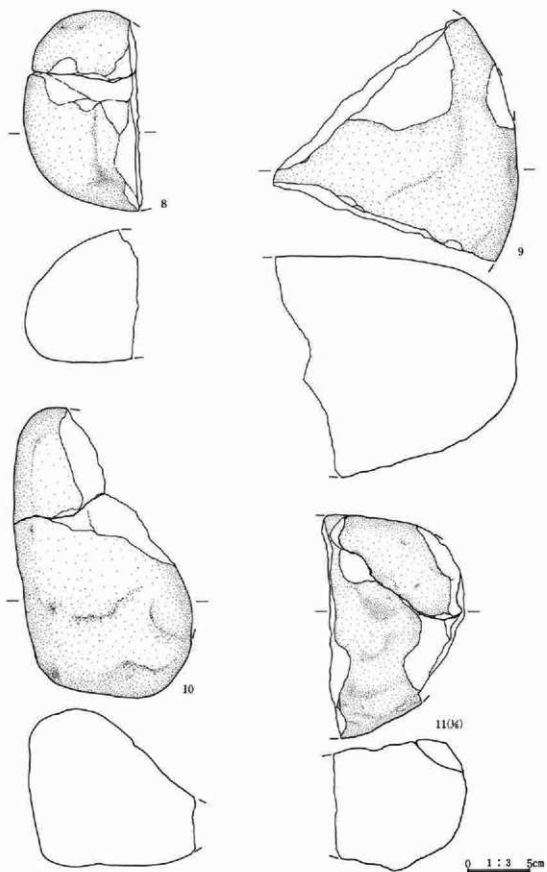
覆土 下部洪水堆積層に覆われる。

出土遺物 羽口片7点、台石破片数点

所見 第1畝跡群より北北西へ24m程の地点で、多量の羽口片、台石片を検出したが、鍛冶遺構としての炉やビット及び上屋構造物の痕跡は一切なく、焼土や炭、灰等は見られなかったため鍛冶遺構として認定することはできない。付近に存在した鍛冶遺構から廃棄されたものと考えられる。この遺跡では下部洪水堆積層の直下で、8世紀末～9世紀初頭の土師器・須恵器が出土している (第51図4～8)。これらの遺物は同じ洪水堆積層に覆われていることから、8世紀末～9世紀初頭の所産と考えられる。



第31図 羽口出土地点・出土遺物実測図 (1)



第32図 羽口出土地点出土遺物実測図(2)

4. 溝

1号溝 (第6・33図 図版16-3)

位置 第2面X-17・18、Y-17グリッド

重複 なし 走行 ほぼ北西-南東方向

規模 長さ約4.86m、幅25-48cm

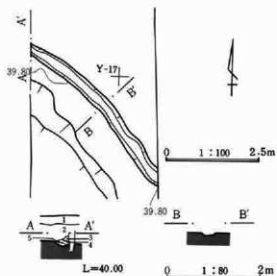
深さ3-7cm

形状 底面はほとんど起伏が見られず平坦であり、断面は浅い皿状である。

覆土 ローム粒を含む褐色土、黒褐色土とローム粒をラミナ状に混入する暗褐色土により埋没している。

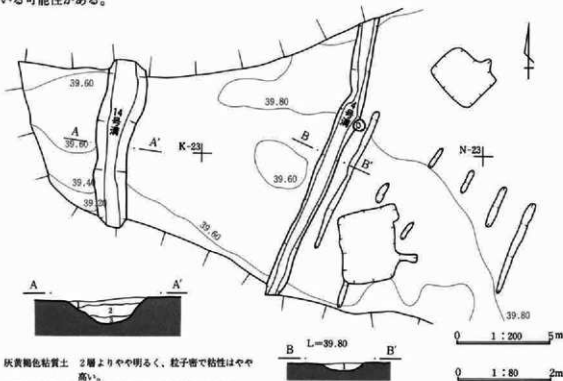
出土遺物 なし

所見 南広張区の西壁の土層断面によれば耕作による削平・攪乱をかなり受けてはいるが、溝本来の規模は幅、深さとも現状の2-3倍であったと推定できる。溝には流水した痕跡が見られなかった。本溝の性格は不明であるが、1号墳の固堀を避けて構築している可能性がある。



- | | |
|----------|--|
| 1 現耕作土 | A 8-Aを含む。(基本土層 I) |
| 2 暗褐色砂質土 | A 8-Bを含む。(基本土層 I) |
| 3 暗褐色土 | 黒褐色土・ローム粒がラミナ状に混入。白色軽石 (A 8-A?) を若干含む。 |
| 4 褐色土 | ローム粒若干含む。締まりを欠く。 |
| 5 褐色土 | ローム粒・ブロックを多量に含む。締まり欠く。粘性低い。 |

第33図 1号溝実測図



- | | |
|-----------|---|
| 1 灰黄褐色粘質土 | 2 層よりやや明るく、粒子密で粘性はやや高い。 |
| 2 灰黄褐色粘質土 | 1 層より粘性高く、黒褐色粘質土小ブロックを極少量含む。炭化物粒子を少量含む。 |
| 3 灰黄褐色粘質土 | 2 層より暗色を呈し、鈍い黄褐色粘質土小ブロックを少量含む。粘性は最も高い。 |

- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 鈍い黄褐色粘質土 | 粒子密で粘性高い。黒褐色粘質土小ブロックを含む。 |
|------------|--------------------------|

第34図 4・14号溝実測図

4号溝 (第6・34図 図版16-4)

位置 第2面K-21~L-24グリッド
 重複 一部を早川の旧河道により切られる。
 走行 ほぼ北北東-南南西方向
 規模 長さ約15.60m、幅0.71~1.12m
 深さ6~22cm
 形状 底面は平坦であり、断面は浅い皿状である。
 覆土 鈍い黄褐色粘質土により埋没している。
 出土遺物 なし

所見 溝には流水した痕跡が見られなかった。本溝の東側に第4畝跡群が検出されている。4号溝を境にして西側に畝間跡の検出が見られないことから、第4畝跡群の西の境界であった可能性が高い。

14号溝 (第6・34図 図版16-5)

位置 第2面I・J-22・23グリッド
 重複 早川の旧河道により切られる。
 走行 ほぼ南北方向
 規模 長さ約8.80m、幅1.37~2.09m
 深さ13~56cm
 形状 底面は丸底状で断面は緩やかに立ち上がる。
 覆土 灰黄褐色粘質土により埋没している。
 出土遺物 なし

所見 検出された溝の底面の北端と南端の高低差は33cmあり、南に低く傾斜している。人為的なものの可能性は高いが、検出した部分が僅かなため、本溝の性格は不明である。

2号溝 (第6・35・36図 図版17-1・20-2)

位置 第2面W-27~31、X-19~25・27~31、Y-18~21グリッド
 重複 第3面の5号土坑を切り、第1面下層の3号溝に切られる。第2畝跡群と重複するが新旧関係は不明である。
 走行 ほぼ南北方向
 規模 長さ48.60(58.85)m
 幅1.25~4.17m、深さ1~26cm
 形状 底面に凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上

がる。

覆土 ローム粒を含む粘性のある暗褐色土により埋没している。

出土遺物 なし

所見 本溝は緩やかに傾斜した溝で、自然に埋没した様相を呈している。形状からみて、人為的なものと思われる。

16号溝 (第6・35・36図 図版17-1)

位置 第2面U-29、V-22~29、W-23~25グリッド
 重複 第1面下層の9号溝に切られる。
 走行 ほぼ南北方向
 規模 長さ約33.49m、幅0.88~4.24m
 深さ6~42cm

形状 底面に凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 不明 出土遺物 なし

所見 第3畝跡群に近接して検出された溝であるが、畝間の様子から本溝を避けて耕作したと推定される。自然によるものであり、17号溝と同一の可能性が考えられる。

17号溝 (第6・35・36図 図版17-1)

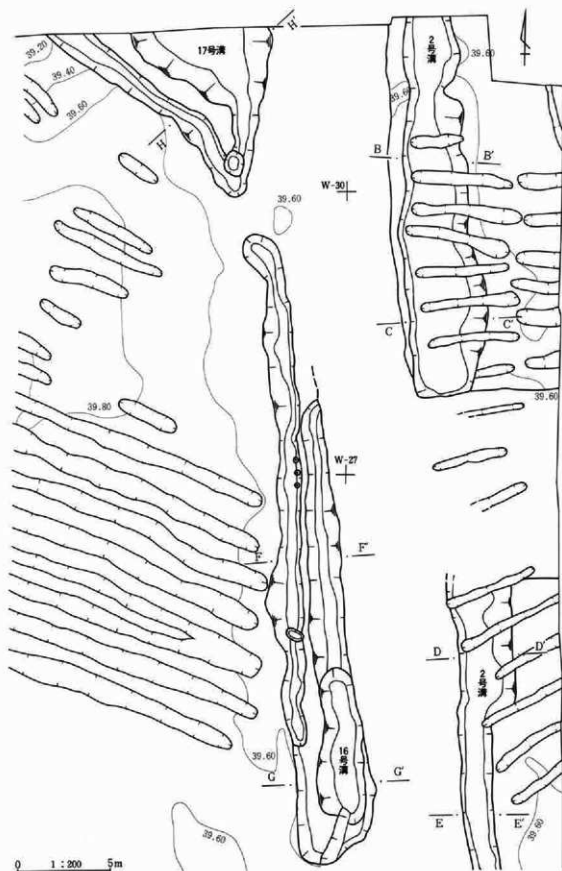
位置 第2面S-31、T-30・31、U-29~31、V-30・31グリッド
 重複 なし 走行 南北-北西方向
 規模 長さ20.60m、南北方向の幅0.95~7.28m
 北西-南東方向の幅0.89~1.55m
 深さ6~14cm

形状 底面に凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上がる。

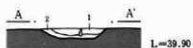
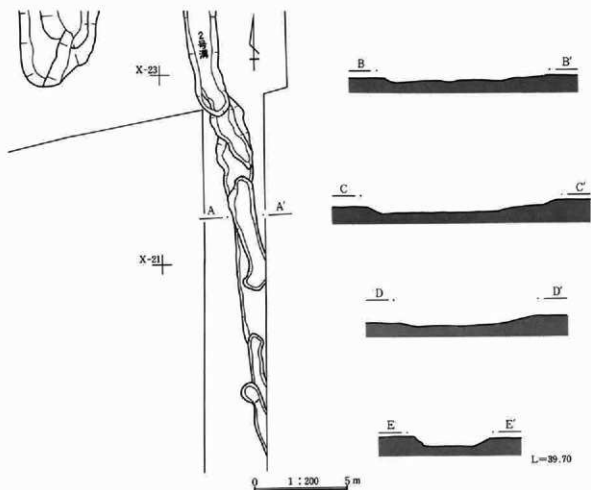
覆土 暗灰色粘質土で埋没し、上位を下部洪水堆積層に覆われている。

出土遺物 なし

所見 本線部分北壁寄りから検出された遺構であり、自然による凹地と考えられる。詳細は不明だが、16号溝と同一の溝の可能性が考えられる。



第35图 2・16・17号溝実測图(1)



- 1 暗褐色土 鉄分とロームの細粒を含み、やや赤味がかっている。粘性あり。ローム質。
- 2 暗褐色土 ローム粒・小ブロックをやや多く含む。粘性あり。ローム質。



L=39.70 0 1:80 2m

第36図 2・16・17号溝実測図(2)

第5節 中・近世の遺構と遺物

1. 溝及び道路遺構

3号溝 (第8・37・38図 図版17-2・20-3)

位置 第1面下層W・X-22グリッド

重複 10号溝及び第2面の2号溝と重複している。2号溝を切っているが、10号溝との新旧関係は不明である。

走行 東西方向

規模 長さ(4.48)m 幅52~72cm

深さ7~17cm

形状 底面に凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 不明

出土遺物 なし

所見 本線部分と南拡張区との接続部分より検出された溝である。

底面の両端の高低差はほとんどみられないが、合流する10号溝の底面が3号溝の底面の高さより約12cm程低いため、10号溝へ流入する様相を示している。3号溝は、10号溝とはほぼ直交する形で検出されたが、検出範囲がわずかなため、詳細は不明である。

9号溝 (第8・37・38図 図版17-2・18-1・21-1・2)

位置 第1面下層V-22-31、W-23-27グリッド

重複 11号溝、12号溝、第1面の中層の6号溝、7号溝と1号道路、第2面の16号溝と重複する。16号溝と12号溝を切り、6号溝、7号溝に切られる。11号溝と1号道路との新旧関係は不明である。

走行 ほぼ南北方向

規模 長さ46.91m 幅0.71~1.98m

深さ17~42cm

形状 底面には凹凸が見られ、断面はやや直線的に緩やかに立ち上がるが、西側からの掘り込みは南側に比べなだらかである。

覆土 北壁寄りでは粒子の細かい暗褐色粘質土で、南壁寄りでは黒褐色粘質土により埋没している。

出土遺物 陶器甕・皿

所見 本線部分東壁付近より検出された溝である。底面の深さは一定ではないが、底面の両端の高低差は21cmで北端に低く傾いている。流下方位は南から緩やかな弧を描きながら、北へ向かう。

本溝は人為的なものと考えられる。10号溝と併走しているが、10号溝との新旧関係は不明である。

10号溝 (第8・37・38図 図版17-2・18-1・21-1・2)

位置 第1面下層V-30・31、W-22-31、X-23-27グリッド

重複 3号溝、12号溝、13号溝及び第1面中層の8号溝、1道路に付帯する溝と重複する。12号溝を切り、8号溝及び1号道路の溝に切られる。その他の遺構との新旧関係は不明である。

走行 ほぼ南北方向

規模 長さ46.20m 幅1.57~3.34m

深さ10~36cm

形状 底面には凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 北壁寄りでは褐灰色及び暗褐色の砂質土、南壁寄りでは暗褐色砂質土により埋没している。

出土遺物 陶器甕・皿

所見 本線部分東壁付近より検出された溝である。底面の深さは一定ではないが、底面の両端の高低差は6cmであり、北端へ低く傾いている。

3号溝と13号溝は、本溝にはほぼ直行する形で検出された。3号溝は本溝に流れ込み、13号溝は本溝から分岐する様相を示している。人為的なものの可能性が高い。

11号溝 (第8・37・38図 図版17-2・18-1・21-1・2)

位置 第1面下層V-27-31、W-22-25グリッド

重複 9号溝との新旧関係は不明であるが、第1面中層の7号溝及び1号道路に切られる。

走行 ほぼ南北方向

規模 長さ38.74 (46.5) m 幅0.62~1.33m
深さ5~22cm

形状 底面に凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 北壁寄りでは暗褐色の砂質土及び粘質土、南壁寄りでは黒褐色粘質土により埋没している。

出土遺物 陶器壺・内耳鍋

所見 本線部分の東壁付近より検出された溝である。底面の深さは一定ではなく、多少の凹凸を持っている。底面の両端の高低差は6cmであり、北端へ低く傾いている。

W-26・27グリッド付近は9号溝と完全に重複してしまうため遺構の全容は不明であるが、人為的なものの可能性が高い。

12号溝 (第8・37・38図 図版17-2・18-1・21-3)

位置 第1面下層V-28・29、W-23~29グリッド
重複 9号溝、10号溝と重複し、9号溝、10号溝に切られる。

走行 南北方向及び東へ向かう溝であり、東壁側にも流路の形跡が見られる。

規模 長さ27.03 (30.3) m 幅0.41~3.29m
深さ13~27cm

形状 底面に凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 砂層と粘質土が互層をなして堆積する。

出土遺物 ニツ岳軽石の石製品

所見 本線部分の東壁寄りから検出された溝である。自然による流路と推定することができるが、底面近くが検出されただけであるため、流下方向は不明である。

東壁の土層断面によれば、調査区の東側へも本溝の流路が延びることが窺え、この断面から4.21mの幅の広い流路であったこともわかる。

時期は中世以降As-A降下以前と考えられ、第1面下層の遺構の中では最も古い溝である。

13号溝 (第8・37・38図 図版17-2・18-2・21-3)

位置 第1面下層W・Y-27グリッド

重複 10号溝及び第1面中層の8号溝と重複し、8号溝に切られる。10号溝との新旧関係は不明である。

走行 東西方向

規模 長さ8.27m 幅36~67cm
深さ8~15cm

形状 底面に深い掘り込みがあるが、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 黒褐色粘質土により埋没している。

出土遺物 なし

所見 本線部分の東壁寄りから検出された溝である。流路は10号溝よりほぼ直角に分岐し、東側に延びている。底面の両端の高低差は8cmで東壁寄りに低く傾いているため、流下方向は10号溝より分岐し東へ向かう様相を示している。

東壁の土層断面によれば、溝本来の幅は約3.33mと比較的幅の広い溝であったことがわかる。

6号溝 (第8・40・42図 図版20-4)

位置 第1面中層S-29、T-26~29、U-23~26、V-22~24グリッド

重複 7号溝及び第1面下層の9号溝と重複し、9号溝を切る。7号溝との新旧関係は不明である。

走行 北北西-南南東方向

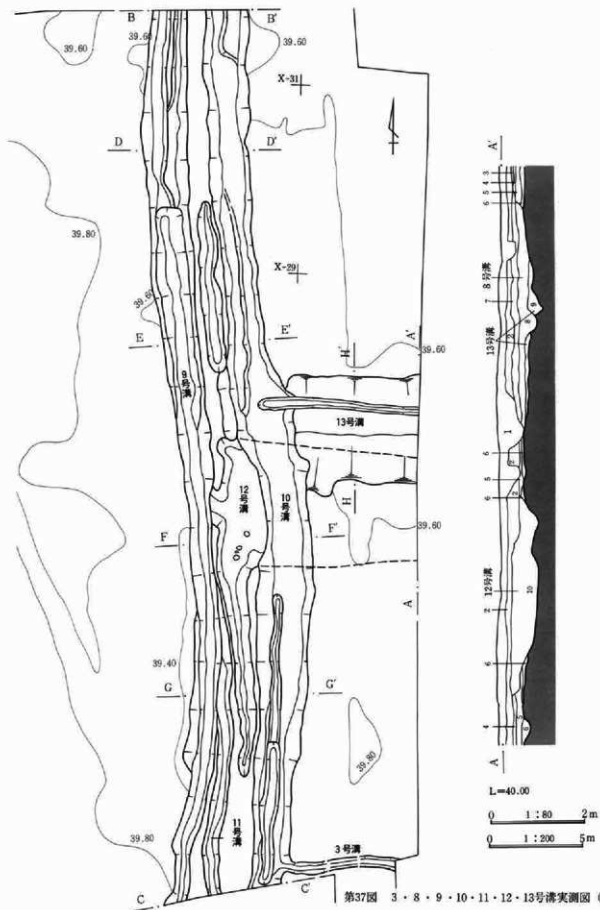
規模 長さ(33.61) m 幅0.54~2.39m
深さ6~21cm

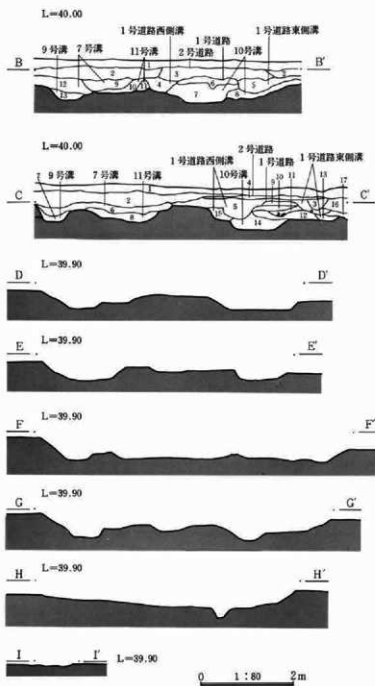
形状 底面は僅かに凹凸が見られるがほぼ平坦であり、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 不明

出土遺物 なし

所見 本線部分の東半より検出された溝である。溝の両端の高低差は約30cmであり、北北西から7号溝へ低く傾いている。溝としての機能的な詳細は不明である。北北西側の溝の延長部は削平されていて検出できなかったが、本溝の掘削時期は中世以降の可能性がある。





- 6 暗褐色砂質土 粒子粗く粘性やや弱い。砂粒をやや多く含む。ローム粒を少量含む。
- 7 黒褐色粘質土 粒子密で粘性高い。ローム小ブロック少量含む。
- 8 黒褐色粘質土 7層に類似。ローム小ブロックを多く含む。
- 9 黒褐色粘質土 粒子粗く粘性低い。細砂・粗砂を2cm前後の厚さで互層をなす。非常に固く締まっている。
- 10 黒褐色粘質土 粒子粗く粘性低い。A s-Aの小ブロック混入。非常に固い。(9, 10層がA s-A降下時期に相当か?)
- 11 黒褐色粘質土 粒子粗く粘性低い。小円礫を多く含む。非常に固く締まっている。A s-Aを含まない。

- 12 褐色砂質土 粒子やや粗く粘性やや高い。砂粒を少量含む。
- 13 黒灰色粘質土 砂粒を多量に含む。粒子粗く粘性低い。ローム小ブロックを少量含む。
- 14 暗褐色粘質土 粒子密で粘性高い。ローム小ブロックをやや多く含む。
- 15 暗褐色粘質土 14層に類似。ロームブロックを少量含む。
- 16 褐色砂質土 A s-Aを含み粒子粗く粘性低い。
- 17 暗褐色粘質土 粒子やや密で粘性やや高い。砂粒を少量含む。ローム小ブロックを少量含む。

セクションA-A'

- 1-6は基本土層I-VIに対応する。
- 7 暗褐色砂質土 4層よりやや粒子密で粘性高い。A s-Bをやや多く含む。
- 8 暗褐色砂質土 粒子やや粗く粘性低い。A s-Bを少量含む。砂粒を多く含む。
- 9 黒褐色粘質土 粒子密で粘性やや高い。マンガンが多量に沈着、固く締まっている。
- 10 黒褐色粘質土と暗褐色砂質土(鉄分沈殿)と黒灰色粘質土が互層をなして堆積。

セクションB-B'

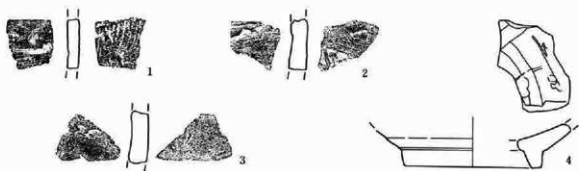
- 1-2は基本土層I-IIに対応する。
- 3 暗褐色砂質土 2層が固く締まった土層。
- 4 暗褐色砂質土 粒子粗く粘性低い。砂粒・A s-Aを多く含む。
- 5 褐色砂質土 粒子粗く粘性低い。砂粒・A s-Aを多く含む。
- 6 赤褐色砂質土 粒子粗く粘性低い。細砂と粗砂が1-2cmの厚さで互層をなす。
- 7 黒灰色粘質土 粒子やや粗く粘性低い。黒灰色の砂層中に黒褐色粘質土小ブロックや黄褐色ローム粒子が混入。
- 8 暗褐色粘質土 粒子密で粘性やや高い。砂粒を少量混入。
- 9 褐色砂質土 粒子細かく粘性低い。砂粒を多量に含む。A s-Bを混入。
- 10 暗褐色粘質土 粒子細かく粘性高い。砂粒を少量混入。マンガンが多く沈着。
- 11 暗褐色粘質土 粒子細かく粘性高い。砂粒を少量混入。マンガンが多く沈着。ローム粒を少量混入。
- 12 褐色砂質土 9層に類似し、ローム粒を少量混入。
- 13 暗褐色粘質土 10層に類似し、ローム粒を少量混入。

セクションC-C'

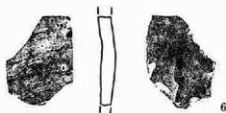
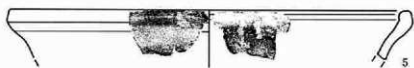
- 1-2は基本土層I-IIに対応する。
- 3 褐色砂質土 粒子粗く粘性やや弱い。ローム・黒褐色土の小ブロック少量混入。
- 4 褐色砂質土 粒子粗く粘性低い。厚さ1cm前後で細砂・粗砂が互層をなす。非常に固く締まっている。
- 5 褐色砂質土 粒子粗く粘性低い。砂粒を多く含む。非常に固く締まっている。

第38図 3・8・9・10・11・12・13号溝実測図(2)

第3章 下田中道遺跡

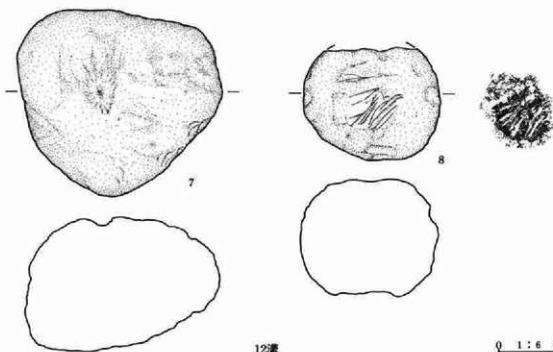


9・10溝



11溝

0 1:3 5cm



12溝

0 1:6 10cm

第39図 9・10・11・12号溝出土遺物実測図

7号溝 (第8・40・42図 図版19、21-1・2)

位置 第1面中層V-22-31、W-22-27グリッド

重複 6号溝、1号道路及び第1面下層の9号溝、11号溝と重複し、9号溝と11号溝を切るが、6号溝及び1号道路との新旧関係は不明である。

走行 ほぼ南北方向

規模 長さ47.45m 幅2.55-0.27m

深さ3-25cm

形状 底面にやや凹凸が見られるがほぼ平坦であり、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 北壁寄りでは褐色砂質土でありAs-Bを含み、南壁寄りでは暗褐色砂質土により埋没する。

出土遺物 陶器壺・鉢・内耳鍋

所見 本線部分東壁付近より検出された溝である。底面の両端の高低差は31cmで、北側に低く傾く様相を示している。

南壁の土層断面によれば、溝本来の幅は約2.90m前後と比較的幅の広い溝であったことがわかる。また、下層の9号溝、11号溝を合わせた幅及び走行がほぼ同じであり、9号溝と11号溝を合わせた幅での再掘削の可能性が考えられる。

掘削時期は、出土遺物からみて中世以降と推測される。

8号溝 (第8・37・38・40・42図 図版20-1、21-3)

位置 第1面中層W-Y-27グリッド

重複 1号道路との新旧関係は不明だが、第1面下層の10号溝及び13号溝を切っている。

走行 東西方向

規模 長さ8.98m 幅32-83cm

深さ11-16cm

形状 底面に深い掘り込みがあるが全体的に丸みを帯び、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 As-Bを含む暗褐色砂質土

出土遺物 なし

所見 本線部分の東壁寄りから検出された溝である。流路は、1号道路に付帯する東側の溝から分岐

している。

底面の両端の高低差は9cmで東壁寄りに低く傾いているため、流下方向は1号道路に付帯する東側の溝より分岐し、東へ向かう様相を示している。東壁の土層断面によれば、溝本来の幅は約5.10m前後と比較的幅の広い溝であったことがわかる。

本溝は覆土からAs-B降下以降でAs-A降下以前の溝であり、As-A降下の時には、既に埋没し溝としての機能を失っていたと考えられる。

1号道路 (第8・40・41・42図 図版19、21-1・2、22-1)

位置 第1面中層V-27-31、W-22-31、X-10-16、Y-10-14グリッド

重複 第3面の1号住居跡、1号墳、1・2号土坑、第1面下層の9・10・11号溝、中層の7・8号溝及び上層の2号道路と重複する。7・8・9号溝との新旧関係は不明であるが、2号道路に切られる。その他の遺構は切っている。

走行 ほぼ南北方向

規模 長さ73.13 (107.13) m

道幅0.55-1.25m 溝幅0.33-2.74m

溝の深さ3-59cm

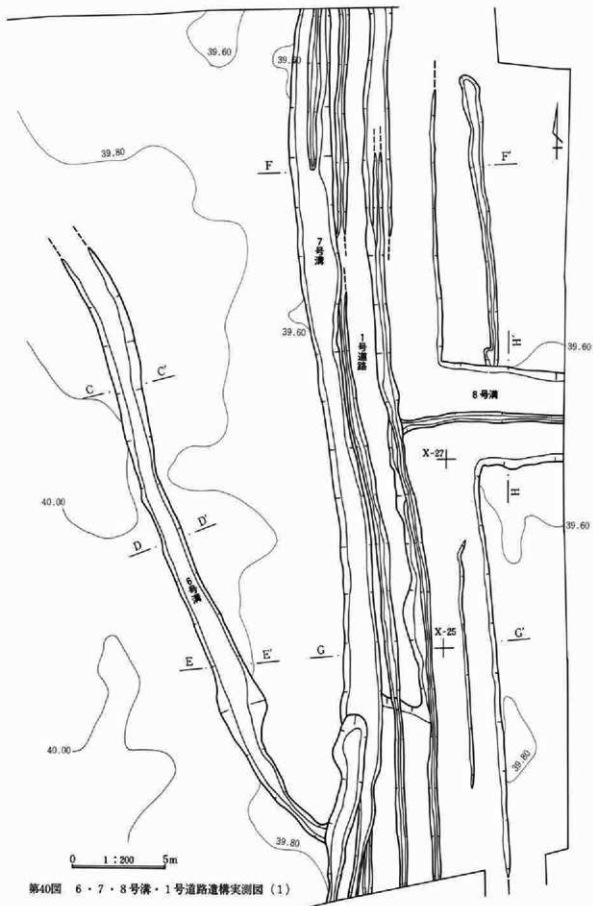
形状 道の上面はほぼ平坦である。両側の溝は平面的にはほぼ完全に平行し、底面は凹凸が見られるが、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 北壁寄りではAs-Aを含む暗褐色、褐色の砂質土及び固く締まった暗褐色砂質土で、南壁寄りでは粘性が低く固く締まった褐色砂質土である。

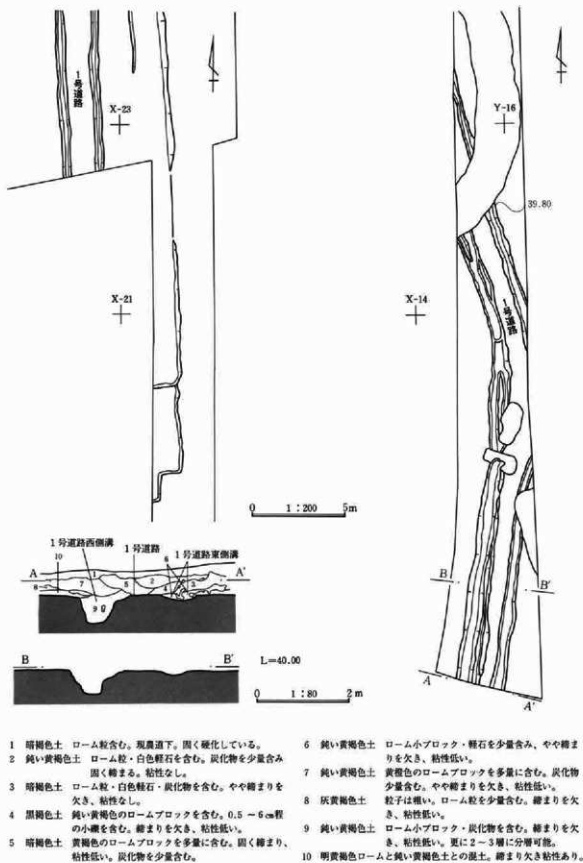
出土遺物 陶器壺・灯明皿

所見 南拉張区の南端より本線部分の東壁寄りを通る道路遺構である。道の両側に溝を備えており、東側の溝は8号溝へと分岐している。

溝の深さは一定ではないが、東側の溝の両端の高低差は26cmであり北へ低く傾いており、流れは8号溝で分岐する様相を示している。特に、西側の溝の底面の標高は、南拉張区1号土坑の付近で39.43mであり、本線部分の北側で39.52mであった。また、

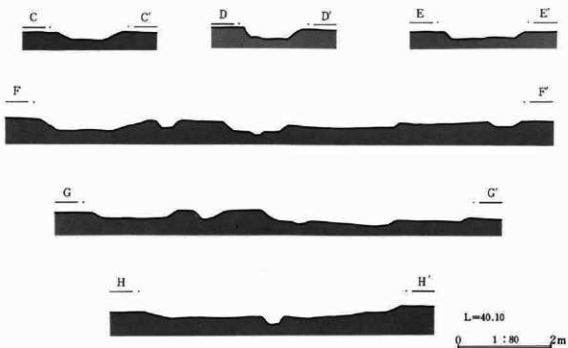


第40图 6・7・8号溝・1号道路遺構実測図(1)

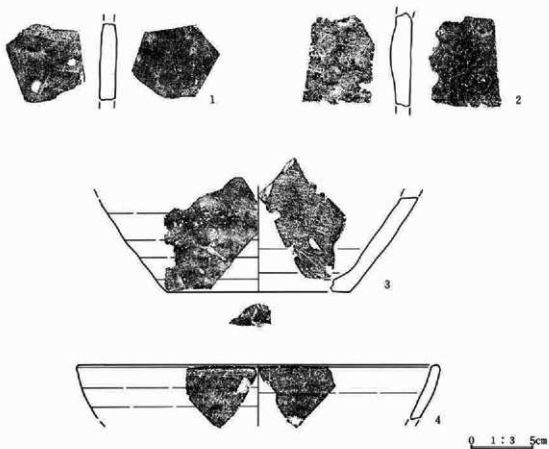


第41図 1号道路遺構実測図(2)

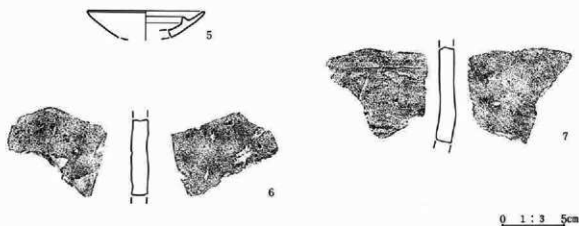
第3章 下田中道遺跡



第42图 6・7・8号溝・1号道路遺構断面図



第43图 7号溝出土遺物実測図



第44図 1号道路遺構出土遺物実測図

この1号土坑付近から南側へは南へ低く傾いており、標高39.30mであった。このことから、西側の溝は概ね北へ向かって低く傾いているが、1号土坑付近では南に低くなっている。

道の南北の高低差は、凹凸が見られるものの北へ30cm程低く傾いていた。また、道の幅は土層断面によって北側で1.25m、南側で0.55mであることが推測される。南扯張区での遺構の残存状況は、本線部分と比較して良好であった。土層の堆積状況から、溝と道路面は数度改修された様子が窺える。本遺構の時期は土層の堆積状況及び出土遺物から、As-B降下後に造成され、As-A降下後も使用されていたと考える。

5号溝 (第8・45図 図版20-5)

位置 第1面中層L-39、M-39・40、N-40グリッド

重複 なし

走行 東北東-西南西方向

規模 長さ12.54m 幅31~53cm

深さ8~13cm

形状 底面は丸みを帯び、断面は浅い皿状を呈す。

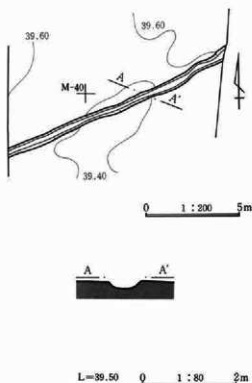
覆土 黒褐色の砂質土及び粘質土

出土遺物 なし

所見 西壁の土層断面によれば、本来の溝の幅は

2.90m、深さは42cmと比較的大きな溝であり、自然に埋没した様子がわかる。また、ほぼ直線的で地形の傾斜に沿った走行をしている。

本溝は中・近世の項で扱ってはいるが下部洪水層を掘り込んでいること、なおかつ覆土の上位を上部洪水層が覆っていることから、本溝は平安時代の溝の可能性が高い。



第45図 5号溝実測図

2号道路(第8・46図 図版21-1・2、22-2)

位置 第1面上層V-26~28、W-22~28、X-22~27グリッド

重複 第1面中層の1号道路と重複し切る。

走行 ほぼ南北方向

規模 長さ28.76m 幅1.68~2.60m

高さ2~9cm

形状 道の上面はほぼ平坦であり、断面は台形状を呈している。

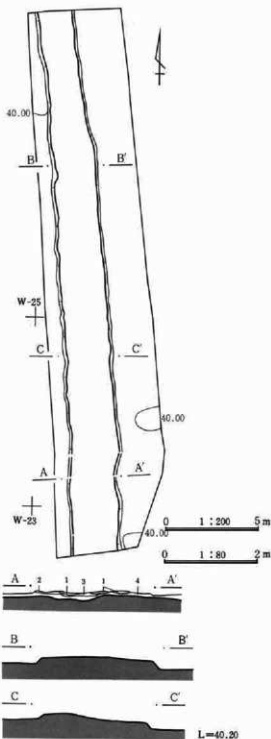
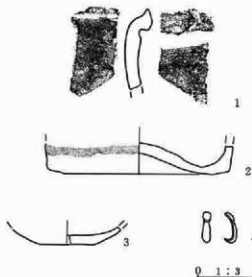
覆土 A s-Aを含む砂質の褐色土

出土遺物 陶器甕・徳利・灯明皿・銅製品

所見 本線部分の東壁寄りから検出された道路遺構である。本遺跡では、最も新しい年代の遺構として捉えられる。構築面の南北の高低差は12cmであり、北に低く傾いている。道の両端はやや西側が高くっており、1号道路のような付帯する溝は備えていなかった。

道幅は、南端で2.40m、北端で1.86mであり、南側に向かってやや広く造られていた。一方、本線部分の南・北壁に見られる本遺構の覆土は、基本土層のA₃-Aを含む第1層であり、構築面の様子から現代の耕作により遺構面の上位をかなり削平されていることがわかる。

これによると、本線部分を南北に貫いて造られていたこと、及び南壁の土層からは第1面中層にある



- 1 褐色土 道の硬化面、白色軽石(A s-A?)の細粒を多量に含む。砂質。
- 2 褐色土 道の硬化面。1層より軽石の混入が少ない。炭化物を若干含む。
- 3 黒褐色土 道の硬化面。白色軽石(A s-A?)混入。ローム粒・炭化物を若干含む。砂質。
- 4 黒褐色土 1~2mmの白色軽石粒と炭化物を少量含む。砂質。

第46図 2号道路遺構・出土遺物実測図

1号道路と両側の付帯する溝を埋めて、2号道路を造っていることが確認できた。したがって、1号道路の構築時期から継続的に使用されていることになる。また、南拡張区の南端部分の土層断面にも、本遺構の構築土の可能性が高い土層(第41図2・5層)が検出されている。本遺構は、同一地点での地割軸線としての性格も考えられる。

本遺構の時期は、道路の構築土の中にA s-Aの可能性が高い火山軽石が含まれていることから、A s-Aの降下時期以降に造成されたものである可能性が高い。

一方、出土遺物は知多窯の陶器甕で外面と口縁部の内面に自然軸が認められる。また、瀬戸・美濃の徳利と灯明皿では徳利が外面に柿軸を施し、灯明皿は内外面に柿軸を施している。前者は、13世紀中葉～14世紀前半に、後者は18～19世紀にそれぞれ比定することができる。仮に、構築土中に含まれる火山軽石がA s-Aだとすると、後者は年代的に一致することになる。

よって、本遺構の時期はA s-A降下以降の18世紀後半以降に築造された可能性が高いと考えられる。

2. 集石遺構

1号集石遺構(第8・47図 図版23)

位置 第1面中層O-22・23グリッド

重複 なし

規模 長軸1.14m 短軸0.74m

長軸方位 N-7°-E

形状 ほぼ楕円形の浅い皿状の凹地

出土遺物 礫

所見 本線部分の南半寄りから検出され、下位に小礫、上位にやや大きい礫がT字状に集中して見られる遺構である。

上位の集石の様子は、南半部分と北半部分では並び方が異なっている。南半部分は、礫の長径を南北方向に2列、北半部分は東西方向に並べている様子が窺える。また、北半部分のほぼ中央に小礫を集めている。上位の20個余りの大きい礫と小礫15個前後

を除去した段階で、遺構確認面より22cm掘り込んだ掘方状の凹みと下位の小礫群を約30個検出した。掘方状の平面はほぼ楕円形をしており、中央付近の凹地に小礫を集石していた。

上位の礫群は意図を持って配石されている様子が窺えるが、本遺構に伴う遺物は大小60数点の礫のみであり、遺構の性格は不明である。

本遺構には年代を判定することのできる出土遺物が全く検出されなかった。また、年代の判明している火山灰の堆積もないことから、遺構の構築時期は不明である。

2号集石遺構(第8・48図 図版24)

位置 第1面中層O・P-21・22グリッド

重複 なし

規模 長軸1.68m、短軸1.62m

長軸方位 N-125°-E

形状 ほぼ円形状

出土遺物 礫

所見 本線部分の南半寄りの南壁付近から検出され、大小600個以上の礫が円形状に集中して検出された遺構である。

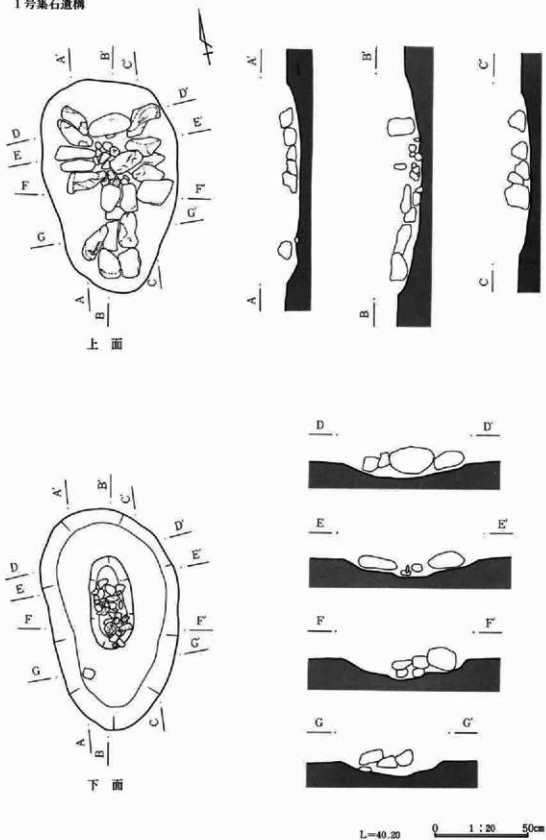
遺構のほぼ中央付近の2ヶ所は他の部分と比べ、集石が少なく凹地状になっている(第48図の網点の部分)。

礫を除去した下面からは石の重みによると思われる若干の凹みが見られるだけで、1号集石遺構のような顕著な掘方は検出できなかった。また、遺構の下面からは、若干の炭化物が検出されただけにとどまった。

礫は、底面より最大で21cm程の高さに積んであった。1号集石遺構のような大きな礫を使ったり、規則的な積み方は見られなかった。遺構の性格は、不明である。

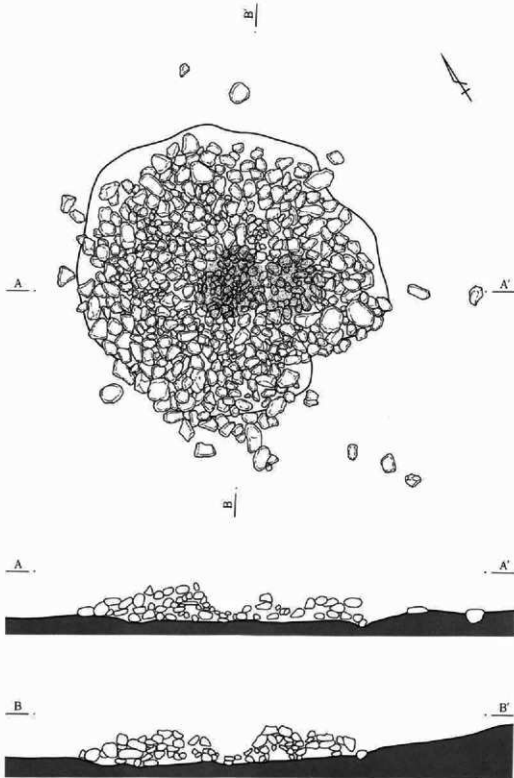
本遺構には、年代を判定することのできる出土遺物が全く検出されなかった。また、年代の判明している火山灰の堆積もないことから、本遺構の構築時期は不明である。

1号集石遺構



第47图 1号集石遺構実測图

2号集石遺構



第48図 2号集石遺構実測図

L=40.30 0 1:20 50cm

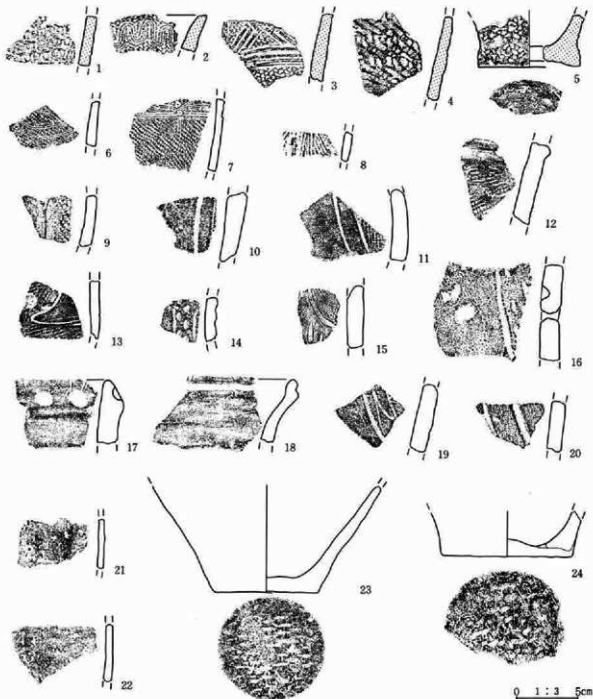
第6節 遺構外の出土遺物

遺構外出土遺物としては、縄文時代の土器・石器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の家形埴輪及び平安時代の土師器・須恵器等がある。

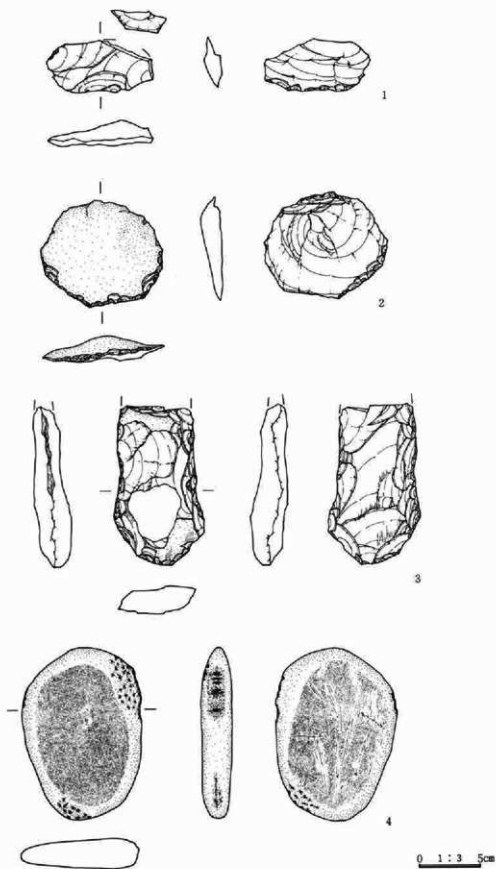
縄文時代の土器は、前期から後期に及び、石器は剥片・削器・打製石斧等で、いずれも古墳の周囲や

溝等から出土している。古墳時代前期の土師器は4世紀後半に比定できる器台と台付甕で、1号住居跡と同一時期の物である。平安時代の土師器は、土師器坏・須恵器の蓋で下部洪水堆積層の直下から出土しており、この年代を示す唯一の遺物である。

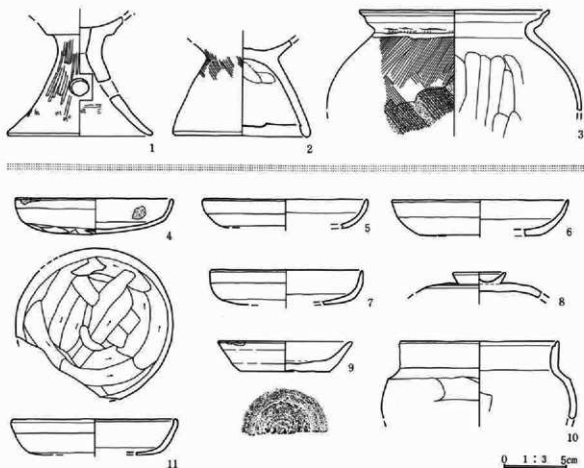
なお、観察表においては伴出した遺構名を記したが、その遺構に共伴するものではない。



第49図 遺構外出土遺物実測図(1)



第50図 遺構外出土遺物実測図(2)



第51図 遺構外出土遺物実測図(3)

家形埴輪

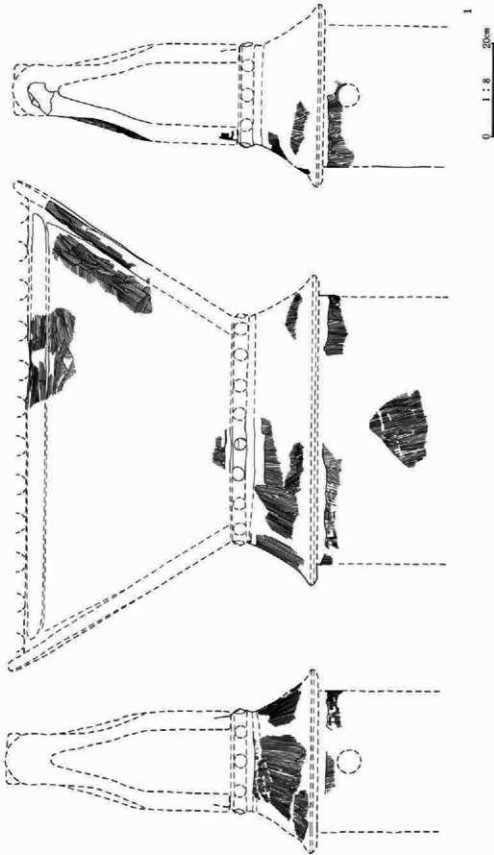
L-22グリッドの第2面の遺構確認段階で、洪水堆積層から出土した入母屋造りの家である。集中して出土し、同一個体と認められたので図上復元した。復元に際しては神保下條1・2号墳資料、平井地区1号墳資料などを参考しているが、細部においては不確定要素がある。

壁体部は断面楕円形を呈し、粘土紐貼付もなく明確な角を作らない。側面上位に円形透孔があく。屋根には下屋根と上屋根との区画、あるいは上屋根の下端を示すと思われる突帯がみられる。突帯にはボタン状粘土が貼付けられる。妻縁は粘土帯貼付で肥厚させ、破風板もあわせて表現している。妻下端は突帯に接続すると想定した。突帯は残存部側面まで回り込みつつあり、一周する復元をしたが流れの部

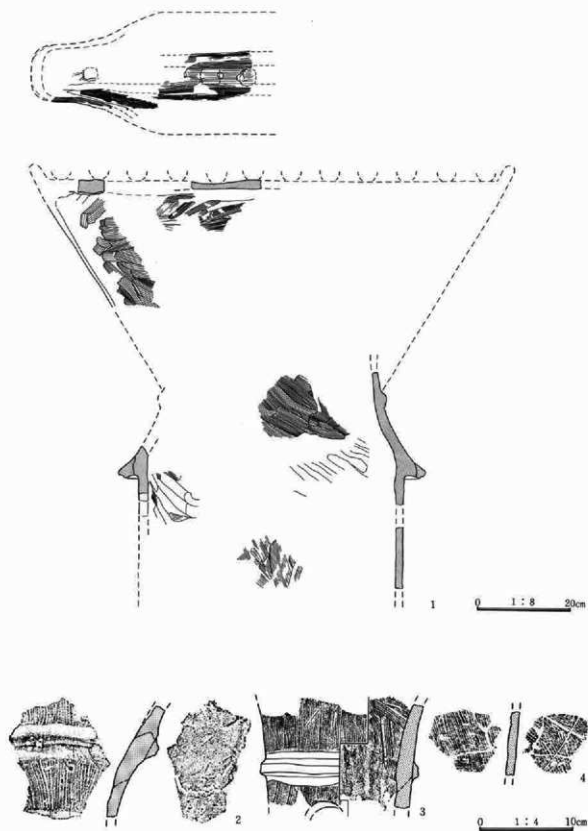
分のみの可能性も否定しきれない。上屋根残存部の流れには文様および赤彩は認められない。棟は丸く造り、障泥板を打っている。堅魚木の剝離痕が3箇所あり、10本以上の堅魚木が推定される。

成形面では軒部分に顕著な接合痕があり、壁体から乾燥させながら取東させて下屋根の形を作り突帯の上まで造形していることが判かる。軒は壁体に粘土を接合させて作っている。上屋根の成形法は不明確だが棟は粘土紐を左右に掛け渡していることが看取される。突帯、妻縁、障泥板の貼付粘土表面はハケメを施した後ナデ仕上げをしている。

(文責 南雲芳昭)



第52図 遺構外出土遺物実測図(4)



第53図 遺構外出土遺物実測図(5)

第4章 下田中川久保遺跡

第1節 遺跡の概要

本遺跡は新田郡新田町・佐波郡境町の町域にある。上武道路（国道17号バイパス）の北で、下田中道遺跡の北東約200mの地点にあり、早川の左岸に位置している。調査区は、大間々扇状地の扇端部にある微高地と早川の浸食による谷地形との境にある。標高はほぼ40.33～41.30mであり、周辺は畑地や水田として利用されている。調査区の南西隅より早川までは約100m程離れており、この間に一段低くなった低地部分が存在している。

調査対象区の中を県道大原・境線がほぼ北に向かって走っており、調査区はこの大原・境線と上武道路（国道17号バイパス）が交差する三ツ木交差点の約230m程北上した地点から北に向かったの地区と、この地点より南西の早川へ向かったの地区である。現在の早川は河川改修が済み、上武道路（国道17号バイパス）に沿って南東へ流れ、三ツ木交差点の手前で南下している。早川の河川改修前は、大水の度に氾濫していたとのことである。このことは今回の発掘調査の結果からも窺える。

調査地点は、上記の県道大原・境線に沿って、県道の東側の幅約2～2.5m、西側の幅約1.7～11.6mの直線距離で約107mの部分と、県道から早川に向かって南西に延びる幅約13m、長さ約30mの範囲を対象としている。

この結果、1区は台地上の南端であり、2区は台地と低地の移行部分に立地していることが判明した。2区は現在の耕作により大半が攪乱を受けており、遺構の残存状態の不良なものが多かった。また、1区については、調査区の幅が狭いこともあり、遺構確認が難しかった。

以上の様な条件下での調査ではあったが、古墳時代から中・近世に至るまでの各種の遺構と遺物が検出された。

旧石器時代の遺物に対する試掘については、1区

の台地上を対象としたが、水性二次堆積のローム台地であり、遺構・遺物は検出できなかった。また、縄文時代の遺構・遺物についても同様であった。

古墳時代の遺構としては、6世紀後半の堅穴住居跡1軒を1区より検出した。また、2区の洪水堆積層中より埴輪が出土した。

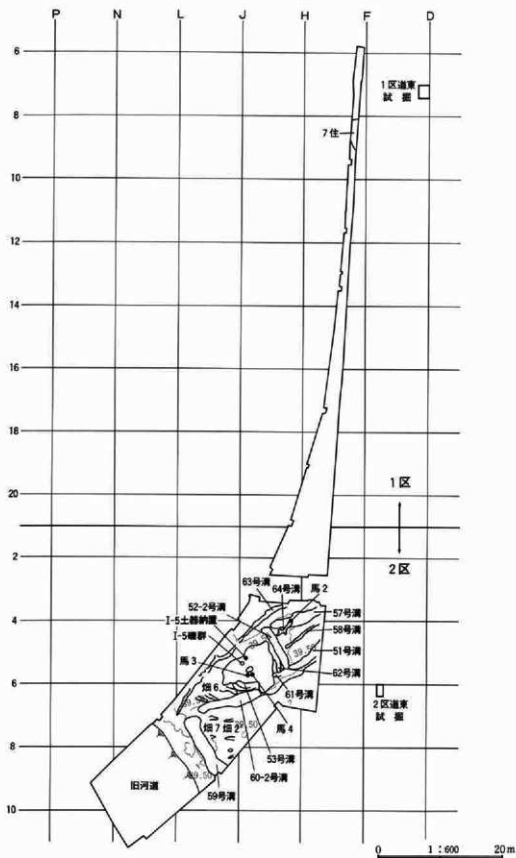
奈良・平安時代の遺構としては、堅穴住居跡6軒、土坑2基、畑跡5箇所及び痕跡2箇所、水田跡及び溜池と推定される遺構が各1箇所、溝14条（自然の凹地も含む）、祭祀関連の遺構（馬歯・馬骨出土地点4箇所、礎群1箇所、土器納置地点2箇所）、不明遺構5基を検出した。検出した畑跡の一部は、洪水堆積層の直下から確認されている。水田と推定される2区の凹地部分からは、築堤跡が伴って検出された。また、As-Bで覆われた溝1条を平安時代の住居跡と同一の検出面で確認することができた。

中・近世の遺構としては、1区で道路遺構と溝を各1条を検出した。

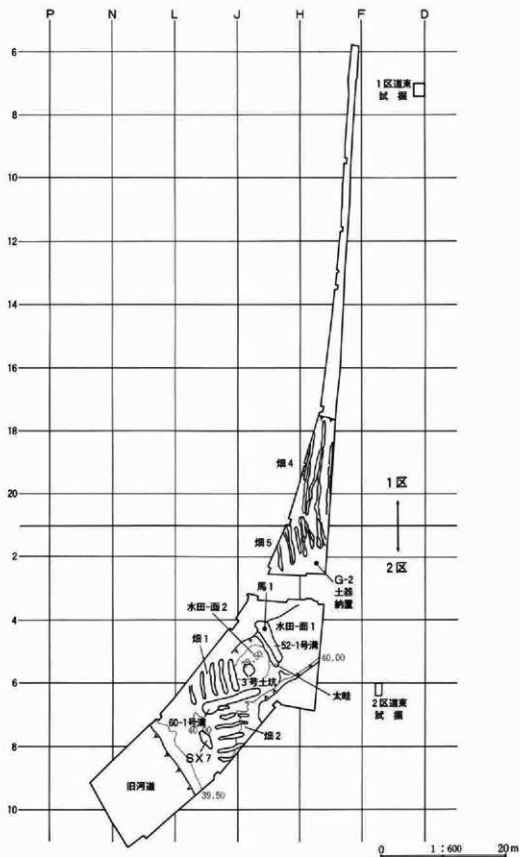
2区の北半部の用水路から1区までの調査範囲にかけて表土を除去した時点で、溝や土坑状をなす耕作痕等が多数検出されたが、近世一現代に至るものと推定されたため、遺構としては特に扱わないこととした。

また、県道大原・境線の東側の調査区においては、2ヶ所の試掘を入れた。1区側の道東の試掘は、D-7グリッドに約1.9×1.9×1.9mの規模で行った。表土より約1.7mの地点まで逐次遺構を確認しながら掘り下げたが、人頭大の礫と砂を含む人為的に埋め戻しをした層が続いており、遺構の確認までには至らなかった。

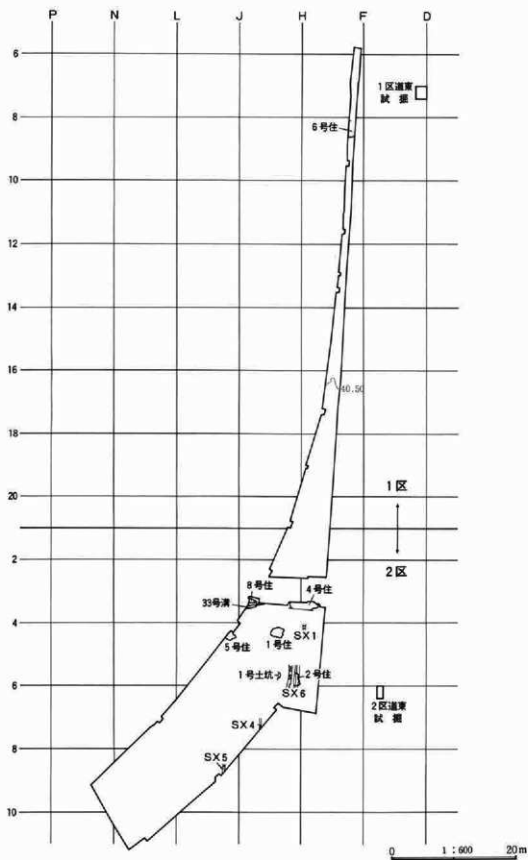
2区側の道東での試掘は、E-6グリッドに設定した。1区側の試掘から直線距離で約95m離れた地点である。試掘の規模は約1×2×1.65mである。約1.5m掘り下げた時点で、径250mmの排水管を確認した。この排水管は現在使用されているため、これ以上の調査は断念せざるを得なかった。当然、地表下1.5mの地点までは排水管に伴う埋土であり、この間に一切の遺構は検出されていない。



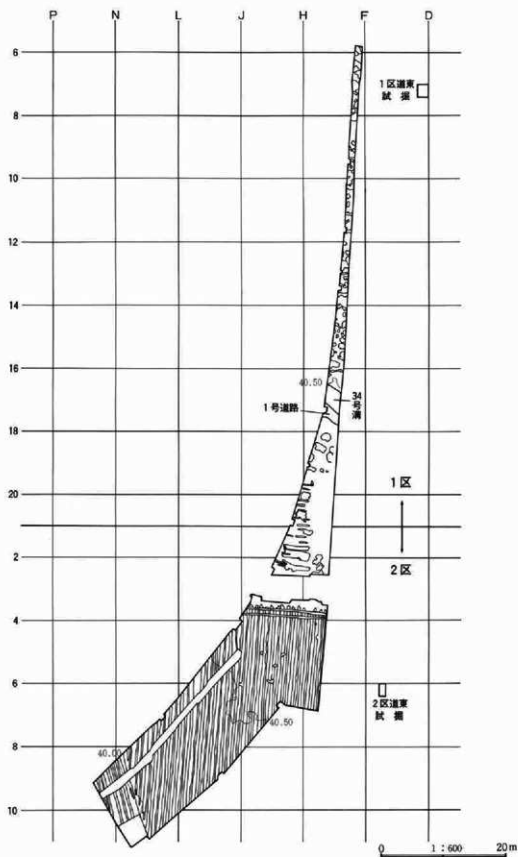
第54図 古墳～平安時代前期(下部)概念図



第55図 平安時代前期(上部)概念図



第56図 平安時代（住居跡・土坑等）概念図



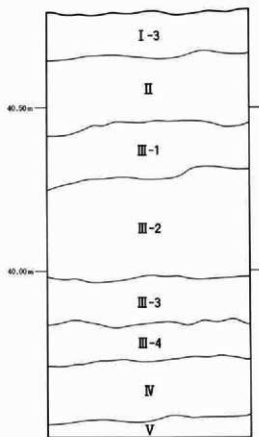
第57図 中・近世一近代概念図

第2節 基本土層

本遺跡の標準的な土層堆積状態は第58図に示した2地点であり、概要は以下の通りである。

(低地部基本土層)

- I-3層 黒褐色土 砂質土 現耕作土
- II層 暗褐色土 シルト質土
- III-1層 洪水堆積層 暗褐色土 粘性が高い。
- III-2層 洪水堆積層 暗褐色土 粘性土とシルト質土とが互層をなす。
- III-3層 洪水堆積層 暗灰色土 シルト質土
- III-4層 洪水堆積層 黄灰色土 粘性土とシルト質土とが互層をなす。黄灰色のシルト質が全体を占める。



(2区G-4グリッドを基準)

- IV層 暗灰色土 粘性の高い土層で有機質を多く含む。
- V層 灰白色砂層

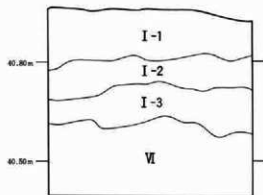
(台地部基本土層)

- I-1層 県道の盛土
- I-2層 黒褐色土 現耕作土であり、県道沿いの耕地に客土された層。
- I-3層 黒褐色土 調査区全域を覆う現耕作土であり、砂質土。
- VI層 黄灰色土 ロームの水性二次堆積層と考えられる。

以上が本遺跡の基本土層である。

なお、テフラ、植物珪酸体、花粉については、科学分析を行った。分析資料の採取地点は以下の通りであり、分析結果は巻末に掲載しておく。

- 第1地点 1区 F-14グリッド
- 第2地点 1区 F-18グリッド
- 第3地点 2区 G-4グリッド
- 第4地点 2区 H-5グリッド
- 第5地点 2区 I-5グリッド
- 第6地点 2区 J-5グリッド
- 第7地点 2区 J-6グリッド
- 第8地点 2区 H-4グリッド



(1区F-10グリッドを基準)

第58図 基本土層

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

7号住居跡 (第54・59図 図版39-2)

位置 1区第5面F-8グリッド

重複 第2面の6号住居跡により切られる。

規模 調査地点の幅が約1.10~2m前後と狭いため、規模は不明であるが、検出された壁の長さは北西壁で1.14m、南西壁で1.97mであった。

形状 検出された周壁から方形を基調とした形態であると推定する。

主軸方位 不明

覆土 自然に埋没した様相を示し、検出面はローム面である。ロームブロックと木炭粒を含む黒褐色土により覆われている。

壁高 北西壁で20cm、南西壁で25cmの高さがあり、

緩やかに立ち上がっている。

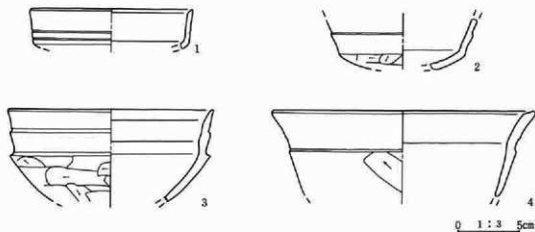
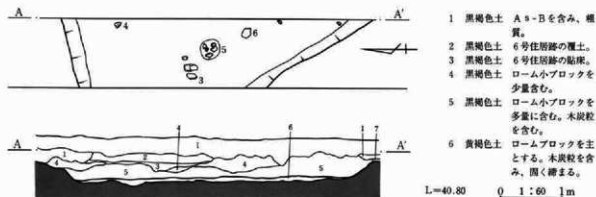
周溝 なし 柱穴 なし

床面 比較的平坦で、全体的に固く締まっていた。北寄りに一部落ち込みのある堀方をしており、全体的に南側より北にかけて低く傾斜した堀方をしていた。床面は、ロームブロックと木炭粒を含む黄褐色土で貼床される。

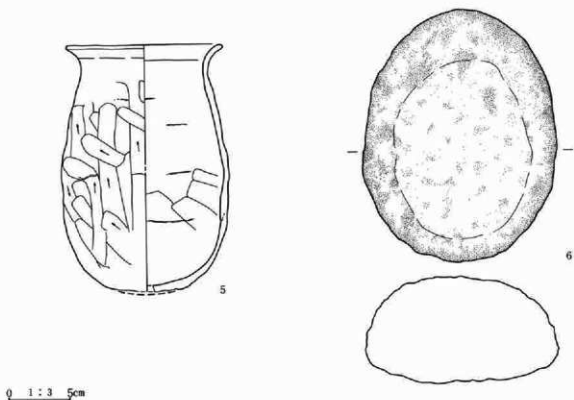
竈の位置・残存状態 不明 貯蔵穴 不明

遺物の出土状態 調査範囲のほぼ中央の床面より土師器杯・鉢・甕及び覆土より上面に僅かに磨耗痕のある二ツ岳軽石が出土した。

所見 1区の大原・境線沿いの北寄りから検出した住居跡である。住居跡の大半が調査区外であるため、詳細は不明の点が多い。本住居跡の時期は、出土遺物により6世紀後半と考えられる。



第59図 7号住居跡・出土遺物実測図(1)



第60図 7号住居跡出土遺物実測図(2)

第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1. 溝

51号溝 (第54・61図)

位置 2区第4面G-4・5、H-5グリッド

重複 52-2号溝と重複し、切る。

走行 北東-南西方向

規模 長さ約5m 幅0.90-2.80m

深さ7-25cm

形状 底面はほぼ平坦であり、断面は皿状で緩やかに立ち上がる。

覆土 シルト質の暗褐色土

出土遺物 須恵器蓋、土師器甕

所見 調査区内の南側にある微高地と中央の凹地の境にある溝である。凹地を挟む形で北側に57号溝が並行して走行している。自然に形成されたものなのか、人為的なものなのかは不明である。

52-2号溝 (第54・61図)

位置 2区第4面H-4・5、I-5グリッド

重複 51号溝及び61号溝と重複し、51号溝に切られる。61号溝との新旧関係は不明である。

走行 北西-南東方向

規模 長さ7.84m 幅0.90-1.46m

深さ16-30cm

形状 底面はほぼ平坦であるが、中央より南東部分に一段低くなる箇所がある。断面は皿状で浅く、長大な土坑状をしている。

覆土 粘性のある黒褐色土 出土遺物 なし

所見 本溝は、その埋没後に新たに掘削した形跡があり、上位にはほぼ同規模で同じ走行を持った52-1号溝が検出されているが、土層断面からは両者に時間的な差が認められる。

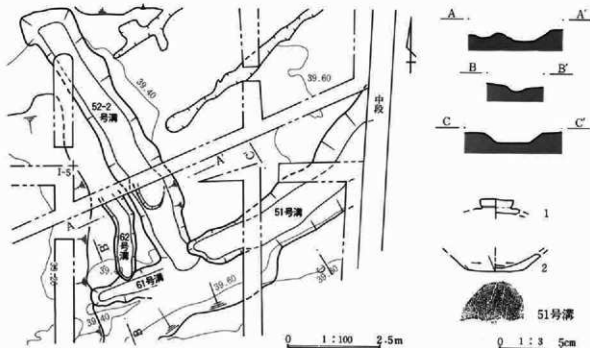
51号溝と近接する57号溝とは、コの字に位置しており、本溝の形状から判断すれば、人為的なものの可能性が考えられる。

61号溝 (第54・61図)

位置 2区第4面H-5グリッド
 重複 52-2号溝及び62号溝と重複し、62号溝に切られるが52-2号溝との新旧関係は不明である。
 走行 ほぼ東西方向
 規模 長さ約2m 幅50~80cm
 深さ5~10cm
 形状 底面は僅かに丸みを帯び、断面はやや開いたU字形である。覆土 不明 出土遺物 なし
 所見 残存状態が僅かなため、詳細は不明である。

62号溝 (第54・61図)

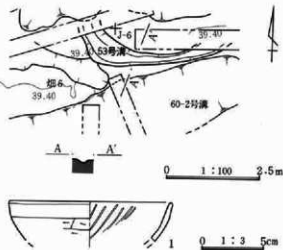
位置 2区第4面H-5グリッド
 重複 61号溝と重複し、切る。
 走行 南-北西方向
 規模 長さ2.20m 幅60cm 深さ4~6cm
 形状 底面は平坦であり、北に向かって低く傾斜する。断面は皿状で浅い。
 覆土 粘性のある黒色土
 出土遺物 なし
 所見 残存状態が僅かなため、詳細は不明である。



第61図 51・52-2・61・62号溝・出土遺物実測図

53号溝 (第54・62図)

位置 2区第4面I・J-6グリッド
 重複 堀6と一部を重複するが、新旧は不明である。
 走行 北西-東方向
 規模 長さ3.50m 幅30~74cm
 深さ3~11cm
 形状 底面は平坦だが、その幅は一定していない。
 覆土 黄灰色の砂質土
 出土遺物 土師器埴
 所見 北西から東へ大きく曲がる溝である。残存状態が僅かなため、詳細は不明である。



第62図 53号溝・出土遺物実測図

第4章 下田中川久保遺跡

57号溝 (第54・63図)

位置 2区第4面G・H-3・4グリッド

重複 64号溝に切られる。

走行 東北東—西南西方向

規模 長さ約8m 幅1.10~2.20m

深さ10~25cm

形状 底面に凹凸が見られ、東北東より西南西にかけ緩やかに低く傾いている。底面の幅是不規則であり、断面は浅い皿状である。

覆土 粘性のある黒褐色土 出土遺物 なし

所見 調査区内の北側の微高地と中央の凹地の境にある溝である。凹地をはさんで南側にある51号溝と並行する位置にあるが、自然に形成されたものか、人為的なものなのかは不明である。

58号溝 (第54・63図)

位置 2区第4面G・H-4グリッド

重複 なし 走行 北東—南西方向

規模 長さ約3m 幅10~45cm

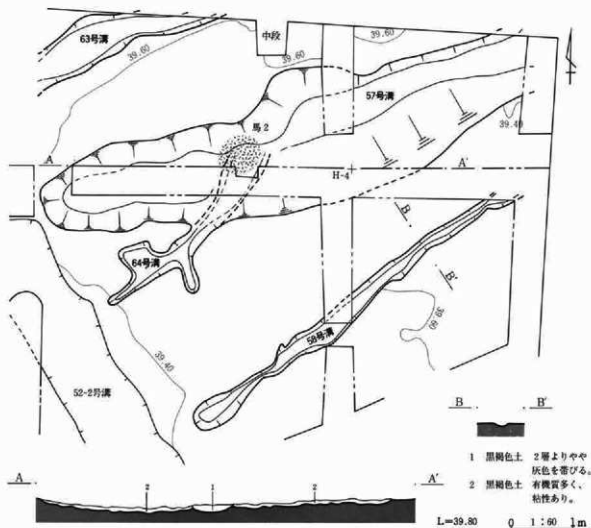
深さ2~4cm

形状 底面は幾分凹凸が見られる。断面は開いたU字状をしている。

覆土 粘性の高い黄灰色土

出土遺物 なし

所見 51号溝と57号溝が微高地と凹地の境を走行するのに対し、凹地のほぼ中央を走行している。検出された底面の両端の高低差は5cmであり、北東側に低く傾いている。自然に形成されたものか、人為的なものなのかは不明である。



第63図 57・58・63・64号溝実測図

63号溝 (第54・63図)

位置 2区第4面H-3、I-3・4、J-4・5、
K-5・6グリッド

重複 なし 走行 ほぼ北東-南西方向

規模 長さ約25m 幅14~80cm
深さ3~13cm

形状 底面に凹凸が見られる。断面は開いたU字状
をしている。

覆土 シルト質の暗褐色土

出土遺物 なし

所見 2区調査区内の北西の微高地を蛇行する溝
である。検出範囲の3箇所で分岐し、調査区外へ走
行することが推測できる。溝の両端の高低差は23cm
であり、南西に低く傾いている。形状から、自然に
よるものと考ええる。

64号溝 (第54・63図)

位置 2区第4面H-4グリッド

重複 57号溝を切っている。

走行 ほぼ北東-南西方向

規模 長さ3.20m 幅14~80cm
深さ14~15cm

形状 底面は丸みを帯びているが、その幅は不規則
であり、断面は開いたU字状をしている。

覆土 黒褐色土

出土遺物 馬歯・馬骨

所見 底面の両端の高低差はほとんど見られず、北
端はトレンチ内の土層断面で確認できたただけであ
り、溝の一部を検出しただけにとどまった。

残存状態が僅かであるため、詳細は不明である。

59号溝 (第54・64図)

位置 2区第4面J・K-7・8グリッド

重複 第3面のSX7と重複し、切られる。

走行 ほぼ北西-南東方向

規模 長さ約10.4m 幅1.84~2.90m
深さ7~38cm

形状 底面は丸みを帯びるが、凹凸が見られる。断

面は緩やかに立ち上がる。

覆土 シルト質の暗褐色土を主体とし、部分的に木
炭粒の混入した暗褐色土及びシルト質の黄褐色土で
埋没する。

出土遺物 蔽石、ロクロ土師器の塊、須恵器坏

所見 第2・3面の調査では本溝の検出はできな
かったが、トレンチを入れたことによって、本溝の
存在が確認できた。

この地点より南西の調査区は早川の旧河道であ
り、度重なる氾濫によって土層の区別を判断しかね
た。このため、本溝は確認した面より上位から掘り
込まれていた可能性がある。溝の中央付近の底面は
やや高くなっており、溝の両端は中央に比べ低く
なっている。遺物は北西の落ち込みの底面からやや
高い位置で出土しており、これらが遺構の年代を示
すものと判断した。自然によるものなのか、人為的
なものなのかは不明であるが、その年代は伴出する
土器から11世紀代と考えられる。

60-2号溝 (第54・64図)

位置 2区第4面I・J・K-6グリッド

重複 第3面の60-1号溝及び畑6と重複する。第
3面の60-1号溝を切っているが、畑6との新旧関
係は不明である。

走行 ほぼ北東-西西南方向

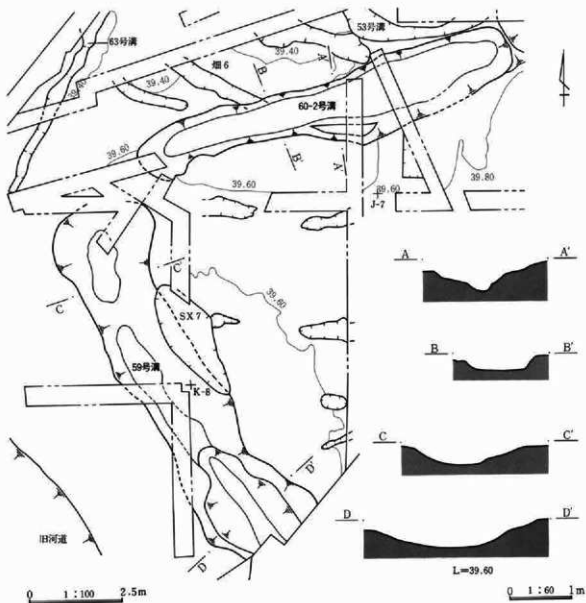
規模 長さ10.35m 幅1.05~1.80m
深さ8~51cm

形状 底面に起伏が見られ、北東及び南西の隅がや
や低くなっており、長大な土坑状をしている。

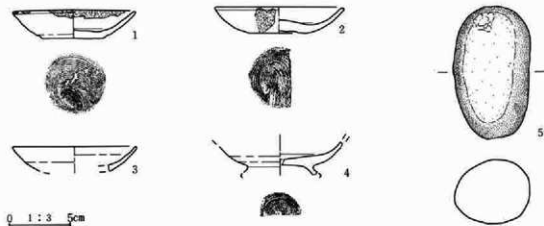
覆土 粘性の高い水性二次堆積の黄灰色土

出土遺物 なし

所見 溝の中央付近が急激に落ち込んでいる。また、
底面の両端の高低差は14cmあり、東北東に低く傾い
ている。上位にはほぼ同規模で同じ走行をもった60
-1号溝が検出されている。この60-1号溝は本溝
が氾濫により埋没した後に再掘削していると考えら
れる。



第64図 50・60-2号溝実測図



第65図 59号溝出土遺物実測図

52-1号溝 (第55・66図)

位置 2区第3面H-4・5、I-3・4グリッド

重複 水田一面1と太畦と重複するが、新旧は不明。

走行 北西-南東方向

規模 長さ約7.27m 幅1.00~2.07m

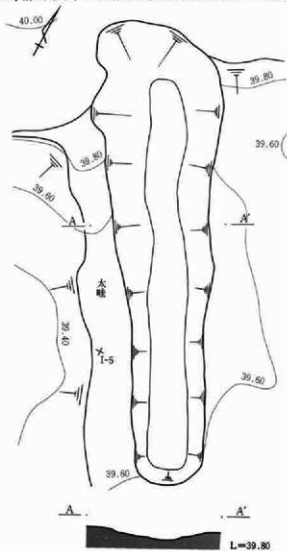
深さ7~30cm

形状 底面はほぼ平坦であり、断面は皿状で浅く長大な土坑状をしている。

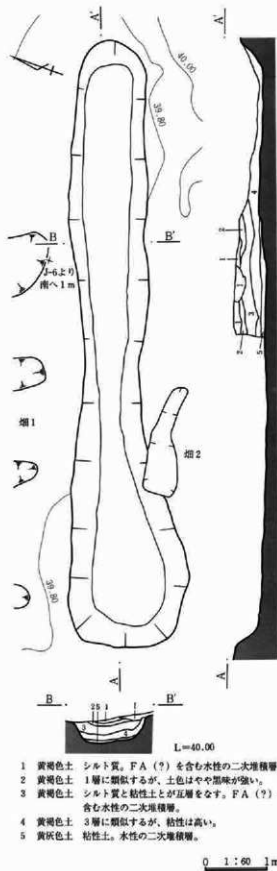
覆土 洪水堆積層の黄灰色シルト質土

出土遺物 馬歯・馬骨

所見 水田一面1と太畦と並行する形で検出された溝である。下位には、ほぼ同規模で同じ走行の52-2号溝があり、この溝の埋没した後に掘削して本溝



第66図 52-1号溝実測図



- 1 黄褐色土 シルト質。FA (?) を含む水性の二次堆積層。
- 2 黄褐色土 1層に類似するが、土色はやや黒味が強い。
- 3 黄褐色土 シルト質と粘性土が互層をなす。FA (?) を含む水性の二次堆積層。
- 4 黄褐色土 3層に類似するが、粘性は高い。
- 5 黄灰色土 粘性土。水性の二次堆積層。

第4章 下田中川久保遺跡

としているが、下位の52-2号溝と本溝との関係は不明である。並行する太畦の様子から本溝を掘削して、その土で太畦とした可能性が高い。

60-1号溝 (第55・67図 図版40-3~5)

位置 2区第3面I~K-6グリッド

重複 畑2及び第4面の60-1号溝と重複する。60-1号溝を切るが畑2との新旧関係は不明である。

走行 東北東-西南西方向

規模 長さ9.60m 幅0.90~1.90m

深さ50~66cm

形状 底面はほぼ平坦であり、断面はやや開いたU字状をしていて、長大な土坑状をしている。

覆土 粘性のある水性二次堆積の黄灰色土とシルト質の黄褐色土により埋没する。

出土遺物 須恵器坏

所見 底面の両端の高低差はほとんどなく、中央付近が若干低くなっている。溝の底部の土層から一時期水の溜まっていた様子が窺え、その後、洪水により埋没したと考えられる。この下位からはほぼ同規模で同じ走行の60-2号溝が検出されている。また、畑1の畝の走行は本溝と約40~60cm離れ、直行している。このことから、本溝は畑1と何らかの関連があったものと推測できる。

発掘調査の段階では本溝は土坑 (SK2) として扱ったが、整理の段階で形状から溝と判断した。

33号溝 (第56・69図 図版40-1)

位置 2区第2面I-3グリッド

重複 なし

走行 東北東-西南西方向

規模 長さ約3m 幅8~40cm

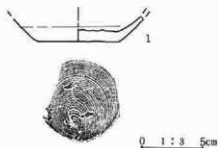
深さ0.5~10cm

形状 底面は幾分凹凸が見られるが平坦であり、断面は緩やかに立ち上がる。

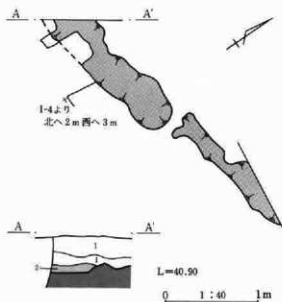
覆土 A s-Bを含む暗灰色土で、部分的にA s-Bの小豆色の灰を混入している。

出土遺物 なし

所見 2区の用水路際より検出した本遺跡で唯一のA s-Bを含む溝である。遺存状態は良好ではなく、僅かな調査範囲から検出した溝である。底面の両端の高低差はほとんどなく、流水していた様子も見られなかった。本溝は、人為的なものの可能性が高いが、詳細は不明である。



第68図 60-1号溝出土遺物実測図



- 1 黒褐色土 A s-Bをやや多く含む。耕作土との混土。
- 2 暗灰色土 汚れたA s-Bを主とし、部分的に小豆色の灰を含む。

第69図 33号溝実測図

2. 祭祀と関連遺構

祭祀遺構を認定する際、古墳時代の石製模造品や小形土器を伴う遺構を、祭祀遺構あるいは関連性ありとする時は、わかりやすい。しかし奈良時代以降の祭祀遺構は、明瞭な場合は少なく、たとえば高崎市史跡日高遺跡における水田関連祭祀遺構のように陸部際から低地部の特定な範囲に複数存在（『日高遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財事業団1982）した場合に祭祀遺構・遺物として捉えうる。ここ下田中川久保遺跡にあっても水田とその関連を思わせる遺構、それに続く台地の境に馬歯・馬骨、意図不明な石の集合、土器の納置疑似が認められた。一方近接の水田遺構は、東方より水口に流水した場合、水の流出先のない湾状の特殊個所で、機能上極めて不合理な形状（調査中は低地帯の内湾個所に相当する水田遺構と考えていたが、その後、溜池とそれに続く水田を推定）であった。そうした特殊とも思える遺構・遺物の広がりや考え合せると、両者は有機的な関連があり、この一角が奈良・平安時代の農事祭儀、法儀に必要な特定な場所であろうと調査中に思料した。以下に馬歯・馬骨の出土個所4、石の集合個所1、土器の納置疑似の個所2について説明を加える。なお挿図の一部は整理担当の作成による。

2区3・4面間 馬1（第55・70図 図版41-1）

位置 I-4グリッド

重複 3面目の52-1号溝の埋没土から発見されたが、馬1埋納のための土壌の有・無は明らかでなかった。4面目の52-2号溝より3面目の52-1号溝が新しいことは明瞭であり、3面目の52-1号溝の構築より馬1が後出して存在することも明らかであるが、3面目の52-1号溝の中途埋没時点との関係は不明であった。

方向 馬歯・馬骨を検討された大江先生によれば頭蓋骨は、鼻先を北西に向けるという。

規模 骨・骨粉の広がり長辺72cm、厚さ7cm以下であった。頭蓋骨は立体的ではなく、相当圧縮され、

扁平となっていた。

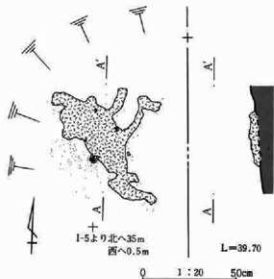
形状 馬骨埋納の土壌の発見に努めたが不明であった。

覆土 馬歯・馬骨の発見は3面目であり、上方に堆積していたのは、3面目を覆う黄灰色細砂の砂質土であった。馬歯・馬骨をとりまく土壌は3面目の52-1号溝の埋没土とほぼ同様に粘気のあるシルト質の土壌であった。

出土遺物 関連の出土土器はない。

所見 馬1は3面目の52-1号溝中で発見された。52-1号溝は、4面目に方向性と規模がいく分異なる状態で当初の形があり、上・下端とも、3面目よりもはっきりしていた。3面目の52-1号溝は台地端に北端部が喰い込むように設けられ、4面目の52-2号溝と異なる段階があったことになる。そのため機能上の必要性は一時的ではなかったと推測された。機能の継続性は馬1に風化状態が認められるため、水田一面1が氾濫によって覆われる直前には3面目の52-1号溝は埋没していたと考える。

馬1の発見は、3面目を露呈した際、骨粉状態が少し見えていた。52-1号溝の埋没土を除去しながら全体を露呈させた状態が整理担当による第70図である。図上方の傾斜マークは4面目の52-2号溝が発見される直上の傾斜状態である。第70図の作成後、もう一枚平面図を作成し、その合成図が馬歯・馬骨



第70図 2区3・4面間馬1出土状態

の項、附図1である。馬骨・馬歯の遺存は骨粉状態の方が多く、骨の組織状の方向性が知れる個所は少なく、わずかに残る馬歯の歯根部側が顎骨状の骨の中に喰い込むのを認める程度であった。馬歯・馬骨を埋めている土壌と、3面目の52-1号溝とを埋めている土壌とは同質で、数回、周辺を精査したものの埋納のための土壌の発見には至らなかった。そのため、土壌に埋納した場合と、3面目の52-1号溝が埋没しなかったところに納置した二つの可能性が考えられる。

52-1号溝と馬1との関係は、52-1号溝の機能については後章で水源地際に設けた築堤の土取り場跡を推定したが、その機能はいづれにしても水田関連であり、頭骨を奉ずるほどの行為は、水田経営に直結した祭儀、法儀であったと推測しておきたい。

調査中、馬歯・馬骨の現場検証を元群馬県畜産試験場長であった大江正直先生にお願いした。その結果、獣種は馬であり、北西側に鼻先が向けられ、上方は風化欠失しているとの所見をいただいた。その後、整理過程での鑑定結果は、馬1は同一個体としてよく、獣種馬、性別不明、年令20.5才±0.5で老令、推定体高130.6cm、体高は中形馬の中では小さい馬であったという。年令20.5才は最長令に属するという。また興味を引いたのは、馬骨中に肢骨片が含まれており、埋納は解体後のことという。

2区4面 馬2 (第54・71図 図版41-2)

位置 H-3グリッド

重複 64号溝中から発見されたが、溝中に馬2の埋納土壌は存在したか明らかでない。馬2は溝の構築より後出するが完全埋没時点より後出したかは不明である。

方向 頭蓋骨は存在しなかったが、大江正直先生によれば歯の配列は鼻先側を西向きにしたという。

規模 歯の広がり最大で35cmの範囲の中にある。

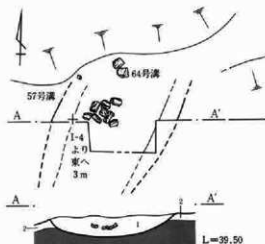
形状 馬歯・馬骨の埋納の場合を想定し、土壌の発見に努めたが不明であった。

覆土 64号溝の最上面には水田一面1の推定耕作土

があり、それを切りその下方に64号溝がある。その埋没土は粘気をおびていた。

出土遺物 関連の出土土器はない。

所見 馬2の発見は水田一面1の推定耕作土を除去した際に、馬歯番号12が発見されたことにはじまる。その際、耕作土における馬歯の単独出土かとも思ったが、その後、64号溝の精査と排土時に連続して発見された。第71図は整理担当者によるその状況である。小骨片や骨粉は認められなかった。馬2と64号溝、同57号溝との関係は、57号溝が古く、続いて64号溝の構築時点があり、馬2は、57号溝の完全埋没時より先行したか、後出したか、土壌の発見はできなかったため明らかでないが、64号溝の機能時と同時の可能性が高い。馬2の平面上の状態は、顎骨が早くから失われたためか(大江先生によると、現在、馬骨を雨晒しにすると5年以内に消滅するという)、約35cmの範囲の中で少し乱れた状態にあった。そのため上面を覆う水田一面1の機能時に何らかの理由により乱されたことが考えられる。そのことをある程度、裏づけるのは、当初発見された馬歯番号12は、平面上、集中個所にあり、水準状態は最も高位置であった。その高さは耕作土の下面に相当している。



- 1 黒褐色土 2層よりやや灰色を帯びる。
2 黒褐色土 有機質多く、粘性あり。

0 1:20 50cm

第71図 2区4面馬2出土状態

そのため馬歯番号12より上方に馬歯・馬骨が存在していた場合、水田一面1の機能時に失われたと推測される。

大江先生の現場検証時には馬歯番号12の出土しかなかったが、整理時の鑑定の結果は、馬2は、同一個体としてよく、獣種馬、性別不明、年齢9.6才±3.7で壮令、推定体高131.8±9.1cmで中形馬の中では中位の馬、歯冠幅率から見ると体格の良い姿が想定されるといふ。その体格の良い点、馬歯の残存が良い点などにより、下田中、川久保馬A平安という標式個体名称をいただいた。

2区3・4面間 馬3・4 (第54・72図 図版41-3~5)

位置 I-5グリッド

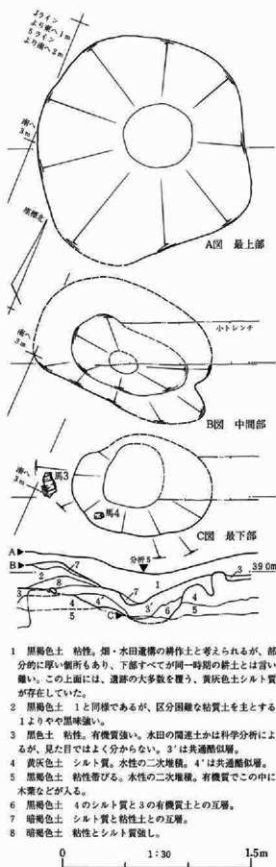
重複 3号土坑は、3面目に、ほぼ円形の凹地としてあり、4面目には、やや不整形の平面形状をとる。馬3・4は、その最下部中より発見された。したがって馬3・4は3面の3号土坑よりも古く、4面目の3号土坑の構築よりも新しい順となる。

方向 馬3は、大江正直先生によれば、往時、西向きに鼻先を向けて納置されたという。馬4は歯1点のため他との関連は不明である。

規模 馬3は頸骨らしき骨の中に歯根部を喰い込ませて出土。その状態での最大長17~18cm。馬3・4とは、平面上、約35cm離れている。

覆土 馬3は、第72図のとおり客土層のように見える注記番号8の直下の同3に含まれて発見された。同8は粘性をおびたシルト質の土壌で、太畦直下や水田一面2の北半で認められたのと似ている。馬3の大半を埋めていたのは有機質の強い黒みをおびた粘性土であった。馬4も注記番号3から発見された。出土遺物 関連の出土土器はない。

所見 第72図は記録保存図を基に筆者が作成した。馬3・4は3号土坑と直接関連であるので合せて浄書した。3枚の平面図は作成時点が異なるのと、平板側図のため、A図作図直後に図化した土層断面(長さ約20mの東西断面)と、上・下端が不一致となっ



- 1 黒褐色土 粘性。畑・水田遺構の耕作土と考えられるが、部分的に厚い個所もあり、下部すべてが同一時期の耕土とは言えない。この上面には、遺跡の大多数を覆う、黄灰色シルト質が存在していた。
- 2 黒褐色土 1と同様であるが、区分困難な粘質土を主とする。1よりやや黒味強い。
- 3 黒褐色土 粘性。有機質強い。水田の開墾土とは科学分析によるが、見た目ではよく分らない。3'は共通層似層。
- 4 黄灰色土 シルト質。水性の二次堆積。4'は共通層似層。
- 5 黒褐色土 粘性帯びる。水性の二次堆積。有機質でこの中に木葉などが入る。
- 6 黒褐色土 4のシルト質と3の有機質土との互層。
- 7 暗褐色土 シルト質と粘性土との互層。
- 8 暗褐色土 粘性とシルト質強し。

第72図 3号土坑の推移と馬3・4の出土状態

た部分があるが、それは修正根拠を欠くため、現場原図どおり抄書した。なお復元破線と土層断面左側3、3'間には、必要な線の記入がなかったので推定破線で加えた。また注記中の注5の木葉などの箇所は、土層断面左端より約70cm西方の凹みに認められたものを指す。

馬3・4は、当初、東・西20mの土層観察用トレンチを掘土した際、馬3の一部が発見されたことにはじまる。その後、B図作成の直後に馬3の全体状況と馬4の馬歯1点の存在が明らかとなった。平面図3枚、土層断面から云える点は、3号土坑内の各土層の最深部や平面図中の下端線などは一致せず、3号土坑は、最終的に機能停止した3面目に至る間、度々、掘り直しされたと考えられ、馬3・4は、その過程での納置である。なお、3号土坑は、後章で触れたとおり、雨水を受ける天水受けを機能目的とする土塼と推定されるため、降水に関連する法儀、祭儀に関係して馬歯・馬骨の納置がなされたと推定される。

調査中、馬3の初出時に大江正直先生に実見していただいた。調査以降、馬歯番号29～38のうち、37を紛失してしまい、馬歯・馬骨の項の図・写真は大江先生の控え記録による。鑑定の結果、獣種は馬、馬3は同一個体、性別不明、年令10.6才±2.1で牡令、推定体高133.7、体高区分は、中形馬の中では中位の馬、納置は西向と推定された。

馬4は、馬3の位置から南東に約35cm離れていた。鑑定結果は、獣種は馬、性別不明、年令10.6才±2.1で牡令、推定体高138.6cm、中形馬の中では大きい馬との所見をいただいた。その中で推定体高138.6cmは、群馬県内における古代の馬歯・馬骨のうちでは最大級に属する。

2区3・4面間 I-5 礫群 (第54・73図)

位置 I-5 グリッド

重複 3・4面間で発見されたため、3面目より、古く、4面目より新しい。

方向 石の周囲を精査したが、掘り込み位置は明ら

かでなく、方向性も知れない。

規模 石の広がりは5点で、58cmの範囲中にある。

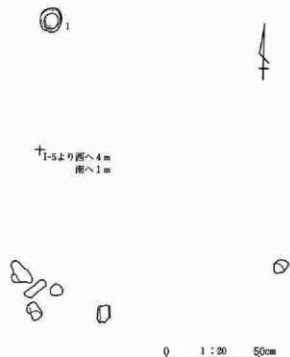
形状 3号土坑の北縁位置の一部を遮るようにも見える。整理担当作成の第73図の平面図のみでは、はっきりしない。

覆土 3面目の水田一面2の推定耕作土を除去した際に、発見された。それは、第72図の土層断面、土層注記番号1に相当し、粘性の黒褐色土である。

出土遺物 川原石8点

所見 この礫群は、水田一面2、3号土坑に関連する第72図土層断面注記番号1の粘性をおびた黒褐色土を除去した際に発見された。その位置は第72図B図の推定北縁に近接し、何らかの形で有機的な存在に思えた。石の高さは馬3・4と近似であり、馬3の基面の高さを0とすると馬4は+2.5cm、礫群の高さは0～5cm内に大多数が入り、1点のみ-14cmの高さにある。

石は河原石であり、現場未図化の個体を加えて8



第73図 2区3・4面間 I-5 礫群・土器納置実測図

点存在し、取り上げた。大きさは長径10cmを越える石が3点あり、他はそれ以下の大きさであった。各石について整理時点で再度、研磨痕や擦痕を調査したが、明瞭でなかった。

祭祀遺構中に、本遺構、遺物を加えたのは、馬3・4と同様に、相当数の儀儀・祭儀行為が行われたであろうことを思う点にあり、遺構として掲げた理由は、遺構が発見できるか否かは、遺構そのものが埋没残存しているか否かよりも、発掘の技量と埋没土に起因があり、相当数を調査しながらとばしていた（関東地方では、掘り切れない遺構や、小遺構の存在を承知しながらの無視や、後に掘り過ぎとわかった場合に云う）かもしれない余地があり、遺構に含めたのは、そのためである。なお祭祀のほか、土留め用石材の可能性も、客土の変換位置のためありうる。

2区3・4面間 I-5土器納置 (第54・73・74図 図版41-6・7)

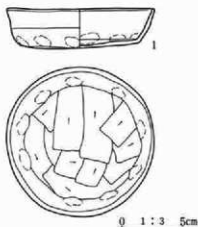
位置 I-5グリッド

重複 3面目より古く、4面目より新しい。

方向 土器の出土場所周辺の精査を行ったが、掘り込み位置や関連遺構は不明であり方向性も知れない。

規模 遺構は不明であり、規模も明らかにできない。

覆土 土器の納置面は、第82図の土層断面注記番号



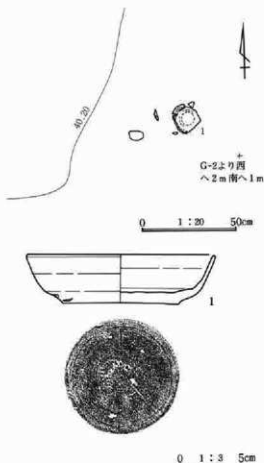
第74図 2区3・4面間 I-5土器納置出土遺物実測図

1に似た粘性をおびた黒褐色土に相当する粘性土を除去した際に発見された。そのため、黒褐色粘性土が覆土であったが、水田一面2の推定耕作土は周辺部で、やや砂質味が増える。

出土遺物 土師器坏1、伏せられた状態で出土。

所見 祭祀遺構に含んだ理由は、土器が単独個体で出土することは、多くはなく、ましてや、焼土、木炭粒を周辺で多見した訳ではなく、住居跡の貯蔵穴を掘り残し、その中にあった土器でもない。それについて蓋然性を求めれば、周辺の出土状況から祭祀関連の可能性が持たれる。遺構としての考え方は前出の2区3・4面間 I-5 礫群の説明によられたい。

土器は土師器の坏で、調査時の欠損がわずかにある。土器の製作年代は9世紀前半でも中頃に近いと考えられる。



第75図 2区3面下位G-2土器納置・出土遺物実測図

2区3下面位 G-2 土器納置 (第55・75図
図版41-8)

位置 G-2グリッド

重複 1面目の現代～近世よりも古く、1・2区畑面との重複は見られなかった。

方向 遺構を伴うか否かは、精査が甘く、明瞭でなく、したがって方向も不明である。

規模 遺構の精査が甘く、遺構を伴っていたかは不明である。そのため規模は不明である。

覆土 近接の畑遺構を埋める土壌と質感は共通し、粘気のある土壌であった。

出土遺物 須恵器坏1。口縁部に、わずかに旧時欠損あり。

所見 発見は、1面目に相当する現代～近世以降の面を終了し、3面目とする畑遺構を徐々に排土する過程で発見された。発見した時点で、既に旧時欠損し、失われている個所があった。出土状態は内面を上とする正位であった。出土位置は、1区畑跡の南端に近い個所からで、畑のさく遺構が終わって途切れたあたりからの発見である。畑遺構が途切れたか否かは、覆う粘気をおびた土壌が南へ向かって少しずつ浅くなるため、立ち上がってしまった畑のさく遺構は、そこで終わりとなるのは明瞭であるが、南端にある数条は不明瞭となっていた。そのためこの坏の出土位置は畑遺構の末端を考えるうえで重要な位置を占める。

土器の年代は口径が15cmあり、轆轤左回転、底面全面回転施削、笠懸席跡群製に見える胎土であることから、8世紀中頃の製作と考えられる。農耕関連の遺物では最も古く、その始源の年代が示唆される。

3. 水田関連遺構

水田遺構を認定する際、大規模発掘であれば、水田区画の単位、水路からの引水配分の構造など、把握→解釈→究明に向け、その広さが、様々な形で有利さをもたせてくれる。しかし、今回の調査面積上の制約は、遺構種、機能について、小規模さからくる不確かさがつきまとい、不明な点を残した。特

に、形態上から考えられる遺構種と、科学分析から出された結果と不整合の個所が生じたが、今後のためと、どちらかに一方づける自信が欠くため、その両者に可能性のあることを併記した。以下、遺構について記述を進めるが、そうした点に注意されたい。

2区3・4面間 水田一面1 (調査時名称)
(第55・76・77図 図版42-1)

位置 G-I-3-5グリッド

重複 推定耕作土下に溝遺構が多くあり、それよりも新しい。台地側の先端は現代トレンチャーにより切られる。52-1号溝とは同一面である。

方向 長軸方向は約N-60°-Eである。

規模 長辺20.4+αm、短辺20.4m。長辺は北東方向にさらに調査対象地外に延びる。

形状 面1の単位のうち東辺が未出であるが、調査範囲のみの状態からは長方形の区画が考えうる。

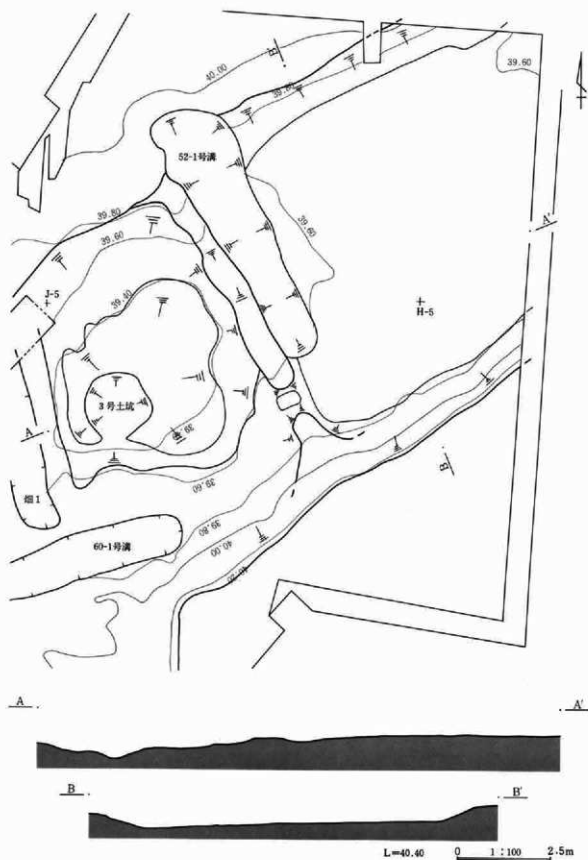
覆土 上面を氾濫による黄灰色シルト層が覆う。

出土遺物 土器は少量、小片の形で認められた。

所見 第76図は整理担当による3面目の状態で、整理時の加除筆は少ない。この面では52-1号溝が共存してあったが、埋没土がどのくらい圧縮されているか不明なため共存の遺構か、前代の遺構の埋没土が圧縮され同一面に凹みとなってあらわれたのかははっきりしない。この3面目の52-1号溝内と水田一面1の表層に黒褐色粘性土(第77図、注記1)が厚さ約10-20cmで堆積し、台地上端部際まで続いて存在していた。

水田一面1の西側には、面-1と面-2とを画した太畦が存在する。それについては後述する。

水田一面1の表面状態は、中央部が高く、東側が約8cm、西側で約25cm低くなっていた。周辺部が圧縮され、低くなったようである。本来の勾配は、第77図土層断面注記1の層を掘り下げた際、多くの溝遺構が発見された。その溝遺構は、砂をまじえ北東方向に向かって流れた形跡を示しており、その上流側は西南側であった。よって、水田一面1の旧時の勾配は北東下りと推定される。推定耕作土とした第



第76図 2区3・4面間水田一面1実測図

77図土層断面注記1は、直下の注記5より暗い有機質の粘性土で、注記4よりも、黒色味が弱かった。葦定耕作土とした理由は、水田一面1の平面形は、水田に思えたこと、表面に堆積した注記1は水田一面2におよぶ広い面を覆い、しかも、黒色土に近い注記4を除くと、有機質味のある色調は、それに次ぐことから、耕作土と推定した。

遺構種とその機能については、当初、方形の区画および西接する土畦の存在は、形態上、水田遺構を意味すると考え、水田跡を推定した。しかし、裁ち割りトレンチ（第77図）を入れた結果、遺構面および推定耕作土の注記1に人間の足跡状の凹みが少ないこと、直下の注記4・5に足跡状の凹みが少ないことから使用に関し疑念が持たれた。使用が永ければ、人間の足跡は注4・5にも印象されるはずであり、それが遺構面上にも残されていないのは、使用は短期で、最終的に使用されていなかったと思料された。最終的に使用されていなかったことは、西接の土畦の上端・下端線の形状が不明瞭であったことから廃棄は、最終埋没の氾濫を測る前代であったと、ある程度、裏付けされる。廃棄水田を推定する際、畦の上端線が不明瞭になるのは当然の結果であるが、下端線が明瞭か不明瞭かで、ある程度、識別可能である。

今回の整理をへて、再考すれば、水田一面2は溜池と考えられるので、東下りに続く面1は次の溜池に相当することも考えられる。さらに廃棄については、水田一面2の構築面は、図面合成の結果、西接の畑遺構の直下におよぶことから、西接の畑遺構に後出の余地が生じ、氾濫の直前まで畑遺構が機能していたのであれば、水田一面2について既に、廃棄された余地が生ずる。

土壌に関する自然科学分析は、土壌、プラント・オパールの植物ケイ酸体、花粉分析を委託した。委託報告は、分析の経括をされた早田勉氏ほかによりまとめられ、本書中に、その報告が掲載されているので参照されたい。その中で、水田一面1に関連するのは試料採集地点3・4である。地点3は土壌に



※本図の断面位置基点は第76・78図のA-A'面に一致。
3号土坑の土層断面の注記は省略、第72図参照。

第77図 2区3・4面間水田一面1・2横断土層図

ついでであり、地点4は、第77図中の分析4と注された箇所て植物ケイ酸体、プラント・オパール、花粉分析を行うため4試料が採集された。試料名は、第4地点としPA11・12・13とある。結果について、ケイ酸体は、残存は良かったものの、イネの検出はなく、ヨシ属・ネザサ節型が多く検出された。花粉化石の残存はPO1・PO2・PO3の試料採集地点ともに不良で、わずかながら水田雑草・畦地植物とされるオモダカ属、ヨモギ属がわずかながら検出された。報告所見として、ケイ酸体、プラント・オパールについては、「(前略)堆積当時はヨシ属が生育するような比較的湿った土壌条件であった(後略)」という。花粉分析では「(前略)第4地点のPO3では1個のオモダカ属が検出されているが、オモダカ属は母性植物における花粉生産量が少なく散布性に乏しい。また花粉は水成の堆積物にしか含まれていないため、第4地点の溝状遺構は滞水するか湿地状であった可能性が高い。(後略)」と説明している。以上、分析結果、稲の栽培は否定的であった。これを受け、発掘された水田一面1は、水田区画を呈する遺構であるものの、稲作による使用は未使用に近いということになる。

出土遺物については、整理担当の所見、および整理班の資料によられたいが、発掘調査中、9世紀代の土師器坏の小破片が出土していたと記憶する。

2区3・4面間 溜池遺構(整理時推定)・水田一面2(調査時)(第55・78図 図版42-2)

位置 H-J-4-5グリッド

重複 推定耕作土下に溝遺構があり、それらよりも新しい。台地側の上端は現代トレンチャーによって切られる。3面目の52-1号溝とは同一面で発見され、3・4面目の溜池遺構は、畑1の直下におよび、畑1より古い。

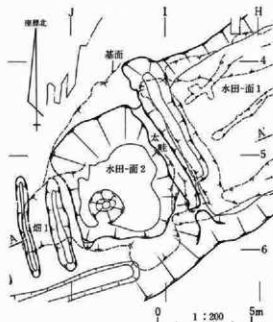
方向 不整形のため測定できず。

規模 上端線は、そうはっきりしていないが、平面図化した際の規模は、南北方向の最大長14.6m、東西方向のほぼ中央で、長さ11.3mを測る。

形状 平面形は不整形である。その最深部には3号土坑があり、4面目の段階から3号土坑は存在している。3面目の段階の規模は、推定耕作土が畑1の推定耕作土下におよぶため、その段階で、溜池が機能しているのであれば、3面目の規模形状は小さくなっているはずである。

出土遺物 土器の出土が少量あり、小片で認められた。

所見 第78図は3面目の状態で、整理時点の加除筆は少ない。この面で3号土坑の最上面は凹んで存在しており、西縁は畑に沿う形で立ち上がり、人為所作である。北縁は台地縁に一致し、自然地形の状態に近いと考えられ、南縁側は、ゆるやかに立ち上がるので人為所作が、どの程度、加わったかはっきりしない。東縁は太畦の存在から明瞭である。太畦の南端には水口が存在している。4面目の状態は、西縁は、畑直下に喰込み、3号土坑の下半部は3面目の3号土坑とは少し、下端位置が異なって認められ、水口位置直下は、3号土坑の方向を向く52-2号溝が発見され、太畦は盛土であることが明らかとなった。その新・古の状態、つまり3・4面の状態を合成したのが、第78図である。

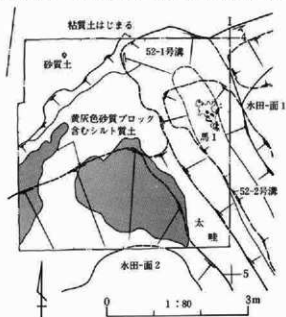


第78図 2区3・4面間3・4面の新・古の状況

水田一面2の表面状況は、3号土坑の下端部が最も深い状態にあり、南西隅部が3号土坑の方向に向かって少し凹み、3号土坑の上端も、その延長箇所が途切れていた。表面は凹凸が少なく、3面目を埋没させた氾濫時には足跡様の凹みは、認められず、乾燥状態にあったようである。3面目の直下部は、推定耕作土とした第77図土層注記1の黒褐色粘性土が存在していた。その層を耕作土と推定した理由は、太畦から水田一面1におよぶ範囲を、単一層が占めること、有機質味のある色調であることから耕作土と推定した。使用については、注記1の直下層の乱れが少ないことから、そう度々、使用された水田ではないと考えていた。水田として機能した場合、水の引入は東の太畦からと考えた。その際、水田一面1・2の置かれた場所は、流入した水を二たび流出させる構造にはない不合理な構造の考え方である。灌漑法としては、水田地帯全体の水の趨勢に任せた方法である。しかし、その考え方は、水田一面2の最深部に位置する3号土坑のあり方が不自然であり、灌漑用井戸の埋没もありうるとして、水田一面2の露呈直後に、2面目の3号土坑・水田一面1・2を切る形で載ち割りトレンチ（第77図）を入れた。その結果、深さは浅く、灌漑用井戸と云い難い規模であった。その状況と現時点での周辺地帯を考え合わせ、比較すれば、下田中川久保遺跡の立地は、大間々扇状地形の一角にあり、現在でも台地上の浅い位置から湧水することはなく、3号土坑の深さをもって湧水を誘ったと考えるのは無理である。さらに大間々扇状地形中の灌漑については、江戸時代において難行の末に完成した岡登用水の開さくや、現代でも果菜、根菜栽培のための散水に経費を投じた経緯があったことは知られている。そうした地帯の中で行われる灌漑には、自然水系（その中には水源を湧水から発する小河川も多くある）から直接的な灌漑、用水による二次的な灌漑、天水溜池による灌漑がある。発掘時点では、県内における、湧水活発化が湧水の目的での井戸例は多出してあったので、天水を受けるための溜池に関しては想定外

であった。現時点で再考すれば、3面から4面間に粘性土が多く認められたこと、第77図の土層注記1が、深く、畑1の内部まで立ち上がりながら深く喰い込むことなど、天水溜池と解釈した場合、符合点が求められ、水田一面2について溜池を、3号土坑について天水受けの最深部の小穴を推定しておきたい。

自然科学分析は第77図のとおり、3号土坑内を第5地点、畑1の直下もしくは水田一面2の推定耕作土に相当する第6地点で試料採集を、お願いした。第5地点は、植物ケイ酸体（プラント・オパール）分析の試料名は、PA14・15で、第72図の土層注記7・3'に相当する中である。分析結果はイネとしての検出はなく「(前略)ヨシ属が多く生育するような湿地的な環境であったものと考えられ(後略)」とされた。同地点の花粉分析は、試料名PO1・2であり、最多の検出量があった。第6地点は、ケイ酸体分析の試料番号PA16・17・18で、イネが比較的低い値で検出され、「(前略)稲作が行われた可能性が考えられる。」とされた。花粉分析については実施していない。以上の結果から、イネの植物ケイ酸体が畑1から検出され、この場所付近に稲作が左証されることになるが、水田として可能性を考え



第79図 太畦跡と客土面 (部分)

ていた水田一面1・2で検出されず、可能性が薄いと考えられた畑遺構で検出され、そのことは想定外の結果であり、その分析成果は大としなければならない。

なお、水田一面2は溜池と推定されたことから、次に続く、水田一面1の北東延長上に小規模な水田跡が想定される。現在、畑地となっている該当箇所は、長さ約50mにわたりわずかに凹みとなるのを認める。

2区3・4面 太畦跡（調査時）・築堤跡（整理時推定）、S D 52（調査時）52-1号溝（整理時）・土取り場跡（整理時）（第55・78・79図 図版42-1）
位置 H-I-3~5グリッド

重複 太畦、52-1号溝ともに3面上は連続し、4面目は、太畦は基面しかなく、52-1号溝は方向性のやや異なる掘り方が存在していた。

方向 太畦はN-148°-E、52-1号溝（3面）はN-148°-E。

規模 太畦は長さ約8m、幅0.9m、比高差は最大で約30cm。52-1号溝（3面）は長さ7.4m、最大幅1.9m、3面の長さ8.2m、幅1.3m。

形状 太畦は、南端近くに水口部がある。上・下端線とも不明瞭である。52-1号溝は太畦に沿い、横・縦断面とも、下端線不明瞭なU字状を呈す。

覆土 52-1号溝は、砂の堆積が少なく、シルト質、粘性土を主となす。

出土遺物 土器の出土は少量あり、小片で認められた。

所見 太畦は発掘時に地山造出ではなく、客土と認められた。部分的に第79図のようにシルト質と細砂ブロック（地山ブロック）を含む明瞭な客土が、3~4面間の溜池中と伴に認められた。土取り場として太畦の単位と方向性が共通する52-1号溝を土取り場として推定し、太畦を溜池の築堤跡と推定しておきたい。52-1・2号溝の2単位から2回以上の土盛りが考えられる。（文責 大江正行）

4. 畑跡

畑2*（第54・80図）

概要 早川の旧河道の岸寄りに作られたものであり、上位の畑2が氾濫により埋没する前の耕作痕である。

位置 2区第4面J-7・8グリッド

畝間の走行 N-68°-86°-E

畝間の規模 東西2m、南北6.30mの範囲から、4条の畝間を検出した。畝間の長さは0.69~1.35m、幅は12~62cm、深さは5~12cmである。

覆土 上位を洪水堆積層（基本土層Ⅲ-4）が覆っている。

出土遺物 なし

所見 この上位には、畑2の畝間跡が検出されている。一部の畝間跡以外は、畑2の畝間跡とは位置が合わないため、本遺構が埋没した後、復旧されたのが畑2と推定できる。すなわち、旧早川の氾濫の影響で耕作面を削平され、シルト質の暗灰色土により埋没し、その後、水性二次堆積であるシルト質の黄灰色土と暗灰色土に覆われていた状態を再度畑2として耕作をしたと考える。遺構の残存状態は耕作痕の底部が残されているのみである。また、60-2号溝と並行する形で検出されているが、60-2号溝との関係は不明である。本遺構の時期は、上位を洪水堆積層（Ⅲ-4）が覆っていることから9世紀前半以前の近い時期と考えられる。

畑6（第54・80図）

概要 2区の北西部にあり、遺構面は現地表面より約1.20~1.30m掘り下げた所より検出した。一部を53号溝と60-2号溝に重複しているが、新旧関係は不明である。

位置 2区第4面J・K-6グリッド

畝間の走行 N-112°-119°-E

畝間の規模 1.80×8.70mの範囲から、3条畝間を検出した。畝間の長さは1.80~2.10m、幅は13~68cm、深さは5~11cmである。

覆土 黄灰色の砂質土

出土遺物 なし

所見 畝間の両端の高低差は、北西に向かってやや低く傾く傾向が見られる。小規模な1単位の耕作跡であるが、詳細は不明である。本遺構の時期は、不明である。

畑7 (第54・80図)

概要 2区の南西部を占める旧河道に向かって緩やかに傾斜した範囲にあり、現地表より遺構面まで約1m程掘り下げた所より検出した。一部を第3面の不明遺構(SX7)に切られている。

位置 2区第4面J-7グリッド

畝間の走行 N-89°-94°-E

畝間の規模 東西1.30m、南北3.50mの範囲から、2条の畝間を検出した。畝間の長さは0.70~1.19m、幅は14~48cm、深さは6~11cmである。

覆土 シルト質の黄灰色土

出土遺物 なし

所見 僅か2条の耕作痕であり、同一方向に走行する形状をとっている。早川の旧河道の岸寄りに作られた畑であり、大半を泥濘により削平され、畝間の底部の一部が痕跡として残ったと考えられる。本遺構の時期は、不明である。

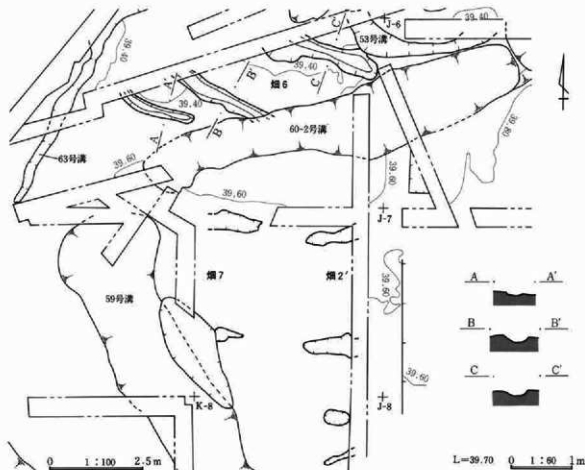
畑5 (第55・81・84図 図版44-2)

概要 調査区を南北に分ける用水路北側の1・2区にまたがる範囲から検出された耕作跡である。この面の約20cm上位には、畑4が検出されている。

位置 1区第3面下位G-18-20、H-20グリッド
2区第3面下位G-1、H-1・2グリッド

畝間の走行 N-4・162°-171°-E

畝間の規模 畝間の長さは1.62~12.48m、幅は17



第80図 畑2'・6・7実測図

～55cm、深さは3～15cmである。

覆土 粘性が強く、やや酸化気味の暗褐色土

出土遺物 なし

所見 第3面の下位から検出された遺構である。2区側では、畝間の長さが比較的短く、耕作の場所を移動していることが第84図からわかる。白抜きの畝間跡は、網かけの部分より古い耕作の部分である。1区側では、畝間跡の長さは比較的長く走行も異なっている。このことから、1区側と2区側では単位の異なる耕作をしたことが推測できる。

なお、2区のG-2グリッドからは須恵器の坏(第75図)が本遺構の確認面と同じレベルから出土している。これがこの遺構に伴うとすれば、本遺構の時期は8世紀後半と推測される(遺構図は平安時代前期として掲載)。このことについては、祭祀の関連遺構の項で詳しく述べたい。

畑4 (第55・82・84 図版44-1)

概要 表土より約40cm下より検出された耕作跡である。この面の約20cm下位には畑5が検出されている。

位置 1区第3面G-17～20グリッド

畝間の走行 N-4-8°-E

畝間の規模 畝間の長さは2.45～8.28m、幅は21～77cm、深さは2～11cmである。

覆土 粘性のある暗褐色土

出土遺物 須恵器蓋

所見 1区の第3面より検出した遺構である。下位の畑5の1区側の畝間跡と走行・規模とも似ていることから、畑5が洪水堆積層により埋没した後を掘削し復旧した耕作跡と考えられる。また、調査区の東側のトレンチにかかった本遺構の様子から、遺構は東西に広がる可能性が考えられるが、北側には近世の道路遺構と溝が検出されており、ここでは本遺構は確認されなかった。

なお、第84図は、畑4と下位の畑5の合成図である。黒塗りの部分が畑4を示している。本遺構の時期は、覆土中から出土した須恵器坏蓋より9世紀代以前と推定でき、下位の畑5との新旧関係も矛盾しない。

畑1 (第55・85図 図版43-1)

概要 2区の北西部で、遺構面は現地表面より約1mほど掘り下げた所より検出した。遺構面は、東側がやや低くなっているが、ほぼ平坦な面を利用して畑としている。

位置 2区第3面I-6、J・K-5・6グリッド
畝間の走行 N-166～173°-E

畝間の規模 5.70×8.05mの範囲から5条の畝間跡を検出した。畝間の長さは2.79～5.49m、幅は0.29～1.04m、深さは13cmである。

覆土 洪水堆積層(基本土層Ⅲ-4)

出土遺物 ロクロ土師器の塊

所見 一部をトレンチにより削平しているが、本遺跡の耕作跡としては、残存状態が比較的良好な遺構である。粘性のある黒褐色土を地山とし、畑としている(第77図)。

畝間の残存状態は、東側程良好である。畝の間隔は0.90～1.50mで、畝と畝間の高低差は最大で約20cmを測る。畝間の走行は、60-1号溝と約40～60cm離れ、直行している。このことから、本遺構は60-1号溝と何らかの関連があったものと推測できる。

また、この遺構が洪水堆積層(Ⅲ-4)の直下であり、畑2がⅢ-4層を掘り込んで耕作していることから本遺構は畑2より僅かな時期の差ではあるが古い時期のものと考えられる。

なお、検出された畝間の様子から一部調査区外へ遺構が広がる可能性がある。本遺構の時期は、出土遺物から9世紀代と推測できる。

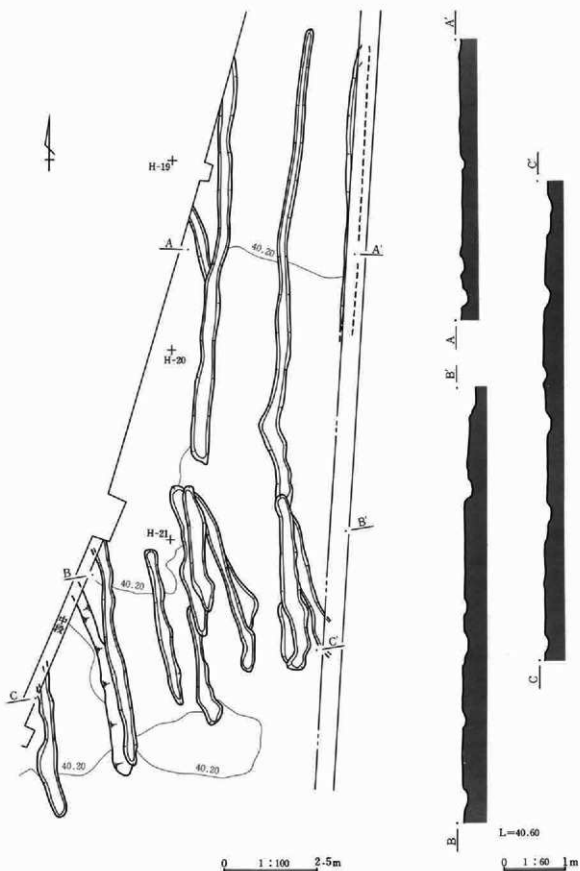
畑2 (第55・85図 図版43)

概要 2区のほぼ中央の南寄りから、耕作跡を検出した。西に向かって緩やかに下がる斜面上に作られた耕作跡であり、現地表面から遺構面までは約60～90cm程の深さである。

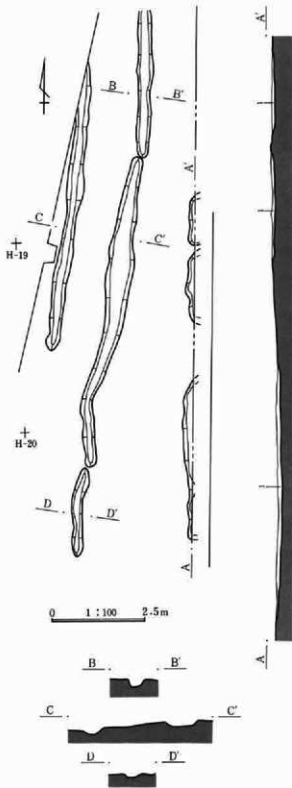
60-1号溝と北側の畝間跡が重複しているが、新旧関係は不明であった。

位置 2区第3面I・J-6～8グリッド

畝間の走行 N-79-90°-E



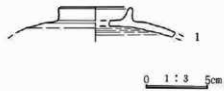
第81图 堀5 实测图



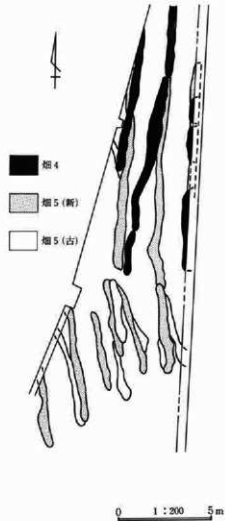
1 暗褐色土 粘性土。

L=40.60 0 1:60 3m

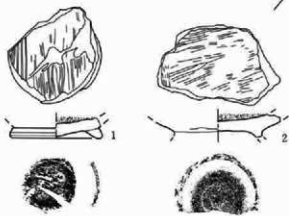
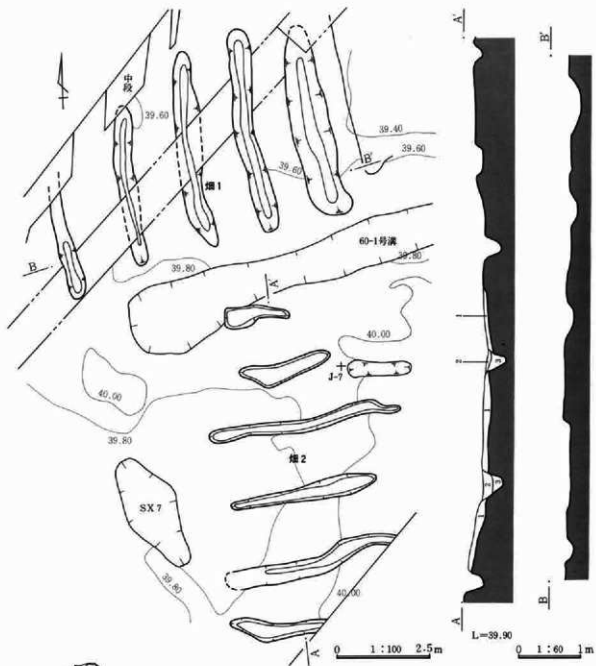
第82図 畑4実測図



第83図 畑4出土遺物実測図



第84図 畑4・5模式図



第86図 燧1出土遺物実測図

- 1 黄灰色土 FA (?) を多量に含む二次堆積層。
- 2 黄灰色土 1層に似るがブロック状を呈す。
- 3 黄灰色土 砂質-シルト質。水性堆積。

第85図 燧1・2実測図

0 1:3 5cm

畝間の規模 東西5.30m、南北7.70mの範囲に7条の畝間跡を検出した。畝間の長さは1.73～5.15m、幅は15～54cm、深さは2～26cmである。

覆土 砂質及びシルト質の黄灰色土

出土遺物 なし

所見 畝は割平されており、畝間のみを検出であった。また、一部の畝間跡は深さ2～4cmしかなく良好な残存状態ではなかった。洪水堆積層(Ⅲ-4層)を掘り込んで耕作し、畑1がⅢ-4層の直下にあることから、本遺構は畑1より僅かな時期の差ではあるが新しい時期のものと考えられる。詳細は不明な点が多いが、本遺構の時期は、9世紀代以降と推定される。

5. 土坑

1号土坑(第56・87図 図版45-1・2)

位置 2区第2面H-5グリッド

重複 なし

規模 幅80×(80)cm 深さ59cm

形状 平面形(楕円形)

断面形 円筒形状 底面にやや凹凸があり、一部に径8センチ程の窪みが見られる。掘り込みは直線的である。

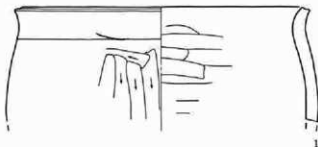
覆土 粘性のある灰色土の小ブロックを含む暗褐色土及び木炭粒と焼土粒を僅かに含む淡暗灰色土

出土遺物 須恵器土釜

所見 2区のやや東寄りの地点で、現表土から約25cm程掘り下げた所より検出された。遺構の大半をゴボウ栽培によるトレンチャーで削られており、一部を確認できただけにとどまる。

トレンチャーの幅はほぼ25cmで、トレンチャーによって掘削されなかった南側の地山には遺構の続きは見られないため、土坑の径は約80cm内外と推定できる。遺構面は、シルト質の暗褐色土の地山を掘削しており、覆土の堆積状況から自然に埋没したと考えられる。

出土遺物は、底面より8cm上で淡暗灰色土層中から平安時代末頃の須恵器土釜が出土している。詳細は不明な点が多いが、本遺構の時期は平安時代の11世紀代と推定される。



- 1 暗褐色土 植物灰(現ゴボウ栽培による)
- 2 淡暗灰色土 シルト質で木炭粒・焼土粒を僅かに含む。
- 3 淡暗灰色土 2層より粘性は強い。
- 4 暗灰色土 粘性があり粘性のある灰色土の小ブロックを含む。

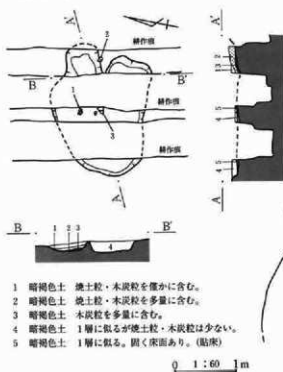
第87図 1号土坑・出土遺物実測図

6. 竪穴住居跡

1号住居跡 (第56・88図 図版38-1)

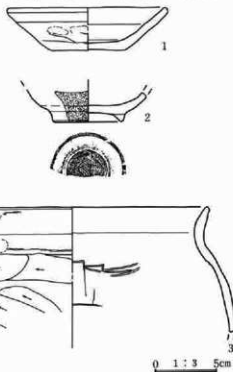
位置 2区第2面H-4グリッド 重複 なし
規模・形状 耕作による削平等を受けており、規模、形状とも不明な点が多い。

主軸方位 不明



- 1 暗褐色土 焼土粒・木炭粒を僅かに含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・木炭粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 木炭粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 1層に似るが焼土粒・木炭粒は少ない。
- 5 暗褐色土 1層に似る。固く床面あり。(貼床)

覆土 焼土粒、木炭粒を含む暗褐色土
壁高 8～9cm 周溝・柱穴・貯蔵穴 不明
床面 比較的平坦で貼床を施し、固く締まる。
竈の位置・残存状態 東壁に設置するが住居跡との関係は不明。燃焼部の奥行きは40cm、幅は54cm。
遺物の出土状態 床面及び竈内に少量出土した。
所見 本遺構の時期は、10世紀前半と考えられる。



第88図 1号住居跡・出土遺物実測図

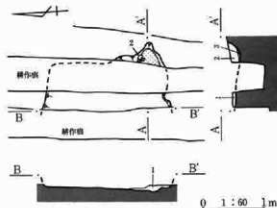
2号住居跡 (第56・89図 図版38-2)

位置 2区第2面H-5グリッド 重複 なし
規模・形状 耕作による削平を受けており、残存する遺構は部分的である。規模、形状とも不明であるが確認された長さは東西0.84m、南北2.04m、深さ5～18cmである。

主軸方位 N-(93)°-E

覆土 焼土粒、木炭粒を含む黒褐色土
壁高 南壁で5cm程の立ち上がりが確認できたが、北壁はほとんど削平されていた。
周溝 土層断面によれば、南壁付近に一部凹みが見られるが、周溝とは考えにくい。

柱穴・貯蔵穴 不明



- 1 黒褐色土 木炭粒・焼土粒を含む。
- 2 褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 3 赤褐色土 焼土層。(大床面)

第89図 2号住居跡実測図

床面 比較的平坦で固く締まっているが、貼床は施されていない。

竈の位置・残存状態 東壁の南東隅に設置する。燃焼部壁外型で、燃焼部のみ削平から免れたと考えられ、残存する燃焼部の規模は奥行き65cm、幅60cm。

遺物の出土状態 竈内より須恵器等を出土した。

所見 本住居跡の時期は、10世紀代と考えられる。

4号住居跡 (第56・91・92図 図版38-3)

位置 2区第2面G・H-3グリッド 重複 なし
規模・形状 2区の北寄りを流れる用水路際の南で、表土より約45cm程下より検出された。シルト質の暗褐色土(基本土層Ⅱ)から掘り込んでいる。住居の北側は、用水路により大半を削平されている。また、住居の南側は調査時の確認が不十分なこともあり、大半を掘り下げてしまった。このため、規模は確定できない。形状は、方形を基調とした住居の可能性が高い。

主軸方位 N-(97)°-E

覆土 FA(?)を含むシルト質の暗褐色土

壁高 壁は西側のみの検出であり、22cm程で緩やかに立ち上がる。

周溝 なし 柱穴 不明

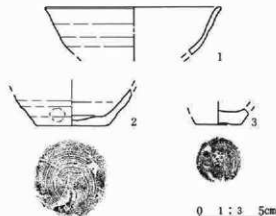
貯蔵穴 竈右袖脇に設けられている。検出された規模は70×65cm、深さは20cmで底面は皿状をしているが凹凸が見られる。東壁際の断面の立ち上がりは急傾斜している。

床面 比較的平坦な床で、粘性を帯びた暗褐色土で貼床を施している。

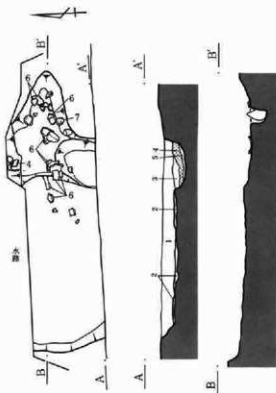
竈の位置・残存状態 東壁に設置した燃焼部屋外型である。焚口部の幅は40cmで袖石が据えられていた。奥行きは60cmで、竈のほぼ中央に支脚となる石が置かれていた。掘り方は、使用面から7~10cmの深さで掘り込まれており、竈の幅とほぼ同じであるが、奥行きは東側へ約20cm程突出していた。尚、支脚は使用面から28cm程掘り込んで設置していた。

遺物の出土状態 竈内に集中して出土している。

所見 本遺構の時期は、10世紀前半と考えられる。



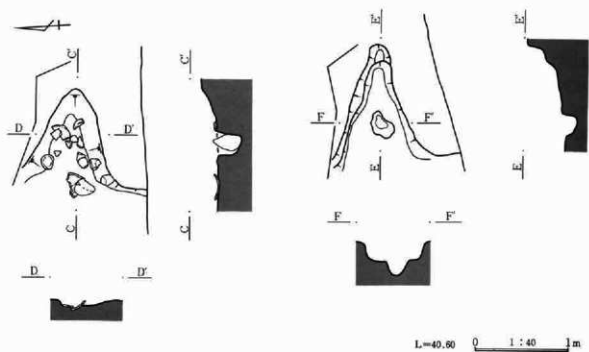
第90図 2号住居跡出土遺物実測図



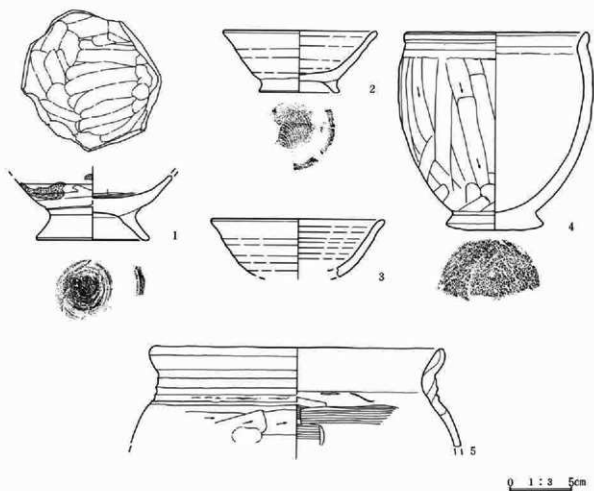
- 1 暗褐色土 3層に近似するが、土色はやや明るい。
- 2 暗褐色土 粘性高く、部分的に塊状をなす。(貼床)
- 3 暗褐色土 シルト質、FA(?)を含んだ二次堆積。
- 4 黒褐色土 焼土粒・木炭粒を多く含む。
- 5 黒褐色土 木炭粒を多量に含むが、焼土粒は少ない。

L=40.80 0 1:60 1m

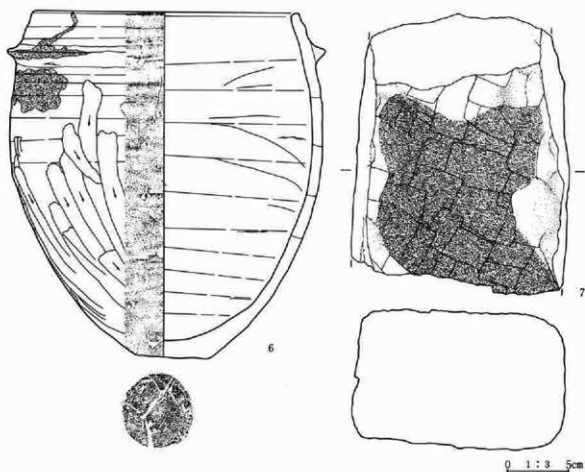
第91図 4号住居跡実測図



第92图 4号住居跡覆実測図



第93图 4号住居跡出土遺物実測図(1)



第94図 4号住居跡出土遺物実測図(2)

5号住居跡(第56・95図 図版39-1)

位置 2区第2面J-4グリッド 重複 なし
規模・形状 調査区域外との境に位置して、現表土下より46cmの所で検出された遺構である。住居の大半をトレンチャーによる耕作で壊されているが、検出された長さは東西(1.20)m、南北(1.06)mであり規模は不明である。東壁に竈を持つ、方形を基調とした形態であると推定できる。

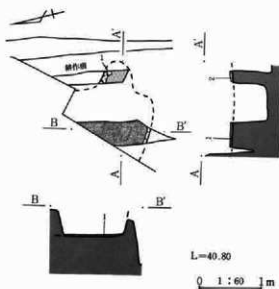
主軸方位 不明

覆土 不明

壁高 南西側の壁で24cmあり、立ち上がりは急傾斜している。

周溝 なし 柱穴・貯蔵穴 不明

床面 比較的平坦な床で、粘性が高く木炭粒を多量に含んだ黒褐色土で貼床が施されている。



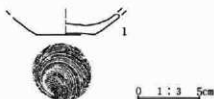
- 1 黒褐色土 粘性高く、木炭粒を多量に含む。(貼床)
- 2 黒褐色土 粘性高く、木炭粒と灰を多量に含む。

第95図 5号住居跡実測図

竈の位置・残存状態 竈の南側の立ち上がりは不明だが、北側の立ち上がりに焼けた部分が検出できたことから燃焼部を壁外に造り出すと思われる。

遺物の出土状態 竈内より須恵器坏を出土。

所見 本住居跡の時期は、10世紀代と考えられる。



第96図 5号住居跡出土遺物実測図

6号住居跡 (第56・97図 図版39-2)

位置 1区第2面F-8グリッド

重複 第5面の7号住居跡の覆土を切っている。

規模・形状 調査地点の幅が約1.1~2m前後と狭いため不明な点が多い。検出された長さは東西1.05m、南北2.54mであり、規模・形状とも不明である。

主軸方位 不明

覆土 流水による砂質土を多く含む黒褐色土

壁高 北壁の一部は覆土にA s-Bを含む攪乱のため確認はできないが、僅かに残存した部分より北壁は13cm、南壁は14cmであり緩やかに立ち上がる。

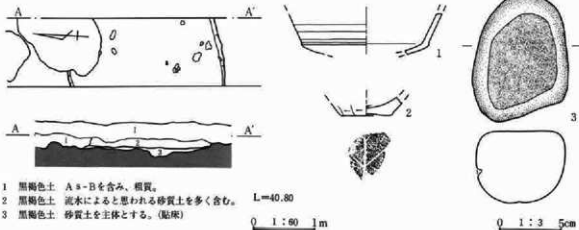
周溝 なし **柱穴** 不明 **貯蔵穴** 不明

床面 やや凹凸が見られるが硬くなく、床面下は最も深い所で15cm程掘り下げて、砂質土を主体とする黒褐色土で貼床をしている。

竈の位置・残存状態 不明

遺物の出土状態 土師器坏と甕が少量出土したが、散在していた。また、この住居跡の下位に位置する7号住居跡の出土土器と接合関係にある遺物も検出された。

所見 本住居跡の時期を確定できる遺物はない。



- 1 黒褐色土 A s-Bを含む、粗質。
- 2 黒褐色土 流水によると思われる砂質土を多く含む。
- 3 黒褐色土 砂質土を主体とする。(貼床)

第97図 6号住居跡・出土遺物実測図

8号住居跡 (第56・98図 図版39-3)

位置 2区第2面I-3グリッド **重複** なし

規模・形状 2区の北寄りを通る用水路により竈の一部を削られている。調査区内では竈のみを検出できただけで規模・形状とも不明であるが、竈を東壁に設置する形態の住居である。 **主軸方位** 不明

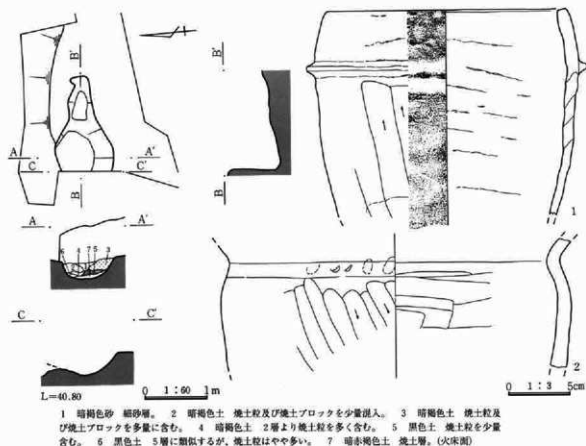
覆土 不明

壁高・周溝・柱穴・貯蔵穴・床面 不明

竈の位置・残存状態 燃焼部の全形は確認できないが、奥行きは約40cm、幅約40cmを越えるものと推測される。煙道部は燃焼部の奥壁から幅約15cmで、約30cm延びる。

遺物の出土状態 覆土中より須恵器羽釜及び土釜を出土。

所見 本住居跡の時期は、出土遺物より11世紀代と推測される。



第98図 8号住居跡・出土遺物実測図

7. その他の遺構 (SX)

SX 7 (第55・99図 図版45-8)

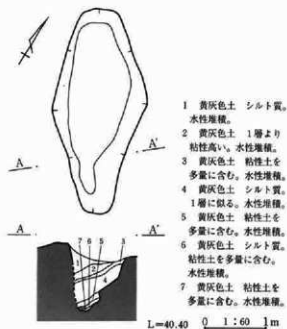
位置 2区第3面J-7・8、K-7グリッド
重複 第4面の59号溝と畑7に重複し、切っている。
規模・形状 長さは東西3.20m、南北1.50mで深さは1.50mを測る。底面には凹凸が見られ、平面は丸みのある菱形をしている。

覆土 黄灰色のシルト質土と粘性土の互層

出土遺物 なし

所見 遺構の確認が難しいため発掘はできなかった。このため、遺構の性格は不明な点が多いが、風倒木痕の可能性も考えられる。

円筒埴輪片が遺構確認面より上で出土しているが(図版45-8)、上位から出土しているためこの遺構の時期を確定する遺物ではなく、本遺構の時期は不明である。



第99図 SX 7 実測図

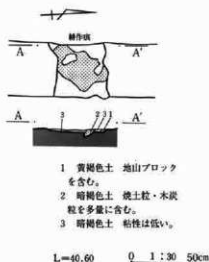
SX1 (第56・100図 図版45-3・4)

位置 2区第2面G-4グリッド 重複 なし
規模・形状 耕作による攪乱を受けているため、残存する遺構は部分的であり上面もかなり削平されている。不明な点が多いが、50cm四方の範囲から検出されており、やや方形に近い形をしている。

覆土 粘性の弱い暗褐色土及び木炭粒と焼土粒を多量に含む暗褐色土

出土遺物 なし

所見 検出範囲のほぼ中央より、木炭粒と焼土粒を多量に含む暗褐色土層が確認されている。不明遺構として扱っているが、削平された住居跡の可能性も考えられる。



第100図 SX1実測図

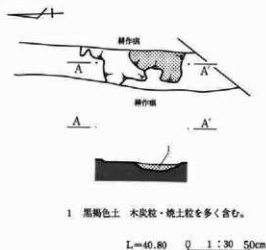
SX4 (第56・101図 図版45-5・6)

位置 2区第2面I-7グリッド 重複 なし
規模・形状 耕作による攪乱を受けているため、残存する遺構は部分的であり上面もかなり削平されている。不明な点が多いが、規模は25×85cmの範囲であり、形状は確定できない。

覆土 木炭粒、焼土粒を多く含む黒褐色土

出土遺物 なし

所見 シルト質で暗褐色土の地山を掘り込んでいるが、床状の固い箇所が部分的に見られ、木炭粒と焼土粒を多量に含む黒褐色土層が検出されている。不明遺構として扱っているが、削平された住居跡の可能性も考えられる。



第101図 SX4実測図

SX5 (第56・102図 図版45-7)

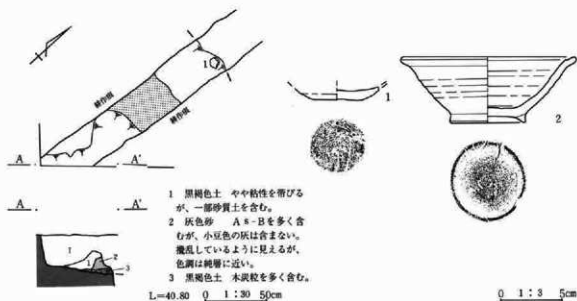
位置 2区第2面J-8グリッド 重複 なし
規模・形状 耕作による攪乱を受けているため、残存する遺構は部分的であり上面もかなり削平されている。調査は現代の耕作跡に挟まれた幅30cm前後で、東側で1.50m、西側で1.30mのほぼ台形をした範囲から検出された。遺構の底面は、南側に低く傾いている。

覆土 遺構の下位をAs-Bを多量に含む灰色砂により覆われている。一部を耕作によると思われる黒

褐色土により攪乱される。

出土遺物 底面の直上より須恵器杯、覆土中より須恵器塚が出土した。

所見 検出範囲のほぼ中央から木炭粒と焼土粒を多量に含む部分が見られ、南側で幾分凹地状になる箇所が検出された。また、床面と思われる部分が凹地状近辺の北西隅と遺物出土地点で確認されており(第102図)、住居跡の可能性が高い。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀前半と考えられる。



第102図 SX 5・出土遺物実測図

SX 6 (第56・103図)

位置 2区第2面H-5グリッド

重複 なし

形状・規模 耕作による攪乱を受けているため、残存する遺構は部分的であり、上面もかなり削平されている。調査は現代の耕作跡に挟まれた、長さ1.90m前後、幅0.45m前後のほぼ方形をした範囲であり、形状は不整形で、底面に凹凸が見られる。

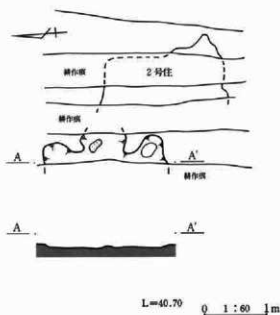
覆土 不明

出土遺物 なし

所見 遺構のほぼ中央より焼土がまとまって検出されており、南側では遺構確認面より4cmほど下がって凹地状をなす部分も見られた。

現代の耕作跡1条を挟んで、本遺構の東側約40cmの所には2号住居跡が検出されている。遺構の底面の標高は40.50mであり、本遺構の底面の標高とほぼ同じであった。そのため、同一の遺構の可能性も考えられたが、別々の遺構として扱った。2号住居跡も上面をかなり削平されているため、重複関係は不明であった。また、本遺構の西側に位置する耕作跡を挟んだ部分への遺構の広がり確認できなかった。

遺構の形状から、住居跡の可能性が高いと考えられるが、不明な点が多い。



第103図 SX 6実測図

第5節 中・近世の遺構と遺物

1. 溝

34号溝 (第57・104図 図版40-2)

位置 1区第1面F・G-16・17グリッド

重複 1号道路遺構を切る。

走行 北西-南東方向

規模 長さ2.75~3.18m、幅2.83~3.55m、深さ28~33cm

形状 底面に凹凸が見られ、断面は緩やかに立ち上がる。

覆土 砂質の黒褐色土

出土遺物 覆土中より土師器片

所見 調査地点の幅が2.30~3.00mと狭いため、規模及び機能についての詳細は不明である。1号道路を一部掘り込み、1号道路と並行した溝として検出された。

流水の痕跡は認められなかったが、覆土の様子から砂質の黒褐色土で急激に埋没していることが窺える。底面の両端の高低差は4cm程であり、南東に低く傾いている。重複する1号道路の構築土中より江戸時代の前半頃の煙管の吸い口が出土している。このことから、本溝の時期は、江戸時代の前半以降と考えられる。

2. 道路遺構

1号道路 (第57・104図 図版40-2)

位置 1区第1面F・G-17グリッド

重複 34号溝に切られる。

走行 ほぼ北西-南東方向

規模 長さ3.15~3.18m、幅1.52~2.22m、構築面の高さは最大で約28cmを測る。

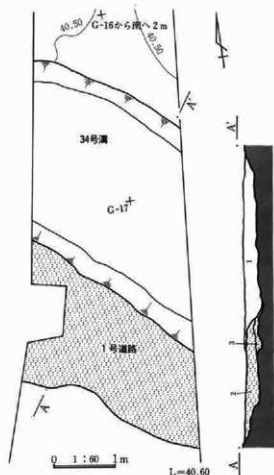
形状 凹地状の地形に、砂質の黒褐色土を数層にわたって盛土しており、上面はほぼ水平である。

覆土 不明

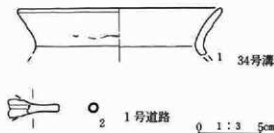
出土遺物 構築土中より煙管の吸い口

所見 調査区の幅が2.30~3.00mと狭いため、詳細は不明な点が多い。現耕作土より約30cm程掘り下げ

た所より検出した。遺構の北側の部分を34号溝に切られている。構築は2回に分けられ、黒味が強く砂質で締まる黒褐色土で下層の道路を構築した後、砂質で締まった黒褐色土で道路幅を広げて上層の道路としていることがわかる。構築土内より煙管の吸い口が出土しており、吸い口の形状から本遺構の時期は、江戸時代の前半以降と推測される。



- 1 黒褐色土 砂質。
- 2 黒褐色土 砂質。上面近くは水平気味に堆積、締まる。
- 3 黒褐色土 砂質。黒味が強く、締まる。



第104図 34号溝・1号道路遺構・出土遺物実測図

第6節 遺構外の出土遺物

遺構外出土遺物としては、旧石器時代の可能性のある掻器（第105図1）、古墳時代後期の円筒埴輪（第105図2～5）、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・石製紡錘車・土錘（第106図6～20・第107図21～23）、中・近世の陶・磁器、鉄器（第107図24～39）等である。

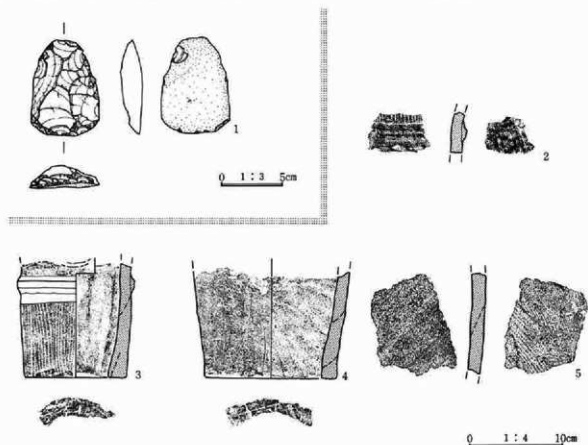
掻器は旧石器時代の可能性があるが、表土中からの採集で黒色頁岩製であるが、原位置の層位は確認できない。

円筒埴輪は、いずれも縦ハケのみで構成され二次調整の横ハケを持たない。また、突帯も断面が低いM字形のもので、これらの形状から6世紀中葉以降の所産と考えられる。この遺跡の周辺には小角田古墳群が存在しており、古墳群の中心は6世紀代にあることから、この古墳群から持ち込まれたものか、或いはこの遺跡の周囲にも古墳が存在していた可能

性もある。なお、第105図4はS X 7の上位から出土している。

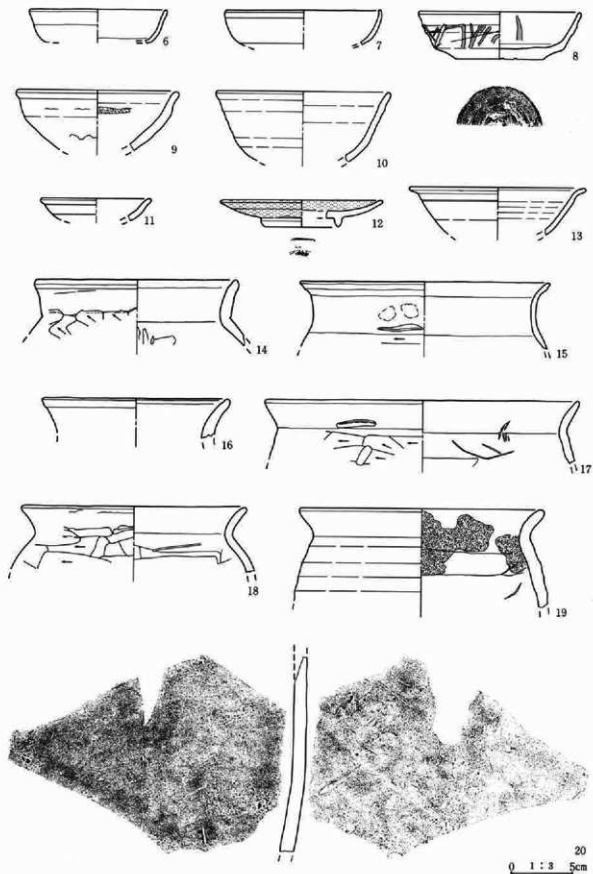
平安時代の土器は、土師器の坏・甕と須恵器の坏・甕・埴及び灰釉陶器である。いずれも9～10世紀代のもので、この遺跡で確認した堅穴住居跡の時期と同一時期の所産である。第106図8は底部は切り離した後、周辺部のみ回転削り調整を施している。また、第106図12の灰釉陶器皿は、低い高台と漬掛けによる施釉を施し、美濃における福年の虎溪山1号窯式に比定することができる。

中・近世の磁器は、第107図24・25が中国龍泉窯系の青磁で、外面には納蓮弁文を施しており、13～15世紀代の所産であると考えられる。また、第107図26・30は肥前の陶・磁器で、外面には二重網目の染付を施しており17～18世紀代の所産と考えられる。また、第107図27は瀬戸・美濃のもので、外面下位には銘軸、その他には灰釉を施している。18～19世紀代の所産と考えられる。



第105図 遺構外出土遺物実測図(1)

第4章 下田中川久保遺跡



第106図 遺構外出土遺物実測図(2)



21



22



23

0 1 : 3 5cm



24



25



26



27



28



29



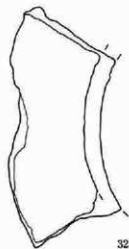
29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



0 1 : 3 5cm

第107回 遺構外出土遺物実測図(3)

第5章 ま と め

1. 集落と島の立地について

下田中道遺跡では、南拡張区から古墳時代の住居跡、古墳及び土坑、本線部分からは平安時代の畝跡群、住居跡、溝群及び中・近世の道路遺構、溝群及び集石遺構、北拡張区からは平安時代の畝跡群、溝が検出された。また、本線部分の西側より旧早川の古墳時代及び中世の流路跡をそれぞれ確認した。

調査の結果、南拡張区のある区域は台地状をなす微高地であり、本線部分と北拡張区は低地部分からなっていることが判明した。本遺跡では、旧石器時代から弥生時代までの遺構はなんら認められず、検出できた最も古い遺構は古墳時代であり、その後土地の利用が時代を経るにつれて変遷している。古墳時代前期の4世紀後半には、早川の河道が微高地まで及んでいないため、この部分に住居跡や土坑が立地し、同後期の6世紀後半には古墳が構築されている。奈良・平安時代になると、低地部である本線部分と北拡張区では島を耕作し、本線部分には住居跡が展開している。中・近世になると、微高地上及び低地部に道路や性格の不明な溝が構築されるが、集落跡の痕跡を示す遺構は検出できなかった。

下田中川久保遺跡でも旧石器時代から弥生時代の遺構は検出できず、最も古い遺構は古墳時代後期の6世紀後半に比定できる堅穴住居跡である。この時期の住居跡は北側に展開する微高地に立地し、南側の低地部には存在しない。奈良・平安時代には低地部に島が作られ、その他に祭祀に関連する遺構や性格の不明な溝が立地している。これらの遺構は早川の洪水堆積層に覆われ、この洪水堆積層は低地部に堆積して、微高地との比高差を少なくして平坦化している。この洪水堆積層の上位には、10～11世紀代の堅穴住居跡が遺跡のほぼ全域に分布している。中・近世には、道路や性格の不明な溝が構築されるが、集落跡の痕跡を示す遺構は検出できなかった。

したがって、両遺跡とも古墳時代は集落が微高地

上のみに立地していることがわかる。一方、低地部には奈良・平安時代から島としての土地利用がみられるが、これらが早川の洪水堆積層に覆われた後は、集落が展開している。この集落と島の立地については両遺跡の調査範囲が狭いため、隣接する三ツ木皿沼遺跡⁽¹⁾も含めて今後広く検討する必要がある。

2. 平安時代の洪水について

下田中道遺跡と下田中川久保遺跡では、早川の氾濫による洪水堆積層を伴っていることが共通した特徴となっている。言い換えば、両遺跡とも早川の流路及び洪水と深く関わった地域として捉えることができる。

下田中道遺跡では、基本土層で下部洪水堆積層と上部洪水堆積層の2層の洪水堆積層を確認しており、畝跡群や堅穴住居跡からも洪水堆積層を確認している。

下部洪水堆積層の直下の面からは、畝跡群及び溝が検出されている。これらの遺構は、共存する遺物が少ないために年代を決定することができない。一方、明確な遺構は伴わないが、北拡張区では下部洪水堆積層の直下から土器・須恵器が出土し(第51図4～8)、これらは8世紀末～9世紀初頭に位置付けることができる⁽²⁾。このことから下部洪水堆積層の年代は、8世紀末～9世紀初頭以降の比較的近似した時期と推定することができる。

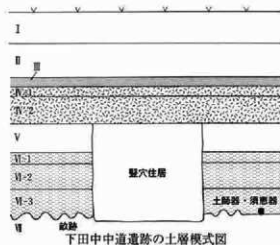
一方、2・3号住居跡の覆土には洪水堆積層が確認され、これらの住居跡はいずれも10世紀中葉前後に比定することができる(第24・26・27図)。先の下部洪水堆積層の年代が8世紀末～9世紀初頭に近い時期であるとすれば、10世紀中葉の2・3号住居跡に下部洪水堆積層が堆積することはあり得ない。

したがって、2・3号住居跡の覆土中にみられる洪水堆積層は、上部洪水堆積層と認定することができ、その年代は2・3号住居跡に伴出する土器から10世紀中葉以降に比定することができる。

また、検出した4軒の平安時代の堅穴住居跡は、9世紀後半～10世紀中葉に位置付けられるため、こ

れらはいずれも下部洪水堆積層より後に構築されたと考えられる。さらに、4号住居跡の覆土の洪水堆積層は9世紀後半以降の近い時期に洪水があったことを示している(第28・29図)。これは年代的に下部・上部洪水堆積層のいずれにも該当しないことから、この時期に別の洪水があったことを示している。

なお、下部洪水堆積層の年代が8世紀末～9世紀初頭に近い時期と推定できることから、これは『類聚國史』弘仁9(818)年の記事にみられる、赤城山南麓を中心にして発生した地震に伴う早川の洪水による堆積物の可能性が高い。



下田中川久保遺跡では、基本土層で4層に分層できる洪水堆積層を確認し、この洪水堆積層の直下から畚の痕跡及び溝等が検出された。また、この洪水堆積層の上位から掘り込んだ5軒の竪穴住居跡を検出している。

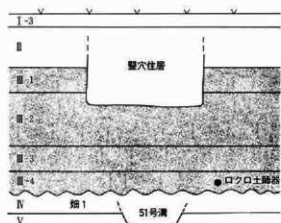
この内、洪水堆積層(Ⅲ-4)の直下に位置する畑1に伴出したロクロ土師器は、9世紀代に比定できる(第86図)。また、洪水堆積層(Ⅲ-4)の下位に位置する51号溝に伴出した土師器・須恵器は、9世紀前半に比定できる(第61図)。つまり、Ⅲ-4層は9世紀前半以降に堆積したことになる。

一方、洪水堆積層(Ⅲ-1)の上位から掘り込んだ住居跡の内、最も古いと考えられる1・4・5住居は、10世紀前半に比定することが可能である(第88・93・94・96図)。つまり、Ⅲ-1層は10世紀前半以前に堆積したことになる。

したがって、下田中川久保遺跡の洪水堆積層(Ⅲ-4)は9世紀前半以降で、洪水堆積層(Ⅲ-1)は10世紀前半以前に比定することができる。

さらに、下田中川久保遺跡の洪水堆積層(Ⅲ-4)は9世紀前半以降であることから、下田中中道遺跡の下部洪水堆積層に対応する可能性がある。しかし、下田中中道遺跡にみられた上部洪水堆積層と対応する洪水堆積層は、下田中川久保遺跡では確認することができない。

また、この遺跡では例えば畑5の覆土のように、基本土層としては認定できない洪水堆積層があり、この年代は畑5と同一面より出土した須恵器から8世紀後半と推定することができる(第75図)。したがって、Ⅲ-4層より以前の8世紀代にも洪水が起こった可能性が考えられる。



下田中川久保遺跡の土層模式図

3. 平安時代の畚について

(1) 下田中中道遺跡

下部洪水堆積層の直下に位置する畚跡群より、比較的高い密度でイネのプラント・オパールが検出されている(自然科学分析参照)。このことから、下部洪水堆積層下の畚跡群では稲作が行われていた可能性が高いと言える。また、IV層、V層及び畚跡の下位の層からもイネのプラント・オパールが検出されている。しかし、畚跡の下位の層から検出されたイネのプラント・オパールについては、他所からの

混入の可能性もある。

したがって、8世紀末～9世紀初頭に近い時期の高では、イネを栽培していた可能性があるかと判断することができる。

(2) 下田中川久保遺跡

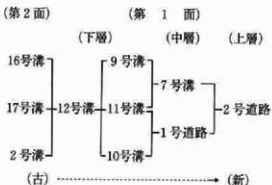
洪水堆積層下の畝跡から、密度は低いもののイネの珪酸体が検出されている。遺構の直上を洪水堆積層に覆われているため混入した可能性は少なく、稲作をしていた可能性が高い。

したがって、この遺跡でも9世紀前半の高ではイネを栽培していた可能性が高いものと判断することができる。

4. 下田中中道遺跡の溝群と道路遺構について

本線部分東寄りから、多くの溝と2条の道路遺構を検出した。これらの溝と道路は、ほぼ南北方向の同じ走行をもっており、それぞれが重複する形で検出されている。この内、南北方向に走行をもち、なおかつ新旧関係の判明している溝と道路を層位順に列記すると、以下のようになる。

すなわち、調査の第2面（平安時代）では、自然によるものと思われる凹地（16・17号溝）と2号溝がある。次に、第1面（中・近世）では下層より12・9・11・10号溝を検出している。また、第1面の中層では7号溝と1号道路、さらに第1面上層では2号道路を検出した。これらを模式的に表すと、以下のようになる。



これらの溝と道路は、それぞれ近似した平面位置に造られており、特に16号溝→9号溝→7号溝・1

号道路→2号道路は、ほぼ同一の位置関係にある。

16号溝は、下部洪水堆積層の下位に位置することから、8世紀末～9世紀初頭以前であり、自然の凹地と考えられる。次に、9・7号溝は伴出する陶器から中世に、1・2号道路は中・近世にそれぞれ位置付けられる。特に、2号道路は1号道路及びこれに付帯する溝を直接埋めて、2号道路を踏襲する形で造成している。

したがって、これらの溝や道路は平安時代の自然の凹地を基に、中・近世に至るまで同一地点に継続して造られていたことになる。これは、平安時代の凹地を利用して何らかの目的の溝が造られ、これがやがて廃棄される過程で道路として利用されたことを示している。また、これらの溝と道路による区画は、何らかの地割り軸線としての機能を持たせていた可能性も考えらる。

5. 転用硯について

整理作業終了後の遺物収納時に、下田中中道遺跡の9・10号溝の覆土より出土の須恵器壺を転用した硯小片を確認したが、図版作成が報告書刊行に間に合わなかったために、本文に記載することができなかった。

この硯は、還元炎焼成された須恵器壺破片で、外面には寛撫で後、撫でを施している。内面については、擦られているために整形技法は不明である。

側部を擦って平坦にして形を整えており、形状は小片のため不明であるが、長方形を呈すると思われる。硯面は、非常に平滑である。

この硯は平安時代の可能性があるが、9・10号溝が伴出する陶器から中・近世の所産であると考えられるので、中・近世の溝への混入である。

注

- (1) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『年報』 13 1994
- (2) 奈良・平安時代の土師器と須恵器の編年は、坂口・三浦氏の編年にしたがった。坂口・三浦京子 『奈良・平安時代の土師の編年』 『群馬県史研究』 第24号 群馬県史編さん委員会 1986
- (3) 群馬県新里村教育委員会 『赤城山麓の歴史地景』 -弘仁九年に発生した地震とその災害- 1991

遺 物 觀 察 表

下田中・中道遺跡1号住居跡出土土物

探訪番号 図版番号	種別 部位	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
1001 図版25	土師器 台付甕	床直 破片	口(16.0) 底一 高 5.5	黒色鉱物粒微 黄色粒少 白色粒少	酸化焰	灰黄緑	口縁部S字状を呈す。外内口縁部横溝で、朝部 刷毛目。内面、口縁部横溝で、朝部横溝で。	外面 カーボン付着

下田中・中道遺跡1号墳出土土物

探訪番号 図版番号	名 称 部位	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	技 法
1201 図版25	円筒埴輪	覆土	口 27.4 底 14.2 高 3.3	白色粒多 赤色土粒少 砂粒少 小礫微	やや良 好	鈍い 赤褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→口縁部横ナデ→透孔穿 孔(円形)。口縁部外面ヘケ掻き 内 縦指ナデ後基底部一部縦ハケ、口縁部縦・斜めハケ。 口縁部横ナデ。底面基部反時計回り A 1形
1202 図版25	円筒埴輪	覆土	口 23.2 底一 高(20.0)	白色粒多 赤色 土粒少 砂粒少 チャート微	良好	明赤 褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→口縁部横ナデ→透孔穿 孔(円形) B 1形 内 縦指ナデ後口縁部斜めハケ→口縁部横ナデ
1203 図版25	円筒埴輪	覆土	孔(6.0) 底 12.6 高(21.2)	白色粒多	普通	鈍い 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 斜めハケ A 3形
1204 図版25	朝顔 胴部	覆土 破片	胴(14.3) 底一 高(20.2)	白色粒多 赤色 土粒・チャート ・小礫少	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ A 3形
1205 図版25	円筒埴輪	覆土 破片	口一 底 14.2 高(18.6)	白色粒多 赤色土粒少 砂粒少	やや良 好	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 斜めハケ B 2形
1206 図版25	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 砂粒多	赤色土粒少	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ 胴(17.1cm) A 2形
1207 図版25	朝顔 花状部	覆土 破片	白色粒多 チャート少	赤色土粒少 黒色鉱物少	やや良 好	橙	下半部上縁部口縁一部口縁部→上半部成形一突帯貼付 外 縦ハケ内 横・斜めハケ 胴(22.2cm) A 4形
1208 図版25	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒少 細砂粒少 小礫微	赤色土粒少	やや良 好	鈍い 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ 胴(16.2cm) B 4形
1209 図版25	朝顔 花状部	覆土 破片	赤色土粒多 白色粒多		やや不 良	橙	外 縦ハケ→突帯貼付横ナデ 内 指ナデ(面ある) 胴(18.0cm) A 3形
12010 図版25	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 砂粒多 小礫微	赤色土粒少	普通	鈍い 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔 内 縦指ナデ 胴(16.0cm) A 2形
13011 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒多 小鉱物粒少	赤色土粒少	やや良 好	鈍い 橙	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ C 1形
13012 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒少 砂粒少	赤色土粒少	普通	明赤 褐	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ C 2形
13013 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒多 細砂粒少	赤色土粒多	やや良 好	明赤 褐	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 指ナデ後一部斜めハケ後 口縁部横ナデ。外面突帯横ナデ有り C 4形
13014 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒多 小礫少 砂粒少	赤色土粒少	普通	鈍い 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ、口縁部横ナデ 内 縦指ナデ後口縁部横ナデ C 1形
13015 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒少	普通	鈍い 橙	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ。外面赤帯? C 2形
13016 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒少	やや不 良	鈍い 赤褐	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ C 3形
13017 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫微	白色粒少	普通	橙	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ C 3形
13018 図版25	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫微	白色粒多	普通	明赤 褐	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ C 2形
13019 図版26	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫微	白色粒多	普通	橙	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ C 3形
13020 図版26	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒少	普通	明赤 褐	外 縦ハケ後口縁部横ナデ 内 斜めハケ後口縁部横ナデ C 5形
13021 図版26	円筒埴輪 口縁部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒多	普通	鈍い 赤褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ後口縁部斜めハケ B 1形

神田番号 図版番号	名称 部位	出土位置 遺存状態	胎	土	焼成	色調	技法
13図22 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒少 小礫少	赤色土粒少 砂粒少	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦ハケ後一部縦指ナデ
13図23 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒少 砂粒微	やや良 好	明赤 褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦ハケ後一部指ナデ A 2形
13図24 図版26	円筒埴輪 口縁一割	覆土 破片	白色粒多 赤色土粒多		やや良 好	明赤 褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 斜のハケ後突帯位置指ナデ
13図25 図版26	円筒埴輪 口縁一割	覆土 破片	白色粒少 砂粒微	赤色土粒少	やや良	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔。口縁部へつ抜き 内 縦ハケ後突帯位置指ナデ A 1形
13図26 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 砂粒多	赤色土粒少	やや良	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 指ナデ A 2形
13図27 図版26	朝顔 胴部	覆土 破片	赤色土粒多 白色粒多		やや不 良	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ。第12図-9と同一個体 A 3形
13図28 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒少 細砂粒少	赤色土粒少	やや良	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦ハケ後縦指ナデ A 3形
13図29 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒少 砂粒多	赤色土粒少	やや良	橙	外 縦ハケ後透孔穿孔 内 縦指ナデ
14図30 図版26	朝顔 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 チャート少	白色粒多	やや良 好	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 指ナデ。前部に庇隆単位 A 2形 (胴部三角)
14図31 図版26	朝顔 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 チャート少	白色粒多	普通	明赤 褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ。突帯粘土両端部一致せず 内 縦ハケ後一部縦指ナデ。上端へつ抜き? B 4形
14図32 図版26	朝顔 胴部	覆土 破片	白色粒多 赤色土粒多		やや不 良	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ A 3形 内 ハケ目? 照あれて不明。第12図-9と同一個体
14図33 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 砂粒多	赤色土粒少 小礫微	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 斜のハケ後指ナデ B 3形
14図34 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫少	白色粒少	やや良 好	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦・斜のハケ
14図35 図版26	円筒埴輪 突帯部分	覆土 破片	赤色土粒多 小礫物少	白色粒多	普通	橙	外 突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ A 2形
14図36 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 白色粒少		普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦ハケ後上端斜のハケ B 1形
14図37 図版26	朝顔 花状部	覆土 破片	赤色土粒多 黒色鉱物粒少	白色粒少	良(やや 硬質)	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ A 5形
14図38 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒多 小礫少	白色粒多	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ。第15図-51と同一個体か B 1形
14図39 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 砂粒多	赤色土粒少 小礫少	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ B 3形
14図40 図版26	円筒埴輪 口縁一割	覆土 破片	白色粒少 細砂粒多	赤色土粒少	普通	鈍い 赤褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ。口縁部斜のハケ A 4形 (山狭)
14図41 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒多	普通	明赤 褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ後突帯位置指ナデ B 2形
14図42 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 砂粒多	赤色土粒多	普通	明赤 褐	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ B 1形
14図43 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒多 小礫少	白色粒多	普通	橙	外 へうナデ? 後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ後突帯位置近く横ナデ。朝顔花状部か? B 2形
14図44 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒少 小礫少	赤色土粒少	やや良	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ A 1形
14図45 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 砂粒少	赤色土粒少	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔 内 縦指ナデ A 4形
14図46 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫少	白色粒多	良(やや 硬質)	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦ハケ
14図47 図版26	円筒埴輪 突帯部	覆土 破片	白色粒多 チャート少	赤色土粒少	普通	橙	外 突帯貼付横ナデ 内 ナデ (面あれる) A 1形
14図48 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫物少	白色粒多	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ A 4形
15図49 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒少 小礫微	赤色土粒少 砂粒少	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ A 4形
15図50 図版26	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	小礫少 白色粒少	赤色土粒少	普通	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ A 4形

押出番号 図版番号	名 部 称 位	出土位置 遺存状態	胎 土	焼 成 色 調	技 法	
15R051	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒多 小礫少	やや不 良	橙 外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ	
15R052	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 チャート少	赤色土粒少 小礫物少	普通 橙	外 縦ハケナデ後突帯貼付横ナデ+透孔穿孔 内 縦指ナデ
15R053	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫物粒少	白色粒多	普通 鈍い 橙	外 帯ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ
15R054	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 チャート少	赤色土粒少 小礫物少	普通 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 縦指ナデ
15R055	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒少 小礫物粒少	赤色土粒少	普通 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 斜めハケ
15R056	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	白色粒多 チャート少	赤色土粒少 黒色鉱物少	普通 淡橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ 内 ナデ
15R057	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 黒色鉱物粒少	白色粒多	普通 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ+透孔穿孔 内 縦指ナデ
15R058	円筒埴輪 胴部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫物少	白色粒少	普通 橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ+透孔穿孔 内 縦ハケ後縦指ナデ
15R059 図版26	円筒埴輪 口縁?	覆土 破片	白色粒少 砂粒少	赤色土粒多	やや良	橙 外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ。外面ヘラ掻き有り 内 斜めハケ
15R060 図版26	円筒埴輪 口縁?	覆土 破片	白色粒多 砂粒少	赤色土粒多	普通 明赤 橙	外 縦ハケ。外面ヘラ掻き有り 内 縦指ナデ
15R061 図版27	円筒埴輪 基底部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒多	良(やや 硬質)	橙 外 縦ハケ 内 縦指ナデ後斜めハケ。底面棒状圧痕有り。 底面基部反時計回り
15R062 図版27	円筒埴輪 基底部	覆土 破片	白色粒多 小礫微	赤色土粒微	良(やや 硬質)	橙 外 縦ハケ 内 縦指ナデ。底面棒状圧痕有り
15R063 図版27	円筒埴輪 基底部	覆土 破片	白色粒多 チャート微	赤色土粒少 小礫微	良(やや 硬質)	橙 外 縦ハケ 内 縦指ナデ
15R064	円筒埴輪 基底部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫微	白色粒多	普通 橙	外 縦ハケ 内 縦指ナデ
15R065 図版27	円筒埴輪 基底部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫少	白色粒多 小礫物粒少	良(やや 硬質)	橙 外 縦ハケ 内 縦指ナデ。底面棒状圧痕有り
15R066 図版27	円筒埴輪 基底部	覆土 破片	赤色土粒微 小礫微	白色粒多	良(やや 硬質)	橙 外 縦ハケ 内 縦指ナデ後横ハケ後一部縦指ナデ
15R067	円筒埴輪 基底部	覆土 破片	赤色土粒少 小礫物微	白色粒多 チャート微	普通 橙	外 縦ハケ下端指押え 内 縦指ナデ。下端指押え後歪み有り

下田中・中道遺跡 2号住居跡出土遺物

押出番号 図版番号	種 別	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
24R1 図版27	須恵器 環	覆土	□ 11.2 底 5.3 高 3.9	褐色粒多	中性焰 やや硬 質	明褐色 輪鑄整形(右回転?)。体部はあまり張りを持たず外反する。底部は静止未切り。無調整。	内外面 カーボン付着
24R2 図版27	ロクロ 土師器 埴	床直	□(14.2) 底 一 高(4.6)	黒色細砂多 黒色鉱物粒少	酸化焰 やや硬 質	灰白 輪鑄整形(右回転?)。体部は張りを有し、口縁部は外反する。	内面 カーボン付着
24R3 図版27	土師器 埴	床直・覆土	□(18.0) 底 一 高 6.7	細砂粒少 小礫微	酸化焰 硬質	にぶい 橙 体部はやや張りを有し、口縁部は強く外反する。体部彫削り後、口縁部横撫で。内面は撫でを施す。高台の径が小さく、著しく幅である。歪の可能性もあろう。	口縁部 カーボン付着
24R4 図版27	土師器 小型壺	床直	□ 13.4 底 9.1 高 12.2	細砂粒少 小礫少 赤色粒多	酸化焰 橙	橙 縦作り。胴部中にやや張りを有し、口縁部は短く外反する。口縁部横撫で。胴部下半~底部に斜位の削りを施す。	内外面 カーボン付着
24R5 図版27	須恵器 羽釜	床直・覆土	□(21.0) 底 一 高(16.6)	2~4mm砂粒 褐色粒多 小礫微	酸化焰 硬質	にぶい 橙 縦作り。胴部上位に張りを有し、口縁部は僅かに内湾する。胴部中位から下半に縦位の彫削りを施す。	
24R6 図版27	土師器 壺	甕内	□(20.7) 底 6.0 高(31.1)	細砂 赤色粘土粒	酸化焰 やや硬 質	にぶい 橙 胴部上位に張りを有し、口縁部は外反する。口縁部横撫で、胴部縦位の彫削り後胴部に撫でを施す。内面は刷毛目状の撫で。	

遺物番号 図版番号	種 類	出土位置 保存状態	度 目 (cm)	石 質	特 徴 ・ そ の 他
24図 7 図版27	不明石製品	覆土 1/2	長 (14.2) 幅 (14.8) 厚 8.2 重 1202g	二ツ岳軽石	巾広の平ノミにより平坦に加工。加工前に全体的に被熱による色変。
24図 8 図版27	凹石	覆土 完形	長 22.6 幅 18.3 厚 5.2 重 1764g	二ツ岳軽石	上面に径6cm深さ2cmの剣先による凹あり。下面は全面研磨により平坦。部分的に火を受け変色。

下田中・中道遺跡3号住居跡出土遺物

遺物番号 図版番号	種 類	出土位置 保存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
26図 1 図版27	土師器 杯	床直 1/4	口(12.0) 底(5.6) 高(4.3)	細砂 角閃石	酸化焰 やや軟 質	にぶい 黄橙	砂底。径1-2mmの粗砂付着。内面の撫では 釜で器面は不整。外面も圧痕が多く、器形は歪 んでいる。	
26図 2 図版27	須恵器 杯	床直 1/2	口(11.3) 底(5.0) 高 3.5	細砂 赤色粘土粒多 黒色鉱物粒少	酸化焰 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。底部に一方の手持ち更 削りを施し、口縁下端にも残存。体部は張りを持 たず、口縁は外縁する。	表面に カーボン付着
26図 3 図版27	須恵器 杯	床直 2/3	口 10.8 底 4.6 高 4.7	褐色粒多 小礫混	還元焰 硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。底部に赤切り無調整。 体部に張りを持たず、口縁部は僅かに外反する。	内外面 黒底
26図 4 図版27	須恵器 杯	覆土 破片	口(13.0) 底 - 高(4.0)	細砂粒多 黒色鉱物粒多	酸化焰 やや硬 質	浅黄橙	轆轤整形。体部にやや張り有り。口縁部は強 く外反する。	
26図 5 図版27	須恵器 埴	覆土 破片	口(14.6) 底 - 高(4.0)	細砂 褐色細粒混	酸化焰 硬質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部はあまり張りを持たず、 口縁部は外反しない。外面口縁下端に高台取付 け時の強い撫での痕あり。	
26図 6 図版27	須恵器 埴	床直 破片	口(12.6) 底 - 高(3.9)	細砂 黒色鉱物粒少	還元焰 硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部はあまり張り有りせず、 口縁部は外反しない。	内外面 黒底
26図 7 図版27	土師器 壺	覆土 破片	口(16.8) 底 - 高(8.5)	細砂粒多 黒色鉱物粒多	酸化焰 やや硬 質	淡黄 灰灰	口縁はやや外反し、胴部は張りを持たず、直線的 に絞く。口縁部横撫で、胴部縦方向に不明瞭 な撫での痕を施す。	内面付 着物
26図 8 図版28	土師器 壺	貯蔵穴 破片	口(19.0) 底 - 高(9.4)	細砂粒多 白色鉱物粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁はやや内湾気味に立ち上がり、胴部に張り を持つ。口縁上端部面取り。胴部は不明瞭な撫 でを施す。	
26図 9 図版28	土師器 壺	覆土 2/3	口(20.8) 底(5.7) 高 25.8	細砂 黒色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焰 硬質	浅黄橙	胴部中に張りを持ち、口縁は「C」字状に外 反する。口縁部横撫で。胴部外面は履位の磨削 り、内面器形の歪みが散見。底部に刷毛目状 の撫でを施す。	外面 カーボン付着
26図10 図版28	須恵器 土釜	覆土 破片	口(21.2) 底 - 高(12.3)	細砂粒多 チャート混 小礫混	酸化焰 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。外面にアテ具使用。口縁 部は短く「く」字状に外反し、胴部に張りを持 つ。	
26図11 図版28	土師器 壺	床直・覆土 1/4	口(20.9) 底 - 高(14.3)	細砂粒多 赤色粘土粒 小礫混	酸化焰 やや硬 質	橙	紐作り。胴部上半に張り有り。口縁部は「く」 字状に外反する。口縁上端部面取り。胴部は履 位の磨削り。	12と同一個 体か
26図12 図版28	土師器 壺	床直 破片	口 - 底(7.0) 高(4.1)	細砂 白色粒多 褐色粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	体部外面縦方向磨削り。内面は刷毛状工具によ る撫でを施す。砂底で外底全面に細砂付着。	11と同一個 体か
27図13 図版28	土師器 壺	床直 破片	口 - 底(7.0) 高(3.0)	細砂粒多 褐色粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	胴部外面は縦方向の磨削りを施す。砂底で縁部 のみ細砂付着。	外面に粘土付 着
27図14 図版28	土師器 壺	覆土 破片	口 - 底(7.6) 高(6.9)	白色粒少 小礫混	酸化焰 硬質	橙	胴部外面は縦方向の磨削り、内面と底部は撫 でを施す。	
27図15 図版28	須恵器 羽釜?	覆土 破片	口 - 底(7.0) 高(8.2)	細砂 赤色粘土粒 小礫混	酸化焰 硬質	外一層 内一 ぶい橙	胴部外面斜方向の磨削り、内面と底部外面は撫 でを施す。	
27図16 図版28	土師器 壺	床直 破片	口底 - 胴部最大 径(20.0)	細砂 黒色鉱物粒少 白色細粒混	酸化焰 やや硬 質	酸化焰 橙	紐作り。内面に上下の接合痕が認められる。	

下田中・中道遺跡4号住居跡出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
28図1 図版28	土師器 坏	竈内	口 12.7 底 7.8 高 4.5	細砂粒多 白色粒少	酸化焰	橙	歪みあり、口縁部の形状は一様でない。口縁内面に屈曲の不明瞭な痕跡がある。外底の削りはやや深い。	
28図2 図版28	土師器 坏	覆土	口(11.9) 底 一 高(4.3)	黒色粒多 白色粒少	酸化焰	にぶい 橙	内面は丁寧な撫でだが、指頭痕の弱い窪みが残っている。外面は上端のみ滑らかな撫で。外底は幅太の削り。	
28図3 図版28	土師器 坏	床直	口 11.6 底 8.2 高 3.3	黒色鉱物粒少 白色粒微	酸化焰	にぶい 橙	4にはば何巧だが、一回り小さい。口縁上端の屈曲は鋭きに欠ける。内面の撫では撫で平滑さに欠ける。外底の削りも雑である。	
28図4 図版28	土師器 坏	床直	口 12.7 底 8.3 高 3.5	細砂粒多	酸化焰 やや軟 質	にぶい 橙	口縁端部が上方に屈曲している。外面は無調整で指頭状の任侠が通っている。外底は方向不定の裏削り。	
28図5 図版28	土師器 坏	覆土	口 11.5 底 7.9 高 3.4	黒色鉱物粒 白色粒	酸化焰	にぶい 橙	底部は平底で、口縁部は内側に屈曲する。口縁部横撫で、底部削り、両面に指頭痕を残す。	
28図6 図版28	土師器 坏	床直	口 12.2 底 8.1 高 3.0	黒色鉱物粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	歪みあり。口縁端部の形状は一定でなく、図示した断面は屈曲の最も強い部分。内底は平坦だが平滑さに欠ける。	
29図7 図版28	須恵器 坏	竈内	口 12.8 底 7.0 高 4.1	細砂粒多 白色粒少	還元焰	灰白	右回転轆轤整形。回転切削無調整。轆轤縦横かく、丁寧な作りの土器である。	
29図8 図版28	須恵器 塊	覆土	口 13.8 底 7.0 高 6.3	片岩粒少量	還元焰	灰	右回転轆轤整形。高台取付け時の丁寧な撫でで切り難し痕は残らない。轆轤直は内面で強い。	
29図9 図版28	土師器 罍	竈内	口 19.6 底 3.8 高 27.7	細砂粒多	酸化焰	明赤褐	コの字状口縁の要としてはやや厚手である。胴部内外面に指頭任侠状の弱い窪みが残っている。外面の削りは息長く深い。	

下田中・中道遺跡5号住居跡出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
30図1 図版29	須恵器 坏	覆土 破片	口(12.0) 底 一 高(3.4)	細砂 褐色細粒微	還元焰 やや硬 質	明靑灰	轆轤整形(?)。体部はやや張りを持ち、口縁部は反折する。	
遺物番号 図版番号	種別	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
30図2 図版29	罐	床直 完形	長 10.2 厚 6.2	幅 8.9 重 654g	推転安山岩		全体に火を受け変色及び吸塵が見られる。	
30図3 図版29	鍛冶台石	覆土 完形	長 18.3 厚 4.5	幅 7.8 重 986g	砂岩		上面中央部に鉄滓付着。	

下田中・中道遺跡羽口出土地点出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
31図1 図版29	羽口	1-397977 3/4	長(12.4) 幅 6.9 厚 6.0	白色粒少 褐色粒多	先還元 元酸化	黒 ↓ 明赤褐	下縁が欠損。先端の轆轤物はガラス質を呈している。	孔 2.0cm
31図2 図版29	羽口	1-397977 2/3	長(11.4) 幅 6.9 厚 7.1	細砂粒多 白色粒少	先還元 元酸化	暗灰 ↓ 橙	先端の一部と下縁が欠損。先端部に轆轤物あり。表面に磨毛状工具痕と指頭痕あり。	孔 1.8cm
31図3 図版29	羽口	1-397977 破片	長(11.3) 幅(5.7) 厚(1.7)	細砂粒少 白色粒微	先還元 元酸化	灰 ↓ 橙	両端部欠損。上縁部は還元している。	
31図4 図版29	羽口	1-397977 破片	長(8.9) 幅(5.9) 厚(2.1)	褐色粒多 白色粒少 細砂粒少	酸化焰	橙 ↓ 橙	下縁が欠損している。先端にも還元部分は見られない。	

探出番号 図版番号	種別 別種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
31図 5 図版29	羽口	L-39フリット 破片	長(5.0) 幅(5.7) 厚 5.5	細砂粒少 褐色粒多 白色粒少	還元 元酸化	灰 1 橙	両端部欠損。上端部は還元している。	
31図 6 図版29	羽口	L-39フリット 破片	長(6.7) 幅(5.4) 厚(1.8)	白色粒少	還元焰	暗灰 1 灰	先端部に融着物あり。	
31図 7 図版29	羽口	L-39フリット 破片	長(9.3) 幅(6.9) 厚(2.2)	細砂粒多 白色粒少 褐色粒微	還元焰	灰 1 灰白	先端部に融着物あり。表面が固取りされている。	
遺物番号 図版番号	種別	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
32図 8 図版29	甕	L-39グランド 1/2	長 15.8 幅 (9.6) 厚 (10.4) 重 206g		花崗岩		被熱による色変と割れ。部分的に磨耗痕あり。	
32図 9 図版29	甕	L-39グランド 1/4	長 (19.3) 幅 (19.4) 厚 (17.5) 重 578g		粗粒安山岩		一部に敲打による割痕あり。被熱による色変は不明瞭。	
32図10 図版29	鍛冶台石	L-39グランド 2/3	長 22.8 幅 14.2 厚 12.5 重 467g		浴槽凝灰岩		被熱による色変あり。数カ所に敲打痕有り。カナトコに使用可。	
32図11 図版29	鍛冶台石	L-39グランド 1/2	長 35.3 幅 (22.6) 厚 (20.8) 重 250g		粗粒安山岩		各所に被熱による色変と割痕がある。	

下田中・中道遺跡9・10・11・12号溝出土遺物

探出番号 図版番号	種別 別種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
39図 1 図版29	焼締陶器 葉	10号溝 覆土 破片	厚 0.9	知多産	普通 酸化気味	褐	体部下位小片。	12~14C
39図 2 図版29	焼締陶器 葉	9・10号 溝 覆土 破片	厚 1.2	知多産	普通	明赤褐	胴部小片。外面押印文一部残る。	13~14C
39図 3 図版29	焼締陶器 葉	9・10号 溝 覆土 破片	厚 1.3	知多産	普通	褐	第44図-6と同一個体か。	
39図 4 図版29	肥前陶器 皿	9・10号 溝 覆土 破片	厚(5.5)	唐津系	普通	にぶい 褐		17C後~18C
39図 5 図版29	軟質陶器 内耳鍋	11号溝 覆土 破片	厚 0.7	白色黏物含む		橙	器壁厚く、口縁部は短く内湾する。	14C後~ 15C前
39図 6 図版29	焼締陶器 葉	11号溝 覆土 破片	厚 1.0	知多産	普通	灰赤	体部下位小片。内面斑点状に自然輪付着。	12~14C
遺物番号 図版番号	種別	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
39図 7 図版29	不明石製品	12号溝底 直 完形	長 30.0 幅 33.1 厚 20.8 重 965g			二フ岳軽石	全体に磨耗するが、一部に平ノミによる工具痕あり。	
39図 8 図版29	不明石製品	12号溝覆 土 完形	長 (18.2) 幅 21.6 厚 18.6 重 406g			二フ岳軽石	細い丸ノミにより部分的に平坦面を造る。	

下田中・中道遺跡7号溝出土遺物

探出番号 図版番号	種別 別種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
43図 1 図版30	焼締陶器 葉	7号溝 底面直上 破片	厚 1.0	知多産	普通	橙	第39図-2と同一個体か。	
43図 2 図版30	焼締陶器 葉(好)	7号溝 覆土 破片	厚 1.5	知多産	普通	暗オリ ープ	第44図-6と同一個体か。外面自然釉。	14~15C

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
43図 3 図版30	軟質陶器 鉢	7号溝 覆土 破片	底(8.2)	光沢のある紅 物を含む	不良	黒	内面使用により磨滅。特に底部下層と底部同様に 厚減著しい。	14-15C
43図 4 図版30	軟質陶器 内耳鉢	7号溝 覆土 破片	厚 0.8	白色針状物微 量含む	不良	灰黄	器壁やや薄い。	15-16C

下田中・中道遺跡1号道路遺構出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
44図 5 図版30	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	覆土 破片	口(9.3) 底 - 高(2.2)	緻密	普通	暗赤褐	踏輪。底部軸をめぐり取る。	18-19C 受皿
44図 6 図版30	焼締陶器 甕	覆土 破片	厚 1.2	知多窯	普通	にぶい 赤褐	体部下位小片。	14-15C
44図 7 図版30	焼締陶器 甕	覆土 破片	厚 1.1	知多窯か	不良	明赤褐	体部下位小片。	13-14C

下田中・中道遺跡2号道路遺構出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
46図 1 図版30	焼締陶器 甕	覆土 破片	厚 1.0	知多窯	普通	暗オリ ープ	口縁部の引き出し弱い。外面と口縁部内面自然	13C中～ 14C前
46図 2 図版30	瀬戸・美濃 陶器 惣利	覆土 破片	口 - 底(14.3) 高 -	やや緻密	普通	暗赤褐	体部下端から底部周縁軸をめぐり取る。外面特 輪。	18-19C
46図 3 図版30	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	覆土 破片	口 - 底(4.5) 高 -	緻密	やや不 良	暗赤褐	底部軸をめぐり取る。内外面踏輪。	18-19C
検出番号 図版番号	種別	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他				備考
46図 4 図版30	銅製品 不詳	覆土 完形	長 2.9	主材は銅であり、錆色は緑色を呈す。形状は、両端部ともに曲がっており、それ は本来的に見える。形起しは鋳造品か。背面側に装輪の凹み、わずかに見える。				17C～

下田中・中道遺跡遺構外出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
49図 1 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.9	繊維を多量に 含む	良好	橙	深鉢の胴部破片。施文幅のせまい環付縄文を帯 状に施文する。	縄文前期 関山Ⅰ式
49図 2 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.0	繊維を多量に 含む	良好	橙	波状口縁深鉢の口縁部破片。全面にL L R Rの 組紐縄文を施文し、口唇下にコンパス文を施す。	縄文前期 関山Ⅱ式
49図 3 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.0	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄橙	深鉢の胴部破片。R R L Lの組紐縄文を施文に、 2本単位の半軟竹管による平行沈線で幾何学的 な文様を構成する。	縄文前期 関山Ⅱ式
49図 4 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.9	繊維を多量に 含む	並	橙	深鉢の胴部破片。R L 断りの環付縄文を帯状に 施文する。	縄文前期 関山Ⅱ式
49図 5 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	底(8.0)	繊維を多量に 含む	良好	橙	深鉢の底部破片。端部が張り出した上底の底部 で、外面にはL L R Rの組紐縄文が施される。 底面は施文。	縄文前期 関山Ⅱ式
49図 6 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.7	片岩粒を多く 含む	良好	灰黄褐	第49図-7と同一個体。	縄文前期 諸磯A式

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
49図7 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.6	片岩粒を多く含む	良好	橙	深鉢の胴部破片。胴部上半に、平截竹管による平行沈線で協骨文を構成し、文様の単位による縦位置関係上、凹形の刺突文を施す。地文は縄文L。L。	縄文前期 諸磯B式
49図8 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.6	細砂を少量含む	良好	にぶい 黄橙	深鉢の胴部破片。集合沈線で幾何学的な文様を構成し、文様の要点に貼付文を施す。	縄文前期 諸磯C式
49図9 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.8	砂粒を多く含む	良好	にぶい 橙	深鉢の胴部破片。断面三角形の微隆帯で区画したなかに縄文L Rを充墳する。	縄文中期 加賀川E4式
49図10 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.4	砂粒を少量含む	不良	にぶい 黄橙	深鉢の胴部破片。2本の平行沈線で文様を描く。	縄文後期 堀之内1式
49図11 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.2	砂粒を少量含む	差	淡黄	深鉢の胴部破片。2本の平行沈線による区画内に縄文L Rを充墳する。	縄文中期 加賀川E3式
49図12 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.4	砂粒を少量含む	差	橙	深鉢の胴部破片。胴部に隆帯がめぐり、胴部にはL形無彫縄文を横位に施す。	縄文中期 加賀川E2式
49図13 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.7	砂粒を多く含む	良好	橙	深鉢の胴部破片。沈線区画内に縄文L Rを施す。無文部および内面に磨痕を施す。	縄文後期 称名寺II式
49図14 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.8	砂粒を多量に含む	良好	にぶい 橙	深鉢の胴部破片。沈線区画内に列点状刺突を充墳する。	縄文後期 称名寺II式
49図15 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.3	軽石・砂粒を多く含む	良好	灰青黄	深鉢の胴部破片。沈線区画内に列点状刺突を充墳する。	縄文後期 称名寺II式
49図16 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.5	軽石・砂粒を多量に含む	良好	にぶい 橙	深鉢の胴部破片。沈線区画内に列点状刺突を充墳する。地彫あり。	縄文後期 称名寺II式
49図17 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.6	軽石・砂粒を多く含む	良好	淡黄	深鉢の口縁部破片。口唇下肥部に指痕状圧痕を施し、口縁無文下沈線を描す。	縄文後期 堀之内1式
49図18 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.9	砂粒を多量に含む	良好	橙	深鉢の口縁部破片。屈曲する口唇部外面に沈線を1本のみぐるせる。	縄文後期 堀之内1式
49図19 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.3	砂粒を少量含む	不良	明黄橙	深鉢の胴部破片。2～3本の沈線で文様を描く。	縄文後期 堀之内1式
49図20 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 1.0	砂粒を少量含む	良好	灰白	深鉢の胴部破片。平行沈線のみで文様を描き、器面には磨痕を施す。	縄文後期 堀之内1式
49図21 図版30	縄文土器 深鉢	1号墳 破片	厚 0.4	砂粒を多く含む	良好	黒黒	深鉢の胴部破片。無文で、内外面とも磨痕を施す。	縄文後期
49図22 図版30	縄文土器 深鉢	シルト上 破片	厚 0.5	片岩粒を多量に含む	良好	黄灰	深鉢の胴部破片。第49図-23と同一器体。	縄文後期
49図23 図版30	縄文土器 深鉢	洪水層下 底部のみ	底 8.0	片岩粒を多量に含む	良好	にぶい 黄橙	深鉢の胴下部で、底面に刺代痕が付く。	縄文後期
49図24 図版30	縄文土器 深鉢	2面 破片	底 10.5	砂粒を多く含む	良好	橙	深鉢の底部。底面に刺代痕を残す。	縄文後期
遺物番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
50図1 図版31	石器 削器	2号溝	長 8.3 幅 4.1 厚 2.0 重 51g	黒色安山岩			剥片端部に粗い加工を施し刃部を作出。明確な使用痕は見られない。	
50図2 図版31	石器 削器	9・10号溝	長 8.2 幅 9.8 厚 1.9 重 135g	溶結凝灰岩			弧状の剥片端部に微細な加工を施し弧状の刃部を作出。表面には磨痕を大きく残す。	
50図3 図版31	石器 打製石斧	11号溝	長 12.6 幅 7.2 厚 2.9 重 288g	溶結安山岩			刃部には部分的に磨耗痕を残す。刃部にはこの磨耗を切る加工が加えられ、刃部再生を試みる。石器基部を欠損。	
50図4 図版31	石器 磨石・敲石	1号墳	長 13.5 幅 9.6 厚 2.4 重 444g	粗粒安山岩			表面とも磨耗が著しい。両側面に敲打痕あり。	
神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
51図1 図版31	土師器 器台	南長瀬区 表土 脚部1/2	口一 底(11.4) 高(9.3)	細砂粒	酸化焰	にぶい 黄橙	器受け部下に稜をもつ。外面黄橙で磨磨り。内面黒塗りで。	
51図2 図版31	土師器 台付壺	1号墳 脚部	口一 底(10.5) 高(7.6)	砂粒多	酸化焰	にぶい 黄橙	脚八の字に開き上平削毛目、下平塗で。内面磨磨り。裾部折り返し。	
51図3 図版31	土師器 台付壺	南長瀬区 表土 破片	口(15.0) 底一 高一	細砂粒 黒色炭粉粒	酸化焰	淡黄橙	口縁部S字状を呈す。外面口縁部磨磨り。胴部削り剥削毛目。胴部下脚毛目後後で。内面口縁部磨磨り。胴部指撫で。	

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	口径 (cm)	胎土	焼成 色調	器形・技法等の特徴	備考	
51図 4 図版31	土師器 坏	北沢地区 2面 ほぼ定形	口 12.4 底 11.4 高 2.8	細砂粒 黒色灰物粒少 白色粒微	酸化焰 やや硬質	にぶい 黄橙	底部は偏平な丸底で、口縁部はやや外傾する。 口縁部横線で、底部は澱削り、間に整形不明 瞭な部分のみられる。	内面 カーボン付着
51図 5 図版31	土師器 坏	北沢地区 2面 破片	口(13.0) 底 — 高 —	黒色灰物粒多 白色粒少 褐色粒微	酸化焰 やや硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部はやや内湾する。 口縁部横線で、底部は澱削り、間に整形不明 瞭な部分のみられる。	
51図 6 図版31	土師器 坏	北沢地区 2面 破片	口(14.0) 底 — 高 —	白色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は平底気味の丸底で、口縁部は内湾する。 口縁部横線で、底部は澱削りを施す。	
51図 7 図版31	土師器 坏	北沢地区 2面 破片	口(12.0) 底 — 高 —	細砂粒少 黒色灰物粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は僅かに内湾する。 口縁部横線で、底部は澱削り、間に整形不明 瞭な部分のみられる。	
51図 8 図版31	須恵器 蓋	北沢地区 2面 破片	口(10.0) 底 — 高 —	白色細粒多 小礫混	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。天井部に回転澱削りを施す。 柄は環状柄。	柄径(4.1cm)
51図 9 図版31	土師器 坏	第1関河 道 1/3	口 10.5 底 7.0 高 2.3	細砂粒 黒色灰物粒少 褐色粒少	酸化焰 やや硬質	淡黄橙	轆轤整形(右回転)。体部は浅く、口縁部は直 線的に外傾する。底部は回転澱削り後の澱調整。	口縁部にカー ボン付着
51図10 図版31	土師器 短頸壺	2面 破片	口(12.3) 底 — 高(6.6)	細砂粒多 褐色粒多 黒色灰物粒少	酸化焰 やや軟質	にぶい 橙	胴部に張り有し、口縁部は直立する。口縁部 横線で、胴部は横位の澱削りを施す。口縁内側 に1条の流線が彫る。	
51図11 図版31	土師器 坏	北沢地区 1面 破片	口(13.0) 底 — 高 —	黒色灰物粒少 白色粒微	酸化焰 やや硬質	にぶい 赤黒	底部平底。口縁部は内湾する。口縁部横線で、 底部澱削り。間に整形不明瞭な部分を残す。	内面 カーボン付着
検出番号 図版番号	名称 部位	出土位置 遺存状態	胎土		焼成 色調	技 法		
52図 1 図版31 図版32	冢形埴輪	本線部分 破片	白色粒少 赤色粒多 砂粒少		良好	橙色	壘体成形後乾燥→崖根形成、軒貼付→突帯・障泥板・破 風板・壘魚木貼付 壘体部外面縦ハケ。内面斜め・縦ハケ、斜め指ナデ。下屋 根外面縦ハケ。内面斜めハケ。上屋根外面縦ハケ、妻線 ハケ。内面横ハケおよび縦・斜めハケ、軒下溝横ナデ。壘 体頂面円形透孔穿孔。	
53図 2 図版32	朝顔 花状部	本線部分 破片	赤色粒少 白色粒多	砂粒多	やや良	鈍い 橙	外 下平線ハケ後乾燥→上半線ハケ後突帯貼付横ナデ 内 下平指ナデ→上半指ナデ B 2形	
53図 3 図版32	円筒埴輪 胴部	本線部分 破片	赤色粒少 白色粒少	砂粒少	良好	橙	外 縦ハケ後突帯貼付横ナデ→透孔穿孔。外面へつ編み 内 縦指ナデ後上位斜めハケ B 5形	
53図 4 図版32	円筒埴輪 口縁部	表土 破片	赤色粒少 白色粒少		普通	鈍い 橙	外 縦ハケ後下溝横ナデ 内 斜めハケ。内面へつ編み	

下田中・川久保遺跡7号住居跡出土遺物

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考	
59図1 図版45	土師器 杯	貼床内 破片	口(12.0) 底— 高(3.0)	細砂 赤色粘土粒	酸化焰	淡黄橙	口縁部はほぼ直立し、底部近くに2条の流線状の線が廻る。		
59図2 図版46	土師器 杯	覆土 破片	口— 底— 高(4.4)	細砂粒多 黒色鉱物粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 橙	口縁部は直線的に外傾し、中位に強い稜を有する。底は丸底。口縁部横溝で、底部手持ち彫り。		
59図3 図版46	土師器 杯	床直 破片	口(16.5) 底— 高(7.2)	細砂粒多 黒色鉱物粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	口縁部は直線的にやや外傾し、中位に稜を有し、底部との間に強い稜を有する。底部は丸底。口縁部横溝で、底部手持ち彫り内で内面は撫でを施す。		
59図4 図版46	土師器 鉢	床直 破片	口(20.3) 底— 高(6.0)	細砂粒多 黒色鉱物粒多	酸化焰 硬質	外にぶい 橙 内黄灰	口縁部は外傾する。口縁部横溝で、体部は彫削り。口縁内部に沈線状の凹取りを施す。	外面 カーボン付着	
60図5 図版46	土師器 甕	床直 覆土 1/3	口(12.4) 底(7.0) 高19.4	粗砂粒 赤色粘土粒	酸化焰 やや硬質	橙	口縁は強く外反し、胴部下位に張りを持つ。胴部上～中位は縦位の彫削り、下位は斜位の彫削りを施す。	黒炭あり	
遺物番号 図版番号	種類	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質					特徴・その他
60図6 図版46	不明石製品	覆土 完形	長 20.0 幅 15.2 厚 8.2 重 1334g	二ツ企輪石					1面のみ研磨による磨耗が見られる。

下田中・川久保遺跡51号溝出土遺物

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
61図1	須恵器 蓋	覆土 破片	口— 底— 高(1.2)	白色粒多 黒色鉱物粒少	還元焰 硬質	灰	横線整形(?)。扁平な宝珠柄。横溝は磨滅している。	柄径2.6cm
61図2 図版45	土師器 甕	覆土 破片	口— 底(4.6) 高(1.2)	細砂粒少 黒色鉱物粒微 白色粒微	酸化焰 やや硬質	にぶい 黄	外面、胴・底部彫削り、内面黒灰。	

下田中・川久保遺跡53号溝出土遺物

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
62図1 図版46	土師器 杯	覆土 破片	口(12.8) 底— 高(3.1)	細砂粒微 白色鉱物粒微 白色粒微	酸化焰 硬質	灰白	口縁部直線的に外傾する。口縁部横溝で、体部横位の彫削り、内面は撫で後放射状の磨耗きを施す。	

下田中・川久保遺跡59号溝出土遺物

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
65図1 図版46	須恵器 杯	覆土 4/5	口 9.7 底 5.0 高 2.2	細砂粒少 黒色鉱物粒少	還元焰 やや硬質	灰白	横線整形(右回転)。底部回転糸切り後無調整。	
65図2 図版46	須恵器 杯	覆土 2/5	口(10.2) 底(5.0) 高(2.0)	細砂粒少 黒色鉱物粒微	還元焰 やや硬質	灰白	横線整形(右回転?)。底部回転糸切り後無調整。	
65図3 図版46	須恵器 杯	覆土 破片	口(9.9) 底— 高(1.9)	細砂粒少 黒色鉱物粒微	還元焰 やや軟質	にぶい 橙	横線整形(?)。	
65図4 図版46	ロクロ 土師器 壺	覆土 破片	口— 底— 高(2.5)	細砂粒少 黒色鉱物粒少	還元焰 やや硬質	明黄灰	横線整形(右回転)。底部切り履し調整後の付高台。内面黒色処理を施す。	

遺物番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	尺 寸 (cm)	石 質	特 徴・その他
65図 5 図版46	磨石	覆土 完形	長 10.4 幅 6.1 厚 5.0 重 402g	粗粒安山岩	両端部に磨打痕あり。

下田中・川久保遺跡60-1号溝出土遺物

神岡番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	尺 寸 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	器 形・技法等の特徴	備 考
68図 1 図版46	須恵器 坏	覆土 破片	口 - 底 (6.4) 高 (2.0)	白色粒少	還元焰 硬質	轆轤整形 (右回転)。底部回転糸切り後未調整。	

下田中・川久保遺跡2区3・4面間I-5土器納置出土遺物

神岡番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	尺 寸 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	器 形・技法等の特徴	備 考
74図 1 図版46	土師器 坏	覆土 完形	口 10.6 底 9.3 高 2.3	細砂粒少 黒色鉱物粒微 白色粒微	酸化焰 硬質	底は平底。口縁部は短く内湾する。内面にゆるやかな稜を有する。口縁部横撫で。底部磨削り。	指痕良

下田中・川久保遺跡2区3面下位G-2土器納置出土遺物

神岡番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	尺 寸 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	器 形・技法等の特徴	備 考
75図 1 図版46	須恵器 坏	掘面直上 2/3	口(14.8) 底 9.2 高 3.8	細砂粒少 黒色鉱物粒微 白色粒微	還元焰 やや硬質	灰白 轆轤整形 (左回転)。腰部に強い稜でが描かれ、口縁部は外傾する。底部は切り難し後、回転磨削りを施す。	

下田中・川久保遺跡畑4出土遺物

神岡番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	尺 寸 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	器 形・技法等の特徴	備 考	
83図 1 図版46	須恵器 蓋	覆土 破片	口 - 底 - 高 (2.0)	細砂粒少	還元焰 硬質	外灰褐 内灰	轆轤整形 (右回転)。横は環状溝で天井上部外面回転磨削り後の貼付。外面自然釉付着。	口径(5.6cm)

下田中・川久保遺跡畑1出土遺物

神岡番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	尺 寸 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	器 形・技法等の特徴	備 考	
86図 1 図版46	ロクロ 土師器 破片	覆土 破片	口 - 底 (7.1) 高 -	白色鉱物粒微 黒色鉱物粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	轆轤整形 (?)。付高台。内面磨き後黒色処理を施す。	
86図 2 図版46	ロクロ 土師器 破片	覆土 破片	口 - 底 (7.0) 高 -	細砂粒多 白色粒少 褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形 (?)。内面磨き後黒色処理を施す。	

下田中・川久保遺跡1号土坑出土遺物

神岡番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	尺 寸 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	器 形・技法等の特徴	備 考	
87図 1 図版46	須恵器 土釜	覆土 破片	口(22.2) 底 - 高 (8.8)	小粒炭	酸化焰 硬質	灰褐	口縁部は短く外反し、端部に面取りを施す。口縁部横撫で後、胴部に縦位の磨削りを施す。	

下田中・川久保遺跡 1号住居跡出土遺物

探訪番号 図版番号	種別 種類	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
88図1 図版45	土師器 坏	床直 1/4	口(12.4) 底(6.8) 高3.3	黒色灰物粒少 細砂粒少	酸化焙 硬質	浅黄橙	底部は平底で、体部から口縁部は直線的に外傾する。口縁部外面は横溝で、体部下平と底部は匙削り、内面は撫でを施す。体部に指痕直あり。	
88図2 図版45	ロクロ 土師器 塊	甕内 破片	口— 底5.2 高(2.6)	細砂粒多 白色粒少 黒色灰物粒少	酸化焙 硬質	赭灰	轆轤整形(右回転)。胴部に張りを持つ。底部回転糸切り後の付高台で附付は丁草。	
88図3 図版45	土師器 甕	床直 破片	口(21.6) 底— 高(9.7)	細砂粒多 白色灰物粒多 黒色灰物粒多	酸化焙 硬質	橙	胴部に張りをもし、口縁部は外反する。胴部横位置削り後横撫で。内面横位置撫でを施す。	

下田中・川久保遺跡 2号住居跡出土遺物

探訪番号 図版番号	種別 種類	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
90図1 図版46	須恵器 坏	覆土 破片	口(13.7) 底— 高(3.7)	細砂粒多 白色粒少 黒色灰物粒微	還元焙 硬質	赭灰	轆轤整形(?)。体部は僅かに張りをもし、口縁部は外反する。	
90図2 図版46	須恵器 坏	甕内 1/2	口— 底(5.5) 高(2.8)	小礫混	還元焙 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後無調整。	
90図3	須恵器 小甕	覆土 破片	口— 底3.6 高(1.2)	白色灰物粒多 細砂粒少 褐色粒微	還元焙 硬質	にぶい 橙	轆轤整形(右回転)。底部切り離し後の無調整。	

下田中・川久保遺跡 4号住居跡出土遺物

探訪番号 図版番号	種別 種類	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
93図1 図版46	ロクロ 土師器 塊	甕内 1/4	口— 底(8.4) 高(4.8)	白色灰物粒少	酸化焙 硬質	浅黄橙	轆轤整形(?)。高台はやや長脚の付高台。内面底部の指痕が顕著。	
93図2 図版46	須恵器 塊	甕内 1/3	口12.1 底(6.0) 高4.8	白色灰物粒多	還元焙 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。胴部の張りは弱く、口縁部は僅かに外反する。底部回転糸切り後の付高台。	
93図3 図版46	須恵器 塊	甕内 破片	口(13.6) 底— 高—	細砂粒多	還元焙 硬質	灰黄	轆轤整形(?)。体部にやや張りを持ち、口縁部は外反する。	
93図4 図版46	土師器 甕	覆土 3/4	口(14.4) 底(7.6) 高15.2	細砂粒多 白色粒少 黒色灰物粒少	還元焙 硬質	にぶい 赤褐	口縁部は短く直立し、胴部上半に張りをもつ。口縁部横撫で、胴部は横位の匙削りを施す。内面は横位の撫で。底は砂砥。	内面底部斜削りによるひび割れ
93図5 図版46	土師器 甕	甕内 破片	口(23.0) 底— 高(7.6)	黒色灰物粒多 小礫混	還元焙 硬質	にぶい 橙	肥厚した口縁部は外反し、4本の沈線を通らす。胴部は張りを持ち横位の匙削りを施す。内面は刷毛状工具による撫で。	
94図6 図版47	須恵器 羽釜	甕内 ほぼ完形	口20.9 底5.6 高27.2	細砂粒多 黒色灰物粒微 褐色粒少	還元焙 硬質	浅黄橙	紐作り轆轤整形。胴部中に張りをもし、口縁部は内傾する。脚は断面三角形。胴部上半は轆轤直を残し、下半は斜位の匙削りを施す。内面無調整。	外面 カーボン付着
遺物番号 図版番号	種類	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
94図7 図版47	石製品 産物集材	甕 両端欠損	長(20.8) 幅16.8 厚10.8 重3434g	二ツ岳軽石	残存する4面は巾法の平ノミにより平坦に加工。一面のみ火を受け変色する。			

下田中・川久保遺跡 5号住居跡出土遺物

探訪番号 図版番号	種別 種類	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
96図1 図版47	須恵器 坏	甕内 破片	口— 底4.5 高(1.2)	細砂粒少 黒色灰物粒少 褐色粒微	還元焙 硬質	にぶい 橙	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後無調整。	

下田中・川久保遺跡 6号住居跡出土遺物

押出番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
97図 1 図版47	土師器 坏	覆土 破片	口 - 底 - 高 (2.3)	凝砂粒少 黒色鉱物粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 黄緑	底部との間に稜を有し、口縁部に2条の沈線状の線が走る。底部は丸底で手持ち用開り。	
97図 2 図版47	土師器 壺	覆土 破片	口 - 底 (4.0) 高 (1.0)	砂粒多 白色粒多 黒色鉱物粒少	酸化焰 硬質	外 燈 内 浅 黄緑	底部木葉痕。	
押出番号 図版番号	種 別	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
97図 3 図版47	雑石	覆土 完形	長 9.4 幅 6.9 厚 5.6 重 674g				粗粒安山岩	1部のみ使用。加工痕なし。

下田中・川久保遺跡 8号住居跡出土遺物

押出番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
98図 1 図版47	須恵器 羽釜	覆土 破片	口(19.0) 底 - 高(16.2)	砂粒多 黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	紐作り。胴部の張りは弱く、口縁部はやや内湾する。胴は先端が潰れたような状態である。胴部は縦位の美削りを施す。	
98図 2 図版47	須恵器 土釜	覆土 破片	口 - 底 - 高 (9.9)	砂粒多 黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	胴部はあまり張りを持たない。口縁部横溝で、胴部斜位の美削りを、内面寛撫で施す。口縁部に指痕あり。	

下田中・川久保遺跡 SX 5 出土遺物

押出番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
102図 1 図版47	須恵器 坏	底面直上 破片	口 - 底 4.2 高 (0.8)	砂粒多 褐色粒多 黒色鉱物粒微	酸化焰 やや軟質	にぶい 橙	輪軸整形 (右回転)。底部回転糸切り後無調整。	
102図 2 図版47	須恵器 埴	覆土 1/4	口(13.6) 底 (5.9) 高 (5.2)	白色粒少 黒色鉱物粒少 凝砂粒少	還元焰 硬質	灰白	輪軸整形 (右回転?)。底部切り離し後付高か。口縁部は短く外反し、体部にあまり張りを持たない。口縁部内面に1条の横溝が走る。	

下田中・川久保遺跡34号溝・1号道路遺構出土遺物

押出番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
104図 1 図版47	土師器 壺	34号溝 覆土 破片	口(19.0) 底 - 高 (3.5)	砂粒多 黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は外反する。口縁部横溝で。	
押出番号 図版番号	種 別	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他				
104図 2 図版47	雑瓦	1号道路 構築土内 一部欠損	長 4.1	煙管の吸口部で、外圧によって、潰れている。それは旧時の欠損。主材は鋼。接合面として黒灰色の塵付目が見える。銀鍍か。				

下田中・川久保遺跡遺構外出土遺物

押出番号 図版番号	種 別	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 徴 ・ そ の 他
105図 1 図版47	石器 播磨	表土 完形	長 7.6 幅 5.5 厚 1.8 重 67g			黒色頁岩	割片端部に微細な斜線を加え刃部を作出。
押出番号 図版番号	名 称	出土位置 遺存状態	胎 土	焼 成	色 調	技 法	
105図 2 図版47	円筒埴輪 尖密部	破片	白色粒多 砂粒微	良好	鈍い 黄	外 縦ハケ尖密部貼付横ナデ 内 縦指ナデ	
105図 3 図版47	円筒埴輪 基底部	破片	白色粒多 砂粒微	良好	灰青	外 縦ハケ尖密部貼付横ナデ→透孔 内 縦指ナデ。底面横物圧痕	

標頭番号 図版番号	名 称	出 土 位 置 遺存状態	胎 土	焼 成	色 調	技 法		
105図 4 図版47	内筒輪軸 基底部	破片	白色粒多 小埋少	良好	鈍い 黄橙	外 縦ハケ 内 斜の指ナデ。底面棒状及び埋物痕		
105図 5 図版47	形象輪軸 ？	破片	砂粒多 小埋少	良好	橙	外 斜のハケ後削のハケ、一部ナデ 内 指ナデ後履ハケ		
標頭番号 図版番号	種 別	出 土 位 置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
106図 6 図版47	土師器 坏	破片	口(10.9) 底(8.5) 高(2.6)	細砂粒少 黒色鉱物粒少	酸化焰 硬質	橙	底は平底で、口縁部は僅かに内湾する。口縁部 横溝で、底部掘削り、周に整形不明瞭な部分 を残す。	
106図 7 図版47	土師器 坏	破片	口(10.2) 底 - 高(3.2)	細砂粒微	酸化焰 やや硬質	にぶい 橙	底部は扁平な丸底で、口縁部は内湾する。口縁 部横溝で、底部掘削りを施す。内面は丁寧な衝 で。	
106図 8 図版47	須恵器 坏		口 12.8 底 7.1 高 3.7	砂粒少 黒色鉱物粒微 小埋混	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(左回転)。腹部に強い溝でが施され、 口縁部は外傾する。底部は切り離し後、回転掘 削りを施す。	内外面 火押
106図 9 図版47	須恵器 坏?		口(12.7) 底 - 高(4.7)	細砂粒少 白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(?)。口縁部は短く外反し、体部上 位にゆるやかな横溝を持つ。	
106図10 図版48	須恵器 施	破片	口(13.8) 底 - 高(5.0)	細砂粒多 黒色鉱物粒少	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(?)。腹部はあまり張りを持たず、 口縁部は僅かに外反する。	
106図11 図版48	須恵器 坏	破片	口(8.6) 底 - 高(1.7)	白色鉱物粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	轆轤整形(?)。口縁部は外反する。	
106図12 図版48	灰輪陶器 皿	破片	口(12.8) 底(5.9) 高 2.0	緻密	還元焰	灰白	轆轤整形。高台は貼付。施釉方法は、漬け掛け か。輪調は、やや黄色を帯び透明感はない。	虎沢山1号 窯式
106図13 図版48	須恵器 施	破片	口(13.7) 底 - 高(3.7)	細砂粒少 白色粒微 白色鉱物粒微	還元焰 やや硬質	灰白	轆轤整形(?)。体部の張りは弱く、口縁は短 く外反する。	
106図14 図版48	土師器 甕	破片	口(16.0) 底 - 高(5.1)	細砂粒多 黒色鉱物粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部やや肥厚し、外傾する。口縁部横溝で後 斜位の掘削りを施す。	
106図15 図版48	土師器 甕	破片	口(19.8) 底 - 高(5.2)	細砂粒少 黒色鉱物粒少 白色鉱物粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橘	口縁部は「フ」字状に屈曲する。口縁部横溝で、 胴部は横位の掘削りを施す。	
106図16 図版48	土師器 甕	破片	口(14.7) 底 - 高(2.8)	細砂粒多 黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、内面に幅広の沈線が廻る。	
106図17 図版48	土師器 甕	破片	口(24.9) 底 - 高(4.6)	細砂粒多 黒色鉱物粒少 褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は「ク」字状に外反する。口縁部横溝で、 胴部は横位の掘削りを施す。内面は横位の沈線 で。	内外面 カーボン付着
106図18 図版48	土師器 甕	破片	口(17.6) 底 - 高(5.1)	細砂粒少 黒色鉱物粒少 白色鉱物粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 橙	口縁部は「ク」字状に強く外反する。口縁部横 溝で、胴部横位の掘削りを施す。内面は横位 の沈線で。	
106図19 図版48	須恵器 甕	破片	口(18.8) 底 - 高(7.4)	黒色鉱物粒少 白色粒少 小埋混	還元焰 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(?)。口縁部は外反する。	内面 カーボン付着
106図20 図版48	須恵器 甕	破片	厚 1.1	細砂粒少 黒色鉱物粒微	還元焰 硬質	灰白	外面叩き不明。内面素文。	
標頭番号 図版番号	種 類	出 土 位 置 遺存状態	度 目 (cm)	石 質	特 徴 ・ そ の 他			
107図21 図版48	石製品 砂撈車	1/2	径(5.2) 厚 1.6 孔径(1.0) 重 23g	流紋岩?	縁辺に面取りが施されている。側面中央に1条の沈線が廻る。			

博物館番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
107図22 図版48	土製品 土鉢	1/2	長(3.4) 幅 1.2 厚 1.0	細砂粒少 黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	下縁が欠損している。	
107図23 図版48	土製品 土鉢	ほぼ完形	長 3.8 幅 0.9 厚 0.9	細砂粒少 白色鉱物粒微	酸化焰 やや軟質	灰白	細長い紡錘形を呈する。	
107図24 図版48	龍泉窯系青 磁碗	破片	厚 0.6				外面施青土文。内面無文。	13C
107図25 図版48	龍泉窯系青 磁? 碗?	破片	厚 0.6					13-15Cか
107図26 図版48	肥前磁器 碗	破片	口 - 底(4.0) 高(2.1)				外面2重網目の染付。内底印打により軸刺摩。	18C
107図27 図版48	瀬戸・美濃 陶器 碗	破片	厚 0.4	やや緻密	普通		腰錐碗。外面下位錐軸。その他は灰釉。	18C後-19C初
107図28 図版48	製作地不詳 小碗	破片	厚 0.4	やや緻密	普通		内面から口縁部外面灰釉。貫入する。	19Cか
107図29 図版48	製作地不詳 陶器 盃か	破片	厚 0.8		還元焰 にぶい 赤釉		内外面灰釉。内面底部周縁部による圈縁。外面 輪軸目立つ。	近世か?
107図30 図版48	肥前磁器 碗	破片	厚 0.4		普通		染付。	18-19C
107図31 図版48	肥前陶器 鉢or皿	破片	口(30.5) 底 - 高(3.2)				三島手。内外面透明釉。軸やや白濁する。	18C唐津系 17C後-18C
107図32 図版48	七輪か 煎輪	破片		細砂 赤色粘土粒	酸化焰	にぶい 橙	釜や鍋を置く部分のみ残存。遺存部スス付着。	三河土器か 明治-昭和
107図33 図版48	どろ人形	破片		細砂	酸化焰	橙		江戸-明治
107図34 図版48	石墨	破片	長(2.1)			灰白		明治以降
博物館番号 図版番号	種類	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特徴・その他				
107図35 図版48	鉄製品 不明		長(6.2) 重 3g	幅 0.3	断面四角。錆ぶくれ少ない。層状剥離少なく洋鉄を思わせる。製品としては番線の を思わせる。錆化の進行は少なく地金としての鉄色が錆下に見える。			
107図36 図版48	鉄製品 釘		長(5.8) 重 6g	幅 0.6	両端部旧時の欠損。上部が「く」字状に曲がっている。断面は方形。錆割れ多く 和鉄材を思わせる。和釘である。			
107図37 図版48	鉄製品 釘		長(9.8) 重 23g	幅(0.9)	両端部欠損。断面方形。中央部で「く」字状に曲がる。錆割れ多く、層状剥離あり。 そのため和鉄材か、両端は旧時欠損。			
107図38 図版48	鉄製品 不明		長 7.4 重 41g	幅 2.5	錆ぶくれ少なく、旧状を良くとどめるか製品種不明。和鉄材らしく層状剥離あり、 先端部は刃部として突る。			
107図39 図版48	疑似石			重 28g	鐘乳石状の小塊で、石材を鑑定された飯島静雄氏によれば、畑に使用する石灰か ら、鐘乳石状の疑似石は生じうるといふ。			

下田中中道遺跡と下田中川久保遺跡の自然科学分析

- I. 下田中中道遺跡の野外調査及びテフラ検出分析
- II. 下田中中道遺跡のプラント・オパール分析
- III. 下田中川久保遺跡のテフラ分析
- IV. 下田中川久保遺跡の植物珪酸体分析
- V. 下田中川久保遺跡の花粉分析

下田中道遺跡と下田中川久保遺跡の自然科学分析

古環境研究所

I. 下田中道遺跡の野外調査およびテフラ検出分析

1. 分析の目的

下田中道遺跡の発掘調査では、2層準に洪水堆積物が認められた。ここでは、下位の洪水堆積物を「下部洪水堆積物」、上位の洪水堆積物を「上部洪水堆積物」と呼ぶことにする。本分析では、洪水堆積物の上下の土層についてテフラ検出分析によって示標テフラを検出し、それらとの層位関係から洪水堆積物の堆積年代について考察を行う。

2. 地質層序

第1地点では、下部洪水堆積物によって埋没した畠遺構が検出された(図1)。畠遺構を覆う下部洪水堆積物の層厚は4cmで、黄白色シルトからなる。下部洪水堆積物の上位には、層厚11cmの黒灰色腐植質シルト層を挟んで、層厚8cmの黒褐色土が認められる。この土層には粗粒火山灰が多く含まれている。

より低位にある第2地点の地質層序を、図2に示す。ここでは、より厚い下部洪水堆積物が認められた。堆積物は下位より、黄灰色シルト層(層厚13cm)、灰色砂層(層厚10cm)、灰色シルト層(層厚11cm)の3層から構成されている。また、この地点では、下部洪水堆積物の上位に暗灰色腐植質シルト層(層厚12cm)および黒灰色腐植質シルト層(層厚5cm)を挟んで、上部洪水堆積物が認められた。上部洪水堆積物の層厚は6cmで、灰白色のシルトから構成されている。上部洪水堆積物は、間に0.8cmの黒色腐植質シルトを挟んで、層厚4cmの黄灰色粗粒火山灰層によって覆われている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

すでに噴出年代が明らかにされているテフラ層を

検出するために、第1地点および第2地点の洪水堆積物の上下の土層についてテフラ検出分析を行った。

テフラ検出分析の手順は、以下の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80℃により恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡により、テフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

1) 第1地点

第1地点の分析結果を、表1に示す。試料番号1には、淡褐色軽石が多く含まれている。含まれる軽石の最大径は、2.1mmである。斑晶としては、斜方輝石が認められる。その特徴から、軽石は1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来するものと考えられる。

また下部洪水堆積物の下位の試料番号5には、あまり発泡の良くない白色軽石が認められる。軽石の斑晶としては、角閃石と斜方輝石が認められる。軽石の最大径は、1.3mmである。本軽石は、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名一二ツ岳火山灰(Hr-FA; 新井, 1979, 坂口, 1986)、および6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名一二ツ岳軽石(Hr-FP; 新井, 1979, 坂口, 1986)に由来するものと考えられる。

最下位の試料番号6には、前述のHr-FAおよびHr-FPに由来する軽石のほかに、発泡のよい白色軽石が認められる。軽石の最大径は1.4mmで、斑晶として斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石

(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 石川ほか, 1979)に由来するものと考えられる。

2) 第2地点

第2地点の分析結果を、表2に示す。試料番号1には、淡褐色軽石がとくに多く含まれている。含まれる軽石の最大径は、6.8mmである。斑晶としては、斜方輝石が認められる。その特徴から、軽石はAs-Bに由来するものと考えられる。

また試料番号3および4には、良く発泡した白色軽石が認められる。軽石の斑晶としては斜方輝石が認められる。軽石の最大径は、1.3mmである。本軽石は、その岩相からAs-Cに由来するものと考えられる。ただし後述するように、As-Cの降灰層準はさらに下位にあることから、これらの層準に含まれる軽石は下位より2次的に混入したものと推定される。

下部洪水堆積物の下位にある試料番号6には、あまり発泡の良くない白色軽石が認められた。軽石の最大径は、2.1mmである。軽石の斑晶としては、角閃石や斜方輝石が認められる。その特徴から、軽石はHr-FAおよびHr-FPに由来するものと考えられる。また最下位の試料番号7には、最大径1.4mmの発泡の良い白色軽石が認められる。この軽石の斑晶としては、斜方輝石が認められる。本軽石は、As-Cに由来するものと考えられる。

4. 考察

野外地質調査とテフラ検出分析を併せて行った結果、下部洪水堆積物の下位にAs-C、Hr-FAおよびHr-FPに由来する軽石が認められた。また上部洪水堆積物の上位には、As-Bが確認された。これらのことから、下部洪水堆積物および上部洪水堆積物の堆積年代は、6世紀中葉以降で、1108(天仁元)年以前と考えられる。さらに発掘調査では、畠遺構の下位より7~8世紀の土器が検出されている。この資料より、洪水の発生年代は8世紀以降で、1108(天仁元)年以前と推定することができる。

さて洪水の誘因であるが、洪水堆積物をもたらしたと考えられる早川の上流の赤城山南麓では、818

(弘仁9)年に地震に由来する泥流が発生したことが明らかにされている(早田・能登, 1989, 能登ほか, 1990)。層的に見ると、その発生年代と下田中道遺跡で検出された2層の洪水堆積物の層準とは矛盾しない。とくに上部洪水堆積物がAs-Bの降灰層準にとくに近接していることを考慮すると、下部洪水堆積物が弘仁9年の地震との因果関係をもつ可能性がより大きいと考えられる。しかし洪水現象そのものは、大雨などにより頻りに発生する現象である。このことから、下田中道遺跡の洪水堆積物の誘因を弘仁9年地震との関係を検討するためには、早川中流域での地質学および考古学研究が必要と考えられる。

5. 小結

下田中道遺跡において野外地質調査とテフラ検出分析を行った結果、下位よりAs-C、Hr-FA、Hr-FP、As-Bの4層のテフラが検出された。また発掘調査で検出された2層の洪水堆積物は、Hr-FPの上位でAs-Bの下位の層準にあることが明らかになった。

【参考文献】

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 1:1-79。
- 新井房夫(1979) 関東平野北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, 157:41-52。
- 荒牧重雄(1968) 浅間火山の地質。地団研専報, 14:45。
- 能登 健・内田憲治・早田 勉(1990) 赤城山南麓の歴史地震-弘仁九年地震に伴う地形変化の調査と分析。信濃, 42:755-772。
- 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」:103-119。
- 早田 勉・能登 健(1989) 9世紀に発生した赤城山南斜面における崩壊とその誘因。日本第四紀学会講演要旨集, 19。

表1 下田中中道遺跡第1地点のテフラ検出分析結果

試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径 (mm)	軽石の起源
1	+++	淡褐	2.1	As-B
2	-	-	-	-
3	-	-	-	-
4	-	-	-	-
5	+	白	1.3	Hr-FP, Hr-FA
6	++	白	1.4	As-C, Hr-FP, Hr-FA

+++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,
-: 認められない

表2 下田中中道遺跡第2地点のテフラ検出分析結果

試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径 (mm)	軽石の起源
1	+++++	淡褐	6.8	As-B
2	++	白	2.6	As-C
3	+	白	1.1	As-C
4	-	白	-	-
5	-	白	-	-
6	++	白	2.1	Hr-FP, Hr-FA
7	++	白	1.4	As-C

+++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,
-: 認められない

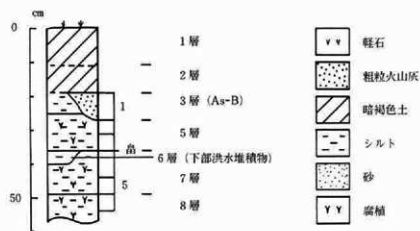
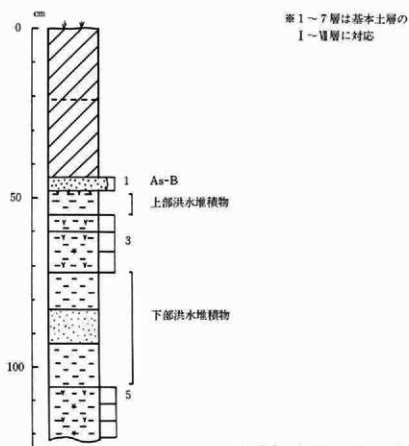


図1 下田中中道遺跡第1地点の地質柱状図

数字は、テフラ検出分析の試料番号



※ 1～7層は基本土層の
I～VII層に対応

図2 下田中中道遺跡第2地点の地質柱状図

数字は、テフラ検出分析の試料番号

II. 下田中道遺跡のプラント・オパール分析

1. はじめに

下田中道遺跡では、下部洪水堆積物層直下から畝状遺構が検出され、当時の畝跡と見られていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、同遺構における稲作の確認およびその他の層における稲作跡の探査を試みたものである。

2. 試料

1991年10月23日に現地調査を行った。調査地点は、No. 1～No. 4の4地点である。調査区の土層は1層～8層に分層された。このうち、6層は下部洪水堆積物層であり、その直下の7層から畝状遺構が検出されていた。また、3層は浅間Bテフラ層である(本稿図1～2参照)。試料は、7層を中心に容量50cm³の採土管およびポリ袋等を用いて採取した。試料数は計15点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μ m, 約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去、乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレバート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、

ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、0.48である(杉山・藤原, 1987)。

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図1、図2に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

稲作跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作(水田)が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。ただし、畝稲作(陸稲)の場合は、水田稲作に比べるとプラント・オパール密度が低くなるのが通例である。以上の判断基準のもとで、稲作の可能性について検討を行った。

No. 1地点およびNo. 2地点では4層～7層について

て、No. 3 地点では4層と5層について、No. 4 地点では7層と8層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。

このうち、発掘調査により畝状遺構が検出されていたNo. 1 地点の7層（洪水堆積物直下層）では、プラント・オパール密度が4,000～5,200個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。また、畝状遺構が断面で観察されたNo. 4 地点の7層でも、密度が2,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの遺構で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。なお、No. 2 地点の7層では密度は2,200個/gとやや低い値である。同地点では畝状遺構が検出されておらず、また他の地点と比較して比高が低いことから、周辺の耕作域（遺構検出域）からプラント・オパールが混入した可能性も考えられる。

その他の層では、浅間Bテフラ直下の4層および5層で密度が3,000個/g前後と比較的高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。No. 4 地点の8層（畝状遺構の下層）では、密度が2,200個/gとやや低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

なお、No. 1 地点の7層ではキビ族のプラント・オパールが検出された。同族には、ヒエヤアワ、キビなどが含まれるが、現時点ではプラント・オパールの形態からこれらの栽培種と他の野・雑草とを識別するには至っていない（杉山ほか, 1988）。また、密度も1,000個/g未満と微量であることから、同遺構でヒエヤアワなどが栽培されていた可能性は考え難い。

6. まとめ

以上のように、下部洪水堆積物直下から検出された畝状遺構からはイネのプラント・オパールが比較的高い密度で検出され、同遺構で稲作が行われてい

たことが分析的に確認された。また、8層および4層、5層でも稲作の可能性が認められた。

【参考文献】杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山—古環境編—。川口市遺跡調査会報告, 10: 281-298.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎考古資料として—。考古学と自然科学, 20:81-92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9:15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）—福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O. sativa* L.）生産総量の推定—。考古学と自然科学, 12:29-41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17:73-85.

表1 プラント・オパール分析結果

下田中道遺跡

No. 1 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
4	36	7	0.90	3,000	1.95	1,500	25,600	2,200	0
5	43	10	0.95	2,100	1.96	2,800	17,800	700	0
6	53	6	1.00	1,400	0.87	0	12,400	0	0
7-1	59	15	1.00	4,000	6.18	2,000	16,300	2,700	600
7-2	68	7	1.00	5,200	3.75	2,900	23,000	2,200	700

No. 2 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
4	53	5	0.90	3,800	1.75	700	11,500	0	0
4'	58	4	0.90	700	0.25	3,900	17,300	1,500	0
5-1	62	6	0.95	3,700	2.16	3,700	19,500	700	0
5-2	68	6	0.95	2,300	1.30	1,500	14,900	2,300	0
6-1	74	14	1.00	700	1.01	2,800	16,300	2,100	700
7	123	15	1.00	2,200	3.40	2,200	17,800	1,400	0

No. 3 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
5	26	25	0.95	3,700	9.01	1,500	14,200	1,500	0
6	51	9	1.00	1,400	1.30	2,200	18,600	1,400	0

No. 4 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
7	32	15	1.02	2,900	4.48	1,400	27,700	1,400	0
8	47	18	1.00	2,200	4.08	3,800	27,500	3,800	0

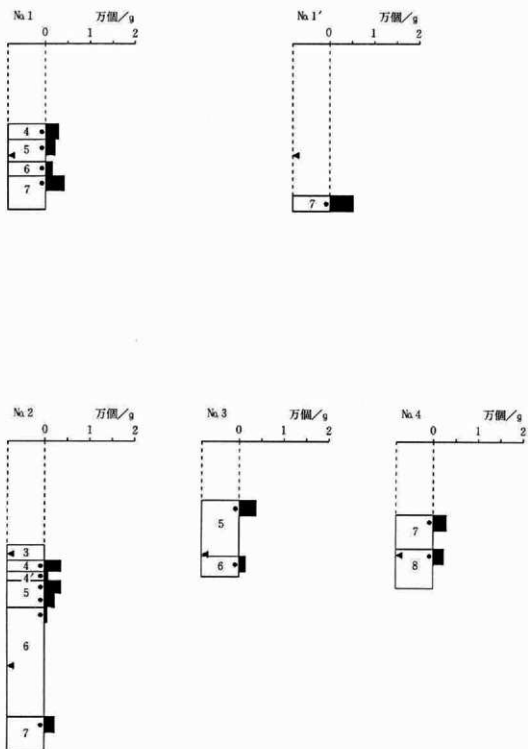


図1 イネのプラント・オーバーの検出状況

(注) ◀印は50cmごとのスケール, ・印は分析試料の採取箇所

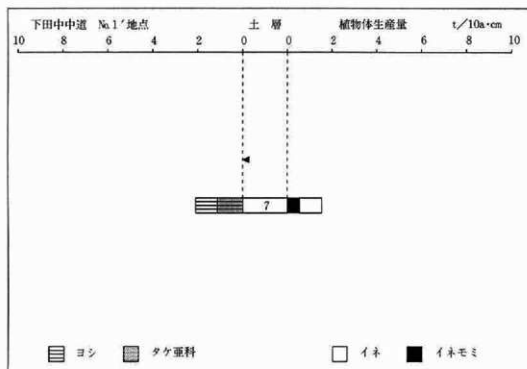
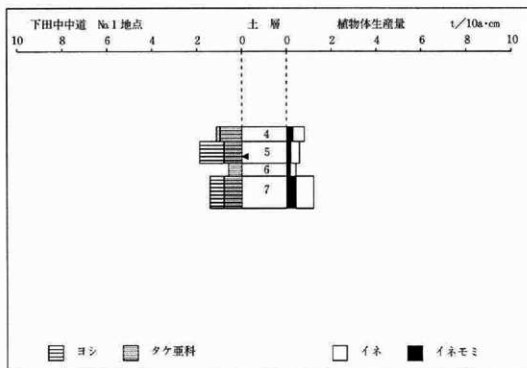
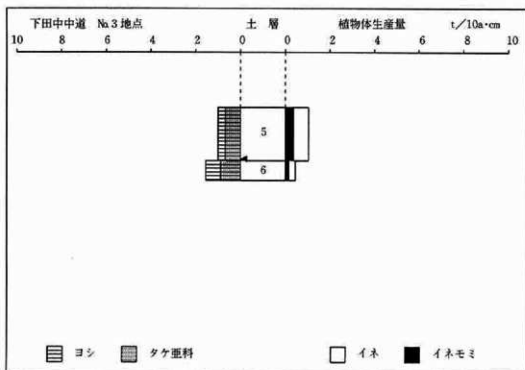
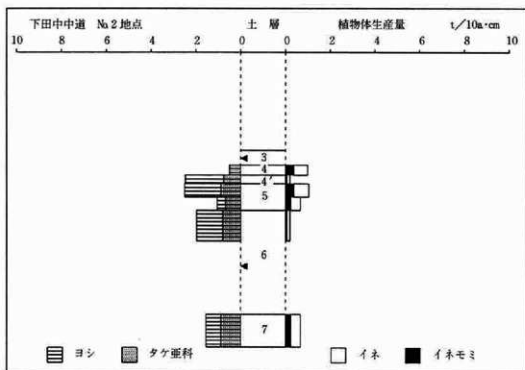
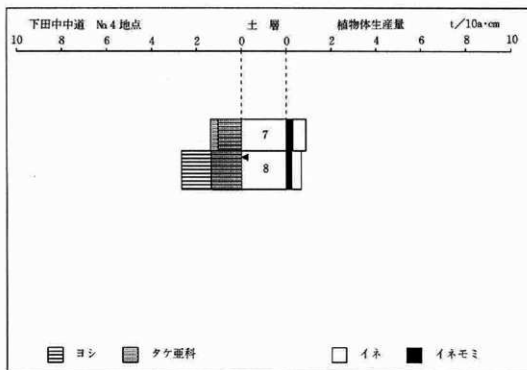


図2 おもな植物の推定生産量と変遷
(注) ◀印は50cmごとのスケール

下田中道遺跡と下田中川久保遺跡の自然科学分析



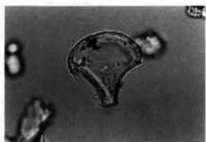
II. 下田中道遺跡のプラント・オパール分析



下田中道遺跡と下田中川久保遺跡の自然科学分析

下田中道遺跡から検出されたプラント・オパール・の顕微鏡写真

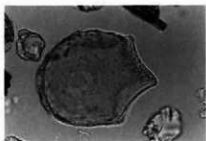
No.	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	No. 1	7-2	400
2	イネ	No. 1	6	400
3	ヨシ属	No. 1	7-2	400
4	タケ茎科(ネザサ属など)	No. 1	7-1	400
5	シノ属	No. 1	7-1	400
6	ウシタケ科(ススキ属など)	No. 1	7-1	400
7	不明(ウシタケ科類似, 大型)	No. 1	7-2	400
8	不明(ウシタケ科類似, 大型)	No. 1	7-2	400
9	不明	No. 1	7-1	400



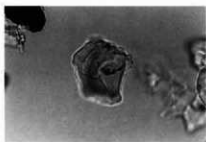
1



2



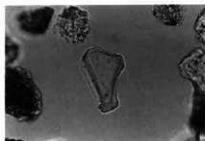
3



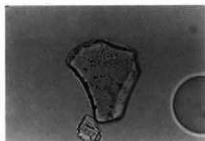
4



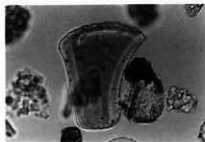
5



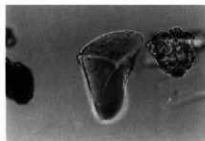
6



7



8



9

0 50 100 μm

Ⅲ. 下田中川久保遺跡のテフラ分析

1. はじめに

下田中川久保遺跡の発掘調査では、高遺構が検出された。この遺跡内の地質断面で認められた土層について地質調査とテフラ検出分析を合わせて行い、テフラ粒子の特徴などから土層の堆積様式に関する資料を得ることを試みた。また島の年代を明らかにするためにテフラ検出分析を試みた。土層観察およびテフラ検出分析の対象とした地点は、第1～4・6・7地点の6地点である。

2. 土層層序

(1) 第1地点

調査地点の中で最も北よりに位置する本地点では、下位より黄灰色砂質シルト(層厚16cm以上、試料番号1)、暗褐色土(層厚17cm)、灰色がかった暗褐色砂質盛土の連続が認められた(図1)。ここでは黄灰色砂質シルトの堆積様式を明らかにするためにテフラ検出分析が行われた。

(2) 第2地点

ここでは、下位より白色シルト(層厚4cm、試料番号1)、暗褐色土(層厚12cm)、褐灰色シルト(層厚18cm)、暗褐色盛土(層厚16cm)の連続が認められた(図2)。このうち白色シルト層の上面では高遺構のサクが検出されている。ここでも白色シルトの起源を求めるためにテフラ検出分析が行われた。

(3) 第3地点

本遺跡の標式的な土層が認められるこの地点では、下位より成層した灰白色砂層(層厚16cm、試料番号5)、暗灰色土(層厚8cm、試料番号4)、灰白色砂層(層厚0.5cm、試料番号3)、暗灰色土(層厚9cm、試料番号2)、成層した灰白色砂層(層厚13cm、試料番号1)、灰色砂質土(層厚14cm)、細かい葉理が発達した灰色土(層厚19cm)、灰白色砂と土壌の互

層(層厚10cm)、灰色土(層厚6cm)、細かい葉理が発達した灰白色砂層(層厚34cm)の連続が認められた(図3)。ここでは、発掘調査によって最下位の砂層の上面で溝状遺構が検出された。また試料番号1の砂層によって埋没した9世紀の水田一面1が検出された。

(4) 第4地点

ここでは第3地点で検出された9世紀の水田一面1の下位に、下位より灰色砂層(層厚8cm以上)と暗灰色土(層厚20cm)の連続が認められた(図4)。灰色砂層の上面では溝状遺構が検出されている。

(5) 第6地点

ここでは下位より葉理の発達した灰色砂層(層厚21cm以上)、灰白色シルト質砂層(層厚3cm)、黒灰色砂質シルト層(層厚8cm)、とくに砂に富む暗灰色砂質土(層厚2cm)、暗灰色砂質土(層厚25cm)の連続が認められた(図5)。最上位の暗灰色砂質土の上面からは、9世紀の畑遺構が検出されている。

(6) 第7地点

ここでは下位より灰色砂層(層厚13cm)、灰色砂層(層厚5cm)、暗灰色砂質シルト層(層厚7cm)、暗灰色砂質土(層厚13cm)、とくに砂に富む暗灰色砂質土(層厚15cm)の連続が認められた(図5)。最上位の暗灰色砂質土の上面からは、9世紀の畑遺構が検出されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

第1地点試料番号1および第2地点試料番号1には土層の堆積様式を明らかにするため、また第3地点試料番号1～5の5試料については示標テフラの層位の把握を行うためにテフラ検出分析を行った。

分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴などを観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。第1地点試料番号1には、スポンジ状に比較的良好に発泡した最大径1.3mmの淡灰褐色の軽石がごく少量認められる。斑晶には斜方輝石が認められる。これらの特徴からこの軽石は浅間火山起源の軽石と思われるが、量がごく少ないことから示標テフラとの同定は困難である。また透明の軽石火山ガラスもごく僅かに認められるにすぎない。全体として粒径がよく揃った岩片や自形を残していない結晶などから構成されることから、本試料は洪水堆積物に由来すると考えられる。

第2地点試料番号1にはシルト粒子が非常に多く含まれており、砂分はごくわずかであった。自形をとどめた角閃石や斜方輝石などの結晶は比較的多く認められたもののその量は全体としてごくわずかで、この試料もやはり洪水堆積物に由来するものと推定される。

第3地点試料番号1～5の試料のうち、試料番号2と4に特徴を同じくする白色軽石が比較的多く認められた。試料番号2と4の軽石の最大径は、各々1.1mm、1.8mmである。軽石はスポンジ状に発泡しており、角閃石や斜方輝石が斑晶として認められるこれらの軽石は、岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名流川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来するものと考えられる。本遺跡の周辺地域においては前者が検出されることが多いことから、前者の可能性の方がより大きいものと推定される。試料番号1、3、5の3試料には、透明で平板状のいわゆるバブル型や軽石型の火山ガ

ラスがごく少量認められたのみで、大部分粒径のよく揃った岩片や自形を残していない結晶などから構成されている。

以上のことから、第3地点で検出された畑遺構は6世紀初頭に降る噴霧されたものと推定され、発掘調査によって推定された年代と矛盾しない。

4. 小結

下田中川久保遺跡における地質調査とテフラ検出分析の結果、複数の層準に洪水堆積物が認められた。テフラ検出分析により、発掘調査で9世紀に発生したと考えられた洪水堆積物の下位の土層から6世紀初頭の榛名流川テフラ(Hr-FA)に由来する可能性のある軽石が検出され、発掘調査による年代推定を追証する結果が得られた。

【参考文献】

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, No.257, p.41-52.
- 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

表1 下田中川久保遺跡のテフラ検出分析

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
第1地点	1	+	淡灰褐	1.3mm	+	pm	透明
第2地点	1	-	-	-	+	pm	透明
第3地点	1	-	-	-	+	pm>bw	透明
	2	++	白	1.1mm	+	pm	透明
	3	-	-	-	+	pm>bw	透明
	4	++	白	1.8mm	+	pm	透明
	5	-	-	-	+	pm>bw	透明

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。

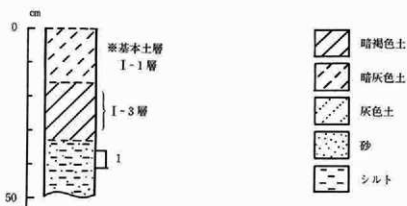


図1 下田中川久保遺跡第1地点の地質柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

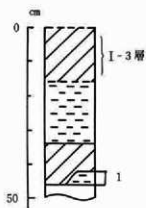


図2 下田中川久保遺跡第2地点の地質柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

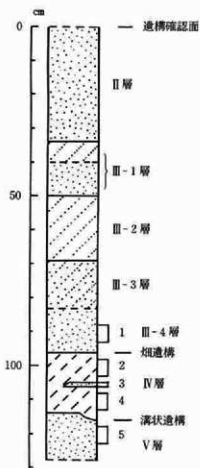


図3 下田中川久保遺跡第3地点の地質柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

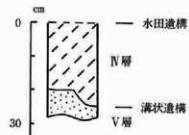


図4 下田中川久保遺跡第4地点の地質柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

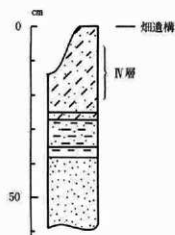


図5 下田中川久保遺跡第6地点の地質柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

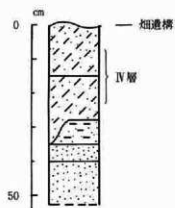


図6 下田中川久保遺跡第7地点の地質柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

IV. 下田中川久保遺跡の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石は植物により様々な形態的特徴を持っていることから、土壤中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境を復元することができる(杉山,1987)。

下田中川久保遺跡の発掘調査では、9世紀の畑・水田遺構が検出された。そこで、同遺構の試料を中心に植物珪酸体分析を行い、イネ科栽培植物の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は、第2地点で畑遺構のサク直下層(PA20)、第4地点で畑遺構(PA11、12、13)および溝状遺構内部の堆積物、第6地点で畑遺構(PA16、17、18)、第7地点で畑遺構下位の暗灰色砂質土層(PA19)の計9点が採取された。また、参考試料として、第5地点で3号土坑遺構直上層(PA15)が採取された。採取層の詳細については本稿図1～6を参照された。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm、約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

[イネ科] イネ、キビ族(ヒエ属など)、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、未分類のタケ亜科、表皮毛起源、棒状珪酸体、莖部起源、未分類等

5. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、オオムギ族(ムギ類が含まれる)、キビ族(ヒエやアワ、キビなどが含まれる)、オビシバ属(シコクビエが含まれる)

る)、トウモロコシ属、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネおよびキビ族が検出された。

イネは、第2地点の畑遺構のサク部(PA20)、第6地点の畑遺構の畝部(PA16)およびその下層(PA17)、第7地点の畑遺構下位の暗灰色砂質土層(PA19)で検出された。密度は600-1,900個/gと比較的低い値であるが、畑遺構は直上を洪水堆積物と考えられる砂層(シルト層)によって覆われていることから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同畑遺構では稲作が行われていた可能性が考えられる。

キビ族は、第2地点の畑遺構のサク部(PA20)で検出された。密度は600個/gと低い値である。同族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。したがって、ここでヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畝作物は分析の対象外となっている。

6. 古植生・古環境の推定

(1) 水田遺構

水田遺構では、上述の分類群に加えて、ヨシ属やウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)、ウシクサ族型、ネザサ節型、クマザサ属型などが検出された。おもな分類群の植物体量の推定値(表2)によると、ほとんどの試料でヨシ属が卓越しており、その他の分類群は比較的少量であることが分かる。

これらのことから、水田遺構の土層の堆積当時は

ヨシ属が生育するような比較的湿った土壌条件であったものと考えられ、周辺などではススキ属やネザサ節なども見られたものと推定される。

(2) 3号土坑

遺構直上層(PA15)について分析を行った結果、ヨシ属やウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)、ウシクサ族型、ネザサ節型などが検出された。おもな分類群の植物体量の推定値(表2)によると、ヨシ属が圧倒的に卓越しており、その他の分類群は比較的少量であることが分かる。

これらのことから、同層の堆積当時はヨシ属が多く生育するような湿地的な環境であったものと考えられ、周辺などではススキ属やネザサ節なども見られたものと推定される。

7. まとめ

以上のように、9世紀の畑遺構では少量ながらイネの植物珪酸体が検出され、同遺構でイネが栽培されていた可能性が認められた。畑遺構の土層の堆積当時はヨシ属が生育するような比較的湿った土壌条件であり、周辺などではススキ属やネザサ節なども見られたものと推定される。

【参考文献】

- 杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号: p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20: p.81-92.
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9: p.15-29.
- 藤原宏志(1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産量の推定—。考古学と自然科学, 12: p.29-41.

表1 下田中川久保遺跡の植物珪酸体分析結果

(単位: ×100個/g)

分類群	第2地点	第4地点			第5地点		第6地点			第7地点
	PA20	PA11	PA12	PA13	PA14	PA15	PA16	PA17	PA18	PA19
イネ科										
イネ	6						14	19		7
キビ族(ヒエ属など)	6									
ヨシ属		28	26	14		35	19	19	21	27
ウシタサ族(スキ属など)	63	28	19	28	8	56	14		28	40
シバ属										7
キビ族型	6	7	6							
ウシタサ族型	101	42	51	42		77	37	38	42	60
ウシタサ族型(大型)			6					6	7	
タケ亜科										
ネザサ節型	51	105	71	127		63	75	38	133	7
クマガサ属型	44	21	19	42	76	7	23	6	56	20
未分類等	32	84	45	35	8	85	61	19	56	27
その他のイネ科										
表皮毛起源	13			7		14	19	13	7	40
棒状珪酸体	316	329	122	296		345	248	183	196	321
基部起源	25	7	13	7		14	5	38		27
未分類等	329	287	301	70	30	127	248	113	294	368
植物珪酸体総数	994	937	680	669	122	824	762	491	841	949

表2 主な分類群の植物体量の推定値

(単位: kg/m²・cm)

分類群	第2地点	第4地点			第5地点		第6地点			第7地点
	PA20	PA11	PA12	PA13	PA14	PA15	PA16	PA17	PA18	PA19
イネ科										
イネ	0.19						0.41	0.56		0.20
キビ族(ヒエ属など)	0.53									
ヨシ属		1.77	1.62	0.89		2.22	1.18	1.19	1.33	1.69
ウシタサ族(スキ属など)	0.78	0.35	0.24	0.35	0.09	0.70	0.17		0.35	0.50
タケ亜科										
ネザサ節	0.24	0.50	0.34	0.61		0.30	0.36	0.18	0.64	0.03
クマガサ属	0.33	0.16	0.14	0.32	0.57	0.05	0.18	0.05	0.42	0.15

※表1の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各種物の換算係数をかけて算出。

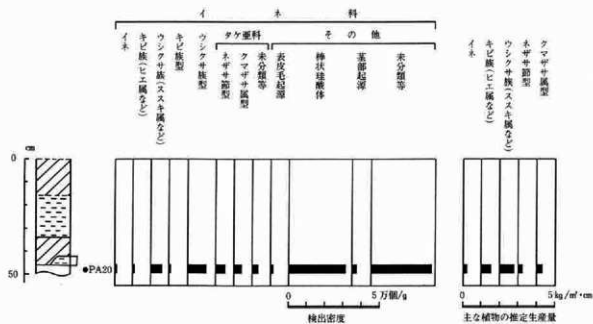


図1 下田中川久保遺跡第2地点における植物珪酸体分析結果

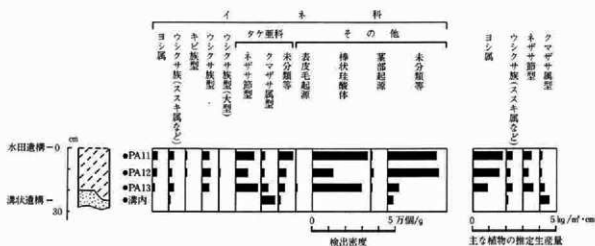


図2 下田中川久保遺跡第4地点における植物珪酸体分析結果

IV. 下田中川久保遺跡の植物珪酸体分析

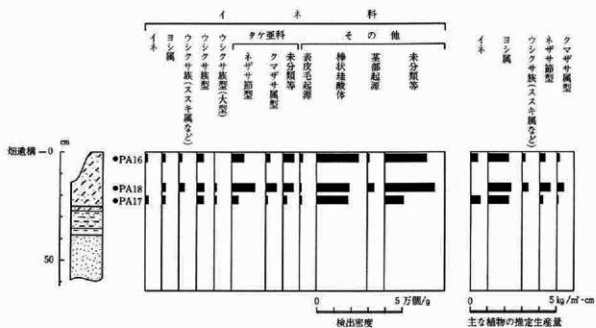


図3 下田中川久保遺跡第6地点における植物珪酸体分析結果

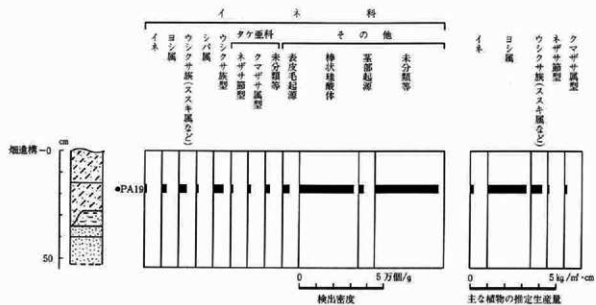


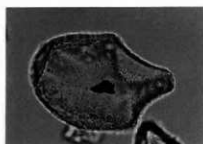
図4 下田中川久保遺跡第7地点における植物珪酸体分析結果

下田中道遺跡と下田中川久保遺跡の自然科学分析

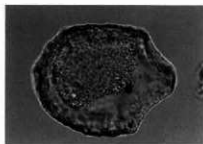
植物遺体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

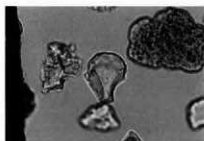
No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	第6地点	PA17
2	イネ	第7地点	PA19
3	キビ属(ヒエ属など)	第2地点	PA20
4	ヨシ属	第6地点	PA18
5	ヨシ属	第6地点	PA16
6	ウシタマ属(ススキ属など)	第5地点	PA15
7	ウシタマ属(ススキ属など)	第2地点	PA20
8	ウシタマ属型(大型)	第4地点	PA12
9	ネギヤシ型	第7地点	PA10
10	ネギヤシ型	第4地点	PA12
11	タマガヤシ型	第5地点	PA14
12	タマガヤシ型	第7地点	PA19
13	メダケ型?	第5地点	PA15
14	表皮毛起源	第5地点	PA15
15	棒状細胞体	第6地点	PA17
16	棒状細胞体	第6地点	PA16
17	イネ科(ヨシ属?)の茎部起源	第5地点	PA15
18	不明	第5地点	PA15



4



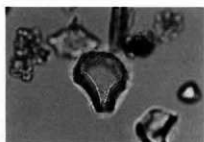
5



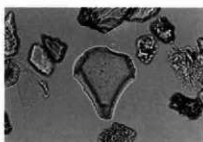
1



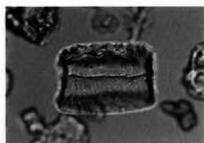
6



2



7



3



8

0 50 100 μm

IV. 下田中川久保遺跡の植物珪酸体分析



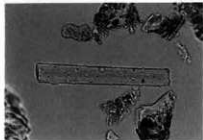
9



14



10



15



11



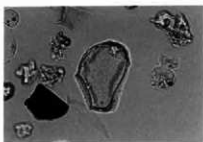
16



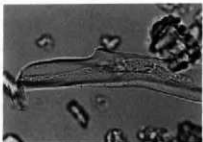
12



17



13



18

0 50 100 μ m

V. 下田中川久保遺跡の花粉分析

1. はじめに

下田中川久保遺跡から検出された水田・畑遺構の堆積土の花粉分析を行った。花粉分析は、湖沼などの堆積域および集水域の大きな堆積物を対象とし、広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生と環境を解析する手法として用いられてきた。考古遺跡では、そのようなやや広域な水成の堆積物以外に、埋没土や遺構内堆積物などの堆積域が限定された生成の異なる堆積物も対象となる。これらからは狭い植生や短い時間を反映することも指摘されている（金原、1993）。また、乾燥的な土壌堆積物や畠土壌では分解によって花粉などの植物遺体が分解を受け残存しないことも多い。ここでは以上のことに留意し分析を行った。

2. 試料

試料は第4地点の3点、第6地点の3点、第5地点の2点（参考試料）の計8点である。第4地点の試料は9世紀の水田一面1（Po1・Po2）と溝状遺構内堆積土（Po3）である。第6地点の試料は9世紀の畑のうね（Po1）・溝（Po2）・灰褐色砂質土（Po3）である。3号土坑（第5地点）では遺構直上層（Po2）とその上位（Po1）である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）に基づき、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。

- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpmで2分間の遠心分離を行った後上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）を基本とし、所有の現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群として示した。

4. 結果

検出された花粉・胞子は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉18、シダ植物胞子2形態の計43分類群であった。結果は花粉遺体一覧として表にまとめた。第4地点と第6地点では花粉がほとんど検出されなかったため花粉組成図に示すことができなかった。第5地点では花粉総数を基本数とする百分率を求めて花粉組成図を示した。

同定された分類群は以下のとおりである。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複雑管東亞属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシダ属—アサダ、クリ—シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、サンショウ属、ニシキギ科、トチノキ、カエデ属、グミ属、トネリコ属
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科

〔草本花粉〕

ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、タデ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、アリノトウグサ属—フサモ属、セリ科、シソ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

1) 第4地点および第6地点

花粉遺体が第4地点のPo3でオモダカ属とヨモギ属の2個が検出されたのみで、他は全く検出されなかった。第6地点は1個も検出されなかった。

2) 第5地点

樹木花粉より草本花粉の占める割合が多い。草本花粉ではヨモギ属・イネ属型を含むイネ科・カヤツリグサ科が優占する。オモダカ属・マルバオモダカなどの水湿地性草本の花粉も特徴的に出現する。

5. 植生・環境・農耕の推定

1) 第4地点および第6地点

花粉遺体のごくわずかししか検出されなかったため、相対比率からみた推定は行えなかった。第4地点のPo3では1個のオモダカ属が検出されているが、オモダカ属は母植物における花粉生産量が少なく散布性に乏しい。またその花粉は水成の堆積物にしか含まれていないため、第4地点の溝状遺構は滞水するか湿地状であった可能性が高い。第4地点と第6地点の試料はまったくといってよいほど花粉が含まれておらず、このことは第4地点・第6地点の試料となった堆積土が生成時か堆積後に植物遺体などの有機質が著しく分解する乾燥した環境におかれたことを示している。花粉遺体が少なかったため、栽培植物の推定はできなかった。

2) 第5地点

第5地点の周辺では草本の多い開けた景観であったとみなされる。樹木はコナラ属コナラ亜属を主とし、やや遠方に森林として存在していたかあるいは周囲に孤立木として生育していたかであろう。周囲はやや乾燥した陸地が広がりヨモギ属を主とするキク科などの陸性の草本が多く生育していた。また、多様な環境に生育する種類を含むイネ科とカヤツリグサ科も多く生育していた。試料採取地点は水湿地状であり、ミクリ属・オモダカ属などの水湿地性草本が生育していた。他にイネ属型も出現しており、周囲に水田の存在が示唆される。水湿地草本は水田雑草でもある。

6. 小結

下田中川久保遺跡の第4地点、第6地点、第5地点の花粉分析を行った。

第4地点・第6地点では堆積土の生成時か堆積後に植物遺体などの有機質が著しく分解する乾燥した環境におかれていたとみなされた。

第4地点の溝状遺構はオモダカ属などの水湿地草本の繁茂する滞水または湿地状であった可能性が高い。

第5地点の直上層は水湿地状であり、ミクリ属・オモダカ属などの水湿地性草本が生育していた。周囲はやや乾燥した陸地が広がり、ヨモギ属・イネ科・カヤツリグサ科などの陸性草本が多く生育していた。また、開けた景観であり、樹木はコナラ属コナラ亜属などがやや遠方で森林として存在していたか周囲に孤立木として生育していたかであった。イネ属型花粉の出現から水田・畑の存在が示唆される。

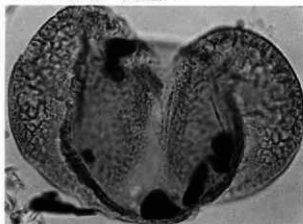
【参考文献】

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院。
 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店。
 日本第四紀学会編 (1993) 第四紀試料分析法, 東京大学出版会。
 鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。
 中村純 (1980) 日本産花粉の標本, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集。

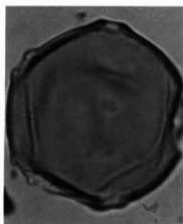
表 下田中川久保遺跡の花粉遺体一覧

学名	分類群	和名	第4地点			第5地点	
			Pol	Po2	Po3	Pol	Po2
Arboreal pollen		木本花粉					
<i>Abies</i>		モミ属				1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属椎葉節東亜属				1	2
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ				7	19
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科				3	5
<i>Juglans</i>		クルミ属				2	2
<i>Pterocarya</i>		サワグルミ属				1	1
<i>Alnus</i>		ハンノキ属				9	2
<i>Betula</i>		カバノキ属				4	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属				1	
<i>Carpinus-Ostrya</i>		クマシラ属-アサダ				7	5
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>		クリ-シイ属				12	6
<i>Fagus</i>		ブナ属				3	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナク属コナラ亜属				39	44
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナク属アカガシ亜属				5	2
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ				10	6
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ				10	6
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属				1	
Celastraceae		ニシキギ科					4
<i>Aesculus trubenata</i>		トチノキ				2	
<i>Acer</i>		カエデ属					1
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属				3	
<i>Elaeagnus</i>		グミ属				1	
Arboreal・Nonarboreal		木本・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae		タケ科-イラクサ科				8	12
Nonarboreal pollen		草本花粉					
<i>Sparganium</i>		ミクリ属				5	2
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属				1	
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属			1	3	2
<i>Caldesia pinnatifolia</i>		マルバオモダカ				5	1
Gramineae		イネ科				47	85
<i>Oryza tpe</i>		イネ属型				13	20
Cyperaceae		カヤツリグサ科				49	52
<i>Monachoria</i>		ミズアオイ属					1
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節					2
<i>Polygonum</i>		タデ属				1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科				2	1
Cruciferae		アブラナ科				2	
<i>Halenia-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属				7	1
Umbelliferae		セリ科				5	1
Rubiatae		シソ科				2	1
Lactucoideae		タンポポ科				3	3
Asteroidae		キク亜科				3	6
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	1		1	107	78
Fern spore		シダ植物胞子					
Monolate type spore		単葉溝胞子				15	12
Trilate type spore		三葉溝胞子				6	7
Arboreal pollen		樹本花粉	0	0	0	122	105
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹本・草本花粉	0	0	0	8	12
Nonarboreal pollen		草本花粉	1	0	2	255	236
Total pollen		花粉総数	1	0	2	385	353
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	0	4	9
Fern spore		シダ植物胞子	0	0	0	23	19

下田中川久保遺跡の花粉遺体 I



1 マツ属複雑管束亜属



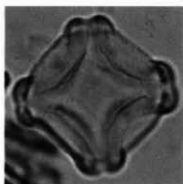
2 クルミ属



3 クリー
シイ属



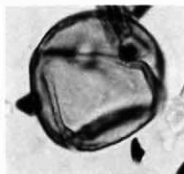
4 スギ



5 ハノノキ属



6 イチイ科-イヌガヤ科-ヒノノキ科



7 ブナ属

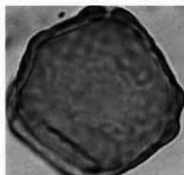


8 コナラ属コナラ亜属



9 コナラ属アカガシ亜属

30 μm



10 ニレ属-ケヤキ



11 エノキ属-ムクノキ

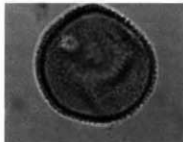


12 トチノキ

下田中川久保遺跡の花粉遺体 II



1 クワ科-イラクサ科



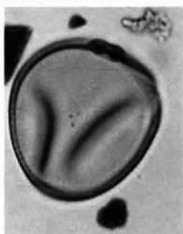
2 ミクリ属



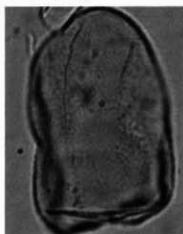
3 オモダカ属



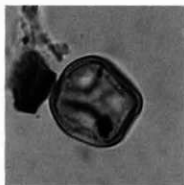
4 イネ科



5 イネ属型



6 カヤツリグサ科



7 マルバオモダカ

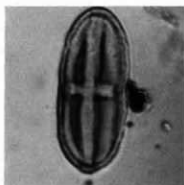


8 タデ属

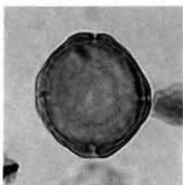


9 ノブドウ

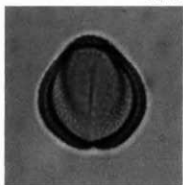
— 30 μm



10 セリ科

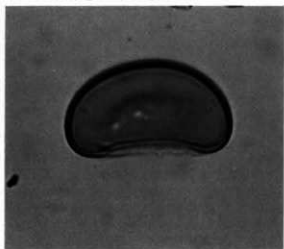


11 アリノトウグサ属-フサモ属

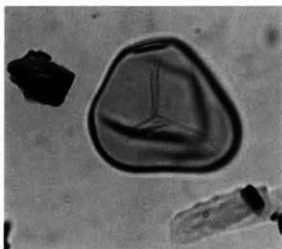


12 ヨモギ属

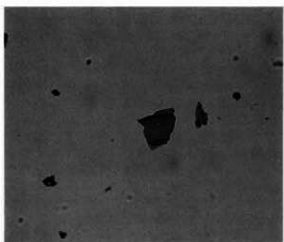
下田中川久保遺跡の花粉遺体Ⅲ



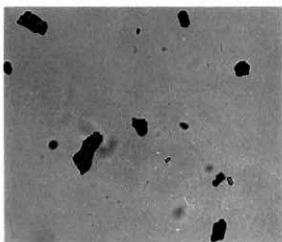
1 シダ植物単条溝胞子



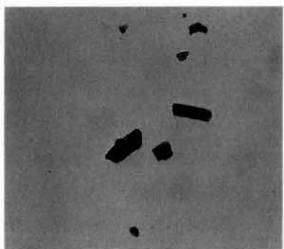
2 シダ植物三条溝胞子 30 μ m



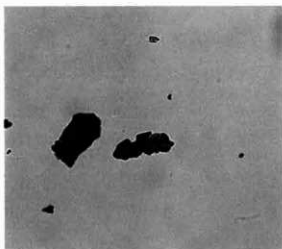
3 第4地点



4 第5地点



5 第5地点



6 第5地点 100 μ m

下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について

下田中・川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について

獣医師 大江 正直

1. はじめに

この遺跡から平安時代初期（9世紀）に属する41個の馬歯と5個の馬骨が出土している。前回までに日高遺跡（注1）、三ツ寺Ⅱ遺跡（注2）、下東西遺跡（注3）、田端遺跡（注4）、国分僧寺・尼寺中間地域（注5）及び三ツ寺Ⅱ遺跡（注6）の馬歯・馬骨を調査し、西毛・中毛に属する上野国の馬の具体像の一部を明らかにすることが出来た。しかしこの成績は上野国の一部の馬の姿であって上野国全体の馬の具体像を知るためには、調査件数、調査域が不足していた。幸いにも今回依頼により東毛に於いて、群馬の遺跡の中で一時代に属するものとしては比較的多数の馬歯・馬骨を調査することが出来たので、東毛に於ける上野国の馬の具体像の一部を少しでも明らかにしたいと考え以下その検討を行った。

(1) 依頼内容

① 獣の種類、② 性、③ 年令、④ 大きさ及び体格の特徴を明らかにすること。

(2) 調査方法

① 出土獣歯・獣骨を有する獣の種類を検討を行う。② 出土獣歯・獣骨を有する獣の性の検討を行う。馬については犬歯の有無と寛骨について性的特徴を調べて性別を検討する。③ 出土獣歯・獣骨を有する獣の年令を検討する。④ 出土獣歯・獣骨を有する獣の大きさ及び改良度を検討し、体格の特徴にも触れる。出土馬歯については既往の古代及び中世の出土馬歯の計測値、及び現代小格馬（注7）の歯の計測値と出土馬歯の計測値と夫々対比して検討する。出土馬骨については既往の古代及び中世の出土馬骨の計測値と対比出来るものは努めて対比し、また林田（注8）及び西中川（注9）の現代の在来馬の計測値と対比して検討する。

2. 使用した基準

(1) 馬歯・馬骨の部位、記号、各部の名称及び測定部位

注10、11、12 参照

(2) 馬の大きさの表現方法

① 馬の大きさは林田重幸（注13）の体高区分による中形馬、小形馬の表現を用いた。

(3) 馬の年令の表現方法

① 馬の年令については市井正二（注14）の幼令馬、壮令馬、老令馬の区分を用いた。また馬歯による年令算定方法は西中川（注15）の公式を用いた。

(4) 単位

馬歯・馬骨の計測値は特別の記載のない限りmmを表わし、比率は%を表わす。

(5) 番号

図中の通番は本文、写真及び附表中の通番と一致する。また明らかに番号の記載されている馬歯・馬骨より分離したと思われる小歯片、小骨片は除外した。

3. 結果

(1) 馬歯・馬骨の出土状況

この遺跡の平安時代初期（9世紀）に属するという水田跡及び関連遺構の耕作土、埋土の中から、附図1～3並びに附写真に示すとおり馬の上顎切歯2、切歯1、上顎類歯22、下顎類歯11、小歯片5、上顎骨の一部1、下顎骨の一部1、肢骨の一部1、小骨片2、計46が出土している。

発掘調査の遺物番号として馬1～4の名称が附されており、本稿はその番号を引継いで使用したが、そ

附図1 馬歯・馬骨の出土位置と出土状況

図1. 馬歯・馬骨の出土位置

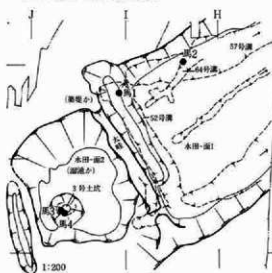
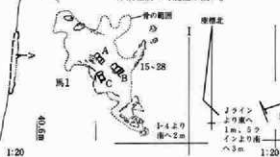


図2. 馬1出土状況 A点に上顎骨が額を上北西の方向に、C点に下顎骨が北西の方向に置かれ、解体後埋没の可能性が高い。



附図2 馬上顎及び下顎における出土馬歯の部位模式図

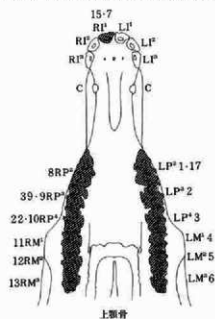


図3. 馬2出土状況 解体については不明である。14の馬歯が出土。多少配列乱れるが、No7RI¹、No1LP²、No2LP³、No3LP⁴、No4LM⁵、No12RM⁶、No13RM⁷と上顎歯が一同となってほぼ北西の方向に並び、1個体として認められる。下田中川久保馬A平安と名称を附す。

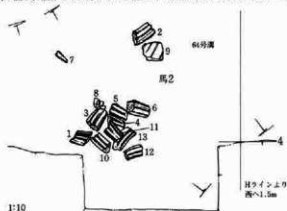
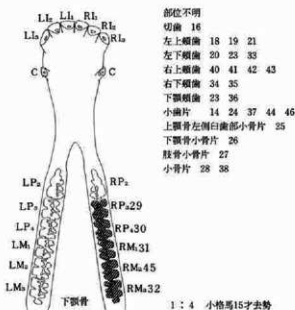
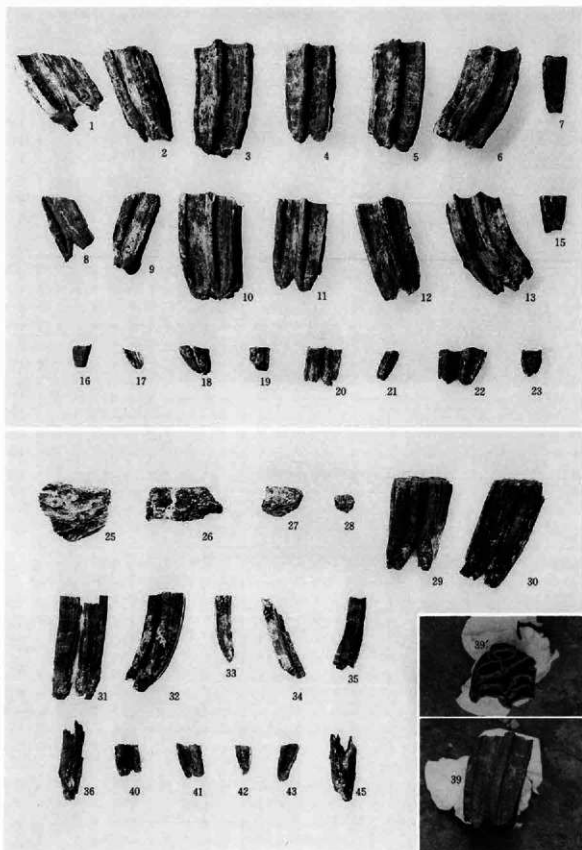


図3. 馬3・4出土状況 馬3は下顎骨に植立した馬歯が北西に向けて置かれ、周辺には風化した馬骨の筈がなかった。馬4は歯根を上にした右上顎臼歯が1出土している。馬3は馬4より小さく、出土の深さが異なると言う。



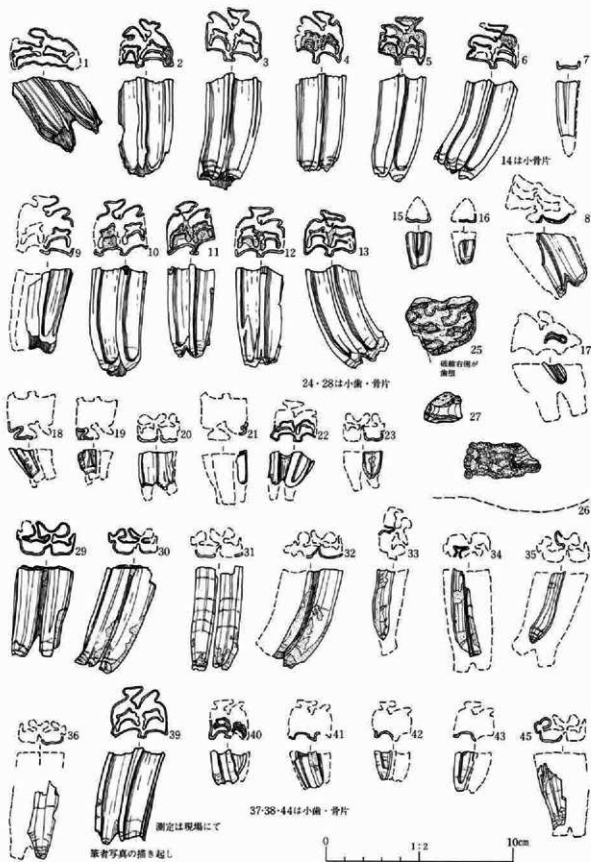
部位不明			
切歯	16		
左上頤歯	18	19	21
左下頤歯	20	23	33
右上頤歯	40	41	42 43
右下頤歯	34	35	
下顎頤歯	23	36	
小歯片	14	24	37 44 46
上顎骨左側臼歯部小骨片	25		
下顎骨小骨片	26		
肢骨小骨片	27		
小骨片	28	38	

1:4 小格馬15才姿勢



附写真 馬歯・馬骨 およそ1:2

附図3 馬歯・馬骨実測図



附表 1 下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨出土状態一覧

番号	出土地	時代	出土状態
1-14 馬2	H-3グリッド水田一面1に接する64号溝から出土。	平安時代初期 9世紀	遺構を埋めている砂の下から耕作土が現れたが、耕作土の最上面より1個の馬歯が出土し、そのや下の耕作土の中から10個の馬歯が出土している。馬2の馬歯が余り壊れていないので、それ以後より耕作されていなかったのではないかと担当の意見であった。 この地点より同一個体に属すると考えられる右上切歯1、左上白歯6、右上白歯6、計13の馬歯が出土している。馬歯の出土した場所の土壌には赤褐色の部分があり、かつては須蓋が埋没し、現在では風化して形をとどめないことを示している。これらの13の馬歯は良く取相を保っているものが多く、歯根エナメル質まで遺残していることもあり、また前述の須蓋の風化した跡もあるので、これらの馬歯は永く上顎骨の中に林立していたことを物語っている。馬歯は配列が乱れているが、北西部に右上第1切歯が出土し、左右第3後白歯が南東側に出土し、左右第2前白歯がその間の切歯寄りから出土している、この馬の須蓋は北西に向けて埋没されていたと考えられる。
15-28 馬1	I-4グリッド太靴に沿った東溝52-1号溝から出土。	平安時代初期 9世紀	発掘時発見当初から馬歯が断片状態であったが、馬骨は一団となっていて散らばってはいなかった。馬歯・馬骨の一部は耕作土の最上面から見えていた。 この地点より同一個体に属すると考えられる右上切歯1、切歯1、左上頬骨3、右上頬骨1、左下頬骨2、下顎頬骨1、小歯片1、上顎骨小骨片1、下顎骨小骨片1、肢骨小骨片1、小骨片1計14の馬歯・馬骨が出土している。附図1に見られるとおり、現地調査の時A点では上顎前白歯、上顎後白歯が2つ並んで歯根部を上にして出土しており、須蓋が顎を上にして置かれていたものと考えられる。またC点では下顎頬骨がほぼ北西方向に並び下顎骨に林立しているのを認めることが出来た。また下顎骨の風化が激しかったが小骨片を取り上げることが出来た。これらのことからこの馬の須蓋及び下顎骨は北西の方向に向け、須蓋は顎を上にして、その周辺に下顎骨、肢骨等が置かれていたものと考えられる。
29-38 馬3	I-5グリッド水田一面2にある3号土坑より出土（水田一面2は溜池と推定されている）。	平安時代初期 9世紀	この土壌より馬歯・馬骨が出土している。担当の意見によれば、3号土坑と言う小さな土壌の中で何かを行っていたらしく、この行っていたことは継承されていたものらしいとのことであった。 この地点より同一個体に属すると考えられる右下頬骨6、左下頬骨1、下顎頬骨1、小歯片1、小骨片1計10の馬歯・馬骨が出土している。これらの馬歯の中で右下顎頬骨は右下顎骨白歯部に林立したまま、顎面を下にして北向きに横たわって出土している。しかし馬骨の風化が激しく僅かに小骨片しか取り上げることが出来なかった。
39 馬4	I-5グリッド水田一面2にある3号土坑より出土（溜池最深部の土壌との推定）。	平安時代初期 9世紀	3号土坑から馬歯が出土しているが上記No.29-38とは離れて出土しており担当の意見では発掘中に移動したのではないとのことであった。 この地点から右上第3前白歯が1個出土している。この馬歯は歯根部を上にして出土しており、周囲には骨の風化したことを示すやや小さな赤褐色の土壌が点在している。恐らくは上顎骨が置かれ、この馬歯を除いて風化したものと考えられる。
40-44	I-4グリッド水田一面2の耕作土の中から出土（面2は溜池と推定されている）。	平安時代初期 9世紀	水田一面2の最上層土を発掘中に発見された。馬1とは距離的に近いものであった。 この区より右上頬骨4、小歯片1計5の馬歯が出土している。この馬歯は20才以上の老令馬の馬歯で、風化の度合い、大きさ、年令、形状、歯根等から馬1と同一個体に属すると考えられるが、次のI-5グリッドより出土している馬歯が牡令馬の馬歯であり、同一個体に属すると言う確証がつかぬので別個体とした。
45-46	I-5グリッド水田一面2の耕作土の中から出土。	平安時代初期 9世紀	I-5グリッド水田一面2より出土した馬歯はI-4グリッド水田一面2出土の馬歯とは距離的に離れている。また馬3、馬4とも出土した深さが違っていた。 このグリッドより右下第2後白歯1、小歯片1計2の馬歯が出土している。

れは同一個体と思われるもののみについてである。

この遺跡から出土した馬歯・馬骨の中で馬歯については遺存状態が極めて良好なものがある反面、極めて脆い一面を持っていた。しかし歯根までほぼ原相を保っているものが多いことは、これらの馬歯が永い間上顎骨臼歯部及び下顎骨臼歯部に植立したまま埋没していたことを示している。特にI-4グリッドの水田跡(水田一面1中の耕土または58号溝埋土上方)より出土している馬1及びI-5グリッドの水田跡(水田一面2中の3号土坑埋土)より出土している馬3は現地調査時(1993.6.4)筆者が下顎骨に植立しているのを認めたが、骨の風化が激しく僅かにI-4グリッドの馬1より上・下顎骨小骨片を取り上げることが出来たのみであった。そうした状態であっても馬1・3は各々1個体分のままとりありとしてよいような埋没、出土状態にあった。

馬2は水田跡耕土もしくは64号溝埋土最上層から出土し、極めて遺存が良かった。

馬歯が極めて良く原相を保っている一例としては、上野国の中毛・西毛より出土した平安時代の馬歯は、田端遺跡に見られるような地下水が及ぶ土壌中の藍鉄鉱による置換が行われていると考えられる馬歯を除いては、エナメル製の厚みは通常の場合1mm以下の薄いものであるが、馬2及びこの遺跡出土の他の馬歯のエナメル製の厚みは1.4~1.5mmの厚みを保っている。なお全般的に言えば各馬の馬歯は薄い黒褐色を帯びていて極めて脆く、咬合面附近の象牙質、セメント質の大部分を失っていて時代の古さを物語っている。

馬骨については馬1・3に附着していたが、各々風化が激しく赤褐色の土壌化した跡を認めた。馬1は、骨粉状態の骨の中でかろうじて残る骨片により頭蓋、下顎骨、股骨等の風化した跡と推定されたが、風化による土壌化が激しく僅かな上顎骨臼歯部、下顎骨臼歯部、部位不明の股骨の夫々小骨片しか取り上げることが出来なかった。

馬3に附着していた下顎骨と思われる骨片を1993.6.4の現地調査時に確認しているが、調査整

理後の状態では部位を明らかにし得る状態に土壌化状態であった。

旧時の埋没状態については、馬1は頭蓋が額を上北西の方向に置かれ、また下顎骨が左側を下にして北向きに置かれ、馬3は下顎骨が右側を下にして北向きに置かれ、馬4の上顎前臼歯が歯根を上にして出土し(馬4は額を上にして置かれていたことを物語っている。馬3と同一個体か否かについては後述)、また馬1は股骨の一部が出土していることから、これらの馬は解体後夫々の場所に置かれたものと考えられる。

これらの遺存体の出土状況は附表1、附図1、写真のとおりである。

(2) 出土馬歯・馬骨を有する個体数

出土馬歯・馬骨の中で出土状態、風化の度合い、形、大きさ、年令、色沢、歯根等から見て同一個体または同一個体の確率が極めて高いものは、馬1、馬2、馬3及びI-4グリッド(水田一面2の耕作土)より出土したNo.40~No.44である。No.40~No.44は馬1と同一個体に属するものと考えられるが確証が得られないので別個体とした。

同一場所より出土している馬3と馬4とが同一個体であるか否かについては、年令的には両馬ともほぼ同じであるが、馬3が馬4よりやや小さい馬であることから見て別個体とした。

出土馬歯・馬骨は個体数の最小限度で考えると6個体である。時代的にはすべて平安時代初期(9世紀)に属すと言う。

同一個体と思われるもののうち、H-3グリッド水田跡より出土した馬2、No.1~No.14は1体分として良くまとまったものであり、上野国の古代の馬としては歯冠の幅率が大きく、今後の検討に資するものと考えられるので以後この馬歯を有する馬に固有名称を与え、下田中川久保馬A平安と呼ぶこととする。

附表 2 下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨の形態

No.	出土馬歯の部位	個体の同一性	特 徴			欠損状態その他
			大きさと全体の形	咬合状態	エナメル製の特徴	
1	LP ²	出土状態、風化の度合、大きさ、形状、	台形を示している。	咬耗は進んでいる。	内部エナメル製はやや複雑で、前後小窩は大きく、扁平で前後に伸びていて力強い。	内部象牙質及びセメント質を失い、エナメル製は短冊状に割れ、前葉先端を失う。
2	LP ³	年令、色沢、歯相等から見て同一個体である	柱状で太く力強い。	咬耗は進んでいる。	前歯齶、中歯齶の発達良好で前歯の反りは深い。内部エナメル製はやや複雑である。前・後小窩は大きくて力強い。	内部象牙質及びセメント質を失い、エナメル製は短冊状に割れている。
3	LP ⁴	噛申は極めて高い。	柱状で太く力強い。	咬耗は進んでいる。	前・中歯齶の発達良好で前歯の反りは深い。前・後小窩は大きく、各々の耳状部は縮毛状を呈して長く歯齶に向って伸びている。	内外のエナメル製は良く原相を保っている。咬合面から約1cmの深さ迄内部象牙質、セメント質を失う。
4	LM ¹		柱状でやや細い。	咬耗は進んでいる。	原歯と次歯の発達良好で、原歯の後縁は顕著である。内部エナメル製はやや複雑である。	前・後小窩を除き象牙質を失い、前後の製は短冊状に割れているが内外のエナメル製は良く原相を保っている。
5	LM ²		柱状でやや細い。	咬耗は進んでいる。	内外エナメル製は小さいけれども良く発達している。特に原歯は前後に伸び発達良好である。	咬合面から約1cmの深さまで象牙質、セメント質を失っている。内外のエナメル製は良く原相を保っている。
6	LM ³		柱状で美しい弧状湾曲を示している。	咬耗は進んでいる。	内外エナメル製はやや小さいが良く発達し、特に原歯は長く後方に伸びている。	咬合面から約1.5cmの深さまで象牙質、セメント質を失っている。原歯咬合面の一部を失っている以外良く原相を保っている。
7	RP ¹ 唇面エナメル製		やや細くて短い。	咬耗は進んでいる。	エナメル製の反りはやや強い。浅くやや太い縦溝が走っている。	唇面のエナメル製のみで歯根部を失っている。
8	RP ² 舌面エナメル製の一部		やや短く平たい。	咬耗は進んでいる。	原小窩に僅かに原歯の一部が附着している。	舌面エナメル製の一部分のみ。
9	RP ³ 後葉		柱状でやや短い。	咬耗は進んでいる。	内外エナメル製は大きくて力強い。特に次歯、後小窩、原歯後谷は大きくて良く発達している。	前葉を失うほか、象牙質セメント質の大部分を失っている。
10	RP ⁴		柱状で太く力強い。	咬耗は進んでいる。	内外エナメル製は大きくて力強い。特に前・後小窩、次歯、原歯後谷、原歯の発達は良好である。	中・後歯齶、前後の歯齶の咬合面を一部欠いているほか、咬合面より約1cmの深さまで象牙質、セメント質を失っている。
11	RM ¹		柱状でやや細くて、やや短い。	咬耗は進んでいる。	内外のエナメル製はやや小さいが良く発達している。内部エナメル製はやや複雑で、前小窩の耳状部の縮毛状が目立っている。	前・後小窩より舌側の象牙質、セメント質が咬合面より約1cmの深さまで失われている以外良く原相を保っている。

下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について

No.	出土馬歯の部位	個体の同一性	特 徴			欠損状態その他	
			大きさと全体の形	咬合状態	エナメル装の特徴		
12	RM ¹	出土状態、風化の度合、大きさ、形状、年令、色	柱状でやや細くて、やや短い。	咬耗は進んでいる。前・後縁と中葉が凹み咬合はやや不整である。	内外のエナメル装はやや小さいが良く発達している。内部エナメル装はやや複雑で、原歯の成長が目立っている。	前後のエナメル装の一部を欠いているほか原歯より頬側の象牙質、セメント質が咬合面より約1cmの深さまで失われている。	
13	RM ¹	沢、歯槽等から見て同一個体である	柱状で美しい弧状湾曲を示している。	咬耗は進み、前・後縁と中葉が凹み咬合はやや不整である。	内部エナメル装は前後に長くて平らであるが良く発達して力強い。原歯は平らで前後に伸びている。	咬合面より約1cmの深さまで象牙質、セメント質が失われている。	
14	小歯片	歯牙は極めて高い。	短い短棒状の小歯片と細かい小歯片とが混ざり合っている。	不 明	不 明		
15	R1 ¹ 唇面	出土状態、風化の度合、大きさ、形状、年令、色	太くて著しく短い。	咬耗は著しい。	唇面に2本の太い縦溝が通っている。	唇面以外を失っている。	
16	切歯唇面	同上	太くて著しく短い。	咬合面を欠いていて不明。	1本の縦溝が通っている。	唇面の遠心面、咬合面を欠いている。	
17	L1 ¹ 前小歯	沢、歯槽等から見て同一個体である	種率は極めて高い。	小さくて船形をしている。	咬耗は著しい。	頬面は楕状をなし、前小窩の前側の耳状部は痕跡を残すのみである。後側の耳状部は上方に伸び、エナメル装は誠に単純である。	前小窩以外を失っている。
18	左上前臼歯原小歯	同上	三角歯状をなし著しく短い。	咬耗は著しい。	原歯前凹は深く原歯の前側はやや大きい。	原小歯及び原歯の一部以外を失っている。	
19	左上後臼歯原歯	同上	小さなチップ状を示し著しく短い。	咬耗は著しい。	原歯前凹及び原歯は小さ目である。	原小歯及び原歯の一部以外を失っている。	
20	左下後臼歯頬面エナメル装	同上	二つの短棒状を示し著しく短い。	咬耗は著しい。	下原歯はやや幅が広く、下次歯は狭くて多少丸味を帯びており、下後隆起を欠く。	頬面エナメル装のみで下後隆起及び前歯部を欠く。	
21	左上臼歯次歯	同上	三角柱状を示し著しく短い。	咬耗は著しい。	次歯はやや丸味を帯び、次歯凹は浅く、次歯隆が僅かに附着している。	次歯隆及び次歯以外を失っている。	
22	RP ¹ の一部	同上	小さくて著しく短い。	咬耗は著しい。	前・中附歯は太くて力強い。中附歯は歯根部で後附歯と接合している。内部エナメル装はやや複雑で、前・後小窩は平たく、特に後小窩は前後に長く両耳状部は頬面に向って展開している。	前・後小窩より舌側を失っている。	
23	下顎臼歯頰側エナメル装	同上	楕状で小さく著しく短い。	咬耗は著しい。	エナメル装はやや厚く楕状をなしている。楕状部の中心が隆起しているので下次歯と思われる。	下次歯以外を失っている。	
24	小歯片	同上	小さな短い短棒状のもの及び細かい小歯片とが混ざり合っている。				

下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について

No.	出土馬歯の部位	個体の同一性	特 徴			欠損状態その他
			大きさと全体の形	咬 合 状 態	エナメル製の特徴	
29	RP ₂	出土状態、風化の度合、大きさ、形状、年令、色沢、歯相	長四角柱状でやや太い。	咬耗は進んでいる。	内外のエナメル製は厚く各様とも大きくて力強い。特に下原歯、下次歯は大きく、下内齧谷は大きく前後に伸びている。内外のエナメル製は極めて脆い。	下次隆起の咬合面附近を欠き、咬合面より約5mmの深さの象牙質、セメント質を失っている。
30	RP ₄	等から見て同一個体である確率は極めて高い。	長四角柱状でやや長い。	咬耗はやや進んでいる。	頬面エナメル製はやや厚いが、内外のエナメル製は極めて脆い。下原歯、下次歯の発達良好で、下内齧谷は前後に長く伸びている。	下次隆起、下原歯の咬合面附近を欠き、咬合面より約5mmの深さまで象牙質、セメント質を失っている。
31	RM ₁ 頬面エナメル製		扁平で、短歯状で、やや長い。	咬耗はやや進んでいる。	頬面エナメル製は厚いが極めて脆い。下原歯、下次歯の発達良好で力強い。	下原歯、下次隆起以外を失っている。
32	RM ₂ 前歯		細い四角柱状で、美しい弧状湾曲を示している。	咬耗はやや進んでいる。	前歯及び中葉の外部エナメル製であるが、各歯はやや大きく力強い。	前・中葉の外部エナメル製で、舌面咬合面附近を失っている。
33	左下臼歯下後隆起		細くて小さく、短歯状である。	咬耗は進んでいる。	エナメル製はやや厚いが極めて脆い。下後隆起の発達良好である。	下後隆起のエナメル製のみである。
34	右下臼歯下内齧谷		小さな短歯状である。	咬耗は進んでいる。	下内齧谷の発達良好で前後に長く伸びている。	下内齧谷のエナメル製のみである。
35	右下臼歯下後附歯		小さな短歯状である。	咬耗は進んでいる。	下後附歯の発達良好でエナメル製はやや厚い。	下後附歯のエナメル製のみである。
36	下顎臼歯頰面エナメル製の一部		扁平で短い。	欠けていて不明である。	発達良好であるが極めて脆い。歯根部に数本の歯槽が走っているほか、2本の細い歯槽が走っている。	頰面エナメル製の一部である。
37	小歯片		小さな短歯状の小歯片及び細かな齧歯片。			
39	RP ¹		太い四角柱状でやや短い。	咬耗は進んでいる。	前・中附歯の発達は良好であるが内部エナメル製は比較的古拙である。前・後小窩はやや大きい。	ほぼ歯相を保っている。
40	右上前臼歯の一部	出土状態、風化の度合、大きさ、形状、年令、色沢、歯相	小さく、複雑な形状をしていて甚だ短い。	咬耗は激しい。	前・中附歯はやや細く輪郭は不明である。前歯の凹みは深い。前・後小窩は小さく、前後の耳状部は単純である。	頰面前葉及び前・後小窩以外を失っている。
41	右上前臼歯中附歯	等から同一個体である確率は高い。	小さくて甚だ短い。	咬耗は激しい。	中附歯はやや太く簡明である。前歯の凹みは深い。	頰面中葉エナメル製のみである。
42	右上臼歯前歯		小さな三角形扁平状で甚だ短い。	咬耗は激しい。	エナメル製はやや厚い。前附歯は輪郭不明で前歯の反りは浅い。	頰面前葉エナメル製である。
43	右上臼歯前歯		細い小さな三角形扁平状で甚だ短い。	咬耗は激しい。	エナメル製はやや厚く、前附歯の輪郭不明で前歯の凹みはやや深い。	頰面前葉エナメル製である。

下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について

No.	出土馬歯の部位	個体の同一性	特 徴			欠損状態その他
			大きさと全体の形	咬 合 状 態	エナメル装の特徴	
44	小歯片	同上	小さな短歯状の小歯片である。			
45	RM ₂ 後葉の一部	出土状態、風化の度合、色沢等より同一個体である確率は高い。	四角柱状で短い。	咬合面欠損のため不明。	エナメル装はやや厚く咬合面附近は欠損していて短いが全体に力のみまぎっている。下次隆はやや細く、下次隆起が後方に大きく突き出ている。後の歯からの圧迫の少ないことを物語っている。下内隆は小さい。	後葉の一部で咬合面を欠いている。
46	小歯片		短歯状の短い小歯片と細歯片である。			
No.	馬骨の部位	個体の同一性	特 徴			欠損状態その他
25	上顎左側臼歯部小骨片		風化著しく、細歯状歯皮状の凹凸が激しく、一端に歯槽溝と思われる2つの凹みが見られた。前側歯槽断面に歯根部の断面と思われるものを認めた。			小骨片である。
26	下顎骨小骨片		褐色を呈して極めて脆く、軽く湾曲した短歯状の小骨片で風化のため緻密骨は松樹皮状を呈している。一端の表層部が剝離している約1cmの部分には下顎骨特有の繊維の細かい風化亀裂を認む。風化のため赤褐色泥状と化した物質を認むるも海綿骨と判断出来るものはなかった。			
27	数骨小骨片	である確率は高い。	淡褐色を呈し極めて脆く、緻密骨は薄いコルク状を呈し、所々緻密骨の剝離している箇所には極めて細かい海綿骨を見ることが出来る。一面は平らで半円形を示し、反対面は斜めで先端がややせり出している。側面は開閉面のように凹んでいる。			約2×1cm程度の小骨片である。
28	小骨片		海綿骨の一部と考えられる小骨片。			
38	小骨片					

(3) 出土馬歯・馬骨の遺存状態とその形態

下田中川久保馬A平安の馬歯No. 1～No. 14は淡黒褐色で、白歯は柱状をしていて力強い。遺存状態は極めて良好で、良く原相を保っているものが多い。エナメル装は極めて脆く、咬合面附近の内部象牙質、セメント質の大部分を失っている。前附歯、中附歯の発達は良好である。内部エナメル装はやや複雑で、各歯の発達は良好である。特に上野国の古代の馬としては歯冠の幅率の高いことが目立ち、特記される。その他No. 15～No. 46の馬歯・馬骨の遺存状態並びに形態は附表2のとおりである。

(4) 出土馬歯・馬骨を有する馬の性別

犬歯及び寛骨を確認することが出来ないで性別は不明である。

(5) 出土馬歯・馬骨を有する馬の年齢

飼育の飼料が異なるので現代馬をもって古代の馬の年齢を類推することは妥当でないと考えられるが一応西中川の年齢推定公式により出土馬歯を有する馬の年齢を類推すると附表3のとおりである。

また出土した馬歯・馬骨を有する馬の年齢を分類すると次のとおりである。

附表 3 下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬の性、年令、大きさ

No.	個体の同一性	性	年 令		大 き さ		備 考
			年 令	区分	推 定 体 高	体 高 区 分	
1-14	同一個体 下田中川久保 馬A平安	不明	9.6才±3.7 (n=12)	社令	131.8cm±9.1 (n=8)	中形馬の中では中位の馬	同時代の馬と比べると歯冠長はやや大きく、歯冠幅、幅率ともに大きい。現代小格馬と比べると歯冠長はやや小さいが、歯冠幅、幅率ともに大きい。
15-28	同一個体	不明	20.5才±0.5 (n=3)	老令	130.6cm (n=2)	中形馬の中では小さい馬	馬歯がすべて欠損しているので歯冠長を推定出来るものについて言えば、同時代の馬と比べると歯冠長はやや大きい、現代小格馬と比べると歯冠長はやや小さい。
29-38	同一個体	不明	10.6才±2.1 (n=4)	社令	133.7cm (n=2)	中形馬の中では中位の馬	同時代の馬と比べると歯冠長はやや大きく、歯冠幅、幅率はやや小さい。現代小格馬と比べると歯冠長はやや小さく、歯冠幅、幅率はやや大きい。
39		不明	11.4才	社令	138.6cm	中形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比べると歯冠長はやや大きく、歯冠幅、幅率ともに大きい。現代小格馬と比べると歯冠長は同じであるが、歯冠幅、幅率ともに大きい。
40-44	同一個体	不明	20.8才±0.5 (n=4)	老令	不明	不明	不明
45-46	同一個体	不明	不明	社令	不明	不明	不明

老令馬 No.15～No.28 (馬1)、No.40～No.44 小計2、社令馬、No.1～No.14 (馬2)、No.29～No.38 (馬3)、No.39 (馬4)、No.45～No.46 小計4、合計6。

(6) 出土馬歯・馬骨を有する馬の大きさ

出土馬歯・馬骨の計測値は附表4、5のとおりである。この計測値を既往の出土馬歯の計測値(注7)及び現代小格馬の馬歯の計測値(注7)と比較してその結果を取りまとめたものが附表3である。出土した馬歯・馬骨を有する馬の大きさを分類すると次のとおりである。

中形馬の中では大きい馬、No.39(馬4)、小計1、中形馬の中では中位の馬、No.1～No.14 (馬2)、No.29～No.38 (馬3)、小計2、中形馬の中では小さい馬、No.15～No.28 (馬1)、小計1、不明、No.40～No.44、No.45～No.46、小計2、合計6である。

(7) 出土馬歯・馬骨を有する馬の改良度

風化が激しく馬骨として取り上げることが出来たものは僅かに上顎骨左側臼歯部の小骨片、下顎骨臼歯部の小骨片並びに部位不明の肢骨の小骨片だけであったので馬骨から大きさを推定することは出来なかった。そのうち改良度を示すとされている歯冠幅及び幅率(歯冠幅/歯冠長)(注16)を計測出来たものは上顎歯9 (No.3～No.13=馬2、No.39=馬4)、下顎歯2 (No.29～No.30=馬3)、計11(3個体)であった。これらの馬歯の幅率の平均値は附表6のとおり、上顎歯においては平均 $101.7\% \pm 7.5$ 、(n=9)、下顎歯においては平均 $\bar{x}=58.3$ 、(n=2)である。この数値を附表8に示す平安時代における他の5つの遺跡(日高遺跡、三ツ寺Ⅲ遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、国分僧寺・尼寺中間地域)から出土した上顎頰歯の平均幅率 $91.5\% \pm 12.7$ (n=16)、

下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について

附表 4 下田中川久保遺跡出土の馬歯の計測値

No.	馬歯の部位	歯冠長 (EGL)	歯冠幅 (EGB)	幅 率	TH (ram)	TH (cent. P)	Buccal TH Palatal TH	エナメル厚 (頬 側-舌側)	重 量	摘 要
1	LP ²	欠損	欠損	／	33.1	31.9	49.8	1.4-1.2	10.9	前側翼を失う
2	LP ³	欠損	21.7	／	42.4	40.4	53.8	1.5-1.4	16.5	前側翼を失う
3	LP ⁴	29.8	28.6	96.0	52.7	42.7	59.8	1.4-1.3	27.9	
4	LM ¹	26.2	28.6	109.0	44.6	37.7	49.8	1.7-1.2	28.4	
5	LM ²	25.2	27.2	108.0	51.1	44.9	51.7	1.2-1.0	24.3	
6	LM ³	27.2	24.6	90.0	51.1	48.8	56.5	1.4-1.1	29.3	
7	RP ¹ 唇面	欠損	欠損	／	欠損	欠損	29.2	1.6-／	1.2	歯根部欠損
8	RP ² 舌面	欠損	欠損	／	欠損	欠損	36.7(舌面)	／-1.2	1.3	
9	RP ³ 後葉	欠損	欠損	／	35.4	欠損	44.9	1.4-0.9	7.2	
10	RP ⁴	28.3	29.4	104.0	47.3	47.2	54.8	1.6-1.5	29.4	
11	RM ¹	25.6	29.3	114.0	40.9	34.3	47.6	1.4-1.3	21.5	
12	RM ²	25.7	26.7	103.9	47.1	44.4	51.2	1.4-1.0	21.9	
13	RM ³	26.4	24.7	93.6	50.9	45.1	59.1	1.6-1.2	23.0	
14	小歯片								13.7	泥を含む
15	RP ¹ 唇面	13.8	欠損	／	欠損	欠損	19.6	1.4-／	1.1	歯根部を欠く 社令時鑑定歯冠 長17.5
16	切歯唇面	長 8.6	幅 3.6	／	欠損	欠損	高 12.1	1.0-／	0.8	咬合面、歯根部を 欠く
17	LP ² 前小窩	長 9.1	幅 6.5	／	欠損	欠損	高 15.2	1.0-0.8	0.3	
18	左上前臼歯 原小歯	長 9.0	幅 1.6	／	欠損	欠損	舌面17.0	／-1.4	1.3	
19	左上後臼歯 原歯	長 9.4	幅 5.3	／	欠損	欠損	舌面12.7	／-1.1	1.1	
20	左下後臼歯 歯面	長18.0	欠損	／	15.9	欠損	高 20.6	1.6-／	1.5	
21	左上臼歯次 歯	長 4.3	幅 7.6	／	欠損	欠損	舌面17.4	1.0-／	0.8	
22	RP ² の一部	24.8	欠損	／	16.4	欠損	20.1	1.2-／	3.9	社令時鑑定歯冠長 26.5-27.0
23	右下臼歯唇 面	長10.0	幅 3.8	／	欠損	欠損	14.0	1.4-／	0.7	

下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について

No.	馬歯の部位	歯冠長 (EGL)	歯冠幅 (EGB)	傾 率	TH (ram)	TH (cent. P)	Buccal TH Palatal TH	エナメル厚 (頬側-舌側)	重 量	備 考
24	小歯片								1.3	
29	RP ₅	29.2	18.6	63.7	37.1	欠損	47.4	1.7-1.2	19.1	
30	RP ₄	27.6	14.6	52.9	53.3	欠損	59.2	1.5-1.0	19.2	
31	RM ₁ 頰面	欠損	欠損	/	48.3	欠損	54.6	1.5-/	12.9	
32	RM ₁ 前葉	欠損	14.6	/	49.1	欠損	54.8	1.4-1.3	9.3	
33	左下臼歯下後隆起	長 4.3	幅 9.2	/	欠損	欠損	高 35.7	厚 0.9	1.3	
34	右下臼歯下内溝谷	長 9.3	幅 6.4	/	欠損	欠損	高 46.0	厚 1.0	2.3	
35	右下臼歯下後附歯	長 4.1	幅 8.9	/	欠損	欠損	高 40.6	厚 1.4	1.9	
36	下顎臼歯頰面	長11.9	幅 8.6	/	欠損	欠損	高 42.9	1.2-/	2.2	
37	小歯片								5.3	
39	RP ³	30.9	29.4	97.0	43.6		50.2			発掘現場で計測標品欠落
40	右上前臼歯の一部	長19.8	幅10.1	/	18.0	欠損	18.7	1.5-/	1.3	
41	右上前臼歯中附歯	長13.2	幅 5.5	/	19.5	欠損	20.9	1.4-/	0.8	
42	右上臼歯前葉	長 9.9	幅 4.1	/	欠損	欠損	15.6	1.2-/	0.5	
43	右上臼歯前葉	長 9.7	幅 4.0	/	欠損	欠損	21.2	1.4-/	0.7	
44	小歯片								2.9	
45	RM ₁ 後葉の一部	長10.7	幅11.7	/	欠損	欠損	高 35.4	1.5-1.4	3.9	
46	小歯片								0.1	

長=前後の距離、幅=左右の距離、高=上下の距離

附表 5 下田中川久保遺跡出土の馬骨の計測値

No.	馬骨の部位	長	種	短	種	厚	重	量
25	上顎骨左臼歯部小骨片	37.5		33.4		16.6	6.7	
26	下顎骨小骨片	41.4		17.7		8.6	3.7	
27	肋骨小骨片	20.6		15.2		11.7	1.8	
28	小骨片						0.8	
38	小骨片						4.6	

附表 6 下田中川久保遺跡出土の馬歯の平均幅率

上 顎 臼 歯			下 顎 臼 歯		
No.	馬歯の部位	幅 率	No.	馬歯の部位	幅 率
3	LP ^a	96.0	29	RP ₃	63.7
4	LM ¹	109.0	30	RP ₄	52.9
5	LM ²	108.0	平 均		58.3
6	LM ³	90.0			
10	RP ^a	104.0			
11	RM ¹	114.0			
12	RM ²	103.9			
13	RM ³	93.6			
39	RP ^a	97.0			

下顎頰歯の平均幅率51.4%±7.2 (n=41) に比べると極めて高い数字を示し、特異なことと言わねばならない。この値は馬2、3、4についての幅率であるので個体数で言えば全体の50%についての値である。馬歯について言えば全体の11/41=26.8%である。

この個体数の50%と言う数字は6個体中幅率の判明している3個体の馬歯全部の合計した平均幅率が上顎歯では101.7%±7.5 (n=9) で、下顎歯では58.3 (n=2) と言うことである。この平均幅率は極めて高い数値であって、他の5遺跡中、平安時代の幅率の判明している日高遺跡、下東西遺跡、国分僧寺・尼寺中間地域3つの遺跡の中では平均幅率がそのような高い数値を示すものはないので、一歩譲歩して、1個体に属すると考えられる馬歯のうち、下田中川久保遺跡出土の馬歯の平均幅率が示す数値を用い、上顎については1個の馬歯でも幅率101を越すもの、下顎については1個の馬歯でも幅率58を越すものの個体数を調べると、日高遺跡7個体(馬歯数n=9)中、上顎臼歯が幅率101を越え、下顎臼歯が幅率58を越えるものは2個体(28.5%)、下東西遺跡2個体中(n=2)幅率101及び58を越す

上 顎 臼 歯		下 顎 臼 歯	
平 均	101.7±7.5 (n=9)		

附表 7 各遺跡出土馬歯数

遺跡名	上顎歯	下顎歯	不明	計
日 高	15	4		19
三ッ寺Ⅲ	18	15		33
下東西	17	23		40
田端	39	13		52
中間地域	276	241	62	579
計	365	296	62	723

もの1個体(50%)、国分僧寺・尼寺中間地域10個体中(n=46)101及び58を越すもの2個体(20%)である。

このように1個でも幅率が上顎臼歯においては101、下顎臼歯においては幅率58を越えるものを有する個体を数えてすら、下東西遺跡の50%を除いては日高遺跡28.5%、国分僧寺・尼寺中間地域20%と言う低いものであって、下田中川久保遺跡出土の馬歯を有する個体数の50%が高い幅率を示していると言うことは平安時代の上野国に於いては極めて珍しいことと言わねばならない。

また幅率が判明し、高い幅率を示している11個の馬歯が全体の馬歯の26.8%と言うことは大変低い値のように感じるが附表7に見られるとおりに上野国の他の5つの遺跡から出土している全時代を通じての馬歯の合計は上顎歯365、下顎歯296、不明62、計723であり、そのうち附表8に見られるとおりに幅率の判明しているものは、上顎歯77、下顎歯139、計216であり、比率にすると216/723=29.9%で左程高い数字でなく、ここでは下田中川久保遺跡の馬2、3、4の11の馬歯をもってこの遺跡の幅率を現しているものとして話を進めて行きたい。

前述のように幅率が馬の改良度を現わすものとするならば(注16) 下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬は平安時代に於ける上野国の馬としては大変改良度の高い馬であったと言い得る。また永い年月の間下田中川久保遺跡の人々が馬の改良に力を入れて来た結果でもある。

なお馬の改良がいかに永い年月を要するかと言うことの例としては国分僧寺・尼寺中間地域出土馬歯の幅率のことがある。附表8時代別、遺跡別、出土馬歯の平均幅率の中で、平安時代の国分僧寺・尼寺中間地域の出土上顎白歯の平均幅率は 87.3 ± 11.8 ($n=8$)で、下顎白歯の平均幅率は 51.4 ± 7.6 ($n=38$)であった。この平均幅率を上野国の平安時代の日高遺跡、下東西遺跡の上顎白歯の夫々の平均幅率、 94.0 ± 12.2 ($n=7$)、 107.5 ($n=1$)及び下顎白歯の夫々の平均幅率、 47.5 ($n=2$)、 57.2 ($n=1$)と比較すると、国分僧寺・尼寺中間地域の平均幅率は上顎白歯では3つの遺跡中最低であり、また下顎白歯の平均幅率については他の遺跡の例数が少なく判断し難いところであるが一応順序とすると第2位と言うことになるが、第1位の下東西遺跡の 57.2 を大部下回っている。この上顎白歯の平均幅率の最低、下顎白歯の平均幅率第2位と言う成績は永く中世に迄尾を引いている。

中世における国分僧寺・尼寺中間地域出土の馬歯の平均幅率は上顎白歯については 87.9 ± 12.7 ($n=12$)で、下顎白歯については 54.9 ± 7.6 ($n=25$)である。この平均幅率を上野国の中世の日高遺跡、三ッ寺遺跡、下東西遺跡、田端遺跡の上顎白歯の夫々の平均幅率、該等なし、 93.2 ± 16.3 ($n=12$)、 90.3 ± 13.1 、該等なし、及び下顎白歯の夫々の平均幅率 55.0 ($n=1$)、 51.2 ± 9.7 ($n=12$)、 55.0 ± 8.3 ($n=14$)、 47.3 ($n=2$)、と比較すると、上野国分僧寺・尼寺中間地域の平均幅率は中世における上野国の5つの遺跡出土の馬歯の平均幅率の中で上顎白歯については最低で、下顎白歯については第3位である。

近世における上野国の他の遺跡出土の馬歯については既資料の中で幅率を意識して計測した例が少ないので、ここでは国分僧寺・尼寺中間地域出土馬歯について下顎白歯の平均幅率の 61.6 ± 11.0 ($n=22$)を用いることとするが、下顎白歯の平均幅率60以上と言うのは大変高い値であって附表8の中では近世の国分僧寺・尼寺中間地域の成績以外では見当たらない位の良い数値である。

附表 8 時代別、遺跡別、出土馬歯の平均幅率

上 顎 白 歯				下 顎 白 歯			
時 代	遺 跡 名	馬歯数	平均幅率	時 代	遺 跡 名	馬歯数	平均幅率
平 安	日 高	7	94.0 ± 12.2	平 安	日 高	2	47.5
	下 東 西	1	107.5		下 東 西	1	57.2
	中間地域	8	87.3 ± 11.8		中間地域	38	51.4 ± 7.6
	計及平均	16	91.5 ± 12.7		計及平均	41	51.4 ± 7.2
中 世	三ッ寺Ⅲ	12	93.2 ± 16.3	中 世	日 高	1	55.0
	下 東 西	8	90.3 ± 13.1		三ッ寺Ⅲ	12	51.2 ± 9.7
	中間地域	12	87.9 ± 12.7		下 東 西	14	55.0 ± 8.3
	計及平均	32	90.5 ± 14.5		田 端	2	47.3
中世-近世	中間地域	1	83.9	中間地域	25	54.9 ± 7.6	
不 明	中間地域	28	87.0 ± 16.7	計及平均	54	53.8 ± 8.3	
合計及平均		77	89.3 ± 13.3	中世-近代	中間地域	11	55.5 ± 7.8
備考 古墳時代の例としては幅率の判明している三ッ寺Ⅲ遺跡のNo.88M ² がある。各歯は力強いものであったが幅率は80.3である。M ² は元來幅率の少ないものが普通であるし、また一例だけなので除いた。				近 敷	中間地域	22	61.6 ± 11.0
				不 明	中間地域	22	63.4 ± 12.5
				合計及平均		139	55.4 ± 10.1

このように平安時代における国府附近は長い間の東北経営のため根こそぎ馬が公用に徴発され、馬の改良どころではなく、平安時代に良馬を失った影響は中世に至っても回復することはなかった。近世に至って国分僧寺・尼寺中間地域の馬はやっと改良度の高い馬となった。このように馬の改良にはいかに永い年月を要するかと言うことを改めて思い知らされた感である。この下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨は前代からの改良の結果と考えることが出来る。したがって8世紀代に溯った段階に向上的な飼育が行われていたと推測される。

4. 考察

下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬を飼育していた人々

(1) 馬1、2、3、4、No.40～No.44、No.45～No.46を夫々1個体として認めた理由

[馬2] No.1～No.14

①水田一面1に接する64号溝の同一地点より出土していること。

②13の馬歯は良く原相を保ち、歯根エナメル質まで遺残し、永い間同一上顎骨に植立していたと考えられること。

③馬歯は第1切歯より第3後臼歯まで北西の方向に向いて一団となって出土していること。

④どの馬歯も太くて力強く、内、外の各歯の発達良好で内部エナメル質はやや複雑で歯相が一致すること。

⑤馬歯はいずれも10才前後で、中形馬の中位にあり、年令、大きさが一致すること。

[馬1] No.15～No.28

①細片状態で出土しているが、頭蓋を上にて北西の方向に置かれ、下顎骨に歯が植立したまま北西に向いて出土している。

②上・下の馬歯はいずれも咬耗激しく、20才を越え、中形馬の中では小さい馬で、年令、大きさが一致すること。

③咬耗激しく馬歯が短いため、内部エナメル質は極めて単純で歯相が一致すること。

[馬3] No.29～No.38

①水田一面2にある3号土坑より右下顎骨に馬歯が植立したままほぼ北向きになって出土している。

②馬歯は柱状で力強く、内外の各歯とも大きくて力強く、歯相が一致している。

③馬歯はいずれも10才を越え、中形馬の中では中位の馬で、年令、大きさが一致する。

[馬4] No.39

①馬3と同一土壌より出土している。

②1個の馬歯であるが柱状で太く、大変力強い

③年令11才を越え、中形馬では大きい馬で、馬3とは異なる馬である。

[馬No.40～No.44]

①I-4グリッドの水田一面2の耕作土中から出土していること。

②いずれの馬歯も咬耗激しく20才を越えているものである。

③歯相、大きさ、年令等馬1と同一個体に属すると考えられるが確証がないので別個体とした。

[馬No.45～No.46]

①I-5グリッド水田面より出土している下顎臼歯と小歯片である。

②馬3、4とも出土した深さが異なり、No.40～No.44とは距離的に異なる馬であると言う。

③折れた右下第2後臼歯であるが社令で大きさが不明である。No.46は小歯片である。

(2) 埋没前に個々の馬が解体されていたか否かについて

[馬1] (No.15～No.28)

①現地調査の時(1993.6.4) I-4グリッド太畦に沿った東溝から風化により赤褐色の土壌化した頭蓋、下顎骨等と推定される馬骨の跡を認めた。

②A点より上顎臼歯、上顎後臼歯が2個並んで歯根部を上にして出土している。2つの馬歯が歯根部を上にして出土したことは頭蓋が顎を上にして北

西の方向に向けて置かれたことを示している。

(頭蓋に下顎骨が付いたまま埋没した時は、馬骨が風化により崩れる時に馬歯は歯根部を上に向けたまま埋没する確率は少ない)

③C点では下顎頰歯が北西の方向に並び、下顎骨に植立しているのを認めた。

④この地点から部位不明の肢骨の小骨片が出土している。

これらのことから、これらの馬骨は解体後夫々の場所に置かれたものと考えられる。

【馬2】(No. 1~No. 14)

①水田一面1に接する64号溝の同一地点より14個の馬歯が出土している。

②馬歯は第1切歯から第3後臼歯までおおむね北西の方向に向かって一団となって出土している。

③14の馬歯は小歯片を除いて良く原相を保ち、歯根部エナメル質まで良く遺残している。歯根部エナメル質まで良く遺残すると言うことは永い間上顎骨臼歯部に植立していたことを物語っている。

これらのことから同一上顎骨に植立していたことはわかるが、解体については不明である。しかしこれらの馬歯が北西の方向に向かって一団となって出土している点で、解体後この地点に上顎骨が置かれたことを想定しても大きな間違いはないものと考えている。

【馬3】(No. 28~No. 38)

①I-5グリッド水田一面2にある3号土坑より9個の馬歯と1個の小骨片が出土している。

②現地調査の時右下顎頰歯が右下顎骨臼歯部に馬歯を植立したまま頰面を下にして北向きに横たわって出土している。

この下顎骨が頰面を下にして北向きに置かれている点で、解体後この地に置かれたものと考えられる。

【馬4】(No. 39)

①I-5グリッド水田一面2の3号土坑より1個の馬歯が出土している。

②この馬歯は歯根部を上にして出土しているが、良く原相を保ち、歯根部エナメル質まで良く遺残し

ている。

1個の馬歯ではっきりしたことはわからないが、歯根部を上にして出土したことは永い間この馬歯が上顎骨に植立していたことを示しており、解体後上顎骨が頰を上にしてこの地点に置かれた確率は高いと考えている。

【馬No. 40~No. 44】

I-4グリッド水田一面2の耕作土中より出土し、解体については不明である。

【馬No. 45~No. 46】

I-5グリッド水田一面2の耕作土中より馬歯1、小歯片1が出土している。解体については不明である。

(3) 下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬を飼育していた人々

前述のとおり下田中川久保遺跡出土の馬歯のうち牡令馬の馬歯は中形馬の馬歯ではあるが、太く柱状で力強く、附表6に見られるとおり率も上野国の他の遺跡出土の馬歯に比較して大きく、平安時代の馬としては改良度の高い馬であった。平安時代初期(9世紀)に国府が大和政権の東北経営遂行のために奔走し、公用馬としての馬の徴発が強力に進められている中で(注17)これ程の良馬を老令になるまで飼育できる人々は余程の力と経済力とを兼ね備えた人々に相違ないと考えられ、場合によっては徴発されず、老令に至るまで飼育出来た点を見れば、飼育管理者は何らかの権利を有していたこともあり得て、私的な飼育を強く感ずる。

またこれらの下田中川久保馬A平安(馬2)及び馬3、馬4等の出土地は調査担当によれば灌漑用の溜池(水田一面2)、太畦(築堤跡)、水田(水田一面1)が推定されるという。その中の水溜の集中個所に相当する3号土坑から馬3、馬4が、築堤跡に馬1、水田一面2際に馬2が出土している。特に馬1は頭蓋を上にして築堤跡や水田側から、また下顎骨や解体された肢骨が畦(築堤跡)から一団となって出土している。こうした状態はこの地が祭祀の場

所で集中的に儀祀が行われたことになり、祭祀の聖域であったことと、水源であったことと直接の関連であったことがわかる。

国分僧寺・尼寺中間地域において平安時代の出土場所別馬歯・馬骨の出土状況を調査したことがあったが、その成績は(注18)住居跡=馬歯21、馬骨5計26、井戸跡=馬歯127、馬骨8計135、溝跡=馬歯9、馬骨1計10で、馬歯単独の占める割合が高いのに対し、下田中川久保遺跡では頭蓋、下顎骨、或いは馬1のように頭蓋、下顎骨、肢骨と言った骨を伴う姿で出土しており、大きな差が認められる。この差は上野国の中毛・西毛と東毛と言う地域の差か、または祭祀や法儀を司ったもの差であるかと言う

問題があるが、しかしこれ程優れた馬を祭祀に用いることが出来る力と経済力とは出土地点の微細な小地域単位の状況であるとして説明し得る範囲を優に越え、明らかに地域的に突出状態にあると言える。

このように考えてくるとこの地の祭祀を司っていた人々は、近年新田町において大形独立柱穴の建物跡、唐三彩の陶器片の発見があり、また古代の新田郡内には、寺井庵寺(注19)、入谷遺跡(注19)、七堂遺跡(注19)など7~8世紀の上野国内において際だった遺跡の存在する地帯であり、下田中川久保遺跡での祭祀を司っていた人々と、それらの遺跡を生み出した地方豪族とは何らかの関連を有していたと考えられる。

注

- 1 大江正直 「日高遺跡出土の馬歯・馬骨について」『日高遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982
- 2 大江正直 「三ツ峠遺跡2号土壌出土の馬歯・馬骨について」『三ツ峠遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1985
- 3 大江正直 「下東西遺跡出土の獣歯・獣骨について」『下東西遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1987
- 4 大江正直 「田端遺跡出土の獣歯・獣骨について」『田端遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1988
- 5 大江正直 「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域4』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1990
- 6 大江正直 「三ツ峠遺跡出土の獣歯・獣骨について」『三ツ峠遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1991
- 7 大江正直 「日高遺跡出土の馬歯・馬骨について」『日高遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982
- 8 林田重幸 「第3章第2節日本古代馬の分類」『日本在来馬の系統に関する研究』(日本中央競馬会) 1978
- 9 西中川敏・松本光寿 「V遺跡出土骨同定のための基礎研究」『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(鹿児島大学) 1991
- 10 獣歯の部位、記号、並びに各部の名稱 [馬歯] G.G. SIMPSON 『HORSES, (OXFORD UNIVERSITY) 1951、直良信夫 「日本および東アジア発見の馬歯・馬骨」 1970、西中川敏策定 「馬歯の測定部位」により、和名については原田敏治訳 「馬と進化」 1979による
- 11 獣骨の名稱 加藤嘉太郎 「家畜比較解剖図説(上巻) 改訂増訂」 1981、川田信平、関根正之 「図説家畜解剖学(上巻) 改訂」 1974 による
- 12 獣歯・獣骨の測定部位 [馬歯・馬骨] ANGELA VON DEN DRIESCH 『A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES』(HARVARD UNIVERSITY) 1976 及び西中川敏策定 「馬歯の測定部位」により、J.U. DUERST BERN 『METHODEN DEN VERGLEICHENDEN MORPHOLOGISCHEN FORSCHUNG』1958、林田重幸 「日本在来馬の系統に関する研究」(日本中央競馬会) 1978、直良信夫 「日本および東アジア発見の馬歯・馬骨」 1970 を参考とした
- 13 馬の体高分区について林田重幸は「日本在来馬の系統に関する研究」の中で「日本及び東アジア地域の在来馬について小形馬群と中形馬群に大別し、体高について小形馬が105~122cm、中形馬が129~138cmの範囲にある」と述べている
- 14 馬の年齢区分について吉井正次は「馬学総論」 1943 の中で「5才以下を幼令、6才以上15~16才迄を壮令、17才以上を老令」としている
- 15 西中川敏 「頭蓋の長、幅、高からの年齢推定公式」『日本古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(鹿児島大学) 1991
- 16 吉倉直は「原原古墳群出土の馬歯」(原原) (熊本県教育委員会) 1975 の中で「咬合面の狭いことは原原の1つの特徴」と述べている。またG.G. SIMPSONは「馬と進化」の中で「歯冠の大きさと高さは植物食性と体の大きさとに対する進化の現われである」と述べている。直良信夫は「日本および東アジア発見の馬歯・馬骨」の中で「臼歯が幅を増して行くことは他の大形馬の交配などによってもたらされる馬の改良の結果ではないか」と述べている
- 17 大江正直 「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域4』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1990 の中で中間地域出土の平安時代に属する73個体中平均の出来た55個体の馬の平均年齢が6.2±3.4才で、若令死であった理由は8°C~9°Cには上野国が暖帯経帯に對する兵馬の供給基地であったことによることを述べた
- 18 大江正直 「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」の中で時代別、出土場所別、歯・骨の出土状況について、平安時代には井戸跡及び溝跡から出土する歯・骨の比率が213対46=4.6対1と歯の方が多く、中世には78対250=1対3.3と骨の方が多ことを述べた
- 19 「群馬県史 資料編2-原給古代2」 群馬県 1988

写 真 图 版



1. 平安時代面（第2面）全景（本線部分、東から）



2. 中・近世面（第1面）全景（本線部分、東から）



1. 北拉張区平安時代面（第2面）全景（南から）



2. 南拉張区全景（北から）



1. 低地部基本土層断面 (T-31グリッド、中位にA s-B層、下位に洪水堆積層が見える。南から)



2. 畝間を覆う下層の洪水堆積層 (第2面の第2畝跡群、西から)



1. 冠水した調査区（調査中、台風により3回調査区が冠水した。本線部分、東から）



2. 発掘作業員全員での遺構確認作業（南から）



3. 溝群の検出作業（北から）



4. ローム台地上層の土層堆積状態（南から）



5. 本線部分西半の新期河道上層の土層堆積状態（北から）



1. 1号住居跡 (西から)



2. 1号墳 (南から)



1. 1号墳埴輪出土状況（南から）



2. 周堀土層断面（南辺、東から）



3. 周堀土層断面（北辺、東から）



4. 1号墳埴輪出土状態（北から）



5. 1号墳埴輪出土状態（北西から）



1. 1号墳填輸出土状態 (南東から)



2. 1号墳填輸出土状態 (南西から)



3. 1号土坑 (西から)



4. 1号土坑土層断面 (南から)



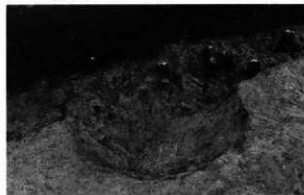
5. 2号土坑 (南から)



6. 3号土坑 (西から)



7. 4号土坑 (西から)



8. 5号土坑 (西から)



1. 第2面第1畝跡群 (東から)



2. 第2面第1畝跡群 (西から)



1. 第2面第2～4畝跡群（北東から）



2. 第2面第2・3畝跡群（東から）



1. 第2面第2畝跡群 (南から)



2. 第2面第3畝跡群 (北から)



1. 第2面第3畝跡群 (北西から)



2. 第2面第4畝跡群 (北西から)



1. 2号住居跡（西から）



2. 2号住居跡竈前遺物出土状態（西から）



3. 2号住居跡貯蔵穴遺物出土状態（北から）

1. 3号住居跡 (西から)



2. 3号住居跡竈前遺物出土状態 (西から)



3. 3号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 (西から)





1. 4号住居跡（西から）

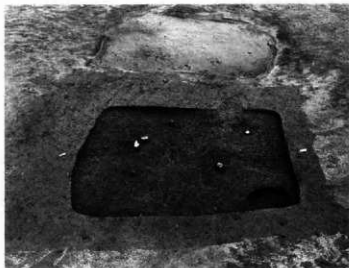


2. 4号住居跡竈前遺物出土状態（西から）



3. 4号住居跡北東隅遺物出土状態（南から）

1. 5号住居跡（西から）



2. 5号住居跡竈（西から）



3. 5号住居跡貯蔵穴（北から）





1. 平安時代住居群と畝跡 (北から)



2. 羽口及び台石集石地点検出状態 (北東から)



3. 1号溝 (北西から)



4. 4号溝 (北東から)



5. 14号溝 (北東から)



1. 第2面溝群 (2・16・17号溝と鉄跡、北西から)



2. 第1面下層溝群 (3・9～13号溝、南から)



1. 第1面下層溝群（9-12号溝、北から）



2. 第1面下層13号溝（西から）



1. 第1面中層溝群（7号溝と1号道路遺構、南から）



2. 第1面中層溝群（7号溝と1号道路遺構、北から）



1. 8号溝 (西から)



2. 2号溝 (南から)



3. 3号溝 (西から)



4. 6号溝 (南東から)



5. 5号溝 (東から)

1. 7・9～11号溝と1・2号道路遺構土層断面(南から)



2. 7・9～11号溝と1・2号道路遺構土層断面(北から)



3. 8・12・13号溝土層断面(西から)

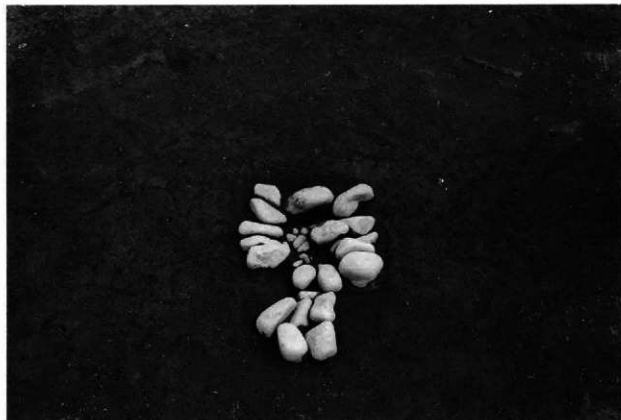




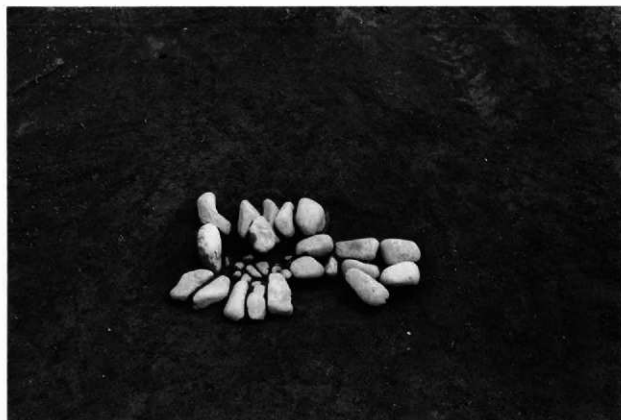
1. 1号道路遺構 (南から)



2. 2号道路遺構 (北から)



1. 1号集石遺構 (南から)



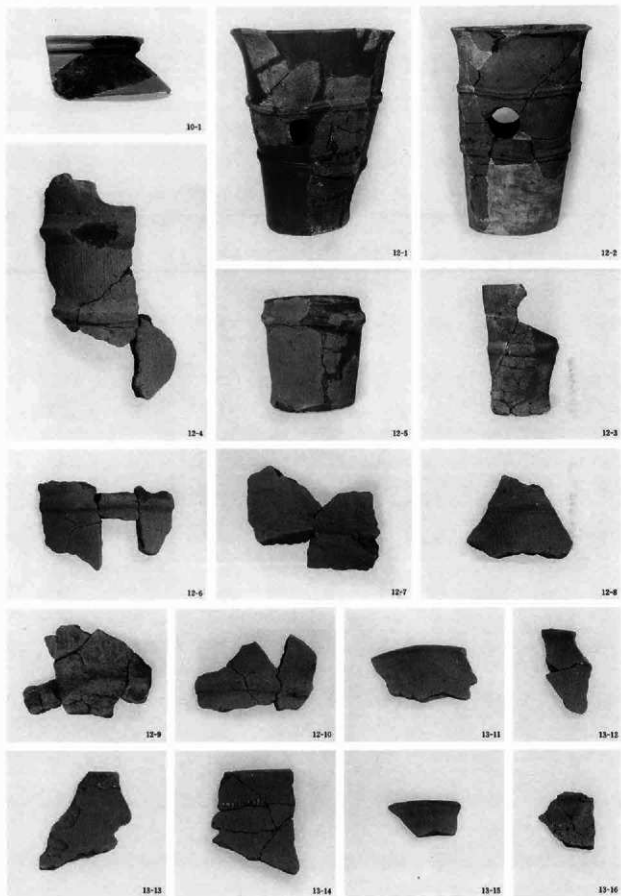
2. 1号集石遺構 (西から)



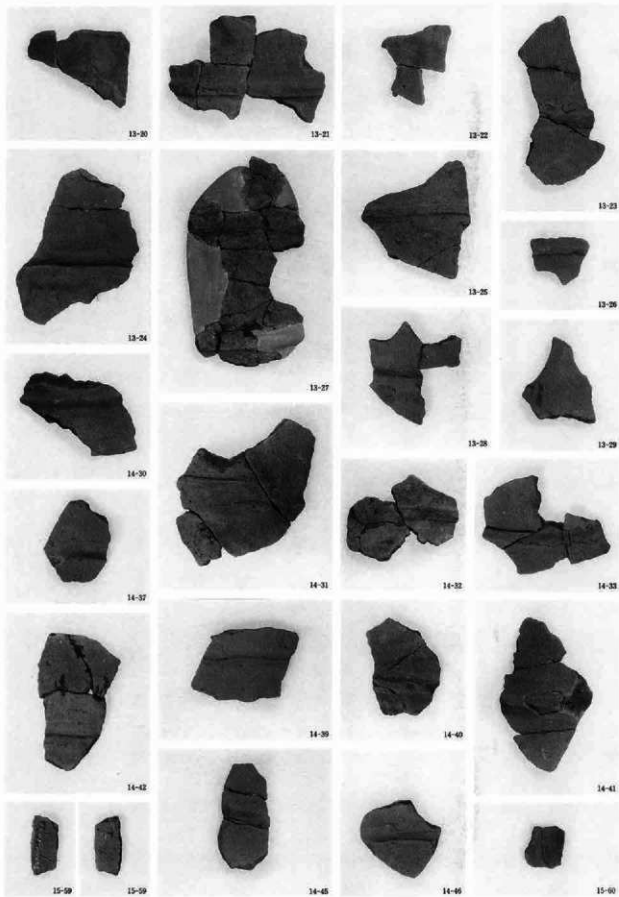
1. 2号集石遺構 (南から)



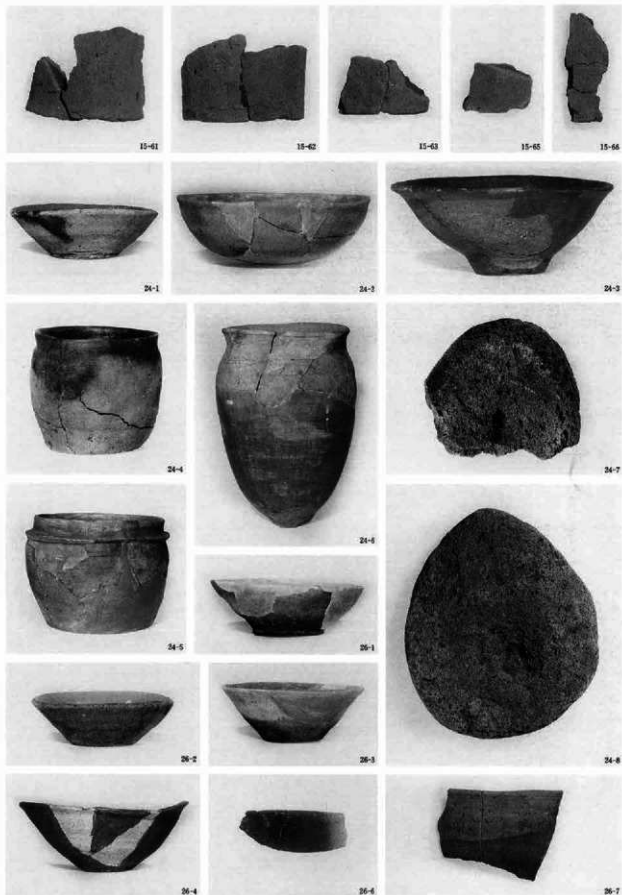
2. 2号集石遺構 (北から)



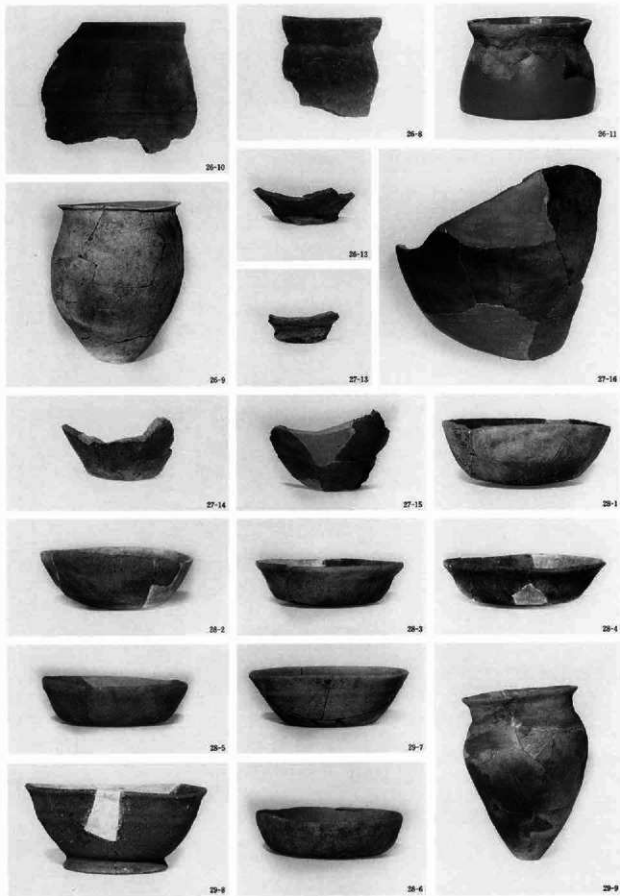
1号住居跡、1号墳出土遺物



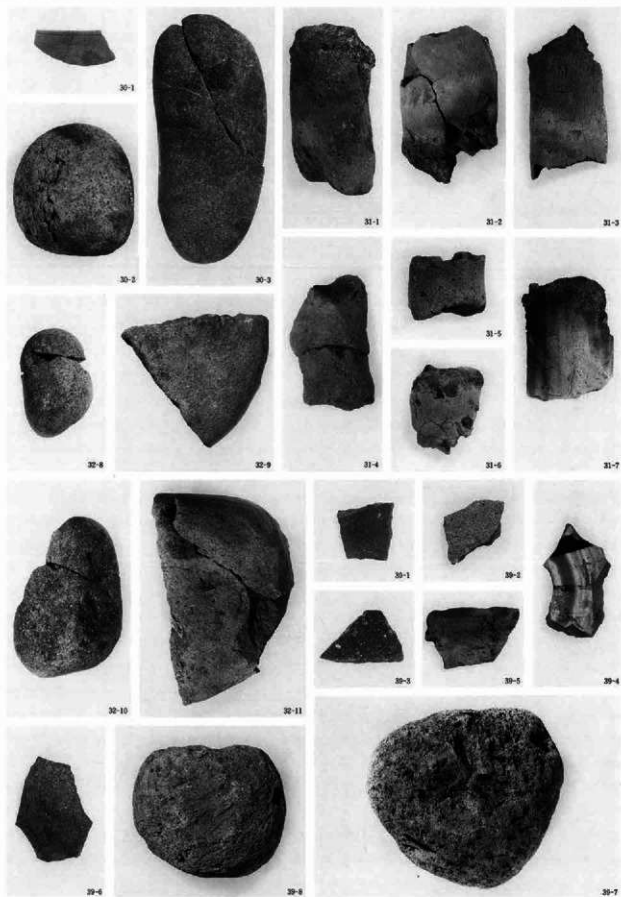
1号墳出土遺物



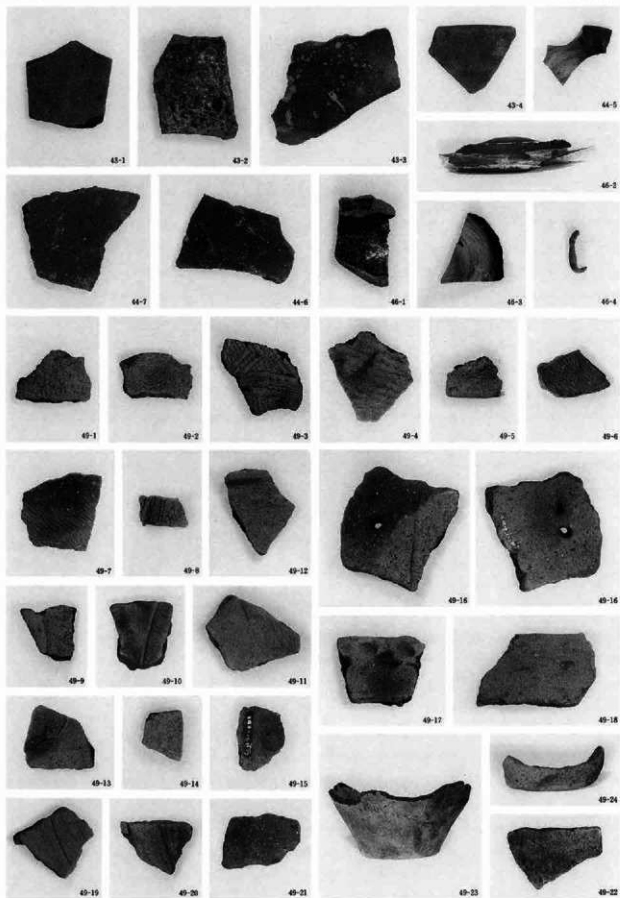
1号墳、2・3号住居跡出土遺物



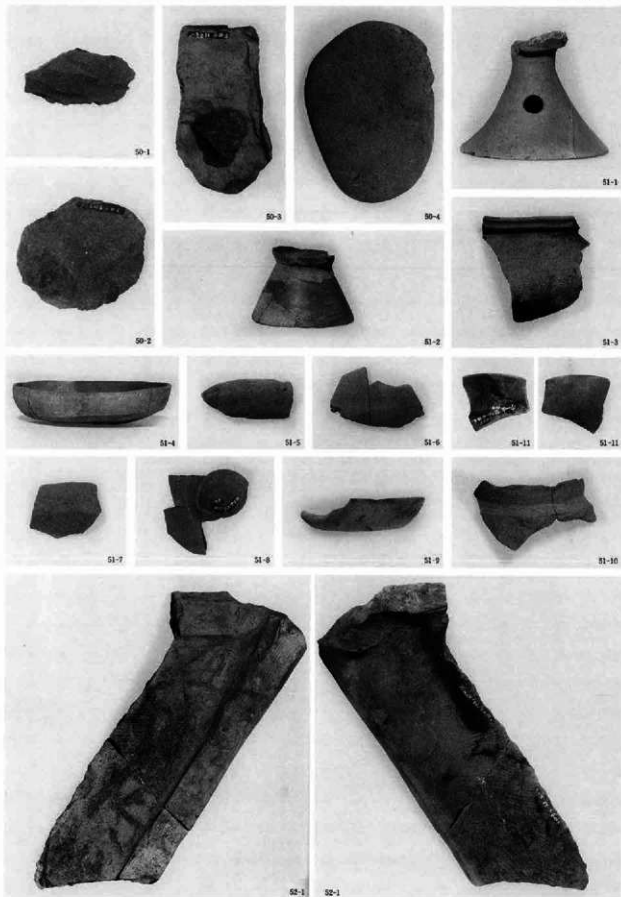
3・4号住居跡出土遺物



5号住居跡、羽口出土地点、9～12号溝出土遺物



7号溝、1・2号道路、遺構外出土遺物



1号墳、2・9・10・11号溝、遺構外出土遺物



52-1



52-1



52-1



52-1



52-1



52-1



52-2



52-3



52-4



52-4



遺跡全景（2区棚上空から）



1. 2区側から上武道路と早川を望む（東から）



2. 下田中道遺跡（調査終了—写真中央より左上部分）と調査中の三ツ木皿沼遺跡（北西から）



1. 2区（現代の耕作痕）から赤城山方面を望む（南東から）



2. 2区北隅及び1区3面全景（南から）



3. 2区第4面全景（南西から）



1. 1区の道東試掘（北から）



2. 2区の道東試掘（西から）



3. 2区の道東試掘（北から）

1. 2区低地部基本土層断面（西から）

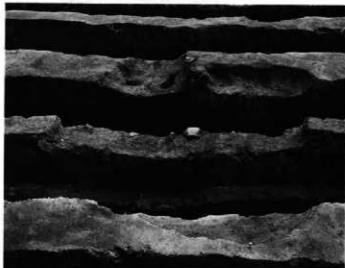


2. 2区第4面作業風景（南から）



3. 2区第4面作業風景（南西から）





1. 1号住居跡 (西から)



2. 2号住居跡 (西から)



3. 4号住居跡 (南から)

1. 5号住居跡（南東から）



2. 6・7号住居跡（北から）



3. 8号住居跡竈（西から）





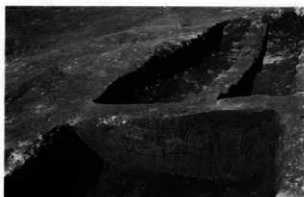
1. 33号溝 (中央より右側の線内、東から)



2. 34号溝と1号道路 (手前)の断ち割り (北東から)



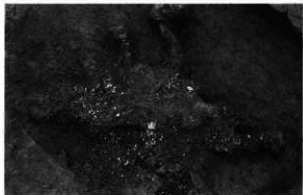
3. 60-1号溝全景 (東から)



4. 60-1号溝土層断面 (西から)



5. 60-1号溝遺物出土状態 (北から)



1. 2区3・4面間馬1出土状態(南西から)



2. 2区4面馬2出土状態(南から)



3. 2区3・4面間馬3出土状態(北から)



4. 2区3・4面間3号土坑・馬3・4出土状態(北東から)



5. 2区3・4面間馬4出土状態(南から)



6. 2区3・4面間I-5土器納置遺物出土状態(北東から)



7. 2区3・4面間I-5土器納置遺物出土状態(北から)



8. 2区3面下位G-2土器納置遺物出土状態(南から)



1. 2区3・4面間太畦跡と客土面（部分）・52-1号溝・水田一面1（北西から）



2. 2区3・4面間水田一面2（北西から）



1. 畑1・2の全景 (南から)



2. 畑2の全景 (東から)



1. 畑4の全景（北から）



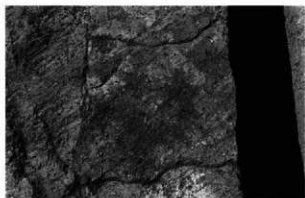
2. 畑5の全景（南から）



1. 1号土坑土層断面 (西から)



2. 1号土坑 (西から)



3. SX 1 遺構確認状況 (北から)



4. SX 1 (北から)



5. SX 4 遺構確認状況 (北から)



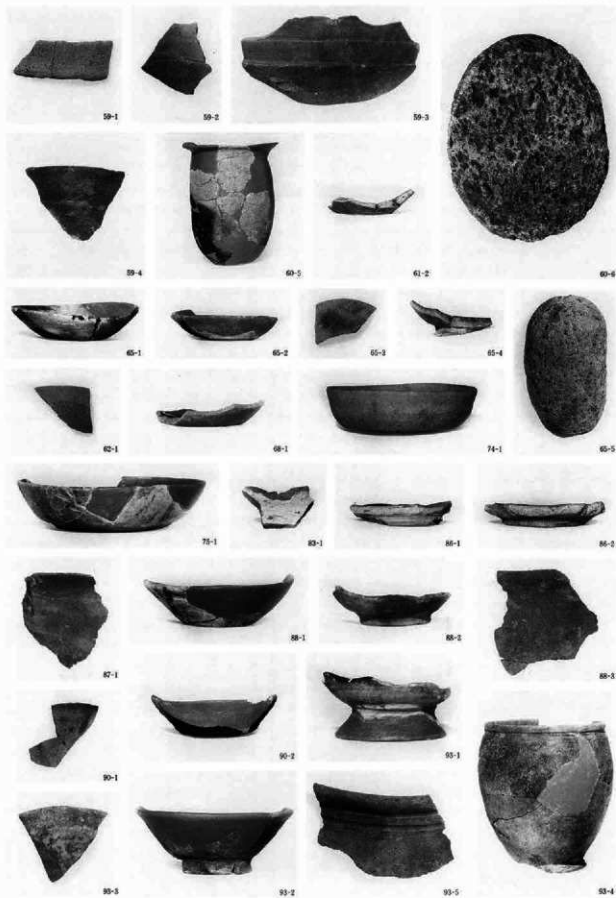
6. SX 4 (西から)



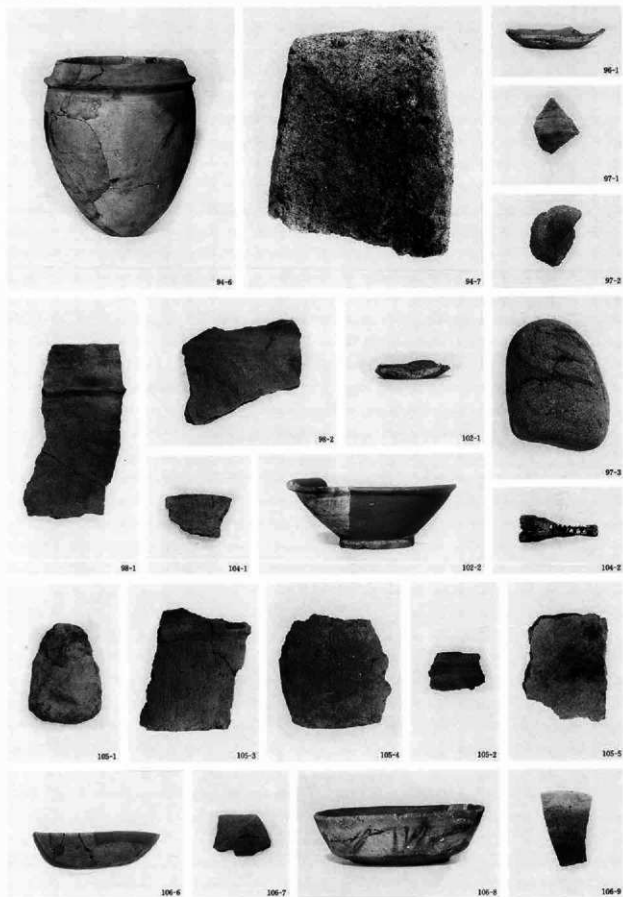
7. SX 5 (西から)



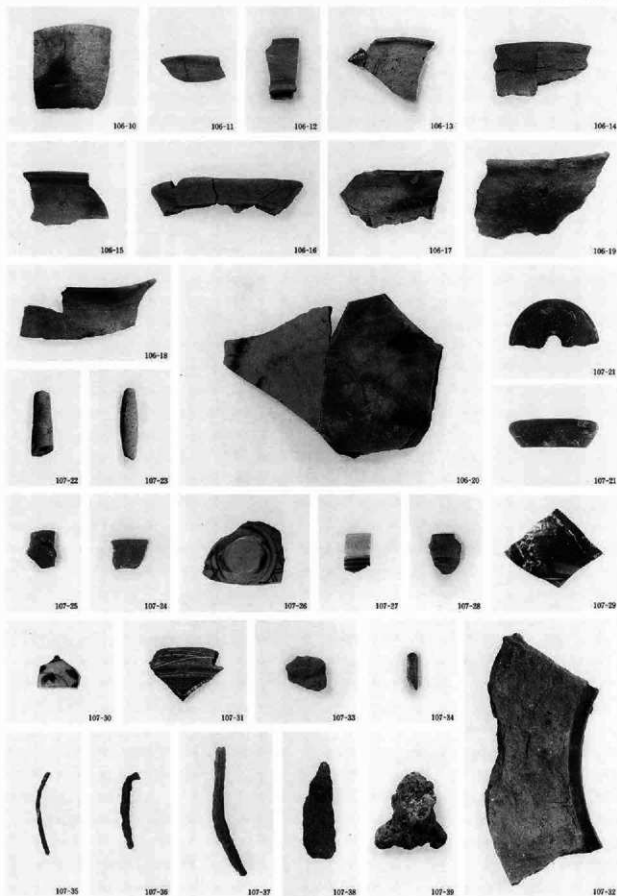
8. SX 7 (東から)



1・2・4・7号住居跡、51・53・59・60-1号溝、1号土坑、畑1・4、2区3・4面圃I-5及びび2・3面圃G-2土器納置出土遺物



4・5・6・8号住居跡、SX5、34号溝、1号道路、遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しもたなかなかみちいせき、しもたなかわくばいせき							
書名	下田中中道遺跡 下田中川久保遺跡							
副書名	国道354号道路改築(改良)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第1集							
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告							
シリーズ番号	第186集							
編著者名	松井能彦 巾 隆之 大江正行 南雲芳昭 大江正直							
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒 377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511							
発行年月日	西暦 1995年 3月 27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもたなかなかみちいせき 下田中中道	しもたなかわくばいせき 群馬県新田郡新田町 大字下田中	10482	00349	36度 16分 39秒	139度 16分 43秒	19910601～ 19911228	6,800	道路(国道354号 道路)改良工事に 伴う事前調査
しもたなかわくばいせき 下田中川久保	しもたなかわくばいせき 群馬県新田郡新田町 大字下田中 佐波郡境町大字三ツ木	10482 10463	00392	36度 16分 47秒	139度 16分 39秒	19930408～ 19931228	898	道路(国道354号 道路)改良工事に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下田中中道	住居 古墳	古墳時代	竪穴住居 墳墓 土坑	1軒 1基 5基	土師器 円筒埴輪 土師器	土師器・須恵器	旧早川の氾濫により埋 没した遺跡	
	住居 生産址 その他	奈良・ 平安時代 中・近世	竪穴住居 畝跡 溝 溝 道路遺構 築石遺構	4軒 4群 7条 9条 2条 2基	土師器 陶器 陶器			
下田中川久保	住居 生産址	古墳時代 奈良・ 平安時代	竪穴住居 竪穴住居 畝跡 田	1軒 6軒 7群 1面	土師器 土師器・須恵器 土師器・須恵器	土師器・須恵器 土師器・須恵器・馬歯・馬骨	旧早川の氾濫により埋 没した遺跡	
	その他		溝 祭祀関連 溜池遺構 土坑	14条 7箇所 1箇所 2基	土師器・須恵器 土師器・須恵器			
	その他	近世	道路遺構 溝	1条 1条	須恵器 煙管			

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第186集

下田中中道遺跡 下田中川久保遺跡

国道354号道路改善(改良)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

平成7年3月20日 印刷

平成7年3月27日 発行

編集／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田794-2

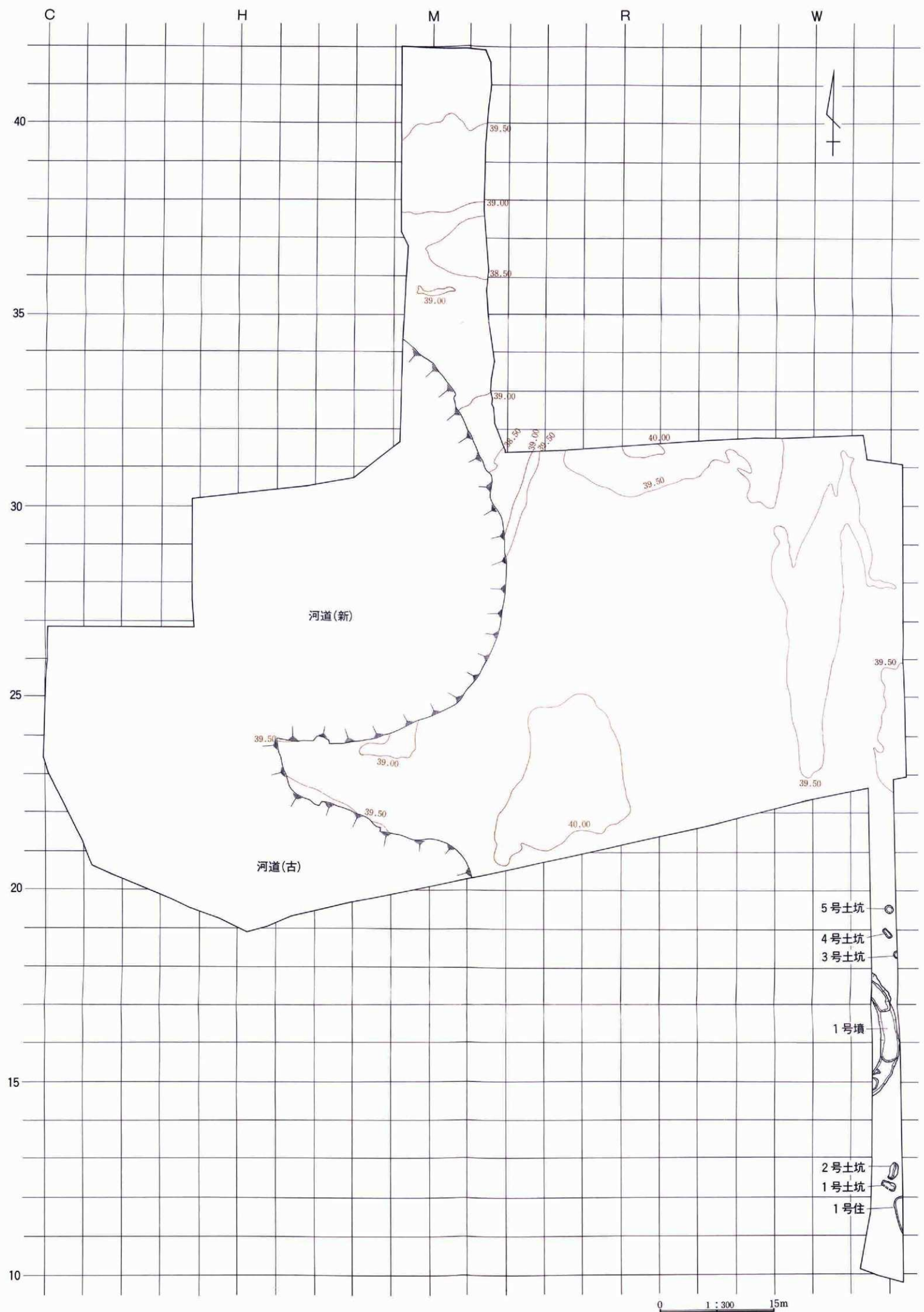
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

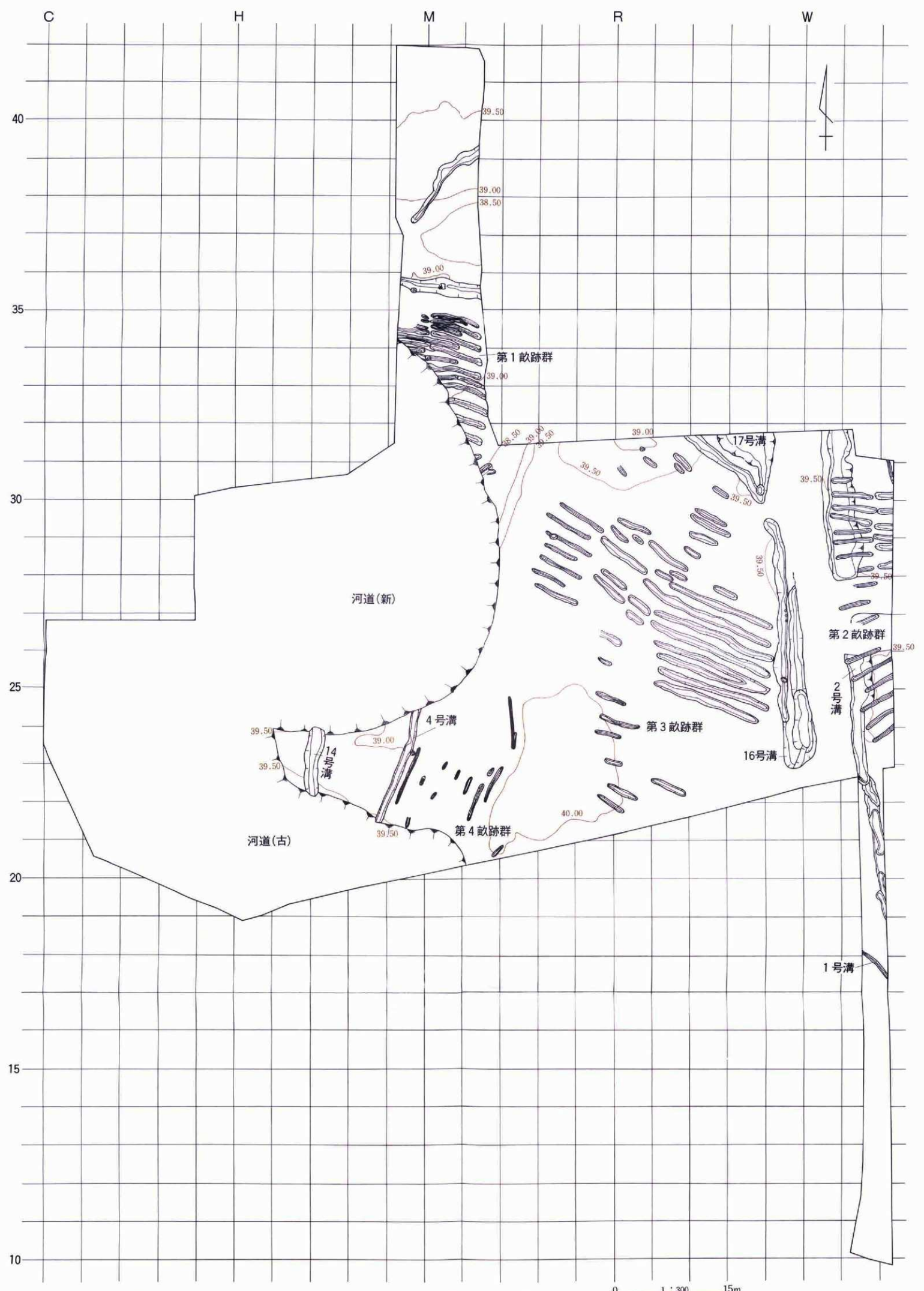
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田794-2

電話(0279)52-2511(代表)

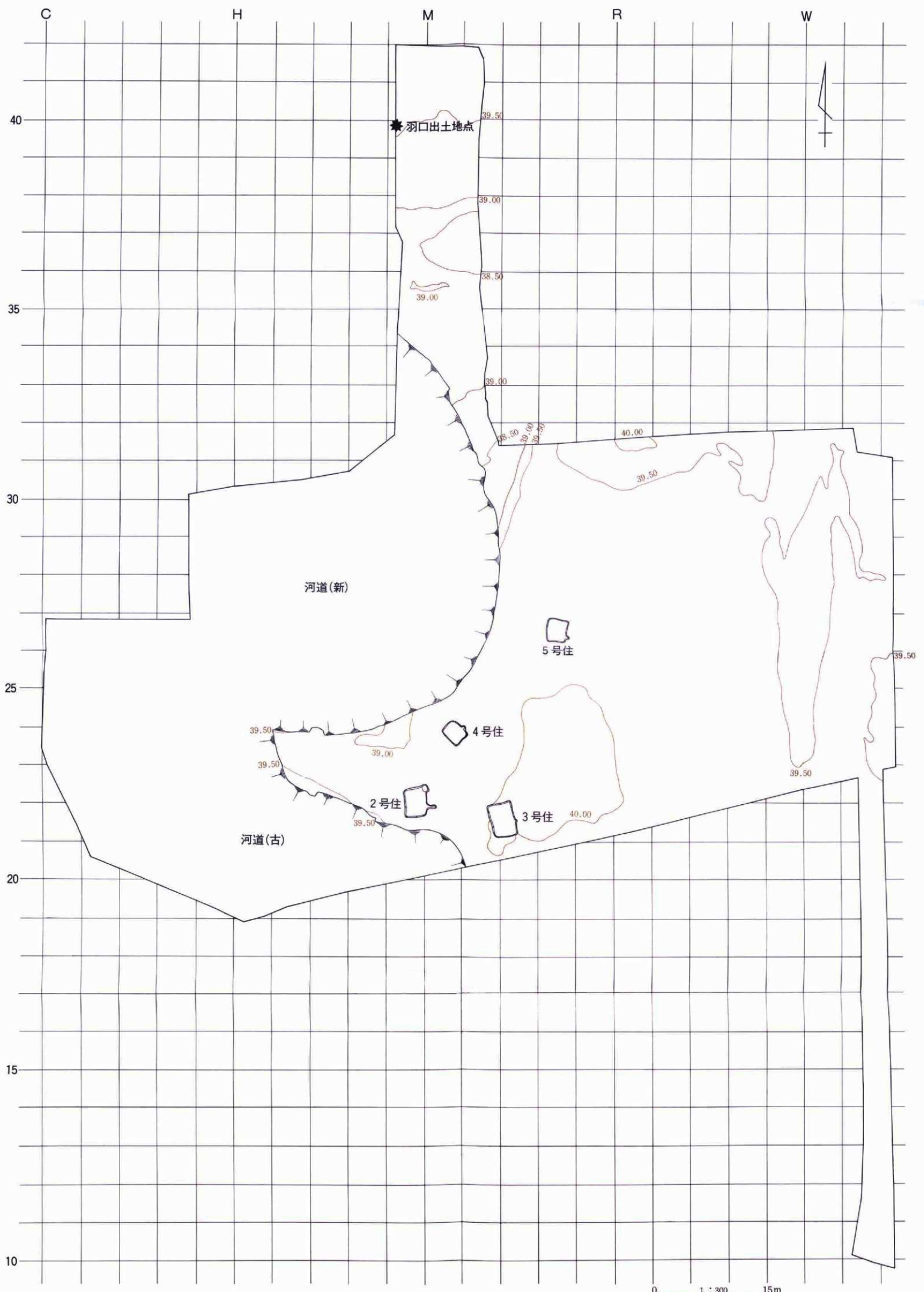
印刷／株式会社 前橋印刷所



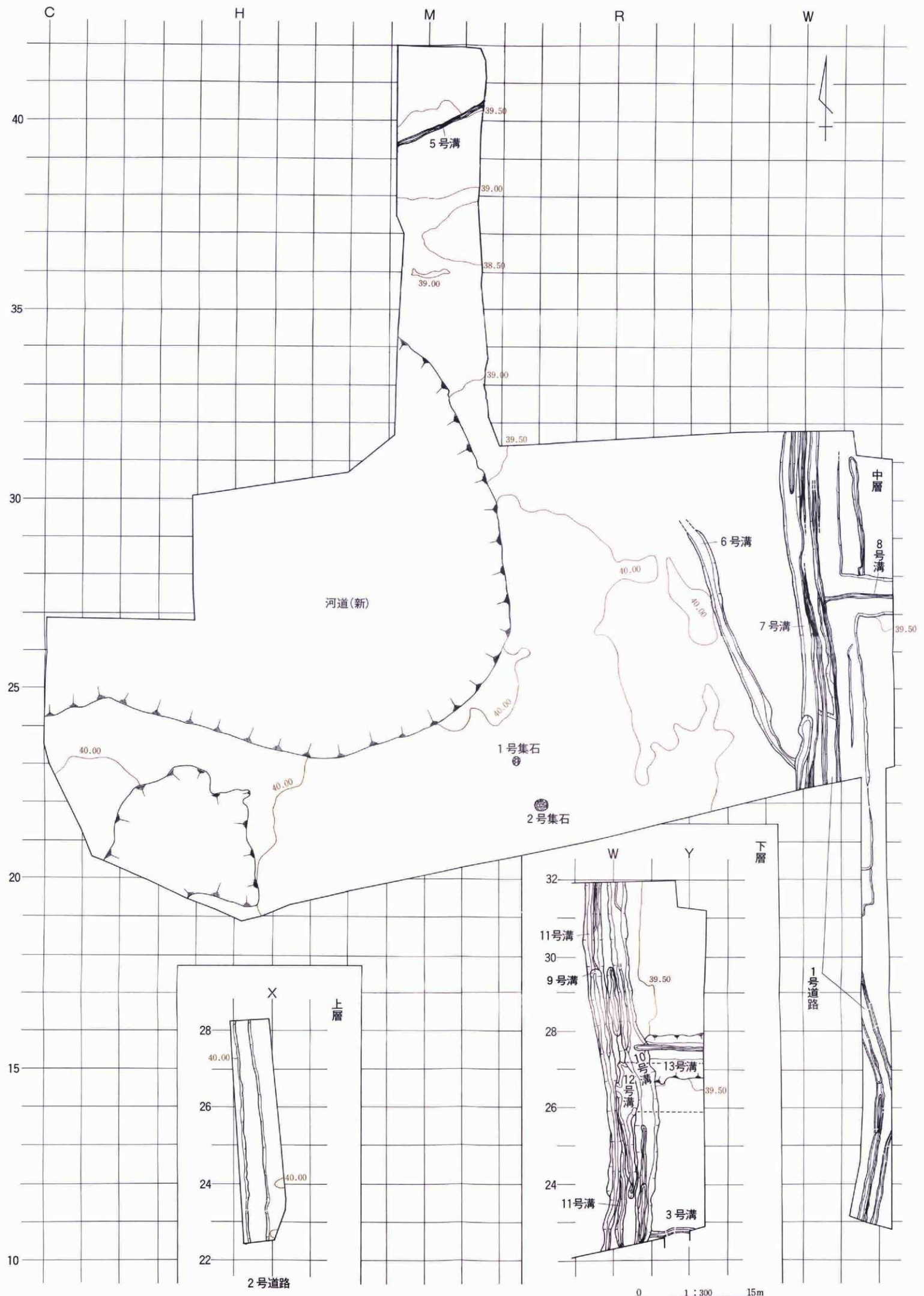
付図1 下田中中道遺跡 古墳時代全体図



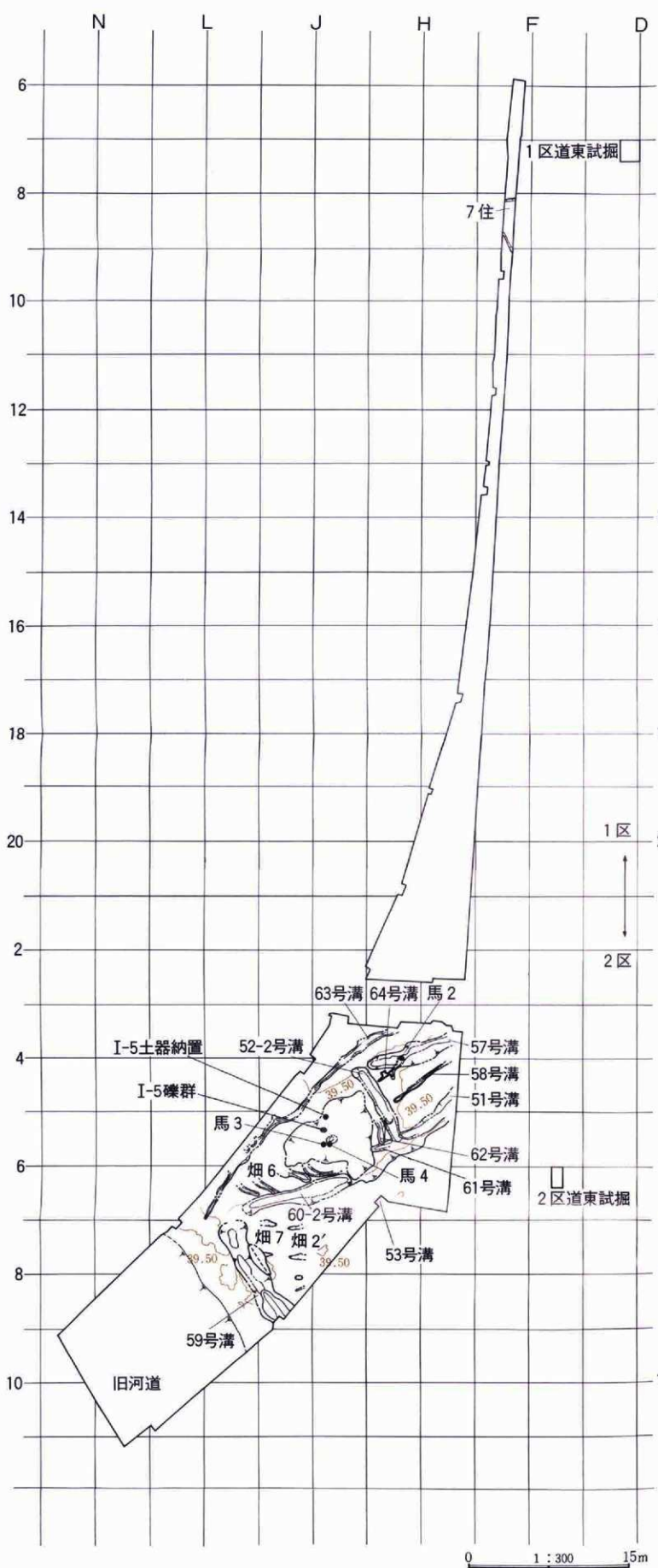
付図2 下田中中道遺跡 奈良・平安時代(畝跡・溝)全体図



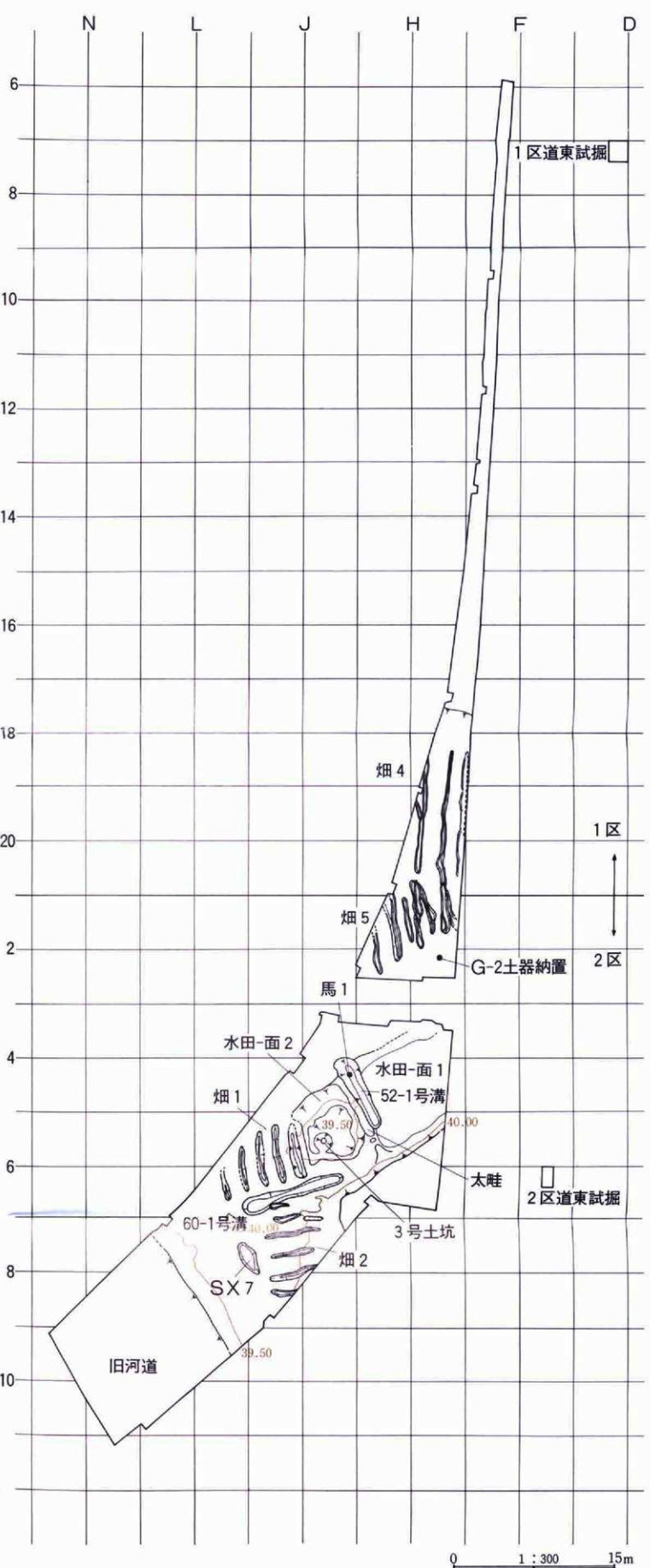
付図3 下田中中道遺跡 平安時代(住居跡)全体図



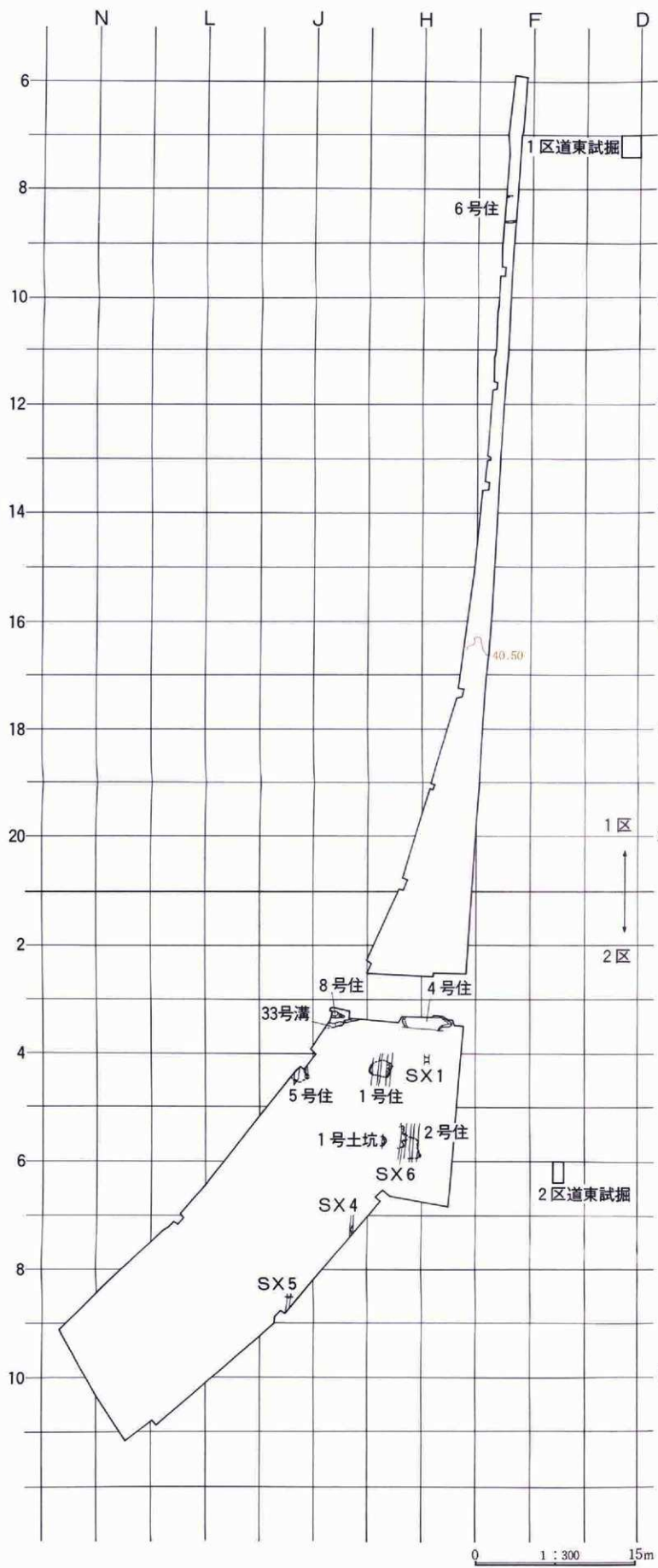
付图 4 下田中中道遺跡 中・近世全体図



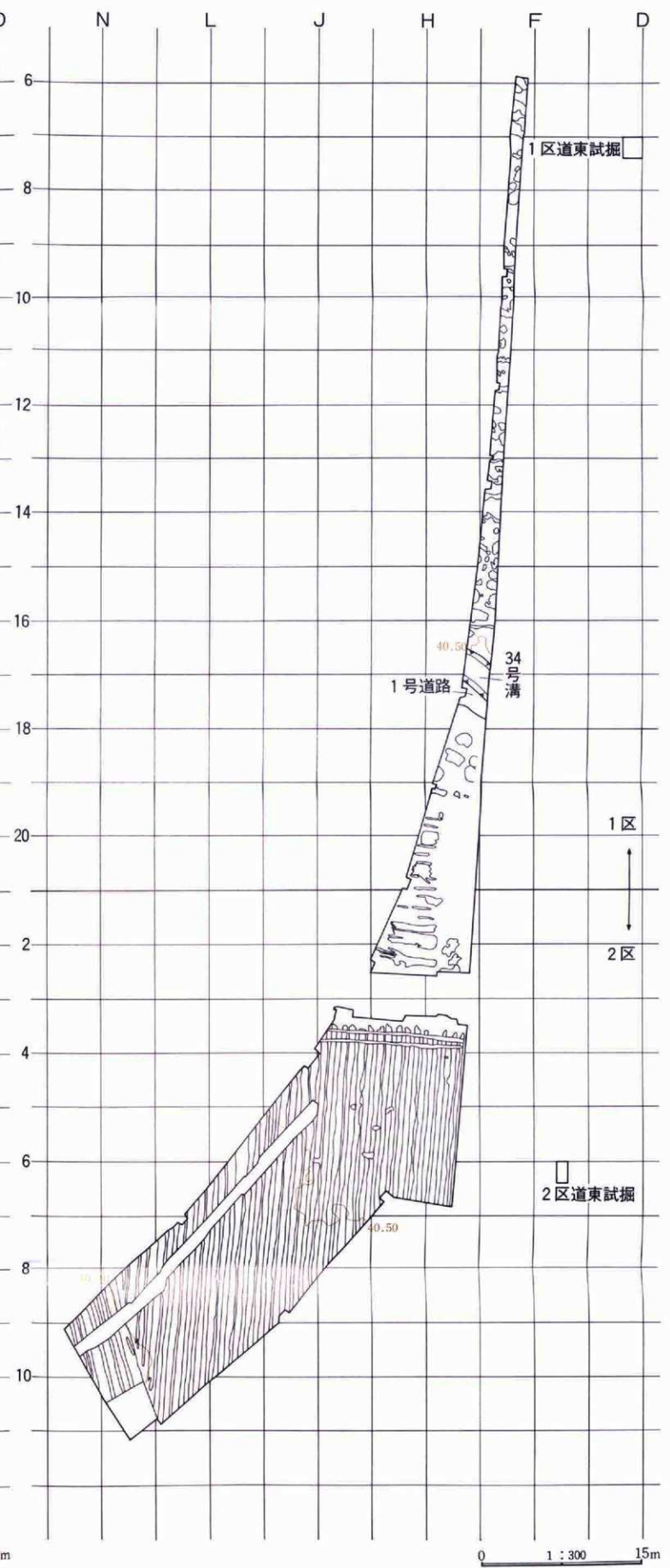
古墳～平安時代前期（下部）全体図(1)



平安時代前期（上部）全体図(2)



平安時代（住居跡・土坑等）全体図(3)



中・近世～近代全体図(4)

付図6 下田中川久保遺跡